

開講のことば

足利工業大学

学長 牛山 泉

ここに足利工業大学と NPO 法人足利まちづくりセンター「VAN- NOOGA」の共催による公開講座「地域活性化社会システム論」の講義録がまとまりました。

わが国では、これからの地域の振興を図ってゆく上で、各地の大学が地域のネットワークの拠点として機能してゆかねばならないということで、内閣官房から「地域活性化社会システム論」が提案されております。これは「地域主権・住民主権」の本来あるべき地方の時代を実現してゆくためには、「知の拠点」としての大学の役割が極めて大きいということを意味しております。

本講座の開講は、私がある会議の折に内閣官房地域活性化総合事務局の方から「地域活性化社会システム論」のご提案をいただいたことがきっかけとなり、これを専門の分野が最も近い蟹江副学長と、都市環境工学科で地域・都市計画を専門とされておられる築瀬範彦教授にお話したところ、「積極的に取り組みましょう」と快諾をいただいてスタートしたわけであります。格別、本講座の世話役を引き受けていただきました築瀬教授には、本学に着任後の日も浅く、しかも、この公開講座は初めての事業でもありましたため、文字通り手探りの部分もあり、大変なご苦勞をおかけいたしました。幸いなことに、これまで足利市のまちづくりに長くかかわってこられた、NPO 法人足利まちづくりセンター「VAN- NOOGA」と、その中心となって活動されてこられた本学都市環境工学科元教授の中川三朗先生のご協力もいただくことができ、合計 5 回の公開講座を開催することができました。

第 1 回は、先ず地元をよく知ろうということから、本学蟹江副学長の「両毛地域を視野に入れた地域活性化論」からスタートし、第 2 回は、この講座の世話人でもある本学の築瀬教授による「地域資源の発掘と活性化の戦略―別府市の事例から―」と題して、観光戦略という観点を中心に足利と別府の比較をお話いただきました。

また、第 3 回は名古屋産業大学の和泉潤教授による「五感による」という、きわめてユニークな発想からのまちづくり論を展開していただきました。さらに、第 4 回は内閣官房地域活性化総合事務局から青木由行参事官による「全国における地域活性化政策について」ということで、全国各地の地域活性化の取り組みについて具体的に事例をご紹介いただきました。そして最後の第 5 回は、栃木県県土整備部都市計画課の西村玲課長補佐に「栃木県における中心市街地活性化の取り組み」をお話いただき、同じ県内でありながら知られていなかった事例などもご紹介いただきました。

以上、「地域活性化社会システム論」は、初めての取り組みでありましたが、予期した以上の成果が得られたように思います。今後はこれを継続するとともに、この成果を具体的なまちづくりに生かして欲しいと願っております。

開講によせて

特定非営利活動法人足利まちづくりセンターVAV-NOOGA

会長 中川 三朗

このたび、足利工業大学の牛山 泉学長のお取り計らいによって、内閣府官房地域活性化総合事務局の「地域活性化社会システム論」をわれわれ特定非営利活動法人足利まちづくりセンターVAN-NOOGA との共催により公開講座として実施しました。

実施にあたりましては、VAN-NOOGA としても初めてのことであり、講師、テーマ、会場、広報その他の運営には不慣れでしたが、足利工業大学都市環境工学科の築瀬範彦教授にご尽力いただきました。地域の活性化について造詣の深い5名の講師をお願いし、足利にとっても意義深いテーマでお話を伺うことができました。一般市民への周知としては足利市の広報「あしかがみ」を活用させていただき、会場を市の中心部にある足利まちづくりセンターVAN-NOOGA の事務所として、計5回開催しました。寒さもうかがわれる時節の夜7時から8時30分という時間帯にもかかわらずお集まりいただき、活発な質疑にご参加いただいた方々に感謝申し上げます。

足利にとって足利工業大学が存在するということは大変恵まれていることであり、国内外の事例を見ても“大学とまち”の関係が地域の活性化に寄与している事例が多々あるところではあります。われわれ VAN-NOOGA も常々大学との交流に意を用いてきました。VAN-NOOGA のメンバー4名が都市環境工学科の非常勤講師として演習を担当しており、学生が足利のまちをテーマに実習作業を行って、その成果を市内で発表したりしてきました。また、大学のまちづくり関連の研究室ゼミではVAN-NOOGA と共同で調査活動を行うこともしてまいりました。

まだまだ不十分な活動状況ではありますが、今回、公開講座として大学とVAN-NOOGA が共催し、その結果を「地域活性化社会システム論」として講義録としてまとめる運びとなりました。この成果を今後のまちづくりに活かし、また、このような講座を継続していきたいと思っています。

足利工業大学・足利まちづくりセンターVAN-NOOGA 共催
公開講座「地域活性化社会システム論」講演録

目次

開会のことば		足利工業大学 学長 牛山 泉
開会によせて	特定非営利活動法人足利まちづくりセンターVAN-NOOGA	会長 中川三朗
第1回	両毛地域を視野に入れた地域活性化論	1 足利工業大学 副学長 蟹江好弘
第2回	地域資源の発掘と活性化の戦略―別府市の事例から―	29 足利工業大学工学部都市環境工学科 教授 築瀬範彦
第3回	五感によるまちづくり	56 名古屋産業大学環境情報ビジネス学部 教授 和泉 潤
第4回	全国における地域活性化政策について	83 内閣官房地域活性化統合事務局 参事官 青木由行
第5回	栃木県における中心市街地活性化の取組み	117 栃木県県土整備部都市計画課 課長補佐 西村 玲
編集後記		

両毛地域を視野に入れた地域活性化論

足利工業大学副学長 蟹江好弘

1. 趣旨説明

司会

それでは、足利工業大学と足利まちづくりセンター「VAN-NOOGA」の共催による公開講座「地域活性化社会システム論」の第1回ということで、本日は足工大副学長の蟹江先生をお招きして、「両毛地域を視野に入れた地域活性化論」というテーマでお話を頂きます。なお、本講座は、内閣府地域活性化統合事務局と栃木県県土整備部都市計画課の協力と、また足利市の後援を得て、行うものです。

地域活性化社会システム論は、本学にとって今回初めてですので、担当する私も手探りでしたが、公開講座として足利のまちづくりについて皆さんと考えて行く場を持ちたいということで、VAN-NOOGA 会長の中川先生にお願いして、共催という形を取らせて頂きました。

今後の予定ですが、本日を含めて5回を予定しております。ご案内しておりますように、再来週の28日は「地域資源の取り組み事例」ということで、私が、1回お話させて頂きます。それから11月20日には、名古屋産業大学の和泉先生から「五感によるまちづくり」というユニークなお話を伺うことになっております。4回目の11月25日は内閣府の活性化統合事務局の首都圏担当の室長兼参事官の青木さんから、全国の地域活性化の動きをご紹介して頂きます。最後は12月9日になりますが、栃木県の都市計画課の西村課長補佐に栃木県における地域活性化の状況をお話し頂くということで、5回を予定しております。この5回の公開講座を終えると概ね、全国の地域活性化の動きとそれに呼応した足利市の取り組みが理解できる構成を考えました。

では、開会に先立ちまして、共催者でありますVAN-NOOGA 会長の中川先生より一言、ご挨拶をお願いします。

中川会長

皆さん、こんばんは。足利まちづくりセンターVAN-NOOGA 会長を務めております中川でございます。VAN-NOOGA は、先月の9月28日に設立10周年の記念式典を行いました。ということは10年続けて来ているわけです。メンバーの中には、今日来ておられる皆さんを含めて、色々と頑張ってもらって、ここまでやってきたわけです。その間、私も足利工業大学にいて、大学との関係をどういう風にまちづくりに生かしたらいいか、正直言って、今日来た学生のほとんどの人は足利の町中を知らずに卒業していくというような実態がありました。それで、できる範囲で、私が関係する卒論やゼミの学生さんにできるだけ町中に来て頂いて、足利というものを、そしてまちづくりというものを知ってもらおうということでやってまいりました。正直言って大学と正式に色々な形でコンタクトするという機会がなかなか作れなかった。そういう中で今年の3月に、「足利の観光まちづくり」というシンポジウムを開きました。先生方には個別には色々なご尽力を頂いているんですけども、大学に組織としての関与をお願いしたいということで桜井事務局長にお願いして、組織の実施部隊のメンバーになって頂き、色々ご努力を賜りました。

その結果は、こういう報告書にできております。今後も、少しずつ大学との関係を深められるといいなと思っておりました時に、築瀬先生から共催で公開講座をできないかというお話があり、私と

しては、VAN-NOOGA の皆さんに諮って、快く「やろうじゃないか」というご賛同を得たような次第でございます。これを始めとして、今後も色々と協力を続けていけたらと思っております。

早速に副学長の蟹江先生から、ご出馬を頂くということで、大変光栄に思っております。今後ともぜひ、大学とまちづくりということで、市役所、商工会議所、青年会議所という民間、行政、それと大学というものがより強く結びついて、まちづくりができればいいなと思っております。今日は蟹江先生、お忙しいところありがとうございました。よろしく願い致します。

司会

どうもありがとうございました。では今から、1コマ分の講義をお願いします。最後にちょっとみんなで討議の時間を取りたいと思います。それから、5回分の講演を録音して「講演記録」という形で残していきたいと思っておりますので、一つまたご協力よろしくをお願いします。それでは、蟹江先生よろしくをお願いします。

2. 両毛地域を視野に入れた地域活性化論

1. はじめに

蟹江講師

私、足工大に38年おります。昭和46年に赴任したんですが、その直後にですね、足利青年会議所が、市民の意識調査ということで、私は大学に来たばっかりだったんですけども、「お前、手伝え」ということで手伝いました。そこから青年会議所とのつながりが非常に深くなりまして、当時は青年会議所がまちづくりに非常に積極的に取り組んでいた。3代の理事長が同じテーマでまちづくりをやっていたというような時代がありました。足利の青年会議所を皮切りに桐生、館林と両毛地域の当時の5つのJC（青年会議所）との付き合いが始まりました。現在は両毛6JCになっておりますけども、青年会議所という、青年たちの力あふれる活動に参加することができました。築瀬先生

に色々提供した資料でもおわかりように、両毛地域にのめり込んでいきました。県境を挟んで色々な地域交流をしてるのは大変面白いし、全国的に見ても、両毛は非常に特殊な地域です。両毛地域を中心にして学位論文をまとめたというようなことになりました。

今日、後でご紹介しますが、一方では道州制というような問題も囁かれ、道州制以外にも様々な地域連携が進んでおります。両毛地域はそういう点では、誇れる地域なんだと思っております。

2. 両毛地域の地理的特性

1) 東京との位置関係について

それでは始めたいと思います。両毛地域を視野に入れた地域活性化論ということでありまして。改めて両毛地域の位置を首都圏の中で見ますと、80km圏に位置しています。これは東京の影響を濃厚に受けながらも、独自の文化圏をぎりぎり形成できる地域かなと思うんですね。同じようなリングの上に、前橋、宇都宮、水戸辺りが、ちょっとこれよりも外れてあります。高崎経済大学の武井昭教授が、首都圏の第一層、二層、三層ってというような言い方しているんですが、経済地理の面で見た区分なんでしょうね。

首都圏第三層というのは非常に面白い地域でありまして、工業再配置の対象地であり、或いは地価水準から言うと、第一層の東京、それから第二層の隣接県に比べると、ちょっと様相が違ふ。それから元の住宅公団もここまでは団地を作らなかったという地域です。積極的に団地を造成した町田など小田急の沿線のような開発は起こらなかった。これは昭和35年から平成12年までの人口の増加傾向を見たものです。増加率が、100%を超えるような地域、実際には150%を超えるような地域です。これはちょうど東京湾の湾岸に沿って、馬蹄形の地域を形成しています。ちょっと飛んで、茨城県的那珂湊、東海村、鹿島や山梨県の甲府や

西側の竜王町や昭和町、静岡県三島の辺りですね。こういうぼつんぼつんと人口が増えてるところがありますけれども、これは地方都市のアーバンズプロール化に因るものであって、首都圏に人口集中した動きではありません。私は勝手に、この人口の増加の range ごとに、一番ひどいところを、つまり昭和 35 年ぐらいの時点で、地域の社会構造が滅茶苦茶に壊れ、全然違った地域になってしまったところを「構造改編地域」とか、或いは「人口激増地域」、また「人口急増地域」といように各 range ごとに分けて、色分けしたものがこの地図です。

この地図で、一つは、東京に集中しているということが言えるわけですが、もう一つは地方中核都市の周辺を見たかった。それが案外、地方中核都市そのものは増えていません。その隣接地域、例えば、これは栃木県では河内町です、こういうところは増えてる。群馬県でも笠懸とかですね、前橋のこちら側の群馬町とか、こういったところは人口が増えるということが分かってきました。

3) 全国の地域連携の事例

さて、両毛地域とはこんな地域なんですけれども、現代、道州制が言われるようになって来てるわけで、今から 6、7 年前に大学院生と一緒に、地域連携についてちょっと勉強したことがあります。これは国土交通省のホームページから、全国の政令指定都市、中核市、特例市、そして旧自治省の広域連合を調べた。道州制みたいなことが真剣に議論されるようになると、両毛地域のように県境をまたいだ地域連携がやや現実性を持ってくるんですね。私は個人的には、11 道州なのかなと推測しております。その理由は、これは我々が今まで地方という言い方をした時に非常になじみのある区分だからです。さて、今ご紹介しようとしている進展中の地域連携であります、広域的な地域連携は全国で 7 圏域あります。それから狭域的な地域連携が 17 圏域、軸線的な地域連携が 6 圏域あるということが分かってきました。これは

私と大村君（院生）が共同作業した勝手な言い分ではありますが、例えば、広域連携の事例としては、東北 6 県に新潟を加えた、「インテリジェントコスモス構想」というのがあります。それから福島県、栃木県、茨城県の 3 県による「21 世紀 FIT 構想」があります。FIT っていうのは、Fukushima、Ibaraki、Tochigi のことなんですね。それから、京都、滋賀県、奈良県、三重県の「京滋奈三広域交流圏」が、近畿ではあります。また、瀬戸内では「西瀬戸経済圏構想」というのがあります。これらは比較的広域にですね、連携しようということで、今皆さんに配った中に全部あります。具体的にどういう事業をやっているかと言うと、善隣友好関係以上のものじゃないですね。次に今度は、狭域での地域連携の事例でありますけれども、青森と函館の一带、ここに「青函インターブロック交流圏」とか、それから十和田湖を中心として「環十和田プラネット広域交流圏」、或いは「南東北 SUN プラン」というのがあります。宮城と山形、それから福島の一部、で連携してます。それからこれは比較的しっかり交流しているんですけども、「三遠南信トライアングル構想」、三州、遠州、南信濃ですね。ここは私行ってきました。豊橋から入ったところです。それから「紀伊半島広域交流圏」ということで、奈良県の一部と和歌山、三重の交流。それからこれもしっかりした交流をやっていますけれども、鳥取、島根、それから、岡山、広島の中ですね。これ山の中に県境サミットというのがあります。これらが狭域での地域連携の事例で、両毛地域もこの中に入ります。それから加えて「九州中央地域連携推進事業」ということで、大分、熊本、宮崎の交流も行われているようです。

3 番目の軸線的な地域連携なんですけれども、一つは磐越高速自動車道の沿線と言っているんでしょうか。磐越自動車道沿線都市会議というのがあります。

これはまさに河井継之助と会津との連携みたいなもので、戊辰戦争の名残みたいな気もするけれど

ども、こういう風な連携もあります。それから「北関東・新潟地域連携軸構想」というのは再来年の夏頃に北関東自動車道路が開通しますから、そうなってくると「L字型構想」と言われている連携が非常に現実性を持ってくるわけです。このL字型構想、高崎で折れ曲がるんですが、長野までつなげて連携してしまおうというような話もあります。それから「関東大環状連携軸構想」というのは、外環道の外側、リング状の首都圏第三層での連携軸構想があります。それから「日本中央横断軸構想」というのは、これは中部、中部から北陸にかけての、連携ですね。軸線的な連携ということになります。こうした地域連携が行われておりますが、詳細は今日の主題ではございませんので省略します。ネットでヒットしてもらおうとが出てまいります。

4) 両毛地域における地域連携

さて、両毛地域は地域連携の先進地という触れ込みで、昭和44年から県境を越えた地域連携が開始されました。日本経済研究所（当時は根津会長）というところに両毛地域の活性化方策を委託しました。この調査研究は、緑色の冊子、ハードカバーで出版されております。

皆さんは両毛地域についてよくご存じだと思いますけども、ちょうど栃木県と群馬県の間のはざまの部分に形成されている地域です。明治維新以後、市町村制が実施されたわけで両毛地域の道路網・都市機能が、ほとんどこれと変わっていません。そんな歴史もあります。ある時には、この両毛地域の群馬県側の一部に栃木県に入っていたこともあります。県境というのは実にいい加減なもので、封建領主、或いはその前の段階で守護とかの時代から、実はこの境界線両毛地域は合併する前は5市12町3村で構成されておりました。私個人は、この5市12町3村に非常になじんでおりましたが、平成の大合併によって6市5町になりました。人口規模は約86万人、総面積は13万8,600ヘクタール、大きさから言うと、ちょっと

小規模な県ですね。鳥取、島根、それから奈良県、こうした県に匹敵する領域です。今さらですが、この両毛というのは、毛野の国の名残でありまして、奈良時代に、律令制のもとで上毛野国と下毛野国が分かれました。これを合わせて、上野国、下野国という風に書くんですが、毛とも書きます。両方の毛を合わせて両毛という風と呼んでるわけで、現在この名残は両毛線だけです。

この両毛地域の地形の概要であります。私はよく学生には地図を開いた時に緑色の関東平野が、茶色の北部の山岳地帯に入り込むところ、ぶつかるところが両毛地域なんだという言い方をしています。これは北部の山岳、山岳丘陵です。そして渡良瀬川が流れ、そして利根川が流れ、利根川と渡良瀬川の2大水系に挟まれたこの辺の沖積地帯が極めて豊饒な農業地帯ということになります。それからこの渡良瀬川の左岸は、山に入り込む谷地がいっぱいあるわけです。足利には谷がいっぱいありますが、その谷に農地が形成され、やがて集落が形成され、町が形成されるという格好で、都市形成がなされているわけです。図の赤い部分は人が住んでいるところです。都市のエリアです。この辺、足利、桐生、太田あたりは、大変面白い地形をしているところです。次の都市機能、図の赤い丸の部分が大体DIDの中心を示しているということでしょう。それからこのオレンジが、インターチェンジです。北関東道のインターチェンジも入っております。これは交通の結節点ということですね。町の部分、やや市街地を形成しているところと道路交通網を図におとしてみたのがこれです。

さて、この両毛地域における連携の推移であります。先程申し上げたように、昭和44年に両毛地域開発推進協議会が発足しました。何故かと言うと、繊維産業がやや下火になって来て、両毛全体の景気が、かつて隆盛を極めた頃に比べると、ややもすると陰りを見せてきた時期です。「何とかしなくちゃいかん」ということで日本経済研究所

をお願いしたわけです。JC を中心にして、色々な組織が渡良瀬川をまたいで、県境をまたいで交流が行われます。

赤字で示しているのは、私が非常に優れていると思っている地域連携のアイテムです。例えば、昭和 52 年には「特殊災害消防対策相互応援協定」が締結されました。これは両毛 5 市と伊勢崎市を含めて、大きな火災が起こった場合、或いは自然災害が起こった場合に、お互い県境を越えて助け合おうという協定です。それから昭和 58 年には「両毛 5 市水道災害相互応援協定」が締結されます。これも大変優れていると思うのですが、足利が渇水で困ったことがあって、その時に太田との間で、上水道の本管のバルブを開いて上水を供給したという実例があります。

この後、様々な立場の人たち、教育長、市会議長、若手議員、市長、商工会議所の会頭、行政の各部署、或いは経済団体のトップクラスの連携が結ばれるわけですね。連携と言うか、そういった組織が作られるわけ。これが後々非常に面白い結果を呼ぶことになります。例えば、平成元年には「社会教育事業の相互参加公開」ということが行われます。これは両毛地域で行われている社会教育の色々な講座、教室、市民プラザで開かれている市民講座、こういったものに両毛地域の住民であれば誰でも参加していいというものです。これは実は教育長会議の恩恵なんですね。こういうことが行われる。これは平成 7 年の「両毛広域都市圏公共施設相互利用」というところに発展していくわけです。つまり朝野球をやっている連中は桐生に住んでいても足利のグラウンドが使える。佐野の人は館林のグラウンドが使えるという利用の仕方です。確か今は、火葬場も同じ料金で使えるようになったんでしょうかね。そういったことで、社会資本を相互利用しようということをやっています。その他にも「両毛広域都市圏総合整備推進協議会」を作りまして、合わせて東武線 3 沿線の開発の在り方とか、或いは「両毛 5 市商工会議所

CATV 検討委員会」というのを作ったりしました。ただ残念ながら、この CATV は、上手くいきませんでした。と言うのは、各市に CATV が芽生えてきてしまっていて、5 市では連携できなかった。それからもう一つちょっと残念なのが、両毛地域の地方卸売市場を統合して、総合卸売市場を作り、流通を促進しようと思った試みも、桐生市、みどり市が脱落し、佐野市も脱落しまして、上手くいきません。また、現在では「両毛広域医療連携調査研究会」を作っておりまして、これは個人的には非常に期待しています。つまり、私の両毛地域を題材にしたドクター論文のテーマは、地方都市圏における定住条件なんです。定住条件をどう考えるかということですが、定住面において非常に重要性を持っているのは医療です。医療、教育、それから社会福祉、国の予算配分でも、この 3 つはプライオリティの非常に高いアイテムじゃないかと思っています。そういう意味で両毛地域では、相当危なくなってしまった医療環境、これをこの 6 市が連携して、充実させていってもらいと非常にいいなと思っています。

今度、足利市の日赤病院も建て替えるし、富士重工太田病院も新築します。昨日の上毛新聞に、この太田の富士重工病院を救命救急センターに指定するというような情報も載っていました。そうするとこの両毛地域に足利と太田と救命救急センターが二つできるんですね。当然、ドクターヘリも飛ばします。こういったことで三次救急という面におきまして、大変期待が持たれる調査研究会であります。

5) 両毛地域の生活圏(その1)

さて、我々都市や建築計画をやっている人間は必ず「生活圏」という概念を使います。これは、利用者を想定したり、或いは施設の設置単位を考えたり、或いは計画単位を考えたりという時に生活圏を考えるわけですが、学生たちには「生活圏とは建築計画や都市計画を行う上で重要な考え方

であり、そこに住む人々の生活する範囲である」というように一応定義づけて教えています。内容的には歴史的に形成された領域が行政的に利用されて現在に至っているものです。50戸の自然集落を出発点にして、やがてそれが町内会になり、そして旧町村になり、やがて市町村、都道府県的に発展するわけですが、それからもう一つは、住民の生活行動における広がりです。これは都市計画ではパーソントリップ調査というのがありますが、これも含めて、住民や、経済活動における生活行動の広がり、この両方を睨みながら、生活圏ということを考えていくわけですが、生活圏での生活行動につきましても、通学圏、或いは購買圏、それから医療圏、それから娯楽、特に娯楽は「日帰り行楽圏」などという言葉もありますが、これも足利の活性化にとっても非常に重要な言葉かもしれません。それから各種社会活動の領域などがあるのではなからうかと思えます。これらは、各市の都市機能を適切に配置する上で使われるんだらうと思えます。

それでは両毛地域の生活圏をちょっと見ていこうと思えますが、ここは歴史的に形成された領域であります。この図は、平成の大合併後の現在の市町村です。合併が上手くいってないのですが、これは首長の力量の問題ですね。それから、し尿・ゴミ処理圏域、或いは警察の管轄、保健所、それから広域消防、救急医療、こうした広域市町村圏が、上位の生活圏であります。それから下位の生活圏は、旧市町村、中学校区、小学校区、そして農林業センサス集落区分であり、町丁字界というような小さい生活圏があります。

6) 両毛地域の生活圏 (その2)

さて、ここでちょっと皆さんに訴えたいことは、両毛地域においては非常に活発に労働力交流が行われているという事実です。平成2年の国勢調査におきましては、栃木県側から両毛16市町村へ約13,500人が通っています。そして、その中から太田、大泉へ6,800人、群馬県側から

栃木県側の2市2町へ約9,000人。足利から太田市へ4,800人、太田から足利市へ2,600人が通勤している。つまり、毎朝毎晩、渡良瀬川の橋のたもとが混む原因は、この労働力交流によるものだったということです。この国勢調査の結果を、図解したものがこれです。この両毛5都市の間での活発な労働力交流がわかります。これ実際は4,600人ですから、表現しきれていないんですけどね。とにかく、2,000人を超えるような労働力交流が行われる。(図を示しながら) やや弱いですけども、ここでも交流がある。そして、桐生と前橋との間もある。案外、宇都宮との間の労働力交流はない。遠すぎるんですね。逆に館林からは、京浜地区に出てしまう。これは大変面白い現象です。館林から朝1番の電車に乗ると横浜まで通える。こういうように、都市間の労働力交流が、県境を越えて活発に行われているということがわかります。

逆に今度は市部から町村への通勤ということで、拠点都市からその隣接町村への通勤を表しているのが、この図です。昔はこの動きは、なかったんです。町と村の関係で地域が成り立っている時代においては、都市が非常に求心的だった。特に、桐生や足利は繊維のまちですから、周りから若い労働力をいっぱい吸収するという格好になっていたのです。何故こういう現象になってしまったかと言うと、市街地にあった工場が、業績拡大をしてどんどん外へ出てしまう。近くの町村にある工業団地等に出てしまうということによって、こういうような新しい通勤の形態ができ上がるということなんです。これは、高度経済成長の後の新しい動きという風に見ていいのではないかと思います。

両毛地域における工業団地は、図のような格好になっておりまして、群馬県と栃木県というのは、非常によく似ている県でありますけども、工業団地の開発の手法が全然違います。群馬県の場合には小規模の工業団地をたくさん作るという手法。栃木県の場合には大ロットの工業団地を、拠点的

に作るという方法のように思います。ということで、さっきの労働力交流の激しさとは、実はこの工業団地の配置が裏付けとして言えると見ていいと思います。ただ、遺憾ながら、大月の工業団地が最近だめになってしまった。それから最近、東京三洋がおもわしくないなど、このデータを収集した時代とはちょっと状況が違っていますが、背景としては今ご説明した風に見ていいかなと思っています。

尚且つ、その裏側には昭和 47 年の工業再配置法の施行があるわけで、東京の下町にある亀戸とか亀有辺りの工場が、首都圏第三層に移転してくるという風な工業再配置が多分あったであろう。そして、それが両毛地域の工業基地化を促進したのかなという気が致します。

それで各都市に対してですね、どこからの通勤者がどのぐらい増えているかというトレンドを見たのが、この折れ線グラフです。一番激しい動きを見ると、例えば、太田です。太田は昭和 40 年から平成 2 年に至るまでに、足利からの労働力がどんどん増えていって、同時に足利の繊維がだめになっていったんですが、ぐんぐん伸びて、5,000 人近くまで通っている。そういうグラフです。それからこれは、これも大変面白いのですが、大泉に対して太田の労働者がどんどん増えていき、5,000 人を越えてしまうという面白い現象もあります。つまり太田に対しては周辺の、或いは前橋辺りからもどんどん労働力が流れ込んできて、今度は玉突き現象で太田の労働力が大泉に出てしまうという面白いことが起こる。これは、これいづれも国調の数字ですが、整理してみるとこんなことが分かります。これを細かく見たものが、表 3 ですが、私がちょっと注目したのは地域内就業者、つまり地域内就業者をちょっと注意して見たわけです。車の時代ですから、自分の市の中で、働く場所がなくてもかまわないのですが、どうせならば、家の近くに働く場所があった方がいいという見方をした場合に、域内就業率みたいな

見方ができます。この数字がどんどんどんどん下がっているのです。域内就業率が下がっています。労働力は自地域内にはとどまらないということが分かってきました。

さて、両毛地域というのは大変な工業基地ですが、平成 18 年の工業統計調査によりますと、栃木県の製造品出荷額は 8 兆 7 千億円、群馬県は 7 兆 7 千億円という数字があげられています。これに対して両毛地域の出荷額は 4 兆 4 千億円あるのです。それから太田、大泉の出荷額は 2 兆 5 千億円とシェアは非常に高いものがある。もっとも歴史的に見た場合に、足利は栃木県の工業の草分けですから、宇都宮が現在のようになる前に、足利はとうの昔に工業地としての地歩を固めてきたわけです。出荷額を細かく見ると、足利は約 4 千億、太田が 1 兆 9 千 405 億円、まあ 2 兆円ですね。佐野は約 4 千億円、大泉が 6 千億円という数字が平成 18 年時点では見られます。このシェアをみると、対栃木県では製造品出荷額は大体 5 割から 6 割ぐらい。それから事業者数で 6 割から 7 割が、両毛地域です。今後この工業基地がどうなっていくのかなあということが大変期待もされるし、また心配でもあります。

7) 両毛地域の生活圏(その3)

それから次に、今度は通学圏であります。通学圏も通勤圏と同じように、図に示すようなブラウン運動が行われております。これは高校生であります。群大工学部をはじめとして、うちの大学、或いは短大の存在から、このような通学行動がある。それから都市部から郡部に対する通学行動もあるということが分かってきました。両毛地域の現在の教育施設分布は図に示す状況であります。この 5 市にそれぞれ等しく大学短大が立地したという状況があります。

購買行動は、最近ちょっと変わってきています。図は足利商工会議所でやって下さったアンケートの結果を加工したものです。これは高級衣料ですが、だんだんと 5 市の求心力は弱まると同時に、

高崎などの中核都市に対する依存性も高まってく。或いは、特にこの両毛地域の場合に、特急りょうもう号に乗れば、1時間25分で東京まで行きますから東京へ出てしまう。或いは、大宮のソニックシティに行くというようなことで、特に頻度の低いものは、非常に広域的な購買行動があるということが分かります。最寄品、或いは中間品や買回り品等を見ると、ちょっと違った様相ありますが、これも県境を越えて全く遠慮会釈なく、あちこちの商店、或いは大型商業集積を自由に利用しているという状況が分かります。両毛地域における大規模小売店分布はこんな風になっておりますが、これも年々大きく変わって、商業振興を考える時に、かつては商店街対商店街の対立や中心市街地に立地した大型店を仮想敵に見立てて目の敵にした時代がありました。やがて複数の大型店の立地後は、郊外にパワーショップが立地して、今度はこのパワーショップ同士の戦いが始まった。足利のアピタにやられて、太田のベルタウンがだめになったというような話しが出てくるわけですね。今後どうなるか分かりませんが、商業、サービス業に関しては、とって予測がつかないような状況まで変化してきています。

次に今度は医療施設ですけれども、栃木県の資料が手に入らなかったのも、群馬県の医療の外来の統計によれば、前橋の日赤、群大、或いは沼田の国立病院、それから桐生の厚生病院という風に、第二次医療拠点に対して外来客が集中する。それから次に入院客も集中するという格好で、この医療施設の利用が見られるのですが、実は県境を越えて相当、隣接圏と言うか、両毛地域全体の医療施設の利用、交流が行われています。

どうしてその資料がないかというと、国民健康保険のレセプトをなかなか出してくれないんですね。お百度を踏んだのですけど貰えませんでした。従って資料がないのです。そこで、ヒアリングした結果によれば、足利の日赤には、県境を越えて、どんどん患者が来ていますから、この辺は、県境

が殆ど無きに等しいという感じがしています。で、両毛地域の医療施設はこんな風なことで、それぞれ第二次医療拠点を持っているわけですね。

佐野厚生病院、館林厚生病院、それから太田は3つありまして、富士重工太田病院、福島病院、本島病院の3つがあります。それから桐生は厚生病院、そして笠懸に東邦病院がありまして、大体200ベッドを超えるような医療拠点があります。この中で足利日赤には、栃木県の2番目の救命救急センターがありますから、ここを3次医療拠点というような見方ができる。尚且つ、今度は、この富士重工太田病院が救命救急に指定されたとすれば、人口86万人のエリアの中に救命救急センターが二つあることになる。我々にとって「スワッ」という場合に大丈夫だということになるわけです。

こういうことで、さっき申し上げたように、両毛地域医療連携調査研究会に、私は大変期待を持っています。それで今後とも新しい行政協力を進めるけれど、どうだろうかということで、私は「両毛クラスターパラダイム21」という報告書を15年ぐらい前に頼まれてまとめたことがあるんですけど、その時に20市町村にアンケートをしました。「どういう行政協力ができるか」ということを聞いたところ、いっぱい丸がついたのは観光開発です。それから道路行政ということで、後はちらほらで、社会教育、文化振興もやや丸が多かったです。やはり可能性が高い所に丸がついたのかなという感じがしております。

8) 両毛の生活圏(その4)

それから今後の行政協力上、検討課題は何かということも、観光資源の発掘・PR、そして公共輸送の改善、というところがかなり強くて、強いて言えば、産業情報の収集・PRというところも結構丸が揃っているかなと感じも致します。結局色々なこと考えてみたんですけど、これ最後のまとめのところにも出てきますが、20市町村が現在の6市6町で、連携し合えるのは築瀬先

生もおっしゃるように、実は観光が一番手っ取り早いと思います。両毛地域には様々な観光資源が実はたくさん眠っています。古代遺跡、毛野の国の支配者等の古墳です。それから中世の遺構、「太平記の里」ということで中世の遺構はいっぱいあります。それから近世の遺構、そして現代建築とか観光資源、名勝景勝地、それとイベント、祭り。これらを一応棚卸をしてみました。ちょっとこれ見にくくて恐縮ですけども、図は古代史の遺跡です。古いものでは、「岩宿遺跡」があります。葛生の「葛生原人」というのは大変期待されたんですが、実はこれ平安時代の人のあごの骨だったことでがっかりしちゃった。こんなフロックもあったんですけども、「天神山古墳」、或いは「女体山古墳」をはじめ、古墳はとにかく非常にたくさんある。こういうことで、古代史も上手く使うと、見るものがたくさんあるかなという気が致します。それから中世の遺構は、実におびただしいものがありまして、足利市、新田市は、まさに太平記の遺構ということになるわけです。

まだ、色々、面白いことはたくさんあるんですよ。例えば、上杉謙信が小田原を攻めてくるんですね。雪が消えると三国峠を越えて来るんですよ。必ず1回佐野に寄って、あそこを1回叩いてから小田原行くんですね。そういう面白い行動をとってまして、そういうことを細かくひも解いてみると大変面白い。それから新田次郎が書いた新田義貞なんか見ると、実は渡良瀬川の水争いですね。足利氏と新田氏が実は堰をどこに入れるかということで、血を見るような喧嘩しているんですね。ですからそういうこと考えると大変面白いものがいっぱい残っています。

特に足利の場合には、鶏足寺は奈良時代のお寺ですから、奈良、鎌倉、室町、それから織豊時代、そして江戸時代に至るまで、すべての時代の遺構があるんです。これも大変面白い。鏝阿寺、足利学校だけじゃないというところが大変面白いと思いますね。

それから図に示す現代建築、これも実は栃木県のマロニエ建築賞、私が委員長やっけていて、現在は松山先生やっけていますけれども、ここで表彰されるようないいものが結構あります。

それから景勝地、これも渡良瀬の上流、或いは唐沢山といった景勝地も随分あります。実はこういうものをきちんと棚卸をして、勝手に、図-23の両毛地域の観光ルートを考えてものですが、はとバスが来た場合の古代史めぐりとか、或いは中世めぐりとか、或いは現代の名勝、景勝地、或いはイベント、これを渡り歩くというような観光ルートが設定できないだろうかということ、もう随分昔、提案しました。ただいくつかネックがあって、葛生の奥の方の秋山というところの向こうが開通して国道122号にぶつかる両毛外環状線が、通るのですよ。

それからもう一つ、ここの桐生の梅田から、122号に出る「座間峠」と言うのがあるんです。座間峠を通ると、沢入いうところに出るんですが、そうするとこれは、両毛内環状が完成するんです。ダムめぐりルートなんてこと考えられます。で、こんな風にちょっと手を加えればですね、両毛地域の観光も捨てたもんじゃない。色々ないいこともやっていますね。

4. まとめ

最後ですけども、両毛地域全体の活性化はまず現状では相当難しい。これ今日書いたものですから、まだ湯気が立っている話ですが、商業関係では、総合卸売市場の企画がどうも上手くいかなくて、風聞では色々なこともあります。例えば、太田の市長は北関東自動車道路が開通したら、インランドデポを作って、内陸の税関を作ろうとか、或いは流通拠点を作ろうとか、色々なこと言っていますけども、その可能性はあります。だけど今のところは未知数で、これから皆さんとの意見交換ですね。

それから工業関係では、もう、新しい提案は何

にも出せない状態ですが、この間、大泉の商工会のお手伝いした時に、やっぱり一つには異業種交流があるんだと聞きました。足利の商工会議所でも、異業種交流を始めてる人がいるんですよ。こういう人の力を頼って、東京大田区なんかだと、信用組合で異業種交流をやっているのですが、両毛地域ももうちょっとやってもいいんじゃないかと思います。それからもう一つは、萌芽的な製品の支援ということで、うちの大学の総合研究センターが動き出していますが、要するにインキュベーター機能です。桐生では中心市街地に、今度6階建ての市営住宅を作りました。この1階にインキュベーションのオフィスを置いてあります。

それから、3番目4番目の観光入り込み客の増加策は、これは今、ご覧なったように、やり方次第によっては、相当可能性があるんじゃないか。最近、東武の駅長さんも、JRの駅長さんも非常に協力してくれておりますから。ちなみに11月の7、8日と「そば祭り」をやります。私が会長ですので、ぜひご参加をお願いします。

それから農業は、大豆生田市長が言うことには、両毛ブランドを確立して両毛の農産物を輸出したい。特に、トマト、それからイチゴ、最近お金持ちの中国人がコシヒカリとか、或いは安全でおいしい日本の農業製品を買ってくれるんです。そういうこともあってですね、両毛ブランドを確立して、主産地形成をして、地産地消もちろんやりますが、中国の人が買ってくれるということも視野に入れてやってくるといいなという感じがします。

非常に雑駁ではありますが、以上でスライドショーを終わりにしたいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。

全体討論

司会

どうもありがとうございます。まさにぴったり、時間通りです。ということで、後、少し皆さんと意見交換をしてみたいと思います。むしろそちら

の方が蟹江先生も望むところだと思いますし、またその中で色々なアイデア出てくるとと思いますので、一つご活発なご議論お願いしたいと思います。どうぞ。

0氏

こんばんは。両毛6JCの会長をやらしてもらっている大沢と申します。どうもよろしくお願ひします。キーワードとして、両毛の色々、青年会議所でもしばらく棚卸みたいにならしてやっていたんです。民間で見る棚卸をそろそろアウトプットしたいなとキーワードを観光で考えていたものから、まだ今日これから擦り合わせをするんですけども、ちょうどいい話が聞けるかなと思って・・・観光のところで可能性を掘り下げて聞かせて頂けるとありがたいかなと思います。

蟹江講師

一つは今、箱モノは作らない、公共投資をしないっていう状況の中で、やはり各地域のイベントを結びつけてくってということがありますよね。相当、入り込み客はあるわけですから、その辺を上手くタイミングを計って、例えば、去年だったかな、足利のそば祭りと、ココ・ファームワイナリーのお祭りが同じ日だった。同じ日だった方が良かったのか、悪かったのかよく分かんないんですけども、賛否両論なんですよ。

それは足利市内の話ですけども、桐生との関係とか、太田との関係とか、こういったことで、まず、ちょっと本筋からそれですけども、考えて見ます。

観光で地域を活性化するってときのストーリーは、一般的には、多くの人にまず来てもらう。そして1時間でも2時間でも、場合によっては半日でも1日でも滞在してもらう。あわよくば、2日も3日も滞在してもらう。

それで、滞在してもらってる間に色々なものに参加してもらったり、そして、一番大事なことはお金を落としてもらう。これがないと宴の後になっちゃうんですよ。残ったのは空き缶ばかりに

なっちゃうわけだね。

どうやってお金を落としてもらうか、例えば食べてもらうとか、お土産を買ってもらうとか、さっき言ったように、農産物を買ってもらうとかしない。その仕組みを作らないとまずいです。

基本的なストーリーでしょう。来てもらって、滞在してもらって、お金を落としてもらう。あわよくばリピートしてもらい仕組みですよ。まさに6JCが集まったらもう鬼に金棒ですよ。

O氏

ありがとうございます。片倉さんも一生懸命やっていた頃は、道州制議論とか、北関東道ができる想定で絵を描いたりしてたと思うんですけども、実際もうすぐ先の話になってるじゃないですか通ること。間違いなく通る。偶然かどうか分かんないんですけど、足利にホテルもたくさん今できてますし、泊まってもらうことも可能かなとも思います。足利を中心とするかどうかは分からないんですけども、何て言うのか、相互補完し合えるような観光地を両毛、「ようこそ両毛へ」、そういうキャッチフレーズでやれたら楽しい、いかなって風に思います、まだ素人考えなので色々相談のってもらおうかなとも思うんですけども。

蟹江講師

さっきご覧になったようにね、全国に色んな地域連携は進んでいるけれども、両毛地域が先進地なんです。それで、上つittedとこで連携してる場所は多いですよ。しかし、両毛地域は水道の水をやろうとか、施設を利用してもいいとかね、或いは卸売市場一緒にして、少し流通を安くしようとかね、実質的なことやってるわけですから、そこは頼もしいですよ。それはもう皆さんの先輩でもあり、我々の先輩が勝ちとってきた成果ですよ。それで前に、県境地域はここだけじゃなくて、他はどうなっているかと思って、小山の周辺を調べたことあるんですよ。小山、古河、結城、ところがね、上手くいってない。だから、地域連

携は両毛の特殊性なんだ。

或いは、伊勢崎とか本庄とか、色んなところに目を付けて調査してみたんですが、両毛が上手くいっている原因は何かって言うとね、「糸編」ですよ、やっぱり。繊維ですね。繊維の歴史的な元請け、下請け、孫請け、或いは横請け、このつながりというのは非常に強い。こういう中で、嫁を貰ったり、やったりという風な通婚圏。それから、農地が隣町にあるというのが通作圏。こういった、二重三重の緊密な地域の関わりがある。それで、挙句の果てには栃木県に行ったり、群馬県が来たりという風な、交流圏があった。

だからそういう点で、色んな揺さぶりを受けて、つながり持ってきた地域ですからね、連携としては強いんでしょうね。

A氏

小山と結城ももうちょっとつながりあっても不思議じゃないんですけどね。無いんですかね。

蟹江講師

これと同じ調査やってみたんですがね、期待したほどの繋がりはないんだね。」

A氏

結城紬にしる、小山でも作ってたりとかもありますよね。

蟹江講師

B君はどこ、出身は。

B氏

僕は埼玉の白岡です。

蟹江講師

そうか。白岡か、埼玉の。それから館林と羽生とか、あの辺のつながりもあるかなと思うんだけど、無いんだね。Cさん、率直なところ、今日の雑駁な話を聞かれてどうでした？

C氏

こちらに来て新参者ですが、両毛6市がほんとに仲がいいのか悪いのかよく分からないんですよ。私は以前、埼玉の東の方で仕事をしていました。埼玉の東部です。今は「つくばエクスプレス」っ

ていうもの通っています。埼玉の一番東端で東京に接している三郷市、八潮市というところありまして、隣同士なんです。隣同士でありながら実は交流してないんですね。八潮市は草加都市圏なんです。東の草加市、三郷は西の流山とか金町とかに近いですね。それと松戸ですね。隣同士でありながらちょうど背中合わせのような感じですね。

E氏

向いてるベクトルが違ってらんだ。

G氏

ですから、三郷の人は江戸川泳いで嫁さんを千葉まで貰いに来たことはあるけれど、背中の方、八潮から貰うことはあまりない。全く背中合わせの都市を、縦断する、つなぐ形でつくばエクスプレスというのは走ったわけなんですよね。

蟹江氏

なるほどね。

G氏

両方の市役所の何となく日頃の交流が無い。ところが、実はあの辺を含めた、越谷まで入れた、埼玉東部都市圏で括れば、100万人ぐらいになる。それなら連携しようというのを言っている。最後は経済力で強引にまとまっていくんだろうけど、ほんとにこれで大丈夫かな、なんていう風に思いました。

広域の交流で、先生のお話伺って水道やり取りするなんてものすごい仲がいのかなという感じがするんです。それを考えると、今度の直近の町村合併では、もうちょっと大胆に、足利の連携みたいなものにはならなかったのかなとも思います。

蟹江講師

実に、その辺は悩ましい。大体ね、桐生が飛び地合併しているってこと自体が非常に不自然ですよ。私は、桐生での会合のある度に言っているんですけど、これは政治的な産物なんですよ。時の首長と国会議員の仲が悪かったっていうのが最大の理由なんです。あれは非常にまずいですね。今、都市マスタープラン描いてますけど、飛び

地があるんですから。新里、黒保根っていう。じゃ、この間の道路整備どうするんだって話になる。真ん中にはみどり市があって、みどり市にお願いしてここんとこやってもらうなんて言っていますけど。非常に不具合ですね。

G氏

私もかつてJCで、10何年か前に両毛地区を政令指定都市にしてやろうっていうんで、80万人ぐらいでしたっけ。

蟹江講師

当時から80万は超えてましたよね。

G氏

問題は県境とか、難しい点はあるかと思うんですけども、これからの道州制もあることだから、これはどういう風にするのか分かんないけども、政令市の可能性というのはあるんでしょうか。両毛市という。

蟹江講師

どうなんですかね。道州制は、一応ネットにも出てくるぐらいだから、かなり公に広報されているけども、個々に踏み切るには、どうですかね、まだ10年以上かかるでしょ。

H氏

ただ、両毛市の可能性があるのかないのかって、すごく面白い議論だし、たぶんそういう方向に行けたら発展するのかなって気もするんですけどもね。

蟹江講師

そうですね。人口86万ですから政令指定都市に近いですよ。

E氏

それってどんな感じですか、地元の方から見ると、両毛市、足利区みたいな感覚。

I氏

できたらいいと思いますけれども、なかなか難しいだろうな。10年じゃ、なかなか。要するに各市会議員、首長、こういう人たちの頭が相当切り替わらないと、難しいだろうな。私はよそから来

てる、足利の人間じゃないんですけども、案外足利は（群馬県の）太田や桐生とは一緒になれるのかもしれない。

J氏

逆に、ですね。

I氏

佐野は難しい。佐野が嫌がるんじゃないかなという気が非常にしますね。足利と一緒にするのは嫌だと。それならもっと反対側と一緒にの方がいいというような感じがします。佐野の人たちと案外付き合いがあるんですけども、嫌がりますね。足利の人と付き合いたくない。

蟹江講師

佐野、お詳しい方？

M氏

いや、詳しくはないですけど。最近ちょっと関わっていることあるけど、嫌がってはないでしょうけど、やっぱりちょっと違うでしょうね。どちらかと言うと佐野の人はやや東の方に近いかもしれませんね。やっぱりそういう意味ではやっぱり足利っていうのは、昔から感じたけど、いい意味でも悪い意味でもやっぱり特殊なんだと思うんですよね、栃木県の中ではね。感覚としてはね。だからやっぱり両毛っていう圏域が昔から一つを中心としてあると思いますね。

G氏

以前にも、さいたま市ができる時に、大宮、浦和が教育圏と経済圏っていうのが、あるかもしれないけども、上手くいかなかったところを、大宮の方のJCの例会行って思いました。それから「さいたま市」を意識しています。だから、ぜひ6JCで頑張ってもらい

たい。

H氏

確かに3つが合併して、まず最初にJCが合併して、

G氏

最初は、YOU and I (YONO、OMIYA、

URAWA、AGEO と INA 町) ですね。4市1町が対象です。結局、浦和、与野、大宮の3市合併から始まる。

E氏

浦和は県庁があって、これの影響が大きいんですね。購買力とか。大宮までが市域だったら県庁が移動しなくて済むわけです。ところが、上尾まで入ると北の方に地域が広がるものですから、そうすると大宮の方に県庁が行っちゃうかもしれないっていう心配もあったと聞きました。

H氏

そういうのはKさんがすごい詳しいですよ。

K氏

4年前にはですね、両毛6JCの会長を務めていて・・・本業はソバ屋ですんで。「そば祭り」には、是非おいで下さい。これは全く私の個人的な意見は、足利と太田が合併するのが、これが話題性という点でも一番の両毛の求心力を高めるためにはいいのかなって、ずっと思っていました。今だから言える話で、10数年前ですね、足利のJCと太田のJCを合併しようという話は出てたんです。最終的に頓挫してしまっただけですけども、かなりいいところまで盛り上がったってことありますね。

蟹江講師

両毛の県境を挟んでもいいわけ。

G氏

うん。関係ない。どっちかに入っちゃえばいいんです。

J氏

太田と足利が入り組んでいる区域もありますし、それから戦争中に中島飛行機に勤めていたって人がかなりいるんですね。太田に親近感を持つてる人が、結構多いんですね。

K氏

行政的には同じ県の佐野との合併が一番手っ取り早いけど、JCは敢えて、距離的に一番近い太田と合併するのがいいかなと思う。でも、それは難しかったんですが。

さっきちょっとイベントの話が出てきましたよね。イベントについても両毛のまちではわりとかぶるんですよ、特に夏、足利の花火と桐生の八木節祭り。ずらせば、お互いにですね、足利の人間、桐生の八木節祭りに参加するっていうことができるんですけども、夏のお祭りが何故がかぶっていて・・・ああいうのを上手く分散できないものかっていうことはちょっと思っていましたね。

蟹江講師

それから都市の勢力っていうことを言った場合にね、やはりその宿泊容量が、ものすごくきてくるんですね。我々建築学会の大会を開くと、大体3千人から5千人ぐらい来るでしょうね。5千人が泊まれないと、建築学会の大会できない。結局、大都市での開催になっちゃうんですね。今、だから両毛で何か大きなイベント開こうとした場合に、宿泊容量ってどのぐらいあるんですかね。」

J氏

足利で400か500、小さめに見積もって。

蟹江講師

足利と太田と桐生を合わせると？

J氏

3,000人になると、もう埼玉県でもできない。

蟹江講師

このように宿泊容量が、小さい。さっき言ったようなストーリーでいっぱい人に来てもらう。滞在して、場合によって泊まってもらう、そして、お金を払ってもらうというストーリーで考えたとすれば、やっぱり泊まる場所ないとね。どっちが先か分かりませんが、人が来なければ到底成立しないしね。

L氏

最近、ホテルも随分できてますよね。ルートインもできて、結構入ってるんですよ。実際うちなんかに出張でメーカーさんなんか来た時に、以前、太田に泊まった人が、今は、足利にも泊まるところあるんだからって泊まってるけど。「わかさホテル」なんて、鏝阿寺見えるからいいんだなんて。

昔の「エルコンドルホテル」ね。

蟹江講師

今日は、主題の足利の活性化の話にはならなかったけど。

E氏

でも、「両毛市」という仮定を一つ置くことによって議論は進みますよ。ただ、合併は非常に難しいなって改めて思いました。つくば市は、20年くらいに、6市町村が合併してできたんですけど。よそ者の発言を聞いた記憶がある。合併直後の話かなと思ったら、そうではなくて、半世紀ぐらい前の話をまだやってる。「あいつ後から来たんだ」みたいな、「地元の奴じゃない」みたいな言い方をするのが、実態なんです。深層意識にそういうのってあるのかなっていうのは感じました。なんだかんだいくと理屈ではまともでない世界のかなという気がその時しましたね。

N氏

後ろからすいません。一つよろしいですか。地域連携という話で私も経験した感じで申し上げるのですが、先程両毛5市は仲いいんだという話をしましたけども、大体ね、「何々は一つ」というのが全国にあちこちにありますよね。例えば、近畿は一つとか、それから四国は一つとか、どこどこは一つ、両毛も一つ。そういうところは大体仲よくないですよ。基本的に仲良ければわざわざそういうこと言う必要がないわけ。もう一つ、

つくばの話が出ましたけども、新しくまとまるこつてのは、意外と行政界がまたがって、それぞれの行政界の半端なところ、つくば市も6市町村界の端でしょう。

筑波研究学園都市に対抗して関西では、関西文化学術研究都市、関西学研都市を作りましたけど、あれも、京都府、奈良県、大阪府のそれぞれの端っこなの。なんかあまり今まで目をかけられなかったというようなところとかね、そういうところがまとまる可能性があるっていうことと。

結局、関西は一つとかなんか言ってるところは、

仮想敵国を作ってるんですよ。関西ってのは、東京に対して何が何でも頑張りたい。対抗したい。それはまあ、明治維新の時に、天皇が東京来ちゃって、関西はあれからずっと恨み持ってんだけどね。だから未だに関西の人に言わせると、天皇はまだちょっと東京で仮住まいしてるみたい。本家は向こうだって言うの。御所ありますんでね。ちょっと余談だけでも。

要するに、仮想敵国があると、やっぱり仲悪くてもまとまる。まとまらざるを得ないって言うかね。それで、万博もやったし、それから関西空港も作ったし、いろいろやってるわけだけど、仲は良好くないんですよ。商工会議所も全然違いますからね。私も京都や愛媛県でも働いたんだけど、四国が一つってのは敵国が無いんだよね。もともとだめだから。そうするとまとまんないじゃない。いずれにしてもまとまんない。そういうことでせいぜい水、渇水の問題で何とかしようっていうぐらいだね。

両毛5市は県境は確かにありますが、一緒になってる。だから面白い要素なんだけど、それぞれみんな頑張ってますからね。つくばももとは何もない所で、農地ばかりのところで新しくできたし、関西学園都市も丘陵地ばかりだからね。そういう意味で、両毛市は、すごく難しいなっていうのと、両毛5市の仮想敵国を作るとどこなんだろうかな。もしそういうのが必要だとするとね。どこでしょうか。

蟹江講師

あの大都市圏、水戸都市圏、宇都宮都市圏、前橋・高崎都市圏のはざまにあるのが虐げられた両毛地域。

N氏

虐げられてるの？

E氏

おんなじぐらいの規模で、頑張れるとこですね。

N氏

それと、もう一つは内部的にはもうちょっと喧

嘩しないとだめだな。仲よくする為には喧嘩するって言うかね。それぞれが、あいつあんなすごいことやったと。こっちも頑張るぞと、こういうね。一つになる為の要素っていうのは、いくつかあって、両毛5市はどれでいくのかなというのが、まだ、分かんない。中途半端な感じがする。

蟹江講師

そうなんですよ、何とか食べられますからね。

N氏

そう、困ってないっていうことがあるからね。関西なんてほんとに困ってるんですよ。名古屋は、3大都市圏から落っこちて来ているけども、ものすごく強いんだね。腰が強いつて言うか、全然へこたれないんだ。人口もずっと変わらない。中部圏は。

蟹江講師

名古屋は両方見てますよ。大阪見て、東京見て、

N氏

やっぱり家康なんだよね。えらく図太いんだよ。そんな感じがしてたから、翻って、両毛5市が連携のためにどの辺を狙って、やればいいのか、色々教えて頂けたらと思うんですけどね。

蟹江講師

僕は、とつても愛すべきエリアと思っています。調査をやればやるほど色々面白いことが出てくる。それで、最近、景気が悪いつてもあるんですけど、今は、生活の質みたいなことが、ほんとに問われている時代じゃないか。行け行けどんどの時代じゃないから、施設もできないし、新しいものは買えないけれど、でも考えてみると、我々は、「豊か故の貧しさ」とでも言うのが分かる。世の中全体が規模が拡大して、豊かになってくると「あれも欲しい、これも欲しい、反対に「これ買えない、欲しい車買えない」という豊かさなんだが、レベル的に言うと食えないというレベルじゃない。そうじゃなくて、もっと生活規模を縮めるといって相当無理があるんだけど、例えば、ヨーロッパの街角、テレビでよく、ヨーロッパ

の楚々とした街を映すんだけど、楽しみはものすごく素朴なんだね。ドイツではじゃがいも焼いて、みんなで集まってパーティーやる。踊る、それから音楽を演奏するというような。我々にそういう豊かさはあるだろうかと言うと、所得水準がかなり高いところまで行っているはずなんだけど、豊かじゃない、やっぱり貧しい。ちょっとこれ変じゃないかと思う。

それで、いい例かどうか分かんないけど、ミシュランオカモトというタイヤメーカーが太田に立地した。太田に工場ができた。当然、従業員とその家族が来て太田に住むはずなんだけど、彼らは足利に住みたと言って、山辺小学校のちょっと脇にアパート借りて住んでいる。そういうチョイスとは何なんだろうかと考えると、やっぱり歴史とか文化とか、生活の質みたいなものがあるのかなという気がする。あんまりハイレベルの、金がかかりそうなことは、とりあえずやめて、生活の質を考える時代になったと思うんです。「結構、足利の生活は潤っているよ」ということにならないかな。僕は年を取ってきたせいか、そうした方向が豊かなような気がするんだけど。自転車走らせるとかね。

L氏

自然がいいですからね。

蟹江講師

それで農産物が上手いしさ、安全だし。

N氏

両毛地域、足利の人が自覚してるか、どうかだね。いいものを案外自覚してないって言うかね。ヨーロッパの話が出たけど、彼らはもう無意識的に自覚してるでしょう。それがずっと続いて来ると感じる。だから、今ミシュランの人が足利がいいって言ったのは、たぶん、自分の故郷に近いからとか。そういう感覚があるのでは。だから、軽井沢を見つけた人も、自分の国のそういうものに、ここはぴったり合ってるからって言うんで、あそこを何とかする。そういう自分の

育ってきたものを日本の中で見つけているというか、そういうものから離れられないって言う、そういうものをみんな持っている。足利の人は、どういう風に思っているのか、どうでしょう。

M氏

外から見ると、足利の持つる非常に大きな地形的なものってやっぱり魅力の一つかもしれないですよ。やっぱり地形っていうのは魅力的に思うのかもしれない。外から見ていると足利が好きだって人多いです。山に抱かれたと言うか、背後に控えてっていう山壁の格好とかもいいんですよ。それが非常に魅力的だって風に言う人多いですよね。

蟹江講師

山あり川ありで、自然の風景もあり。だから一遍に生活の質を変えると、我々は、スローライフだとかね、スローフーズとかもありで、足利ではそれをほぼみんなが実践しているよということでもいいわけだね。上手いものが楽しめるとか、すごい夕日がきれいなアングルがいくつかあるとか。ヨーロッパを見てるとそんなもんだもんね、パーツはね、昨日、テレビでベニスやってたけどね、やっぱり大したパーツじゃないんですよ。

N氏

ある意味じゃ、我々が見てても、退屈しないか心配になるような、感じもしちゃいますよね。もうちょっとなんか刺激が無いと、

H氏

太田行けば刺激はたくさんある。

(複数名笑う)

N氏

でも足利にもそういう刺激があったんですよ。

H氏

繊維産業の衰退とともに、消えていった。桐生にある刺激は十分あるんですよ。桐生には、北に仲町という、集積がある。何故あそこに残ったのかと非常に不思議なんだけど、他の地区にはありませんから。北関東に全然ない。前橋も宇都宮も

含めて、あれだけの集積を持ってるところはないです。最後に残るのは仲町かも。

N氏

佐野が足利を嫌ってるっていうけど、宇都宮も足利を嫌ってますよね。

M氏

嫌ってるっていうより、やっぱり異質っていう感じがあるんでしょうけどね、異質なものが、排除されているという・・・

L氏

避けられている気がする、避けられてるな、俺たち。

M氏

異質なんですよ。特異なんだと思う。特徴あると思う。そういう意味で。

K氏

個性ですよ。

複数名

そう、個性。

N氏

それと京都から嫌われてるからね。要するに日本のお膝元からね。それは歴史的に色々あるからね。

蟹江講師

若い人に言っても全然分かんないと思うけど、昔、徴兵例があった頃ね、足利の人はね、兵隊検査が終わって軍隊に入隊するとね、黙って 2、3 発殴られるんだって、足利から来たって言うだけで。無条件で。つまり、戦前の皇国史観によると、足利は朝敵なんだよ。南北朝の時代に足利尊氏は悪い奴だとされていて、その発祥の地の足利から来たっていうんで、兵隊が、黙って殴られるんだって。そういう時代があったらしいね。よかったよ。その次の世代で。

N氏

だから嫌われる意味が、色々あるわけですよ。それを少し、佐野と宇都宮から何故嫌われるのかってのは調べて下さい。

蟹江講師

で、足利と佐野、もとは葛生と田沼が入ったでしょ。一番の大きな問題はね、都市構造が二眼レフなの。二眼レフの広域圏は、大体上手くいかない。渡良瀬川の向こう、館林と太田が、同じ広域圏なんですけど二眼レフでしょ、これが、まずいんだよ。館林太田の医療問題協議会があって、その病院部会の委員やっています。どういう役割かと言うと、例えば、ある先生が死んで、その先生が経営してた病院の 100 ベッドが宙に浮いた、その 100 ベッドを誰かに配分しなくちゃいけないって言う場合です。あちこちの病院が手を挙げる。1 ベッドを 1 年回転させて 1 千万、1 日 3 万円ですから。僕は distributor になって、ベッドを配分する役なんです。ある時、「人口比例配分がいいだろう」と言ったら、「いや、それは悪平等だ」と言うんですね。太田の方から。「今、発展している都市に余計に配分するのが、適正配分だ」とこういう風に言うんだ。すごい理屈があったもんだなあと思って・・・。

A氏

私は足利生まれの足利人なんですよ。だから、もっともっと、足利の活性化の為に小さなことでも自分でやるべきことはないかと模索して、少しずつ頑張ってます。今日は先生のお話聞いたり、足工大さんにも色々学習に時々お邪魔したり、勉強しております。それで、蟹江先生のお話を聞いて、ほんとに活性化の為に勉強を、こういうことの勉強しないといけないという気分です。今日はありがとうございました。現状はなかなか勉強のチャンスがありそうにないですね。

N氏

この会、後 4 回ありますので。ぜひご参加してください。

蟹江講師

私、決して大風呂敷を広げているわけじゃなくて、ついこの間、「足利学」をやっています。生涯

学習センターでね。

A氏

私2回受けました。1期生と3期生です。

蟹江講師

上智大学、足利工大と足利市と合同でやってるんです。この間は、3回程、市街地の活性化だけに焦点を合わせて、ワークショップをやりました。今日は大風呂敷を広げてしまったけど、この間の足利学では、ピンポイントで講義しました。みんな一生懸命考えて、提案していました。そのミニ報告会を大豆生田さんが聴きにきてくれた。いいことも言っていました。さっきの中国にトマト売るとか、上海にトマト持ってくとか。施政方針はよく分かった。皆さん47歳の市長、若者に任してみようと思ったわけでしょう、今回は。我々バックアップするしかないですよ。僕も実は余計なことですけど、昨日66歳になったんですよ。60代も後半になったらできるだけ、若者の邪魔をしないで、50代、40代の人に任せて、邪魔にならないようにしようと決めたいです。考えて下さい。若者が。

司会

「会話を楽しんでいるんですが、時間も参りましたので、今日は、明日の両毛市を目指してというぐらいのところで、とりあえず、第1回の結論ということにさせて頂きたいと思います。また、観光とか他市の関係というのは次回以降、また折々議論させて頂きたい。最後、申し訳ございませんが、明日のJCの為に一つよろしくお願いします。

M氏

はい。今日はほんとうにありがとうございました。先程からずっとなんか両毛6JCの色々活動の話を、これからやっていこうって話をきいて、アドバイスも頂きましたけれども、たぶん民間からできる交流を先輩達から教わってきたんですが、行政でやることは行政で、民間でやることは民間でというので、民間でやることはたぶんできると思うんですね。どんな行政区の中でも。それを率先

してやってるのが両毛6JCだと思っていますので、そのキーワードを「観光」としたいと考えてますので、また蟹江先生には色々ご助言を頂く機会があると思いますけれども、その時はまたよろしくお願いします。そういったことで、民間からのスタートが行政へも伝播して両毛市が誕生する、そんなことを祈念しまして今日最後の締めとさせて頂きます。どうもありがとうございました。」

司会

公開講座第1回はこれでお開きにさせていただきます。蟹江先生、本当にありがとうございました。

中川会長

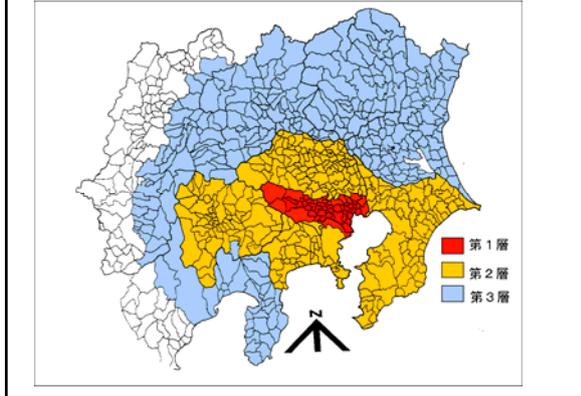
どうもありがとうございました。気をつけてお帰り下さい。

両毛地域を視野に入れた地域活性化論

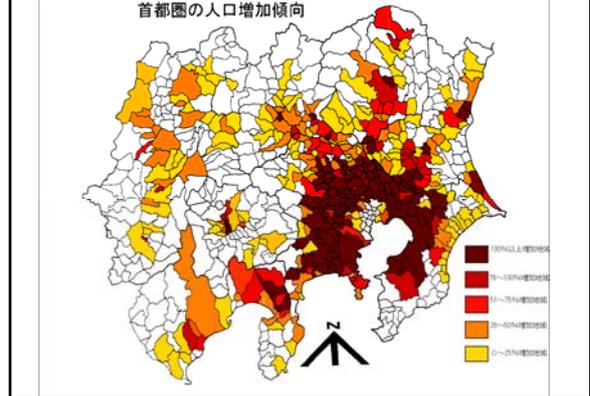
平成21年10月14日
足利工業大学副学長・蟹江好弘



首都圏の領域区分：高崎経済大学：武井 昭氏による

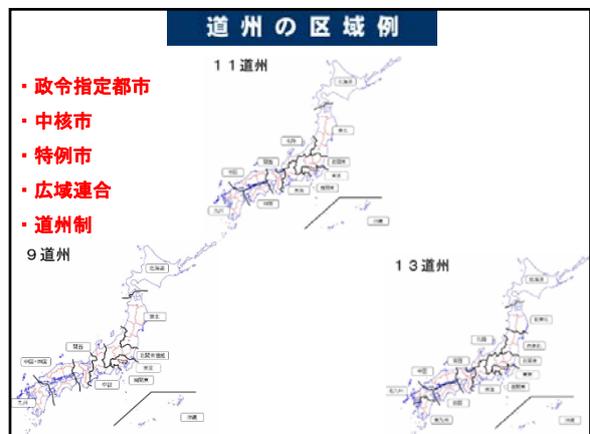


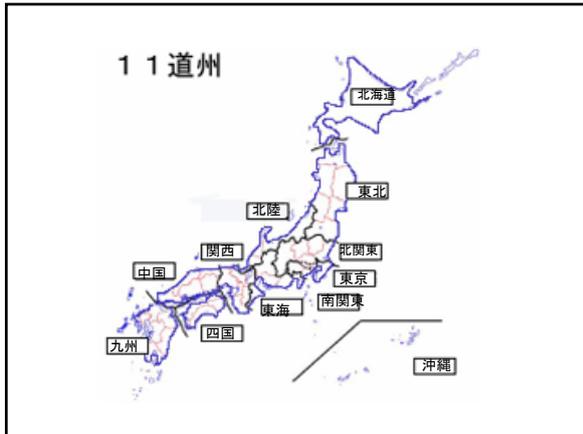
首都圏の人口増加傾向



全国各地で進む地域連携

国土交通省ホームページより





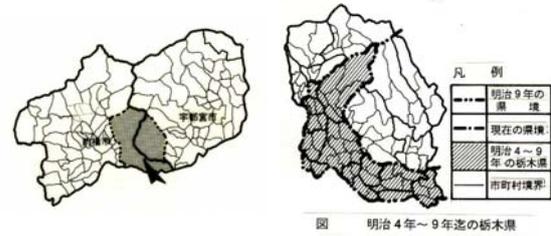
- ### 進展中の地域連携
- 広域的地域連携……7圏域
 - 狭域的地域連携……17圏域
 - 軸線的地域連携……6圏域



両毛地域は地域連携の先進地

昭和44年より県境を越えた地域連携が開始され、既に一定の成果を修めている。

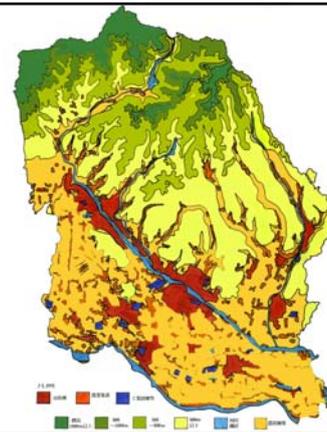
両毛広域経済圏：両毛地域の位置と範囲



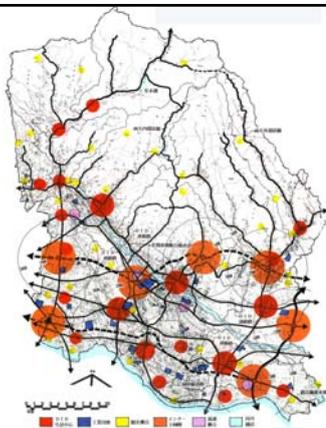
両毛地域の概況：市町村数：平成16年迄、5市12町3村
平成17年より、6市5町
総人口：864,859人（平成17年国調）
総面積：138,600ha

毛野国のこと

- **毛野国**・**毛国**（けのくに、けぬくに、けぬのくに）は、かつて日本の地方行政区分だった**国**の一つである。単に**毛野**（けの、けぬ）とも。
- 律令制下では**上野国**と**下野国**が置かれ、合わせて、あるいはどちらかを**毛州**（もうしゅう）と呼ぶ。合わせて**両毛**（りょうもう）とも言うが、現代ではこの語は上野と下野の境界付近の狭い地域を指すことが多い。



両毛地域の地形概要



両毛地域の道路網・都市機能

両毛地域における連携の推移

両毛地域における連携事業1

- 昭和44年 両毛地域開発推進協議会発足
- 昭和46年 両毛地区青年会議所懇談会発足
- 昭和52年 **特殊災害消防対策相互応援協定締結**
- 昭和55年～国鉄足尾線存続期成同盟発足
- 昭和58年 **両毛5市水道災害相互応援協定締結**
- 昭和59年 両毛5市教育長会議発足
- 昭和59年 両毛5市市議会議長会議発足
- 昭和60年 両毛5市若手議員懇談会発足
- 昭和60年 両毛5市市長会発足
- 昭和62年 両毛5市商工会議所協議会発足

両毛地域における連携事業2

- 昭和63年 両毛地域東武沿線開発推進協議会
- 平成元年 **社会教育事業の相互参加公開**
- 平成4年 両毛広域都市圏総合整備推進協議会
- 平成4～5年 両毛地域整備計画調査実施
- 平成6年 **両毛5市商工会議所CATV検討委員会**
- 平成7年 **両毛広域都市圏公共施設相互利用**
- 平成8年 両毛広域タウン誌発行
- 現在 両毛地域地方卸売市場統合、総合卸売市場化へ向けての協議中（桐生市・みどり市・佐野市が離脱）
- **現在 両毛広域医療連携調査研究会**

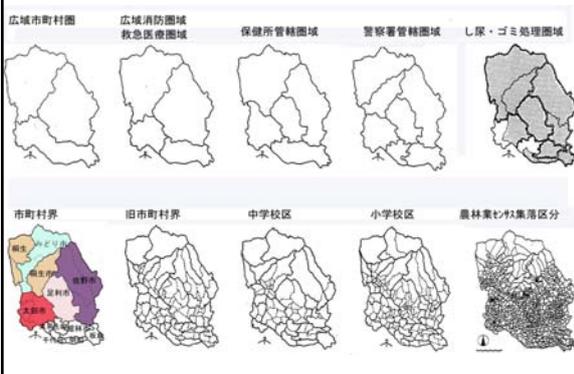
生活圏について

- 生活圏とは、建築計画や都市計画を行う上で重要な考え方であり、「そこに住む人々の生活する範囲」である。
- 生活圏には、①歴史的に形成された集落(部落)など、生活集団(コミュニティ)の単位を原型として、それが幾つか集合した、町内会、地区、市町村、都道府県へと発展する。これらの単位は、行政執行上、便利に利用されてきている。
- ②住民の生活行動における拡がり

生活圏2

- 住民の生活行動における拡がりとは、日常的に生活を営む中で、①通勤、②通学、③買い物、④治療、⑤娯楽、⑥各種社会活動(文化・スポーツ等)を自宅を中心にして、どのような範囲で行っているかを知る。
- そして都市計画等を行う際、各種の都市機能配置を適切に行う上での資料とする。

両毛地域の各種領域・圏域

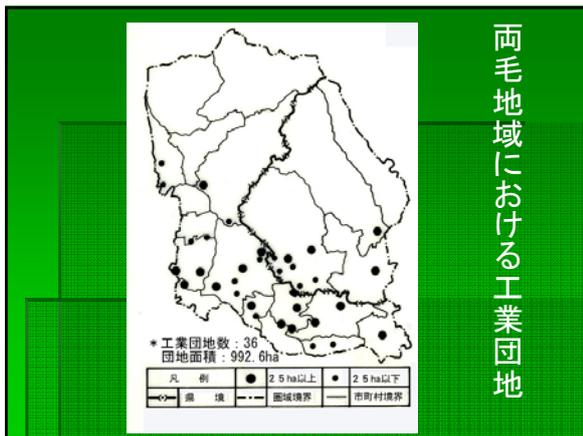
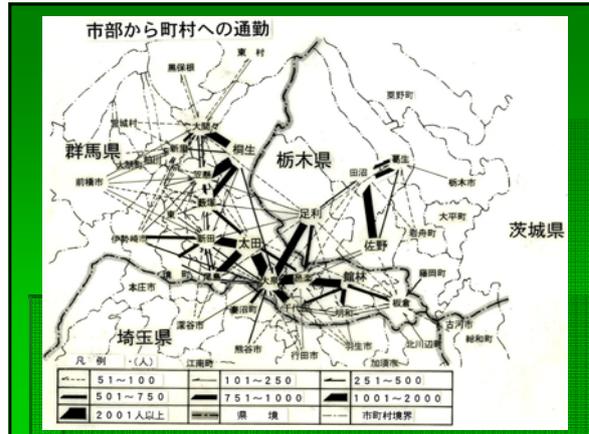
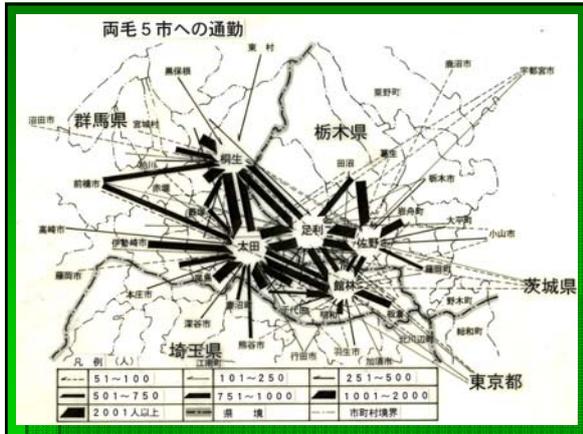


両毛地域では活発な労働力交流が行われている

特に5市の間では、これまでも県境を越えて通勤が行われてきた

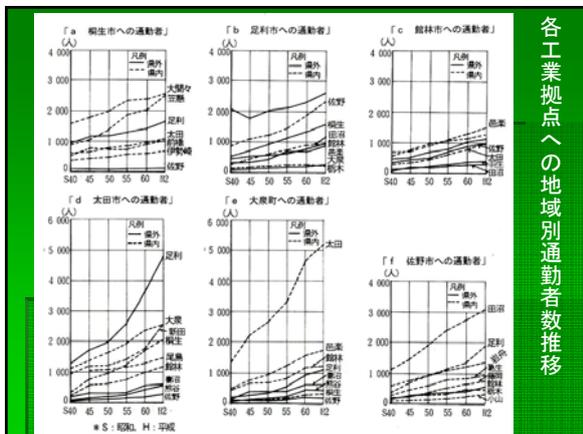
平成2年国調では

- ・栃木県側から両毛16市町村へ、13,543人
- ・栃木県から太田市・大泉町へ6,801人
- ・群馬県側から2市2町へ8,749人
- ・足利市から太田市へ4,849人
- ・太田市から足利市へ2,609人が通勤している。



工業再配置法の施行

- 昭和47・6・16・法律73号
- 廃止: 平成18・4・26・法律 32号
- (目的)
- 第1条 この法律は、過度に工業が集積している地域から工業の集積の程度が低い地域への工場の移転及び当該地域における工場の新増設を環境の整備その他の環境の保全及び雇用の安定に配慮しつつ推進する措置を講ずることにより、工業の再配置を促進し、もつて国民経済の健全な発展を図り、あわせて国土の均衡ある発展と国民の福祉の向上に資することを目的とする。



自地域内就業・他地域での就業

市町村名	労働力 総数 A	B自地域内就業者		C他地域での就業者		D自地域内での就業者	
		就業者数 (人)	B/A (%)	就業者数 (人)	C/A (%)	就業者数 (人)	D/A (%)
福生市	67,910	65,113	95.9	2,797	4.1	700	1.0
	66,060	52,069	78.8	13,991	21.2	2,063	3.1
	45,877	38,832	84.6	7,045	15.4	2,545	5.5
太田市	71,588	58,255	81.3	13,333	18.7	4,110	5.7
	28,966	24,828	85.8	4,138	14.2	1,570	5.4
	38,155	27,274	71.5	10,881	28.5	3,770	9.9
足利市	78,518	73,268	93.3	5,249	6.7	3,327	4.2
	86,374	71,045	81.2	15,328	17.6	11,388	13.1
	34,549	30,942	89.6	3,607	10.4	702	2.0
佐野市	42,153	39,828	94.5	2,325	5.5	2,427	5.8
	9,207	7,160	77.8	2,047	22.2	30	0.3
	11,956	6,288	52.5	5,668	47.5	184	1.5
大岡町	4,852	4,107	84.6	745	15.4	17	0.4
	8,734	5,245	60.1	3,489	39.9	178	2.0
	4,510	3,360	74.5	1,150	25.5	13	0.3
笠懸町	11,724	6,128	52.2	5,605	47.8	228	1.9
	5,120	4,078	79.7	1,041	20.3	-	-
	7,014	3,578	51.0	3,436	49.0	71	1.0

注: 上段昭和40年、下段平成2年

工業統計調査結果：平成18年

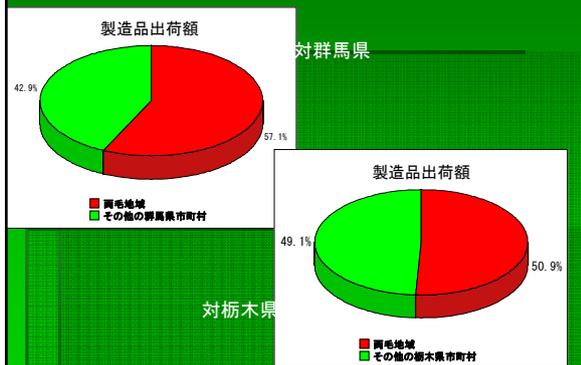
- 栃木県：製造品出荷額：8兆7,267億円
- 群馬県：製造品出荷額：7兆7,761億円
- 両毛地域：製造品出荷額：4兆4,404億円
- 太田市+大泉町：製造品出荷額：2兆5,522億円
- 足利市：同上：3,927億円
- 太田市：同上：1兆9,405億円
- 佐野市：同上：4,244億円
- 大泉町：同上：6,116億円

栃木・群馬両県に対する工業指標のシェア

圏域名	主要工業指標	(単位：%)		
		対栃木県	対群馬県	対両県計
両毛地域	製造品出荷額	50.9	57.1	26.9
	事業所数	72.6	61.6	33.3
	従業者数	58.7	57.8	29.1
太田市+大泉町	製造品出荷額	29.2	32.8	15.5
	事業所数	20.0	17.0	9.2
	従業者数	25.2	24.8	12.5

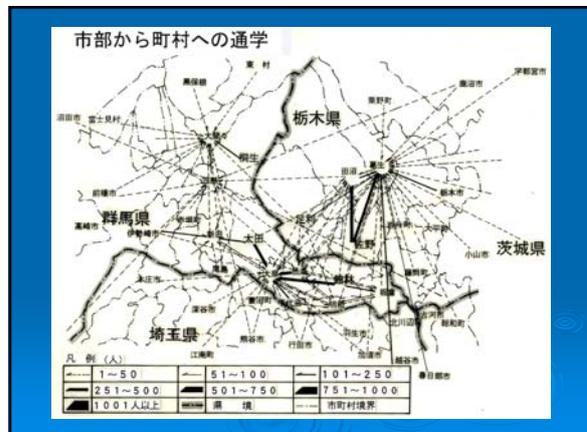
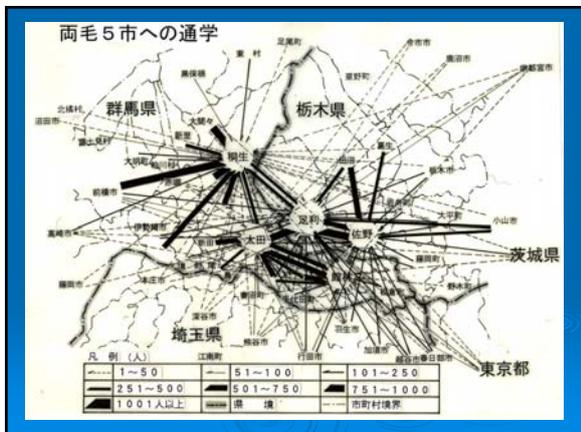
*平成18年工業統計調査結果、但し従業員4人以上の企業

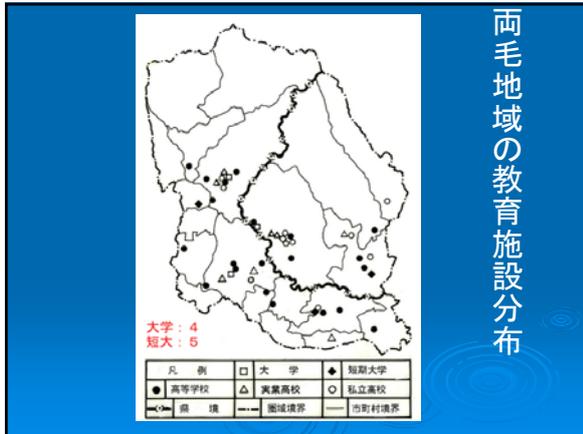
両毛地域は栃木・群馬両県の工業基地である



通学における交流

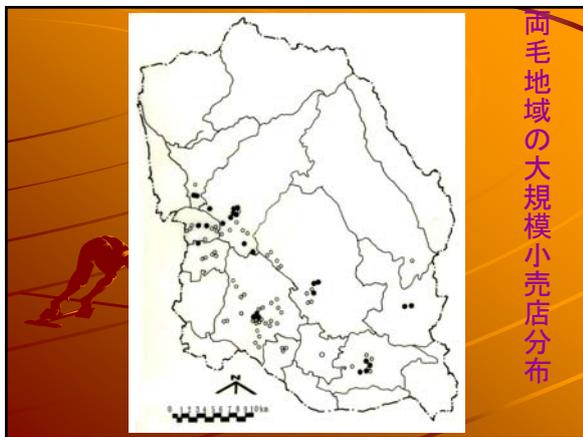
国調結果より





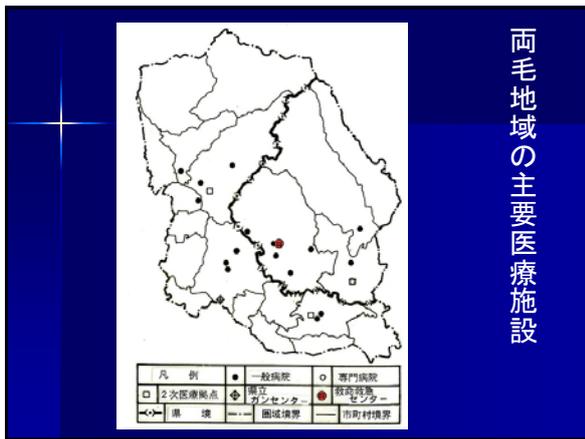
購買行動

足利商工会議所のアンケートより
近年は流通が変化し、大型店が乱立、住民の購買行動も広域化した



医療施設利用

群馬県保健医療計画より



- 住民の生命を守る医療施設群が危機的状況にある。**
- 足利市: 日本赤十字足利病院
 - 佐野厚生総合病院
 - 桐生市: 桐生厚生総合病院
 - 太田市: 富士重工大田病院、医療法人本島病院、太田福島総合病院
 - 館林厚生病院
 - 足利日赤は救命救急病院、太田病院も救命救急病院に指定される可能性がある。
 - 両毛地域医療連携調査研究会に期待

今後とも新しい行政協力を進める
アンケート結果より

行政協力の課題は何か

市町村別	福生市	太田市	足利市	大田町	新井町	館林町	桐生市	鹿沼市	足利市
製鉄課題									
工業振興	○	○		○	○	○	○	○	○
商業振興		○				○		○	○
農林業振興		○				○		○	○
観光開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○
教育振興	○	○				○			○
社会教育・文化振興	○	○	○	○	○	○	○	○	○
社会福祉		○	○	○	○			○	○
一部の供給施設利用	○	○	○					○	
一部の処理施設利用	○							○	○
公共輸送		○	○	○	○	○	○	○	○
医療・介護連携	○	○	○	○	○	○	○	○	○
道路行政	○	○	○	○	○	○	○	○	○

協力が合える期間
 「両毛」両毛地域において自治体間で協力が合える期間のうち、今後の協力が合える期間

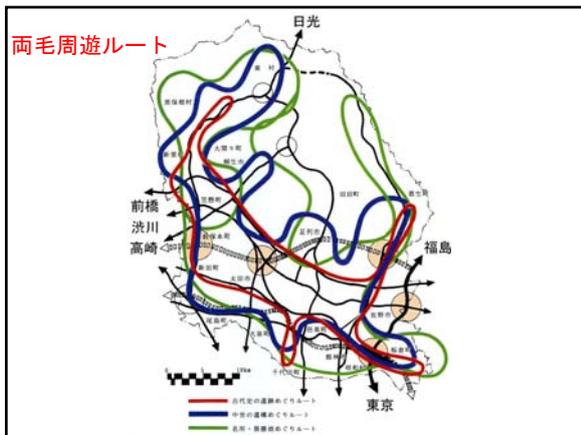
今後の行政協力上、検討課題は何か

協力が合える期間	桐生市	大田市	鹿沼市	足利市	大田町	新野町	成島町	川口町	栗原町	田沼町	鹿沼町
保健・環境衛生等	○							○	○	○	
文化活動	○	○						○			○
スポーツ活動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
観光資源の活用、PR	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
産業情報の収集、PR	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
公共交通の改善	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
労働団体の交流促進	○	○								○	
部やイベントの共催	○	○						○			
災害情報の情報交換、応急	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
職員の人材交流	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

両毛地域には様々な観光資源がある。

- ・古代遺跡:毛奴国の支配者等
- ・中世の遺構:太平記の里
- ・近世の遺構
- ・現代建築・観光資源等
- ・景勝地
- ・イベント
- ・祭り





両毛地域の活性化へ向けて

- 両毛地域全体の活性化は難しい
- 商業関係では総合卸売り市場の企画があったが、6市の枠組みは頓挫した。
- 工業関係では、異業種交流、萌芽的製品の支援（インキュベーター機能）
- 観光入り込み客の増加策は相当可能性があり、地域連携を進めていく重要な課題である。
- 農業は「両毛ブランド」を確立し、主産地形成を進め、地産地消、対外PRを更に進める。

「地域資源の発掘と活性化の戦略—別府市の事例から—」

足利工業大学都市環境工学科
教授 築瀬範彦

中川会長

それでは、定刻になりましたので、始めさせていただきます。

VAN-NOOGA と足利工業大学の共催による公開講座、地域活性化社会システム論の第2回目の始まりです。

築瀬講師

私は、昨年から足利工業大学の都市環境工学科に参りました築瀬と申します。中川先生の後を受けて、地域都市計画研究室を主宰しております。

さて、今回は、本学の蟹江副学長に両毛地域の連携ということでお話を頂きました。今回は、私から、「観光の戦略論」というような、ちょっと大きなタイトルを付けましたが、観光の政策論といった内容をご紹介します。

1. はじめに

実は、先月、大分県の別府市にまいりまして、少し資料を頂きながら、お話を聴いて来ましたので、そのご報告です。その中で、今後、足利の観光を発展させるうえで何か参考になるものがある、ということをお聞きしたいと思います。先にちょっと、動画の方を見ていただきます。これは、別府のCATV局から頂いたものです。

これは、扇山という別府市郊外で「野焼き」をやっている光景ですが、これが観光名物になっているということでご紹介させて頂きたいと思います。

この公開講座をやることになってネタ探しをしていたんですが、本学の先生で別府出身の方がいらっしゃるって、「うちには扇山の火まつりという、結構大きなイベントがある」ということを教えて頂きまして、それではそれを取材してみようとい

ですが、その時間帯を考えてやると、人の集まるイベントになっているということでご紹介させて頂きました。

2. 別府市の観光戦略について

それでは、今のが、前ふりです、これからお話させて頂きたいと思います。

別府市の地域資源活用と観光戦略ということでございます。今ご覧頂いたものが、別府市で行われております扇山火まつりです。これちょっと画像が大きくなっていますが、最終的にはこんな形までいくようです。野焼きを観光資源化したというのが、一つのアイデアかなという風に思っております。実際、これは100ヘクタール規模の牧草地でして、自衛隊の管理地だそうです。この野焼きをやっているのが、採草組合ですから、ここで牧草を採っている方の仕事なわけです。面白いのは、地元のCATV（ケーブルテレビ）、CTBメディアと市役所が連携して、昨年か一昨年ぐらいから別府市のホームページで実況放送まで始めたという風に聞いております。夏場に見れば、私が見たのもこれだけのものだったんです。

ただ、今年の初めだったと思いますが、近くの湯布院で同じようなことをやっていたんですが、風向きが変わって、何人かお亡くなりになったというような記事が新聞に載っておりました。気を付けないとそれなりに難しいものかなとは思っています。

今日は、火まつりのご紹介だけで、その運営ノウハウまでは立ち入りませんが、一般に「地域資源の活用」なんて言うと、なかなか難しいことのような気もしますが、「野焼きが観光の資源にな

るんだ」っていう、そこの視点から入れば、「だったら、あれも使える、これも使える」っていうように、皆さんもお考え頂けるんじゃないかなと思います。

別府の事例を少し調べてみましたら、昭和6年に豊年祭りというのがございまして、これは商工会議所さんが主催していたんですが、それを「温泉祭り」ということで、全市あげての連合祭りに改組した。そして、メインイベントとして、昭和51年からこの「扇山の火まつり」が開催されたということですから、もうかれこれ30数年です。

今ご紹介しましたように、ケーブルテレビジョン別府の方が一番いい場所にカメラを据えて、その映像を市役所のホームページから流している。ですから、市役所のホームページにアクセスすれば、日本中から、この野焼きの光景が見られるということです。それを見て、実際に行ってみようかなという風に思われる方も多いわけですね。地方のCATV会社までアクセスするというのは、知っていないと難しいかもしれませんが、「市役所のホームページを見てください」という形でやれば、簡単に実況映像が見える。これはなかなか工夫しているなと感じました。

次に、別府市の観光戦略、確かに「戦略」と言ってもいい中身がありましたので、本日はこれをメインにご紹介させて頂きたいと思います。

お手元の資料は、経費の関係で、似通った写真を割愛してございますので、字だけですがお許しください。この「別府市の観光戦略レポート」を、一部入手してきましたが、ちょっと字が小さくて恐縮ですけど、平成16年に「観光推進戦略会議」というものを市で設けられまして、立命館アジア太平洋大学が別府にあります。数年前に開学して、半分以上が海外からの学生さんという大学ですが、その先生を座長にして、座長代理がホテルニューツルタの社長さん、それから委員として、有限会社ホーヨーの代表、別府を愛する女性たちの会の世話人代表、竹の井ホテルの社長、サンヨ

ーコーヒーの社長、ホテル風月の社長、まちづくりコンサルネットの代表取締役、ツーリズム学会理事という方も入っておられます。それから、健康と温泉 FORUM 実行委員会常務理事、日本交通公社の研究主幹、電通の次長さんというプロもいらっしゃいますが、地元も方を中心に構成されています。

そこで、「ONSEN ツーリズム」ということで、わざわざ、温泉をアルファベットにしまして、提言書を出しています。

3. 別府市観光推進戦略会議報告書

1) ONSEN ツーリズム

将来ビジョンは、ONSEN ツーリズムをめざしてとなっているわけですが、レポートは、まず、冷静に現況を把握しています。別府市は、公称1千万以上の観光客が訪れているのですが、リピーターが3分の1、リターナーという何年かに1回来るといの方が大半なんですね。それからビギナーが18%です。これはアンケート調査ですが、こういう中から、基本的に別府に来るのは温泉以外の積極的な理由はないと冷静に判断されています。

それから、国内旅行市場の分析ということで、基本的に個人客が増えて、団体客が減ってる。これはまさに、温泉だから分かる変化だろうと思います。どうも名所旧跡の周遊という昔ながらの観光スタイルが、観光地で人々と触れ合うという、イベントだとか、そこで現地の人と接触するというような方向に変わっているんじゃないかという分析をされております。さらに、そういう流れに別府市さんとしては、乗り遅れたのではないかと。そうであれば、「湯治文化」という言い方されていますが、要するに温泉で何をやるかという、その部分の表現と、それを現代的にアレンジする対応が実に不十分だった。

そういう視点から、都市のセンター機能が非常に弱いとか、公共交通ネットワークも極めて弱い。

さらに、情報発信機能が不足しているというようなことを冷静に分析されております。マーケットへの対応ということでございますが、どうやったら入込み人数を増加するかという従来の単純な話から、滞在型の利用へ持っていくべきではないだろうか。だから、今までの「広告宣伝誘客活動」から「街の魅力づくり」へと方向を転換すべきだ。とにかく温泉に来てくださってというのでは、どうもう先詰まりだ。

今日はデータを示していませんが、もうこの10数年、じりじりと別府への観光客が減っていて、ピークで1300万人の方が来ていたのが、もう今1000万人ぐらいになってきている。このままじゃもうじり貧だということを非常によく認識されているわけです。で、1泊2日の通過型の宿泊利用じゃなくて、短期滞在型の利用も増やしたい。そうすることが、交通や街のインフラに負担をかけずに、観光消費を増大することにもなるだろうということですね。

具体的なマーケット像ですが、要するに、自由で気儘な旅を要求する個人客層へどうやってアピールするか。これは足利も同じなんですが、昔のように旗を立てて来るなんてことは絶対あり得なくなってしまう。それから、やはり九州ですから、アジア市場をターゲットに置かなきゃいかん。そのためにどういうことができるかという狙いです。ここで「観光戦略の転換だ」ということを仰っています。すなわち、「街づくりを基盤とするツーリズム振興への戦略転換をしないではいけない」というのが、先程の提言書の一番のポイントなわけです。

2) ツーリズム振興

「ツーリズム振興」とは何だろうということですが、この辺はよく議論されていて、いわゆる「温泉の癒し」というのは従来のコンセプトだ。それから、「ウェルネス産業」とか、「ガイドツアー産業」、「医療福祉産業」と言葉はいろいろありますが、そういうものの振興によるツーリズム産業の

育成という方向に舵を切るべきだろうということです。温泉をネタにして、展開を変えようという、さきほど申し上げた、もう少し「湯治文化」というものを現代流にアレンジして紹介していくというコンセプトのベースになっているわけです。答えは、温泉ツーリズムということで、滞在の魅力を作りたいわけです。

温泉資源をもっと活用したいということで、泥や砂をかぶる温泉だとか、飲む温泉だとか、あるいは蒸気で蒸す温泉、色々あるわけですが、もっとそういうバラエティを富んだ温泉を充実させる、これはもうベースのものだと思います。それから、昔の海浜温泉という海の砂の中で温泉につかるというやつですね。それからあと、埋め立てなどにより海岸線が相当荒れていた。それを復元するという方向に持ってきている。さらに、他に地域の資源はないかと言うと、「大正ロマン」とか「昭和レトロ」の街づくり、街並み再生ということで、後でご紹介しますが、別府は市政を敷かれたのは足利とほぼ同じぐらいの時期なんですね。大正・昭和の物件がかなり残っている。それを活かす。さらに、国際都市としてどうやってイベントをやっていくか。

この4つを柱にして、温泉ツーリズムという名前で戦略を組んでいるということでございます。これは、インターネットで拾ってきた画像ですが、海浜を復元して砂湯をやっている。この写真は別府の駅前ですが、その拠点性を良くするために、駅前の整備事業をやっているわけです。非常にきれいな駅前になっていました。

レトロな街づくりと国際化の一つとして、誰でも500円ぐらいで入れる温泉、これが駅前にボンとあるんですね。その建物が、まあ確かにレトロと言えばレトロでした。それから、アジア文化交流センターという名前のNPOが、もう駅前にできて、外人客を引き込むような動きを始めておりました。

これらの写真には、たぶん、皆さんそんなに驚

かれないと思いますが、一生懸命、街中にある大正ロマン、昭和レトロの建築物を活かした活動をしていました。正直に言って、足利市内の江戸時代からの「巖華園」の方がずっとレトロですよ。しかし、これらの建築物も観光資源として、全体の戦略の中で位置づけられているということをお願いしたいわけです。街並み再生という中で、こういうお寺さんもありました。鏝阿寺よりは新しいですが、やはり、街並み再生プロジェクトの中で位置付けされている。この点が重要だと思います。この街並み再生は、いわゆる街路事業としてやっているんだと思いますが、電線も残っていますし、そんなに、豪華なものではないですが、中心市街地でこうしたインフラの整備もやっておりました。

3) プロジェクトの体系化と観光戦略

立派だと思ったことはですね、プロジェクトの推進という面です。各種プロジェクトを上手く体系化しているということです。

緊急プロジェクトということで、1年から2年の間にとにかく手を付けてしまおうというもの。それから、中期プロジェクトってということで、3年から5年かけて手を付けるもの。それから、長期プロジェクトは20年ぐらいかけてやっていくんだという、そういうメニュー分けをしているわけです。

そこで、緊急プロジェクトの一例として、これは平成16年に提言されて、既に先程ご紹介したように温泉広場という形で実現していた駅前整備です。それから、レトロタウンづくりということで、先程のお見せしたインターロッキング舗装もされております。それから、海浜砂場湯づくり、これもご紹介したとおりです。蒸し湯を復活させたとありましたから、最近はお客が減って、やらなくなっていたんでしょうけど、メニューとして復活させたんだと思います。それから、名物料理の開発、インフラ系として、ループバス、公共交通が弱いので、バスの運行体系を少し変えている。それから温泉の品質管理ですね。やっぱり

これもある一定水準にする。健康診断サービスの開始というのが、これが先程言ったように健康産業、ウェルネス産業ということですね。さらに、ガイドの育成ということをはじめたとあります。それから外国への情報発信。確かに、こういった内容のことは、すぐに着手できる。

着手できることはもうやっている。海浜の砂湯づくりみたいなものは、もう既に行われているわけです。それから、中期プロジェクトとしては、景観指定による歴史的町並み保全、こうした施策は足利市でもやられていますけど、少し時間かかるものはこんな形で着手している。ついで、温泉ミュージアムも作った。路地商店街を整備した。こうしたものは少し時間かかるから中期プロジェクトになっています。それから別荘文化の保全。別府も結局、一種の湯治ですから別荘が多いと。それをうまくその別荘を残そうというようなことをされている。

それから河川の景観と言うか、景観の河川際と言うんでしょうか、これも景観再生でしょう。そういう事業をやっている。それから、夜景ビューポイント整備ということで、地形がよく足利と似ているんですけど、高いところに上がると非常に街がよく見える。それを夜景で見ようっていうことで、そのポイントを整備するっていう事業です。それから温泉の研究機関もありました。ご存じだと思いますが、別府は世界でも、確か十指に入るぐらいのお湯の量がある。屈指の温泉地だからこそ、温泉研究機関を作ってしまうという発想は、気付けば、当たり前かもしれませんが、これはなかなか優れたものだと思います。それから、温泉熱活用植物栽培、旅行商品の開発、スポーツコンベンションの振興などなど、とにかくできることは、もうやっているわけですね。

また、長期プロジェクトとして、ロングステイ滞在メニューの開発、やっぱりこうしたことは一朝一夕にはいかないということでしょう。どうやったら滞在客を増やすかということで、まず、メ

ニューを開発する。定住の促進、市街地改造など手のかかるものは、後回しにしている。しかし、とにかくできそうなものはすぐにやっていますし、おそらくこれは、私の推測ですけど、既にあったインフラ整備事業などは全体計画に取り込んで、位置付けたのだらうと思います。それから、この画像もインターネットで拾ってきたんですが、「世界報道写真展 2009」、「別府現代芸術フェスティバル 2009」、「国際平和映画祭 JAPAN2006 in 別府」とか、国際化とか国際イベントっということ言った以上、様々な手法で、イベントを引っ張って来ている。

観光のインフラとして、別府のホテルの客室数は足利とは、全然違いますから、一概には比較できないですが、国際イベントの開催に努力していると思います。それから、「オンパク運動」というのを始めていました。混浴をもっとやっちゃおうということなんでしょうね。見て頂けると分かるように、混浴しているわけですが、これも運動だと。すごいなと思いました、正直言って。

そこで、一番凄いなと思ったことは、推進体制づくりということで、結局、行政の組織改革をやってしまったということなんですね。それから、人材育成、財源の確保ということで、体系的な政策をすごく意識されています。ですから、従来の観光化とか温泉化の拡充ではない「ツーリズム総合政策局」という部署を、既に作りまして、私もアルファベットの「ONSEN ツーリズム課」という部署に所属している方の名刺をもらいました。従来の観光とか商工とか、そういう縦割り組織ではなく、横串を通すような形での組織再編をされたという風に聞いております。徹しているなという感じなんですね。

そこで、戦略とは何かということで、私なりに考えてみたのですが、別府市さんがやられたことは、あらゆる政策、運動を「温泉ツーリズム」という目標の下に、整合的に、到達時期を明示して、推進体制を整えることだと思います。そして、着

実に、推進しているということがまさに戦略的だという風に言えるかなと思います。

バラバラではやっていないと思うんですね。強引な体系化もしているかもしれませんが、とにかく「ONSEN ツーリズム」というキャッチフレーズを作ったら、全部そこに集約するような形で動いている。これはまさに、「戦略」と言っているのではないかと思います。冒頭ホームページにCATVの実況中継を載せるという話も、色んな抵抗あったかもしれませんが、それも「ONSEN ツーリズム」のために戦略的に推進するんだという方向付けがあれば、「やった方がいい」とご判断をされたんだらうと思います。

一応これで、別府市さんの作られた観光戦略のご紹介を終わるわけですが、レポート頂いてきて、私なりに解釈したものですので、このレポートをそのまま読んでも、今みたいな解釈にはなりません。私も最初は読んでよく分からなかったのですが、一見、どこでもやっているようなことが書いてあるだけみたいな感じもしたんですが、何回か読み返してみた結果が、以上の事柄です。先程言いました、やっぱり冷静な現状分析ですね。それをベースにして、色んなアイデアが出たんだらうと思います。その出たアイデアを組み替えて、ONSEN ツーリズムという旗の下に全部体系的にまとめた。それを印刷しただけで終わらせないために、市の組織まで変えた。やっぱりそこが戦略的な発想ではないかなと思いました。

4) 足利市の観光政策のあり方

それじゃあ、足利市もやればといえば、たぶんそう簡単にはいかないだらう。それはなぜか。当然、置かれた状況が違うわけですから、足利市にそのままやれと言ったって無理でしょう。しかし、足利市がまずどういう戦略を立てるのか。ONSEN ツーリズムでいくのか、観光ツーリズムなのか、コンセプトは何なのかというところを根底から議論することと、冷静に今の状況を見極めなきゃいけないということだらうと思っており

ます。

そこで、ちょっと別府と足利両市の諸元を並べてみましたが、市域に関してみれば、それほど大きさは変わりません。むしろ、別府は非常に平地が少ないですね。山からいきなり海になっていて、その海辺のほんの1キロぐらいの帯状のところに、まちがへばりついているような感じです。人口も足利の方が一回り大きいです。市制の施行もほぼ大正13年ですから、足利と同じぐらいの動きだと思います。

やっぱり違うのは、就業人口です。別府の方の数字を見て頂ければ分かるように、8割の方が3次産業で食べている。とにかく、3次産業と云うか、観光なくして立ち行かない街なわけですね。そこと比べて足利ですが、足利はまだ工業都市なんです。事実上、工業出荷額でも群を抜いています。ただ、こうした特性をどう観光と結びつけるかということを中心にきちんと整理していかないといけないと思っています。別府の製造出荷額114億円は、おそらくほとんどお土産関連だと思います。2次産業と言ってもお土産を作っているぐらいの数字だと思います。

それから、観光客数は、足利がざっくり約300万、別府1,175万ですから、一応公式統計として出てる数字です。大豆生田市長さんのホームページ見たら、確か68万人という数字があったと思うんですが、観光客数のピーク時点は、足利学校作って、テレビで太平記をやった時で、68万人の観光客が足利学校に来ていた。現在は10万人ぐらいまで落ちてはるはずだと記憶しています。要するにリピーター作りに獲得に失敗したんだということホームページで仰ってましたけど、そういうことかなあとと思います。

ですから、あんまり数字の話をしてもしようがないんですが、約300万人の3分の1、あるいは4分の1の観光客が足利にでるとしたら、結構すごい数字だと思うんですね。全市挙げて観光で食べている街と工業主体の都市の観光客数が、較べ

比べて、4分の1だとしたら、足利すごく頑張っているのかもしれないとも言えます。

取材のとき、市内の大学も別府大学の他に、最近、立命館のAPU、アジア・パシフィック・ユニバーシティが来ているのが、大きいと仰ってました。ただ、APUは位置的に見ると街の外れにあって、学生が街の中で活性化に直接寄与しているような感じはしませんでした。先ほどの戦略レポートなどうまく大学を街の活性化に使っているなという感じはしました。

まあ余計なことを申しますと、私も足利工業大学に奉職してまだ2年目ですが、あんな立派な風車が構内で回っているのに、あれを観光資源だと足利市の方は、理解していらっしゃるんだろうかと不思議に思います。毎年5000人以上の見学者があるのですから、風車を観光資源としてもっと活用するような方策を考えてみてはいかがでしょうか。

さて、ちょっと両市の歴史も調べてみましたが、この別府の駅前で万歳をしている老人の像がありますが、これは一体何だろう。これに比較できるものは、何かないかなと思って考えたんですが、とりあえず、足利尊氏さんの、わかさホテルの前のあれがいいかなと思って比べています。この右側のおじいさんは、「油屋熊八さん」と言っていて、明治から昭和にかけてかなり著名な方ですが、亀の井ホテルという著名なホテルの創始者だそうです。『山は富士、海は瀬戸内、湯は別府』というコピーを作られた方で、このコピーのある碑を1924年だったかに、富士山頂にまで建て、さらに日本中にそのキャッチフレーズを標柱にして、建てまくったそうです。それから、これも戦前の話ですが、毎日新聞が新日本八景という企画を投票で決めた時には、別府を首位にした影の功労者だということ。何のことはない、ハガキを配り、別府と書いて、市民に出させたという、今のオールスターで人気球団の選手を選ぶのと同じことやったわけですけど、とにかく、売るんであればそういう手段を選ばないと言うとちょっと失礼になり

ますが、当時別府は、それほどメジャーな存在ではなかったんでしょうね、徹底的におやりになった。それから、全国おおてのひら、大掌大会というのを開催しているとか、もう一つが、温泉マークの考案、まさにこう三本の線のマーク、あれもこの人の考案ではないかというような説もある。本当に、別府と温泉を売るために一生を費やしたような方が、この油屋熊八さんらしいというのが、私も調べていて分かりました。

さて、それでは、足利でこの方に対抗できる方はいるかどうかと思ったら、やっぱり「木村半兵衛さん」しかいないんじゃないかなあと思うわけですが、全然キャラが違うんですね。ご存じのように、銀行経営をやって、両毛線を建設されて、ジャパンランカシャープラン、これを実行されてるわけですね。だから、横浜がリバプールだったら、桐生足利はマンチェスターだと言う。すごいコンセプトだと思うんです。やっぱり、ランカシャーという英国の州と比べて、この両毛地域を位置付けて、両毛からたぶん横浜までに至る地域を日本のランカシャーだと言ったんだろうと思います。本当はこの方のランカシャープランをもう1回きちっと、位置付けなきゃいけないのかもしれませんが、そういう先達がいらっしゃる。

改めて、今回思いました。「観光戦略というのは、まちづくり戦略」であると間違いなく確信しました。3月のシンポジウムで鈴木忠義先生が、観光学ということで、「街は劇場だ」と仰っているのですが、これは、生活する者にとって、暮らしやすい街、それがすなわち外からのビジターの目から見ても面白い街だ。そういう構造にすればいいわけであって、何か特別なことをする必要は全然ないんだということが改めて分かりました。ただ、冒頭の火まつりの紹介のように、「なんだ野焼きか」という視点を地元の人は持つわけです。だから、その部分を評価する外の目があるんだと思います。何が観光資源なのかということについては、本当にきちっと洗い出しする必要があります。ま

た、きちっと現状認識をする必要がある。

この街で「観光」と言った時には、全く別府とは立っている位置が違う。やはり工業で成り立ってきた街だ。それと観光がどういう形でミックスするのかということについて、すごく議論しなきゃいけないんじゃないかと思います。先程、木村半兵衛さんのランカシャープランを整理する必要があるのかもしれないと申しましたが、織物の街がどう変化して現在の姿になったのか。そのプロセスの中に、観光資源になるようなものがあるんじゃないのか、というような視点も必要ですね。

また、ちょっと脱線しますと、最初に足利に来て、わかさホテルに泊まったんですけど、駐車場に驚きました。色んな経緯で、あれは作られていますが、とにかく街は、住んでいる人のためのものですから、不便な街なんて絶対に栄えるはずがない。あの駐車場は使いやすく、なおかつ、見映えもいい、上手く作ったなと思いました。朝は、尊氏公の前にゴミが出してあるわけです。要するに生活していて、なおかつ、自治会やホテルの駐車場として機能しながら、うまく町並みと調和している。もちろん、整備した道路に面した駐車場がない方がもっといいし、近くのアパートの色がもっと大人しければいいとか、そういう文句はいくらでもつけられるんですが、やはりああいう形で駐車場を残して、地元の方が使っていて、面白い観光資源ではないかなと思うわけです。やっぱり生活者の視点と言うか、生活して楽しい、生活しやすいということと、外から見て面白いっていうことは絶対に矛盾しない。そこのところを間違えて、観光だからと言って、住む人にとって不便になるようなことをやれば、絶対上手くないだろうということ、今回旅をして、改めて感じました。

4. まとめに代えて

1) 「ミヤコ」尽くし

これで終わりはしないで、まだ少し続きがあり

ます。

今回調べた「ミヤコ」のイメージなんですが、別府は「泉都」と言うんですね。そこで、これに類するものを探してみたのですが、宇都宮が「雷都」と言っている。雷です。仙台は、凶々しくという失礼ですが、「学都」だと言っているわけです。先に言った方が勝ちみたいなどころあるんでしょうね。伊勢の「神都」、これは、伊勢さんあるから、誰も文句は言えないだろうと思います。それから、名古屋は「鯨都」、まあ金の鯨だから、昔、中日ドラゴンズのことを「金鯨軍」って言っていたぐらいですから、これは分からないでもない。それから、「球都」ですが、正岡子規の松山は分かるんですが、桐生も球都と木更津もそうです。理由は調べていませんが、これもまあ、先に言った方が勝ちなところもあるんでしょうか。

それから地理としての「水都」です、大阪が水の都ということの前から言っていた。それから、小松が「空都」なんですね。地方空港が一つあって空都と言うのかといちゃもんはつけません。きっと議論されて付けたんでしょうね。「港都」は、横浜と神戸、これは日本を代表する港湾都市ですから、分からないでもない。それから、「湖都」の大津、これも琵琶湖ですから分からんでもない。札幌を「北都」という、これは昔からですが、これは札幌以外使いが無いだろう。「南都」の奈は、全然意味が違いますが、南都北嶺ですから。しかし、南都には違くない。西都と言えば、西都市がそもそも九州にありますね。そこで、千葉がですね、「千都」と言うんですね。たぶん、千葉だから千都だということでしょう。千都タクシーという会社があります。

次は、産業文化と都市のイメージです。岡谷が糸の都「糸都」です。桐生は「織都」と宣言済みみたいです。八王子は「桑都」、これは絹の集散地ですから。鉱業では、足尾が「鉨都」だと言っている。八幡と釜石は「鉄都」、今も言っているかどうか知りません。それから、「陶都」が瀬戸と常滑

と多治見と有田と甲賀。甲賀市は、信楽焼きですね。ここら辺は、誰も文句はつけにくいくらい有名でしょう。それから、秋田県の能代市が「木都」と言っています。杉の産地です。古いところでは「炭都」、夕張、大牟田、田川などがありました。これはさすがに歴史の遺物かと思えます。「煙都」の川崎、大阪、これも絶対に市民の方は言いたいとは思わないでしょうが、工業都市としてのシンボルの煙突で売った時期があるのは間違いない。尼崎の「工都」。これもたぶんちょっと古いんだろうと思います。それから、愛知県の岡崎市は、御影石の生産地で、石屋さんが多いところなんですが、ここは「石都」です。西に行くと、西条市の「酒都」はお酒です。

次に「古都」、日本で古都って言えば、京都と鎌倉だろうと思います。それより新しいと古都とは言えないだろうと思います。やっぱり千年近い歴史があるということでしょう。

さて、「足利のイメージとは」、ここですね。この部分をさっきの戦略論みたいに構築するためには、とことん議論しないといけないんじゃないか。何の都かと。あるいは、都なんてうちには関係ないっていうのもいいと思うんですが。実際に、「足利って聞いたことがあるか」って、東京の原宿や六本木で女の子に聞くと知ってるが、「地図でどこか」と聞くと、まず指せない。関東にあるらしいぐらいのところまで知ってれば立派なもんです。さっきあげた何とかの都に比べれば、はるかに売れていない。また、売っていない。何で売るかということのコンセプトがない、という風にまとめていいだろうかと思えます。私が聞いた限りでは、足利は何とかの都っていうふうには言っていないと思います。あったとしたら教えて頂きたいのですが。

A氏

小京都という。

築瀬講師

小京都ですね。しかし、小京都と言うと山口県

の萩がありますね。

A氏

そこいらじゅうにあるんですよ。でも一応、足利は東の小京都っていうんだよ。

築瀬氏

そうですね。でも、小京都と言った時に何番目に来るかって言うと、あまり高い水準ではないかもしれない。小京都という売り方をする以上は、ライバルが多いということですね。

2) まちづくりの課題と戦略

話は変わりますが、北関東自動車道全線開通がもう来年か、その次ぐらいに来ている。千載一遇のチャンスですね。この機会を活かせる準備をしているのかと去年から申し上げているんです。どういうイベントを打つのか。北関東道開通と言ったら、それは単なる地方のローカルイベントに過ぎないわけです。とても全国区にはならないわけです。そこで、情報発信が重要です。CATV、地元紙、大学と連携しているかどうか。広報ろいのは、相乗効果ですから、単発でやってもだめなんです。他のメディアと連携しながら、露出度を上げないといけない。そういう工夫はないだろうか。

それから、一番気になっている問題は、中心市街地の歯抜け跡地です。どんどん駐車場になっているのですが、みっともないんですね。土地利用として、何の戦略もないということを露呈しているわけです。別府市だと記憶していますが、人が居なくなった家屋を壊さないようにしている。壊すと駐車場になる。イメージがますます悪くなるということで、歯をくいしばって頑張っているんだという話を少し聞きました。この駐車場のあり方に対して戦略を立てないといけない。現在は、何もない状況でしょう。タウンホテルの駐車場はどこにあるか分らないです。ホテル前の細長い空間に停めるしかない。「ほとんどお客のサービス考えてないんじゃないか」とタウンホテルさんに文句を言いたくなるわけです。ホテルの裏にも

あるけれど、離れていてよくわからない。中心市街地に、スーパーマーケット「フレッセイ」がなかったら、駐車場環境としてひどいことになっていると思います。私も今日は、フレッセイに停めてきましたから、大きな声で言えませんが、あそこが市民駐車場的な機能を果たしているわけです。イベントをやった時に不法駐車が増えて、非常に迷惑かけているということもあります。ご存じのように、中心市街地活性化事業では、とにかく駐車場を作れば補助を出すというぐらい駐車場の必要性を認識しています。

それでは、空き地を全部駐車場にすればいいかというのは、まちづくりとは全然別の話であって、その部分の整理ができていないのではないかなと思っています。

また、話が飛んで恐縮ですが、文化財です。文化財を市民が楽しめるような仕組みを作っているかどうかです。去年、私の研究室の学生が鎌倉と文化財のあり方の比較研究したんですね。その中で、鎌倉市の文化財保護条例は、文化財を見せるように作ってあるのです。ということは、文化財を借りて、壊したりしたら、ちゃんと弁償しますとかの条文がある。当たり前の話ですが、「壊したら弁償します」ということは、借りるということを前提でなければ出てこない話です。盗難あったらどうしようとか、とにかく文化財を外に出そうという意図が働いている文化財保護条例です。それに対して、足利の保護条例は、文化庁の雛形通りのものです。文化財を守りましょうと言っている。大事なことです。足利学校にしろ、鏝阿寺もむろん文化財である。さらに、そこには足利將軍家の歴代將軍像まである。知る人ぞ知るで、虫干しの時にちょっと拝めるぐらいでしかない。すごい観光資源ものがあるけれど、それをある期間きちっと見せるような仕掛けになっているとはいえない。市民が本当に楽しむ仕掛けになっていないのではないかな。

先程の観光学のところに戻りますが、まず市民

が「こんなものがあるぞ」と、まず楽しむところから始まる。観光客呼ぶために外に出すんじゃなくて、まず市民が、自分たちの文化財に誇りを持てるような展示の仕方をまず考える。それが結局、観光客を呼べるようになるわけで、観光客を呼ぶために無理に化財を何でもいいから出すということを主張している訳ではない。私もよく分からずに勝手なこと申し上げていますが。

その時に、そうした文化財と市の中心産業である工業がリンクできたら、素晴らしいと思います。工業で食べている街が、工業をおろそかにして文化財で生きていきます、観光で食べていきますなどと言ったって、市民は誰も支持しません。やはり、どういうふうに、関東第二の古都である、足利の歴史と、工業という実物をどう結び付けて、何を見てもらうのか、何を売りものにするのか、その部分に対して徹底的な議論が必要じゃないかと生意気ですが思います。

3) 観光立国への国の施策

これは10月23日に官庁速報で拾ってきたものです。観光圏整備、国の支援拡充へということで、ハードな事業も補助対象にすると観光庁が言っています。これは、県境を越えた地域が連携して宿泊旅行者を呼び込む観光圏の整備に向けて国が支援するという内容です。イベント開催とか、観光商品の開発などといったソフトな事業だけでなく、観光拠点の施設整備といったハードな事業も補助対象にするというものです。2010年度には一応、100億円を計上したということです。2泊3日以上滞り型観光を推進することを目的に複数の地域が連携して形成するとこの資料では言っています。国土交通省は、20年に2000万人にする、これは自公政権時代に言ったわけですが、民主党政権は、13年に1500万、16年に2000万、19年に2500万ということを目指している。4倍に増やすという政策の位置付けですが、ここで何が言いたいかと言いますと、前回の講演で蟹江先生が「両毛圏とその連携」ということを仰っている。

その両毛圏がここで言う観光圏そのものではないかと思うのです。そういう形で、国が金を出すとやっているんです。支援もするとやっているわけです。だったら早めに、「両毛圏」、「両毛観光圏」という形で、県境を越えていいと言っているわけですから、早く手を上げるべきだ。ちょっと調べたのですが、既にこういう観光圏の整備計画を出している市町村がたくさんあるんですが、栃木県は日光だけです。だから、桐生、太田、館林など連携して県境を挟んだ観光圏みたいなことを打ち上げれば、まだ旬ですから、訴求力が強いという気がするのです。丁度、いいタイミングではないかと思います。

この前、蟹江先生のお話にあったように、両毛圏という枠は、事実関係として現実的にある。誰かの頭の中にあるものではなくて、実際に医療とか上水の供給とか、色んなこと現実にやっている。はるかに、他の圏域に比べれば連携が強いわけです。

4) これからの街づくりとキャッチフレーズ

今日の報告は、別府がどれほど真剣かということです。正直言って、中心市街地は寂れています。しかし、そこで大半の人が、温泉関連で食べている中で、真剣な議論されたのだらうと思います。議論をきちんとして、色んなアイデアを出すこと前に、アイデンティティというのでしょうか、「一体我々は何なんだ」、「どうやってこの街を活かすんだ」、「この街の売りは何だ」ということを、とことん議論されたんだらうなと思います。その結果としての「ONSEN ツーリズム」、別府しかないものにたどり着いたと思っています。

私もかつていくつかの街づくりに協力しました。キャッチフレーズでいうと、「水と緑と文化都市」なんです。言葉の順番違うだけです。「緑と水の文化都市」、誰も文句をつけないキャッチフレーズを付ける。これでは、意味がないですよ。誰も文句をつけないということは、誰も支持しないということです。そこで、一つの経験を申し上げます。埼玉

県の南で東京の足立区との境に八潮市という小さな市があります。足立区からの中小企業進出の受け皿になった都市です。ある時期、行政としても積極的に工場を誘致した。だから、水と緑の文化都市は言えない。工業の工という字を残さないことには、市のキャッチフレーズは作れないという命題をもらいました。そこで私が参加したプロジェクトチームが作ったのが、「住宅工房都市八潮」です。住宅と、工房というのはアトリエの工房です。とにかく工の字を入れたわけです。工房と言えば、そんなにイメージ悪くない。その結果、イメージですが、メインストリートに自転車の修理工場とか、街の小さな工場を工房街区という名のもとに中小企業が街づくりに参加できる余地を残した経験があります。

こうした下地があったものですから、この「ONSEN ツーリズム」という言葉を生み出すのに、関係者がどれぐらい苦労されたのかなあと、感じたわけです。

それでは、足利に何があるんだとここに最後戻ってくるのですが。やはり衰退している。日本中がそうなんです。これから、足利の街づくりを考える上で、市民にとって暮らしやすい街とは何だろう、市の財産と言ったら何なんだろう。という現状認識をきちんとする。そんなところを皆さんと一緒に考えていく一助になれば、「地域活性化社会システム論」の1コマになるかなというところで、お話これで終わらせて頂きます。ちょっと早いですが、以上です。ありがとうございました。

(一同拍手)

司会

はい、どうもありがとうございました。ただ今の築瀬先生の話に基づいて、色々皆さんで議論していきたいと思いますが、質問も含めて、何かご意見ございませんか。」

A氏

変わったイメージなんですけど、足利は二つの

顔を持つんで、渡良瀬川がありましてね、北の方は、歴史と神社仏閣、南は工業都市のような感じですね。だから、同じ枠にはめてやろうと思うと、矛盾が出てくる。そこで、まちおこしに色んな制限も、高さの制限とか、色々。南側は、もうどんどん高くして人口増やそうとするし、北の方は歴史都市ですから、そういうのはだめだろうという風なイメージですね。

名前だけで言えば、例えば、北海道で言えば、札幌大通り公園は、北海道大通公園といってもいいわけです。

足利で、一番気になるのは、河川敷は良くなったんですけど、中の水の流れがちょっと、なんか堰設けまして、水面が平らなんです。その水で遊ぶようになってたりと。でも、あれをそのままやると泥が流れて、あんまり歓迎できない。昔はねあそこ、砂地できれいな水で、中橋から覗いたら川底が見えたんですよ。

それで、文化の器と言われてたんですよ。今そういう面では、河川敷はきれいにするとっても全然そうではなくなっちゃった。これは建設省と関係ありますけどね、水害の問題等がなければですね、できるだけ、足工大の方まで、太田のスポーツセンターの方まで、川を利用するというのも一つの案だと思うんですよ。

築瀬講師

まず最初の言葉が面白かったですね。「二つの顔を持っている」と仰いましたね。その着眼点が、キャッチフレーズではありませんか、「二つの顔を持つ街」という、その方がすごくインパクトありますよね。私の感覚からいくとですけど。それが一つです。

それから今、水と言われましたけど、基本的に「せせらぎ」ということを仰ったと思います。私も同じことを実は思っていました。大学のところから、山前まで水路がずっと通ってますね、農業用水路です。あれが見かけよりも比較的水質がいいんです。街中通ってて、あんなきれいな水質

はなかなかないんじゃないかなと思っている。あれは、確か。

A氏

柳原です。山の方へ流れてる。

築瀬講師

あれをせせらぎ化するというのもあるのかもしれない。渡良瀬川の水質改善を言ってもハードルは高いでしょう。しかし、柳原水路のある部分、水質のいい部分をせせらぎにすることができるかもしれない。私は知りませんが、もっと色んなところが、地域資源としてあると思います。

A氏

昔だったら、織物の染色やって、川の色がいつも赤になったり、青になったり変わってね、それがだめになってしまったけど、そっちの方が名物だったですね。あの水の中で友禅をあの川でやってたんですよ、昔は。渡良瀬川でもやりましたけどね。

築瀬講師

だから、今、川の水に色を付けちゃうのは怒られますけど、逆の発想をすれば面白いですね。今、仰ったように、何十年か前は、色のついた水の川であった。そんなことも一つの売りになるかもしれませんね。

こうやって議論して行くと、現実に観光資源としてもものになるかどうかは別にして、いろいろなアイデアが出ていくと思います。最初に思ったことは、柳原水路の水質が比較的良好ということ。でも、市民はそんなことは余り思っていない。私がまだ外の人間と言うか、外部の目の部分があるので、今のお話に、ぱっと共鳴しちゃうんだと思います。

A氏

フクロウ川も、今は、どっちかって言うと廃棄物でだいぶ汚い川なんですけど、もとはきれいな川なんです、本当は。あそこをきれいにしますとね、観光に影響する面もあるかもね。

B氏

小林代官が江戸の初期に作ったのが柳原用水ですね。柳原地区をまたいで流れて、それがまっすぐ来て、足工大の方に曲がってるわけです。それが、足利市のちょうど元町辺りにある染屋さんの色で七色に染まっていたんです。それが、幸か不幸か、きれいになりつつあるわけですね。なおかつ、あそこの用水は普通の街の屋根より高いところにあるわけです。市域の西の方にそういう形であるんですが、やっぱり、街の中の財産です前橋で言えば、広瀬川みたいな感じっていうような。本来、農業用水ですから、そういうような感じになる、そういうものも大事にしたいですね、街の真ん中としてね。

築瀬講師

今、仰った内容を看板にして、どこかに建てておくだけでも、たぶん違うと思うんですね。今まで気が付かないものに、まず市民に気が付く必要があると思います。富士川だったと思いますが、市民ボランティアの方が、ものすごく汚かった川でゴミ拾いから始めて、ついに川をきれいにしたというのも、有名な話です。市の職員で熱心な方が、休日の度にゴミ拾いをしていると、だんだんそれが運動になって、川の浄化運動につながっていったっていうんですね。」

C氏

九州の柳川も・・・

築瀬講師

そうですね。日本中にそういう事例はあると思います。だから、水もそういうものの一つですが、こういう議論が大切なんじゃないかなと思います。ありがとうございます。

D氏

突然来て申しわけないです。先程、柳原用水の話出しましたが、我街づくりで、よく聞かされたのが、木村浅七さんっていう古い市長さんがいらして、当然、柳原用水の価値観を昔から分かっている、あの整備の議論をいろいろしたり、ちょっと長すぎるもんですから、色々提案した、実践

したことがあるんですけども、一番すごかったのはですね、法玄寺前の道路を拡幅した時に、あの水路だけは残して、川を拡幅したのが、木村浅七市長さんなんですよ。だから、そういった先見の明があったから、やはり凄い。

先程の別府の例ではないですけども、色々掘り起こしてみると、こういったところにも街に関わった人がいると思うんで、これから築瀬先生に色々そういった発掘をお願いしたいと思うんですけど。

築瀬講師

やっぱり先見の明とか、やっぱり残さなきゃいけないっていう意識が強かったんですね。それが、何年か経てば、きっと、また役に立つことがあります。ありがとうございます。

A氏

昨日まで、長野の方にちょっと旅行してたんですけども、小布施っていう街がありまして、老人会で観光に行ったんですけど、土産屋を見に行くような旅でした。小布施は、何もなくてですね、お菓子屋を回ってきた。「何が観光だ」という感じなんですけど、ただ、小布施のいいところは、全部街並みを統一してしましてね、和風に。だから、歯医者さんでも、信用金庫でもですね、見た感じは全部和風で、全体が和風になっている。これはなかなかね、徹底しておりますね。それで、和風にするか洋風にするか、色々考え方あると思うんですけど、小布施の場合は、全部和風だったんですね。

築瀬講師

コンセプトって言うんですね。コンセプト定めて、それに合うように、少しずつやっていくわけですから。

A氏

問題意識がない人だと、何も感じられず通り過ぎるわけです。こういう会で、問題意識を持って、別府でもですけどね、見れば、色々いいところが見えるんですけど、そういうことに興味がない時

は、居眠りして通ってくるだけで、お菓子屋さん見て帰ってくるような旅になってしまう。見に行くっていうのは、口で何遍言うよりは、早いと思うんですね。何回聞くよりも、やっぱり見たイメージが強いんですね。

B氏

どうですか、この間、別府に行かれて、別府の観光客がやっぱり 1300 万って、そういうのはあんまり当てにならない数字で、足利と同じですから、役所というのはアンケート調査の数字をそのまま出すんで、あんまり当てになりませんよね。実際に、どんなような感じになっているんですか。

築瀬講師

そうですね、やっぱり正直言って、平日に行っただんですけど、寂れていっているなと感じました。先程申し上げたように、じりじりととにかく減っている。温泉関連で食べてる方が大半ですから、その危機感たるや大変なものだろうと思いました。だから、先程ご紹介した戦略を作ったりとか、色々なことをやっているんだろうと思います。

B氏

別府と足利で共通するとしたら、昔は華やかで今は、ぐっと落ちているというのは、共通するんですね。おそらく別府の悩みも、昔のような大勢お客さんが来たことをイメージしたとき、今、本当にお客が減っているんだと思うんですよ。ああいう古いスタイルのところだとしても、今どんどん新しい観光地ができていて。熱海じゃないけど、古いところはあんまりぱっとしなくなってきましたね。黙っていれば、だんだんお客は離れていって、寂れるわけです。足利もその例ですね。

C氏

足利はもともと観光に対しては、力入っていないんです。

A氏

現在でも。

B氏

だから、別府のすぐそば、30 キロ先に離れたと

こに湯布院は、別府湾で獲れたものは、一切食材に使えない。それで、要するに肉だけを中心とした食材を使って、食材自身も、別府と差別化するわけです。野菜も使わないんです。しかも、彼らがやっていることが、既に大分県とか湯布院なんてそんな狭い世界じゃないんです。世界の食をテーマにしてやるわけですね。ある意味では、別府と湯布院は、こんなに差があるわけです、本来は。それが、今、観光客の数で言うと、特に女性の観光客が圧倒的に湯布院に多いわけですね。

この間、熱海に行って聞いたんですが、熱海もツルヤホテルがつぶれたあたりからうんと寂れたんですよ。そして、この間行ってみたら、かなり賑わっていたんです。何がよかったのか全く分かりませんが、交通の条件では非常に熱海は優れてますんで、少しの他の条件の改善で良くなってしまいうんでしょうけど。

別府はかなり観光で優れているんですけど、足利も優れていると思う、消費地から時間、距離が非常に長いって条件があるので、似たようなところも若干あるんじゃないかと思います。そこで、湯布院みたいのできるかって言うと、湯布院や今言った小布施みたいなことはできない。そう簡単にはたぶんできないんではうんでしょうけど、何かその辺に参考にするようなものがありますかね。」

築瀬講師

湯布院も確か、30年か20年ぐらい前ですか、今、仰ったように女性に受けだした頃から、街の中に入り込んでおやりになっている方がいらっしゃるとい記事はよく見た記憶があります。今、本当にメジャーな観光地になりましたけどね。やっぱり、人なんでしょうね。そういう風に盛り上げた方がいらっしゃった。」

C氏

まあ中沢さんとか溝口さんっていう人がいる。人が財産ですね。

築瀬講師

そういうことでしょうね。この前の夏に、初め

て「巖華園」に泊したんです、家族旅行で。うちの家内の評価がなかなか厳しい。最初、フラワーパークに行ったんですが、「よく頑張っているね」という感じです。次いで、栗田美術館に行きましたら、作品に圧倒されて、絶句しました。後は巖華園で非常に楽しく食事をして、一泊しました。本物なんですね。観光目当てに作ったものではない、やっぱり、本物のものが栗田美術館や巖華園にあると感じるんですね。それは今作れと書いても、作れない。やっぱり、どう売っていくかあると思うんですけど、おかみさんとでも美人だっているのもびっくりしましたが、ご主人の

A氏

中島さん。

築瀬講師

中島さんのシャーロキアンの趣味もなかなかのもんでした。ああいう資源が本当に、足利にはいっぱいあるんですね。ただ、それを知る人ぞ知るとい世界ですよ。

B氏

足利には相当、文化人や有名人が来てるんです。

築瀬講師

そうですね。だから、まだまだ、きっと私、新参者ですので、知らないこと、たくさんあるわけですが、やはり、本気になってコーディネートして、それを本気になって売ろうとする、まずそういう動きを作り出す。中川先生はじめ、VAN-NOOGAの皆さん、努力されているわけですが、もう一息頑張る必要があるかな、すると一挙に・・・本当にそんな気がしました。

話戻りますけど、去年、ここに来て申し上げたように、とにかく北関東自動車道が通るじゃないか。その一瞬のために何をするんだっていうことを考えてまして、去年、西田副市長さんに生意気なこと申し上げたら、確か、「背中を突き飛ばされたような気がした」と仰られたんで、非常に恐縮したんですが、「背中を押された」ぐらいにしとけば良かったのに、突き飛ばしてしまったのかと思

ってですね。言い過ぎたかなと思って反省したんですが。

そう思ったんで、私の古巣のUR都市機構の方に、ちょっと声かけまして、歴史まちづくり事業をうまく仕掛けられないかなと今動いている。ちょうどそんな動きをしているところです。国交省の幹部の方と古い付き合いがあって、その話を持ち込んだら、彼が言うんですね、「北関東自動車道のイベントはだめだよ」っていうわけです。「そんなローカルな、地方の一つの道路ネットワークができたっていうだけのものでは、全国区のニュースにならない。やっぱり全国レベルで取り上げてもらうようにするんだったら、もうちょっと違う仕立てがいる。その一つが、歴史まちづくり事業じゃないかな」とアドバイスを受けました。法律も去年できていますね。それをうまく使って、歴史まちづくり事業としてやる。そういう仕立てがまず必要だろう。

A氏

予算もあるんですけどね、ただ予算くれって言っても出さないんですよ。計画がしっかりしてないと、出しようがないんですね、出す方も。まず、計画ができるようにやらないと補助金ももらえない。

築瀬講師

そっちの話は、どう仕掛けて、どう組み合わせていくかっていうことだと思うんですね。だから、本当にこのままでいくと、きっと、開通記念か何かのイベントがちょこちょこあって、で、関係者が4、5台のバスに乗って、ブーンって走って、栃木と群馬ぐらいでテレビに出て、それでお終いっていうことになって、「足利インター」という文字が出てくるぐらいの話で終わるだろうなと思うわけですね。だから、本当に、千載一遇のこのチャンスをどう使うのか。どういうメディアを使って、それを日本中に発信していくのか。北関東道路をトータルで見て、どれほど便利になるのか。影響はどこまであるのか。飛行機で海外か

ら成田とか東京羽田に入る。それで、楽しんだら今度は、東武線に乗って、ここまでやってきて、北関東自動車道で成田まで行くようなルートを作ってしまうとかですね、そういう旅行パッケージみたいなものも考えられるだろうし、随分違う展開もあるんじゃないかと思うのです。どこに誰に対して、どんな情報を発信していくかっていうことももっと議論する必要があるような気がしますね。

A氏

街おこしに二つほど考えがありましてね、一つは観光客とか、集客の話ですね。もう一つはシャッター街をどうするかっていう話と、違う面があると思う。その二つを一緒に考えると分かんなくなるんで、片方ずつ考えてもいいと思うんですね。ある程度関係はあるんですけど。

築瀬講師

先程申し上げたように、駐車場本当にこのままでいいんですかってことですね。

A氏

それはですね、二丁目がどうしてああいう風になったかっていう原因分析をしないと分かんないんですよ。なぜ、ショッピングセンターのでかいのがね、川の向こうにできたのかと。あれに負けたわけですよ。人口が激減したんですよ。だから、お店をやるためにはね、そこに住んでいる人が便利なのが一つですね。それから車で市内の人が行ってね、何か便利なもの買うと、そうすると、もう一つ、観光客ぐらいいないんですね、お店が成り立たないんですよ。そういう原因を分析して、悪いところは直していく。商店街というのは、ものを売るだけじゃない。向こうは合理的になるだけだけど。だから、よく問題意識を持って考えていけば、必ずいい案が出てくるわけ。今残ってるのは、薬屋とお茶屋と眼鏡屋と、今までうんと儲けてた連中がね、残っている。現実的にでかいところが勝つだけ。

築瀬講師

やはり、今仰ったように、街づくりという視点から考えてくんだと思います。観光客を呼ぶのは、最終目的かもしれないけど、やっぱり、住んでる人にとって便利だと。やっぱりそれが先でしょうね。

B氏

それが駐車場になっちゃう。

築瀬講師

そうですね。先程言いましたように、駐車場にしないように、家を壊さないような補助までしていることがいいのかどうか僕は分かりません。ただ、現実に歯抜けになって、駐車場になっていくってこと自体、それで将来は大丈夫かということは、議論しなきゃいけない。もともと個人の財産ですから、どういう土地利用するのは自由なんですけど、とにかく街づくりってというのは、個人の財産権をどういう風に全体の中で位置付けるかっていうことですから、やはり、駐車場の問題ってのは、絶対避けて通れないと思います。

色々問題が難しいことはよく分かっています。桐生もひどい。この前行ったんですけど、面白い話を聴きました。街の活性化の指数は、豆腐屋の数で決まるんだそうですね。要するに、豆腐は買回り品なんだそうです。だから、豆腐屋が残っているということは、基本的にまだ商店が生きてる。桐生はどうも足利よりは豆腐屋の数が多いそうですね。今、うちの学生が一人、どうして桐生に大型ショッピングセンターがないかっていうことを研究してるんですが、どんな答えが出るか分かりませんが、それなりに近在の出身の学生は意識してやっています。いい結果が出るようなら、ここでご報告できるのではないかなあと考えています。

A氏

この会はですね、街づくりの会になってますね。それをどうして具体的にやっていくかっていうことを、具体的に考えていいと思うんですよ。一軒一軒、コンセプトをはっきりさせて、こういう風

にしてこういう風に作っちゃうとみなから聞いて、それを修正してって、そういうコンセプトのもとで作ってかないと、ばらばらになっちゃうんですよ。ビルができたりね、和風ができたり洋風ができたり。だから、全体像として将来どういう格好の街にするかということ、これを街づくりの核なんですよ、ここが。

ここに工大の頭のいい人いるんだから、コンセプトを作ってですね、図面まではいかないにしても、大体決めましてですね、で、模型か何か作ってですね、普通の人は、図面では分かりませんが、大雑把でいいから、模型をいくつか作ってですね、こうなるんだと。そういうもつにみんな、地主一軒一軒と相談してですね、直していかなければ、色んなこと言ってもですね絶対にできない。そういうメンバーで会を作ったらどうですか。ここで。ここ以外に核がないんですよ、足利の街づくりの。

E氏

私も、30代から越して、20年以上住んでいるんだけど、一時、そういう面で夢持って、あそこにいる、建築士とやったことがありますけど。

築瀬講師

ここに一つ核があるっていうこと、ものすごく大きいことだと思うんですね。

A氏

市役所も核でない、商工会議所も核かどうか。私みたいにするさいのがいっぱいいるんだけど、個人ではどこで何やっていいか分からないわけです。たまたま中川先生にお会いして、こういうところに上がってきて、10年目に分かって、10周年記念パーティーで初めて分かって、出てきたんですけど。そういう情熱を持った人、大勢いると思うんですよ。そういう人集めて、ブレインストーミングでどんどん、やってね、そこから活路を開いていかないと。こういう話をして「だめだ、だめだ」っていついていてもですね、全然先に進まないと思うんですね。だから、その辺をやって頂き

たい、ぜひ。」

G氏

頂きたいじゃなくて、「やりましょう」にしてください。

A氏

じゃあ、やりましょう。

(一同笑い)

B氏

NPO が良ければそういう人を集めることができるわけです。

G氏

とにかく集まってね、色々議論して次に進まないといけない。

A氏

NPO 法人の会員が集まるのと変わらない。どっちにしろ、ボランティアも 10 年間、自治会でやってますんで、ゴミ拾いも街頭から交通から全部やる。ただ仕事ですよ。テント張ったり

G氏

足利、でも、そういうこと多いんですよ、一生懸命やってる方がね。

A氏

自治会がしっかりしているから、街もきれいだし、防犯灯もちゃんとついてますし、あれ、自治会がなかったら、防犯灯は消えて真っ暗、ゴミが山になるんですよ。やってる人は 2、3 人で、そういう人集めて、何とかしてくれてんで、自治会でしっかりしているところはきれいになってる。

築瀬講師

そういう意味でさっきの ONSEN ツーリズムのような、市民がですね、一体になれるような、そういうコンセプトを、早く議論するのが大事かもしれませんね。

G氏

それとあと一つね、観光戦略を三つ挙げておられたけども、三つ目の生活する者にとって暮らしやすさ、というのがね、大事なんだと思います。」まあ足利では、中心市街地、人が随分少なくなっ

て、駐車場ができてきた。住んでいる方は、大体で 65 歳以上が 4 割近いんですね。この辺では。だから、ものすごく、お年寄りの街になってきている。出て行く人ってやっぱり、ひとえに、住みにくいから出て行くっていうのもある。じゃあ、残っている方達はどう思っているのかですね。今、仰ったようにね、割とみんなが一生懸命やって、きれいにして、ていうことは、そんなに、住みにくいと思ってるのかどうか。その辺がね、うれしい、ものすごく。

A氏

私はまあ色んなところに住んだことあるんですけども、まあ足利は住みいい方ですね。ただ、働く場所がないんで、人口が減るんですね。こうやって皆さん卒業すると、首都圏の方へ行っちゃってですね、高校生もそうなんです。それで、人口がどんどん減ってきますから、税金も減ってきますよ。いくら市に言っても、いいことは言ってくれますけど、実際やろうとすると、2、3千円の労賃でもだめなんですよ。だから人口増やせばさ。

G氏

足利はね、住みやすいんだけど、やっぱり働くところがないんで、若い人らから見ると。そこをどうするか。だからそれ、今、産業別のあれで言うと工が、もう 5 割は切りましたね。でも、まだメインですよ。だから、そっちをもう少し挺入れするか、観光の方で挺入れするか。

A氏

今はですね、工業とか、産業を誘致するって言ってもね、頭数がね。昔みたいに大勢でできる産業を作ればいいんですけど、物流施設がインターチェンジのそばだとか色々できますけど、就業者はほんの 10 数人。採用するのも初年度で 10 人とか 20 人とかで、大きなお金をかけたわりにはですね、効果ないんですね。大勢来るといことは、みんな中国から入ってきてですね、昔、足利栄え

たのは、大勢県外から女工さん連れて来て人口増えたんですよ。今そういう仕事ないですよ。

G氏

工では増やせないです。だから、あるものをできるだけ、衰退しないように、いかに維持するかということと、もう一つは、商工会議所の商工ですよね、観光を考えると。これが就業者の4割はないと成り立たないというような。商工農、ここは海がないけれども、漁業も含んでね、そういうことで、工業とサービス業と、そっちの方で活用しないと難しい。ただ、今、足利で難しいのは、工のものすごく強かったから、その転換がね、非常に難しい、そこをどうするか。みんながそういう風になるようにどう仕向けたいかっていうのは難しいところなんですよ。さっきどなたか言ってたけど、正直言って、観光でお金稼ごうっていう意識はほとんどないと。なかったと。

F氏

それをなるようにするにはね、どうしたらいいかっていうところが、まだないですよ。街中の住みやすさを良くしながら、どうやってやってくかってなると、余計もっと難しくなる。

築瀬講師

びっくりしたのは、コンビニで、日刊工業新聞売っているんですよ。日本の都市でコンビニで日刊工業新聞を売っているところって、そんなに多くないような気がするんです。東京近辺のコンビニでは、まずそんな光景はないですね。だから、僕やっぱり、これは何か意味があるんじゃないかと思っています。当然買う人がいるから置いてあるんですけど、建設工業新聞を買う人がいるという資源をどういう形でもっと活用するのか。要するに、経営者で、当然日経新聞は読んでるけど、日経プラス建設工業新聞を読んでるその層の意識って、今日議論した、問題にとってどういうことなんだろうか。

F氏

やっぱりオーナー企業多いですよ。だから、

自分で現実をよく見ないと。

C氏

こうした下請け、一番苦しB氏
んでいるところ。

まあ足利の場合、工業人口って言うかですかね、工業就業者数は、栃木県で圧倒的です。工業統計の仕組みが少し違ったんで、無認可で操業するんで、実際には2、3人の作業所がまだね、少ない状況なんです。今、就業人口で第2次が44.4%に現在なっておりますけど、一時期70%近くあったのから、極めて工業に偏っていた。現在、出荷額は3,900億円と少ないですけど、一時期には4,700億円でした。

今、中川先生が仰ったけども、商工会議所ってのは、商業と工業。アメリカのは商業会議所、イタリアでは農商工なんですよ。ある意味では、三つ合わさったようなものが、一つの力になっていた方がいいのかなというような気がしますね。地産他消じゃあね、地産地消っていうような意味で力を発揮する。」

G氏

そこで観光が一番ね、農、商、工の一緒にやるには、観光が一番キーポイントになるのかなあと思います。

A氏

農業も足利小さすぎてですね、商売になんないんですよ。飯が食えないんですよ。米屋なんか特に黒松まで買いには行きますけど、もう固有の収入が少なくて、働いているんですよ、昼間。個人でやっているような農業が多い。

築瀬講師

どうやって、今、仰ったように連携するか。やはり工業のあり方をとことん考えなきゃいけない。本当に参加される方が、工業で今働いている方がどういう形で、街づくりに参加できるか。どういう形の参加が一番いいかっていう視点もいるんだろうなと思うんですよ。」

G氏

築瀬先生の話の中にも出ていましたけど、工業をどうするかっていうね、大事にするには。

B氏

それはね、やっぱり指導をちゃんとしないとだめだと思う。今まで足利はですね、街の中に工場いっぱいあったんです。それを川の南の方、田んぼだったところへみんな移したわけです。だから、トリコット通りというのがあったんです。あそこは、トリコットのごちゃごちゃ小さい工場をみんな集めて作ったんです。トリコットがだめになって、今の都市になったんですね。工業団地は、川の向こうの方に作った。

佐野が今やろうとしているのが、やっぱり工業団地があったので、それを向こうへ連れて行って、向こうで街づくりやっているわけです。ああいうアメリカみたいな、大規模店で1週間分まとめて買ってきて、英渇するようになれば、」。中心部が全部シャットアウトですけどね。

H氏

すみません、ちょっとよろしいですか。今後の参考なんですけども、たまたま今、産業の話が色々出て、先程先生が、両毛広域の話をなされておりましたけども、ささやかな提言をしますと、実はですね、そういった議論は、古くて新しい話になるんですけども、昭和47、8年の頃、当時、桐生と足利が中心になって、両毛地域開発研究ということで、当時の、あれから行政界が変わってますけど、20市町村で「地域開発研究会」というので、議論してですね、レポートを作ったり、それから、一部自主事業をやった経過があるんですよ。たまたまその時には、日通研というコンサルタントが入って、相当お金をかけたわけです。色々議論をして、一つの成果の成果みたいなものが、渡良瀬川の自転車道なんです、あれが共通の成果です。それ以外のものについてはですね、やっぱり各市の市長さんが、自分のところに持ってきたいというワンセット主義になっちゃいまして、やっぱり分かれたんです。それで、しょうがないからって

ということで、当時、商工会議所が渡良瀬合衆国みたいなことで話を濁しまして、また分かれたりした。たまたま足利と桐生の議論が続いてて、足利と太田という議論が、ちょっと外れるんですね。たまたまこの間、太田の実業家にとこに行きましたんですけども、やはり太田は太田なりに色々な議論してますから、また原点に戻って、仕切り直しの中で、予算を取り戻しながら、結果的に足利が良くなる方法をまたお考えになっていいんじゃないかなと、そんな感じがしました。

築瀬講師

ありがとうございます。

学生の時に、昭和47、8年頃でしたっけね、日本での地域連携みたいな話を少し勉強したことがあるんですが、結局、最後に残ったのは、嫌悪施設です。ゴミ焼却場とか、ああいうのを押しつけ合う時の理屈作りぐらいにしか実態はならなかった。まだ、昭和40年代っていう時代には、そんなに切実感がきつとなかったんでしょうね。ところが、あれから日本の人口も減り始めて、国際的に競合者も増えてきた。もう一回、仰るように原点に帰って、その時の知恵をもう一回見直してみる大事な時期に来たのかもしれないね。個別の話になると全く分かりませんし、こうやってVAN-NOOGAで10年やられてきた皆さんの前で、今日は随分生意気なことを申し上げましたけど、はっきり言うと別府の方がよっぽど困っているような感じがしました。

ただ、困るからこそ、やっぱり次の知恵を出すわけで、「知恵がない、知恵が出ない」っていうことはまだ、本気になって考えるほど、困ってないんだろう。しかし、そろそろ本気になって考えないと、相当まずいという状況になってきた。それが、皆さんの活動の10年の節目なのかなっていうように改めて感じました。

本日は、一番最初に、ご紹介したように、いわゆる野焼きでも観光資源だっというところから始まったんですが、野焼きをやり人を呼ぼう、それを

なおかつ、インターネットで全国配信してしまおうという、どう評価するか難しいところなんです。とにかく使えるものは何でも使って行くという精神は大事だし、そういう目を見た時に、先程、ちょっと触れましたように、柳原用水だとか、きっとまだ気付いてない、色んなまだものがあるだろう。それをやっぱりどうやって組み立てていくかっていうことが、大事なことかなと思います。

A氏

京都の山焼きみたいな、足利でもできないことはないんですよ、やれば。消防署かどこかが難しいかな。」

築瀬講師

やっぱり、それは市民から支持を得なきゃいけないわけで。

A氏

一大イベントになりますよ。花火の次ぐらいの。

築瀬講師

街づくりとは、市民が本当に望んでいることを、きちっとやっていくってことなのかなあというところで。

K氏

別府で一番ね、今のお話で、良くなったと思うのは、市役所の組織を作って、変えて、やるってところまでいったってところがね、ちょっと普通では真似のできないことだと思いましたね。民間なら色んなことを発想するどね、別府市は、エライね。

I氏

死活問題なんですよ、行政が動かないと、最後はね。

H氏

難しいところあるんで、組織まで変えてやったっていう辺り、それがどういうことで可能だったのかというのは、またちょっと勉強したいと思います。

黙っていれば、消滅ってような危機感があるんじゃないでしょうかね。別府は大きいから。

おそらく全国では、昔の観光地が半分ぐらいになっているんじゃないかと、想像ですけど。

C氏

全然違いますもんね、観光の規模が。

A氏

だから、足利市もね、昔良かったけど、今、全然だめだという状況まで、追いつめられてですね、かつては、何かやったんだろうと思います。

H氏

だから、足利は工業がまだそこまで危機感持っていないですね。

築瀬講師

戦略と銘打つだけの中身はあるように思いました。そういうことで、今日は別府市のご紹介っていうことです。

A氏

やっぱり認識としては、ここが核だという認識しなきゃだめだと思うんですね。市の核、ここは核でもっと堂々とやっていいと思うんです。

B氏

後から理屈は、つければいいんです。

A氏

宣伝もしてもらえるといいね。10年経って初めてこれやるのが分かったみたいじゃあね。どんどん情報発信して、上毛新聞なんかどんどん載せた方がいいですよ、本当に。

築瀬講師

これでちょうど時間がございますから、終わらせて頂きたいと思いますが、もし、本日、ぜひ最後にご意見があれば。あるいは、築瀬、勉強不足だというご指摘でも結構でございます。学生の中からも、もし何かあれば。

J氏

今までお話を伺って、実は住民の意思も固めて、中心市街地の、そして、こうやるという意見もまとめて、足利市も一緒に、ここでさんざん議論して、まとめたものがあるんです。それで、後はこの通りに、住民はこう考えています。こういう街

が作りたいたんですという風にプランを作って、市に上げてあるんです。市がそれをどうするかというところまで行って、市長が変わってボツという形になっているわけですね。その通りに行けば、少なくとも10年後、20年後は、素晴らしい中心市街地ができ上がって、人が大勢住んでいる。まあ、50年後には非常に活性化した、いい街になるだろうというもとにやったわけですね。それでも、それこそ、全くそういうことを考えてない人を一軒ずつ歩いて、そのもとは、放火によって死者が出たことです。とにかく百数十軒を一軒ずつ回って、そうして納得させて、そして、自分らのいい街を自分らの手で作ろうという気持ちにさせて、12、3年前、さんざんやりかけて、やっぱりさっき中川先生が言ったように、トップの気持ち一つなんですね。

一番最初に、行った時のトップは、それじゃお前らこうやったんなら、やろうと言ったけど、市長が亡くなって、トップが変わった。非常に消極的な人。それが8年間やって、今度は全く別のことを考えているんじゃないかなあ。中心市街地の、足利市において活性化というようなことさえ、考えてないんじゃないかと思うような方が市長になられたんで、夏に市長と面会して話をしたんですけども、今のところはまだ泰然自若としている状態なものですから、これからですね。

さっき、会長から振られて、「20年やったけど」というふうに言葉を濁しておられましたけど、さんざんやって、今ですので、たぶん、無理と思います。

核になろうとして、核になって、それ随分、ここでも議論をし、みんなで色んなものを作り上げてやってきてるわけですから。

G氏

あんまり、発信していないのは事実で、申しわけなかったんですけども・・・

D氏

まあそれからですな。

G氏

そうですね。一度禪を締め直して。

F氏

ぜひみなさん参加して頂いて。

築瀬講師

ネバーギブアップの精神でお願いします。

それじゃあ、ちょっと時間が参りましたので、次回のご紹介だけちょっとさせて頂きたいと思えます。次回は11月20日の金曜日ですね。名古屋産業大学の和泉先生にお願いしております。発端は単なる私の飲み友達だということなんですが、この方は、土地利用計画が専門の方でいらっしゃって、演題は「五感によるまちづくり」です。

実は仕事の話は私したことなくて、足利の酒は何がうまいとか、栃木の酒は何がうまいとかいうところで、まさに五感の話しかしていないんですが、まちづくりに対する感性を非常に重要視されている方です。どっちかって言うと、私は、自分もとデベロッパーなものですから、少し生臭い話になってしまうんですが、今回は逆に、感性の世界で滅多にない話が聞けるものと思っておりますので、ぜひ、20日の日はまたご参集頂きたいと思えます。どうもありがとうございました。失礼します。

(一同拍手)

AIT&VAN-NOOGA 公開講座
「地域活性化社会システム論（その2）」
別府市の地域資源活用と観光戦略

2009. 10. 28
足利工業大学都市環境工学科
教授 築瀬範彦

Chap.1 別府扇山火まつり



santanaka.junglekouen.com/e130998.html

扇山火祭り（1）



www.shiragiku.co.jp/staff/assets...0-39.jpg

扇山火祭り（2）



www.shiragiku.co.jp/staff/assets...0-39.jpg

野焼きの観光資源化

- 約100ha規模の牧草地
- 自衛隊管理地
- 実施は「採草組合」
- 地元CATV「CTBメディア」と市役所連携
⇒ 別府市市HPでの実況放送

牧草地（扇山）



www.enoha.net/tozan/ougiyama.htm

地域資源の活用

- 野焼き ⇒ 観光資源化
- 昭和6年 豊年祭り(商工会議所主催)
 - ⇒ 温泉祭り(全市あがての連合祭)
- 昭和51年 メインイベント「扇山火まつり」開始

メディアへの登場方法

- 地元CATV会社「CTBメディア」
Cable Television Beppu
- 市役所連携
 - ⇒ 別府市市HPでの実況放送



Chap.2 別府市の観光戦略 別府市の観光戦略レポート



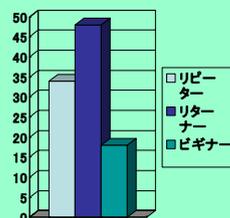
項目	内容
1. 観光振興の重要性	観光は地域経済の活性化に大きく貢献している。別府市においても、観光産業の発展を促す必要がある。
2. 観光資源の整理	市内の観光資源を整理し、魅力を最大化させるための施策を立案する。
3. 観光客の誘致	国内外からの観光客を誘致するためのプロモーション活動を強化する。
4. 観光施設の整備	観光客の利便性を高めるための施設整備を進める。
5. 観光人材の育成	観光サービス向上のための人材育成プログラムを実施する。
6. 観光安全の確保	観光客の安全を確保するための対策を講ずる。
7. 観光環境の整備	観光客にとって快適な環境を整備する。
8. 観光客の満足度の向上	観光客の満足度を向上させるための施策を立案する。
9. 観光客の滞在時間の延長	観光客の滞在時間を延長させるための施策を立案する。
10. 観光客の消費額の向上	観光客の消費額を向上させるための施策を立案する。
11. 観光客の地域貢献	観光客が地域に貢献するための施策を立案する。
12. 観光客の地域愛着の醸成	観光客が地域に愛着をもち、滞在を長くするよう努める。
13. 観光客の地域理解の促進	観光客が地域の文化や歴史を理解し、より深く楽しむよう努める。
14. 観光客の地域貢献の促進	観光客が地域の発展に貢献するよう努める。
15. 観光客の地域愛着の醸成	観光客が地域に愛着をもち、滞在を長くするよう努める。
16. 観光客の地域理解の促進	観光客が地域の文化や歴史を理解し、より深く楽しむよう努める。
17. 観光客の地域貢献の促進	観光客が地域の発展に貢献するよう努める。
18. 観光客の地域愛着の醸成	観光客が地域に愛着をもち、滞在を長くするよう努める。
19. 観光客の地域理解の促進	観光客が地域の文化や歴史を理解し、より深く楽しむよう努める。
20. 観光客の地域貢献の促進	観光客が地域の発展に貢献するよう努める。

別府市の観光戦略の紹介 **ONSEN ツーリズム**

- 平成16年9月
別府観光推進戦略会議
「別府観光推進策に関する答申」提言書
- 将来ビジョン
— **ONSEN ツーリズム** をめざして —

別府市の観光戦略その1 観光客属性の分析

- リピーター: 34%
 - リターナー: 48%
(久々の訪問者)
 - ビギナー: 18%
- ⇒ 温泉以外の積極的
訪問理由はない



別府市の観光戦略その2 国内旅行市場の分析と変化

- 個人客の増加と団体客の減少
- 名所旧跡周遊から
観光地での人々とのふれあいへ

別府市の観光戦略その3 別府観光の課題

1. 「湯治文化」の表現と現代化への対応が不十分
2. 都市のセンター機能と公共交通ネットワークの脆弱性
3. 情報発信機能の不足

別府市の観光戦略その4 マーケットへの対応

- 「入込み人数増加」から「滞在型利用」へ
⇒ 「広告宣伝誘客活動」から「街の魅力づくり」へ
- 「一泊二日通過型宿泊利用」から「短期滞在利用」へ
⇒ 「交通や街のインフラに負担をかけずに観光消費を増大」

別府市観光戦略その5 具体的マーケット像

- 自由で気儘な旅を要求する
個人客層へのアピール
- 成長するアジア市場をターゲットに

観光戦略の転換

- 「まちづくり」を基盤とする「ツーリズム振興」への戦略転換
- 「温泉の癒し」 ⇒
「ウェルネス産業」、
「ガイドツアー産業」、
「医療福祉産業」等の振興による
⇒ 「ツーリズム産業」の育成

ONSENツーリズム

- 滞在の魅力作り
(温泉資源の活用: 温泉泥、砂、飲泉、蒸気..)
- 海浜温泉と海岸線の復元
- 大正ロマン昭和レトロの街づくり・街並み再生
- 国際都市としてのイベント

海浜温泉

farm4.static.flickr.com/3458/336...52cd.jpg



別府駅前



By yanase 2009.09.01

レトロなまちづくりと国際化



By yanase 20090901

街並み再生



By yanase 20090901

街並み再生



By yanase 20090901

街並み再生



By yanase 20090901

プロジェクトの推進

- **緊急プロジェクト: 1~2年**
温泉広場整備、レトロタウンづくり、海浜砂湯づくり、蒸し湯復活、
名物料理開発、ループバス運行、温泉品質管理、
健康診断サービス開始、ガイド育成、外国への情報発信
- **中期プロジェクト: 3~5年**
景観指定による歴史的街並み保全、温泉ミュージアム、路地商店整備、
別荘文化保全、河川景観再生、夜景ビューポイント整備、温泉研究機関
整備、温泉熟活用植物栽培、旅行商品開発、スポーツコンベンション振
興
- **長期プロジェクト: 5~20年**
ロングステイ滞在メニュー開発、定住促進、市街地改造

- 世界報道写真展2009
- 別府現代芸術フェスティバル2009
- 国際平和映画祭 JAPAN 2006 in 別府

推進体制づくり

- 行政の組織改革と人材育成、財源確保
- ツーリズム総合政策部局の設置
(観光課、温泉課ではない)

戦略とは？

- あらゆる政策・活動を
 - ① 「onsenツーリズム」の目標の下に、
 - ② 整合的に、
 - ③ 到達時期明示して、
 - ④ 体制を整え、

推進している

Chap3.足利と別府



<http://photozou.jp/photo/show/212649/18935349>

<http://t.hatena.ne.jp/MrCAT/20070107105805>

足利市と別府市

• 市域	177.82 km ²	• 125.15 km ²
人口	156,060人	• 126,202人
市制	1921年	• 1924年
就業人口	1次 2.6%	• 1.5%
	2次 44.4%	• 15.5%
	3次 52.6%	• 81.8%
製造出荷額	3926億円	• 114億円
観光客	300万人	• 1175万人
大学	足利工業大学	• 別府大学 立命館アジア太平洋大学

足利と別府の先駆者

- 木村半兵衛(1843~1886)
- 油屋熊八(1863~1935)
- 第41国立銀行創業
- 亀の井ホテル創業者
- 両毛線建設
- 山は富士、海は瀬戸内、湯は別府のコピー
- 「ジャパンランカシャープラン」企画実行
- 「新日本八景」選で、別府を首位に導く
- 横浜:リバプール
- 「全国大掌大会」開催
- 桐生・足利:マンチェスター
- 温泉マークの考案

観光戦略

- 観光戦略とは、まちづくり戦略である！
- 観光学では、街は「劇場」
- 生活する者にとって暮らし易さ
即ち、他者から観ての面白さ

CHAP4. ミヤコとイメージ

- | | |
|-------------|------------|
| 1)自然現象 | 3)地理 |
| • 泉都 別府 | • 水都 大阪 |
| • 雷都 宇都宮 | • 空都 小松 |
| 2)文化 | • 港都 横浜・神戸 |
| • 学都 仙台 | • 湖都 大津 |
| • 神都 伊勢 | 4)方位等 |
| • 鯨都 名古屋 | • 北都 札幌 |
| • 球都 桐生・松山等 | • 南都 奈良 |
| | • 西都 |
| | • 千都 千葉 |

産業文化と都市のイメージ

- | | |
|-------------|----------------|
| • 糸都 岡谷 | • 炭都 夕張・大牟田・田川 |
| • 織都 桐生 | • 煙都 川崎・大阪 |
| • 桑都 八王子 | • 石都 岡崎 |
| • 鉾都 足尾 | • 鉄都 八幡・釜石 |
| • 陶都 瀬戸・常滑 | • 古都 京都・鎌倉 |
| • 多治見・有田・甲賀 | |
| • 木都 能代 | |

足利のイメージとは？

何の都か？

「都なんか知らないよ！」というのか？

せめて地図で場所を特定してもらいたい！

足利のまちづくりの課題と戦略？

- 北関東自動車道全線開通時というチャンスを活かせる準備はしているのか？
- 情報発信は、CATV、地元紙、大学と連携しているか？
- 中心市街地の歯抜け跡地を駐車場にして何がまちづくりか？
- 文化財を市民が楽しめるような仕組みを作っているか？
- 工業を大切にしているか？

おまけ

◎観光圏整備、国の支援拡充へハード事業も補助対象に一観光庁

◎観光圏整備、国の支援拡充へハード事業も補助対象に一観光庁

観光圏は、地域を結んだ地域が連携して観光旅行客を呼び込む「観光圏」の整備に向け、国の支援を拡充する。従来のイベント開催や観光商品の開発などのソフト事業を中心に補助を行っていたが、観光拠点の施設整備といったハード事業も対象に加える。再建した2010年度予算案概算案では、前年度比1.6倍となる約108億円を計上した。

観光圏は、2003年以上の観光客を誘致することを目的に、複数の地域が連携して形成する広域的観光エリア。観光事業者や自治体などによる協議会が中心となって策定した計画に沿って整備を進める。

国は今回、対象事業にハード事業を追加するほか、従来の事業費の4割としていた補助率も、6割に引き上げる。補助期間は原則2年間としていたのを、同3年間に延長する。補助対象の拡大で、情報提供を行う駅や公園の施設整備、駅広場の整備、歴史関連施設の復元、演習・演習場の開設などにも補助を受けることができるようになる。

前年度国土交通省は10月、自公政権時代は20年に2000万人を達成するとしていた訪日外国人旅行者数の誘致目標を掲げ、13年に1500万人、16年に2000万人、19年に2500万人が日本を訪れることを目指している。

観光圏事業の強化は、観光を核とする地域産業の再生・活性化策の一環。誘致目標の達成に伴い、同行全体の10年度予算も前年度比4.4倍増となる約257億円を要求した。（7）

（2009年10月23日/官庁連絡）

」の整備に向けたソフト事業に追加する約8億円を計上した。

地域が連携し心となって策

割としていた、同3年間に広場の改修、せるようになる

達成するとし6年に2000

。誘致目標の刷新に伴い、同行全体の10年度予算も前年度比4.4倍増となる約257億円を要求した。（7）

（2009年10月23日/官庁連絡）

「五感によるまちづくり」

名古屋産業大学環境情報ビジネス学部

教授 和泉 潤

司会

和泉先生と私との出会い、つい最近のことでございまして、ある方のご紹介で一緒にお酒を飲んだ。という実に、五感による出会いがございまして、すっかり意気投合しました。今回、公開講座の講師のぜひお願いできないかということで、お忙しいところ日程調整していただいて、本日、来ていただきました。

ということで先生、もし一言ごあいさつをいただければ。特によろしいですか。」

和泉講師

はい。なかでやりますので。

司会

はい、わかりました。それでは、開会に先立って、中川会長から一言ごあいさついただきますと思います。

中川会長

はい。共催という格好になっております「足利まちづくりセンターVAN - NOOGA」の会長を務めております中川でございます。今回で3回目ですかね、公開講座、積んでまいりました。地域の活性化ということは足利にとっても、とにかく切実な問題でございまして、ある意味では、足利工業大学にも色々がんばってもらわないといけないということもあって、こういうことも始めたわけでございます。基本的には築瀬先生が全て段取りされて、今日は遠く名古屋から、遠いと言っではいけないのかな(笑)。おいでいただきまして、本当にありがとうございます。

我々、ものづくりというか土木の世界ですと、最近、「コンクリートからり人へ」というのが、政治の世界で言われているのをご存知ですか。

そういう時代になっておりますけれども、もともと土木っていうのは、別にコンクリートだけじゃないんです。そういうことが、だんだん忘れられつつあることが問題なんで、それをそういうことを多分含めて、和泉先生から色々とお話いただけるんじゃないかなと思います。土木の人間が忘れてるものを、掘り起こしていただければ。それがまちづくりにどうつながるかっていうことを、考えなきゃいけないんだ。こう思っております、大変いい築瀬先生の発想と、それを快く受けていただいた和泉先生に心から感謝したいと思いますが、今日は若い人が割と多いんですけれども、これからは若い人ですかね、NPOもある意味では、年寄りも、なかなか発想が足りないところがありますが、ともども勉強したいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

司会

お願いします。

和泉氏

改めまして皆さん、こんばんは。

一同

こんばんは。

和泉講師

名古屋産業大学の和泉と申します。私の専門は都市計画ですが、今、愛知県のとある市のまちづくりの現場に少し入っております、まちづくりを色々、自分でやるというよりも、むしろアドバイザー的な立場で、関わっております。かなりその市も一生懸命まちづくりしていかないと、中心市街地が非常にさびれてきてしまっているとか、いろんな問題起こっていますので、そういう意味では面白い経験をさせていただ

ております。

そのまちづくりで、人間の五感を活用することが重要と考えています。五感によって周りから情報を仕入れて、言葉を変えて言えば、人間と環境が五感を通してコミュニケーションをしていますので、人間はいかに五感をうまく活用して、快適な状況でまちを楽しめるのかを考えていかなければということで、私の1つのテーマとして、五感によるまちづくりの話を進めております。今日は、先ほど築瀬先生が言われましたが、酒を飲みながらの話しているうちに、こういうことをやっているんだよと言いましたら、あ、それいいなということで決まり、縁あってこの場で、五感によるまちづくりというお話ができるという機会を持ち、非常に嬉しく思っております。私の話をお聞きになりまして、ぜひ、五感を活用して、まちづくりをどうやって考えていくのかを、皆さんに考えていただければと思っております。

今日は、内容としては、「おわりに」も入れると6つです。お手元にパワーポイントの資料がありますから、それをご覧になっていただければわかりますが、「五感とは」という話から始まります。人間は五感によってコミュニケーションしているという話を先ほどしましたが、五感で空間を認識している「五感による空間知覚」の話をしします。その1つに「アロマスケープ」という言葉があり、これを説明します。このアロマスケープに関しては、環境省がいろんな取り組みをしてきました。それを「環境省の取り組みで」で説明し、続いて、五感、特に、におい、かおりを使ったまちづくりについて、いくつか私が関わっている事例などを含めて、「五感によるまちづくりの事例」として紹介して、「おわりに」という流れで話を進めさせていただきます。スライドは全部で45枚ばかりあります。かなり駆け足的に進まなければ、1時間半で終わらないだろうなという気はします。その間にハイパーリンクでいくつか写真なども出てきま

すので、それらをも含めると、早足でいくかもしれません。その間、もし、わからないということがありましたら、手を挙げて質問してください。それに対してはお答えしながら、話を進めていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。まず、「五感とは」から、

N氏

どうぞ、もう座って。

和泉講師

立ったほうがやりやすいのです(笑)。

N氏

あ、そうですか(笑)。

和泉講師

先生という職業柄(笑)。人間の感覚が5つあることは、皆さんご存知だと思いますが、大きく2つに分かれます。1つが物理的感覚と呼ばれているもの、1つが化学的感覚と呼ばれているものです。物理的感覚には、目で見ると、目で見て、その情報が脳に行くと、だいたい頭のうしろぐらいで情報処理します。それから聞くは、頭の真中ぐらい、触るは、頭のとっぺんぐらいで、情報処理をしています。これは物理的感覚です。一方、化学的感覚というのは、鼻、それから口で、今、青が出てきますが、前頭葉、いわゆる人間の考える部分の近くで情報処理しています。つまり、においや味はかなり人間の考えに大きく影響を与えてくるととらえることができます。

五感を、日本語の動詞で見えていくと、一般的には受動的と能動的という言い方をしますが、受動的に「見る」とか、ただ単に「見ている」とことと、積極的に自分の意思を持って「視る」ことに、大きく2つに分けられます。これを受動的と能動的とに分けてみますと、視覚は「見る」と「視る」で分けられます。聴覚は「聞く」と「聴く」で、漢字が違って出てきます。それから漢字と言い方が違うのは、嗅覚の場合です。「におう(匂う、臭う)」と「嗅ぐ」で、受動的、能動的に分けられます。しかしながら、触角と

味覚は、いずれも「触る」「触れる」、そして「味わう」で同じ漢字を使うことになります。これは、あとで述べますが、いわゆる遠い、自分の体より離れているところの情報を入手するときには、2つの言葉を使っています。自分が受身的に情報を入手するときには、受動的な漢字を使っています。積極的に自分でその情報を取りに行こうとする場合には、能動的な漢字を使っています。このことは英語でも同じで「みる」は、「see」とか「look」とか「watch」とかありますが、「see」は全般的に受身的な形でとにかく見えるということ、それから「look」は意思を持って見る、「watch」はもっとじっくり見るということになります。これも受動的、能動的に分かれます。聴覚についても「hear」と「listen」があります。これも同じになります。それから嗅覚についても、「stink」や「smell」は、「臭う」場合には「stink」、「嗅ぐ」場合には「smell」ということで動詞が違ってきます。つまり、洋の東西を問わず、自分の体より離れている情報に関して、どのように接触するかによって、動詞が異なってきます。そうすると、こういったどちらかの動詞をうまく使うことによって、周りの景色を人間が判断していくわけですから、そういったものをうまくつくり上げれば、それを見る人、聞く人、嗅ぐ人にとって、快い気持ちを与えることになるということが考えられます。

そういうことで快適性を高めていくのは、五感によるものと言えます。たとえば、季節で考えていくと、「視る」で言えば、新緑はやはり快適性を高めます。春だなということになります。この写真は、この前行ってきた丸山千枚田の状況です。行くとやはり、里山と言いますか、原風景的なもので、いいなあという感じがします。このようにすごく心が、ある意味では快適な気分になってしまう。これはちょっと余談ですが、ここにあるこれは、日本で一番小さい棚田だそうです。

一同

(笑)

和泉講師

10株ぐらいしか植えられないのですが、水を回す関係と隣の田んぼの関係で、どうしてもつくらなければならないということで、つくったそうです。あと、「聴く」については、たとえば夏になると蝉の鳴き声が聞こえる、日本人の場合はずごく、ああ夏が来たなという感じがします。アメリカ、ヨーロッパですと、うるさいという感じになるらしいのですが、日本人の場合にはそういう形になります。「触る」で言えば、風の感触とかが出てきます。「嗅ぐ」で言うと、たとえば、金木犀のにおいなど、秋はずごくいいにおいがします。これは神奈川県藤沢にある鶴沼ですが、金木犀の住宅街ということで、秋になると住宅の生垣から、金木犀のかおりがプーンとします。これは、環境省のかおり風景百選に選ばれています。環境省のかおり風景百選、またあとで説明いたします。これは、名古屋産業大学ですが、こういった形で金木犀がずっと植栽されていて、ここ通るとすごくいいにおいがします。あ、秋なのだなという感じがします。そうすると、こういった装置をうまく活用すれば、人間は非常にいい気持ちになります。快適性を高めていくということが可能になります。「味わう」については、地産地消という形がいいと考えられます。こういうことで人間と環境がうまくコミュニケーションをすれば、人間の生活、あるいは住むことに関して、快適性が増していくということが言えます。このような人間と環境のコミュニケーションから、いい情報を人間が入手することによって、快適性が増大するというのであれば、そういった情報をどう空間のなかに配置していくかということが、非常に大きな意味を持って来ます。そういうことで、あとでまた出てきますが、五感のまちづくりを考えてくということをはじめたわけです。

これは、言葉の遊びに近いのですが、般若心経では人間の体についている眼、耳、鼻、舌、身（からだ）、それから意というのは、頭の意味になりますが、それでもって知るわけです。何を知るかと言うと、対象として、色（しき）、これは色と書いてありますが、般若心経では物とか形とかになります、そして、声とかおりと味と、それから触れる対象があり、それぞれ眼で、耳で、鼻で、舌で、身で知ることになります。最後の法というのは、これは法り（のっとり）、今様の言葉で言うと、システムです。それを意で知ることになります。このように、般若心経でも五感をお経のなかに入れて、人間はこういう形で外と情報交換しているんだよということを、言っています。

俳句はまた、1つの事例になります。これは、山口素堂の有名な句です。「目に青葉山ほととぎす初鯉」。目に青葉というのは、視覚とか嗅覚とかに関係します。山ほととぎすは、聴覚になります。初鯉は味覚になるということで、俳句の世界でもこういった形で、環境とのコミュニケーションを、句として表していると考えられます。これはちょっと余談ですが、この山口素堂の俳句は季語が3つあります。3つの季重ねです。現在では、あまり季重ねはよくないよということで、いい句じゃないと言われているのですが、こういう有名な句もあります。これも快適な状況のなかで、山口素堂はたぶん詠んだと思います。それは環境と、一生懸命コミュニケーションするわけで、そのなかで快適性がどんどん高まっていった、そういうことでこういう句が詠めたというふうに考えることができます。もう1つ、小学校の唱歌の事例、春の小川。これは皆さんご存知かと思うのですが、最初につくられた歌詞は、こういった歌詞です。「春の小川はさらさら流る 岸のすみれやれんげの花に」です。これを見ていくと、「さらさら流る」、これは聴覚です。それから、「においめでたく」、これは嗅覚です。「色うつくしく」、これは視覚

になります。このように、はじめにつくられた歌詞は、五感をうまく使って書いていると言えます。春の小川のイメージ、ちょっと合わなかったのですが、こんな感じだと思います。ところが、現歌詞はこのように変わりました。「さらされ流る」が「行くよ」というように擬人化してしまいました。「すがたやさしく」とか、「咲いているね」とか、人間をいれる形で歌詞が変えられてしまいました。そうすると、やはり五感を使っているかとは言えないのかなという気はしました。なぜ、そういうこと言えるのかというと、現在の春の小川を見てみると、こうなっています。これは代々木の近くにある河骨川という川ですが、今は排水路になっています。これでは、やはり春の小川ではないと言えます。このように五感をうまく歌詞のなかに入れると、歌詞も生きてくるということが言えます。こういった歌を詠むと、心が気持ちよくなるということが、言えるのかなというように思っています。

五感を使って、人間は環境とコミュニケーションをしています。この五感でコミュニケーションし、空間を感じ取っています。では、どうやって感じ取っているのか。感覚器官は、情報を入れるので、受容器という言い方をします。これが2種類あります。遠距離受容器、これは遠いところから来る情報を入手する感覚です。目、耳、鼻になります。これは皆さんよくお分かりになるかと思います。それから、近接受容器、これは近接した世界の感知に用いられるもので、皮膚とか粘膜とか筋肉から受ける感覚が、主体になります。味覚もこのなかに入ります。生まれたての赤ん坊の場合は、遠距離受容器がほとんど発達していません。近接受容器しか発達してないからです。つまり、触るとかなめるとか、そういった形で情報交換、情報交流、母親と情報交換をしている、コミュニケーションをしています。そして成長していくに従って、遠距離の情報を入力することができるようにな

っていきます。近接受容器の触覚、これは 40 億年前、生命体ができだ単細胞のときから触覚というのがあります。生命そのものと同じ古さで、我々のこの触覚の感覚というのがあります。一方、視覚。これは人間の場合には、最も新しく特殊化した感覚になって来ています。色も見える、立体感もとらえる、そういうことで、最も特殊化した感覚になっています。なぜかと言うと、人間が樹上で生活したときに、いわゆる立体視、それからカラーで見る、それではないと、生きていけなかったわけです。要するに立体視ができなければ、木から木へ飛び移ることもできないので、そういう意味でどんどん発達していきました。嗅覚は味覚とも関連しますが、触覚とほぼ同じで、古くからある感覚でしたが、視覚の発達とともに重要さは減じてきております。聴覚は人間を含めて、すべての動物はもとももっていたものではなくて、海から陸に上がった段階で獲得した新しい感覚になります。これは、液体の環境から気体の環境に変わったときに、音の伝わり方が違ってきますので、それを獲得しないといけないということで、発達していったということです。

まず、遠距離受容器について見ていくと、目は、一般的には情報を収集する上では、耳の 1,000 倍ほど有効になっております。耳が有効に働く範囲は、逆に非常に限られてしまいます。向こうまで 6 メートルくらいですが、私がもう少し声を落として普通の声で話すと、ちょっと聞きにくくなってしまいます。6 メートルくらいまでは人間が話す言葉は、有効に届きますが、だんだん薄れていって 30 メートルくらいより離れると、機能が崩壊してしまいます。ところが、視覚は、目はそれよりも遠くの情報も入手することができます。したがって目と耳は、これだけの違いがあるよということが言えます。目の延長上に、カメラとかテレビがあって、耳の延長上にマイクとかラジオがあるのはご存知と思いますが、テレビとラジオを比較してもわ

かりますが、情報量の相違とか再生の質の相違とか、かなりあるということが理解できるかと思えます。目と耳と空間知覚、空間を感覚する相違というのは、目の場合には障壁があると情報はそこで遮断されてしまいます。情報はそこまで、向こうは見えなくなります。ところが、耳は、このように口を手で覆っても、聞こえます。回りこんで音が伝わっていきます。目と耳はこういった違いがあります。これをうまく使うと、結構いろんなことが可能になります。それを何か生かせないかなということが、五感をまちづくりに生かす出発点の 1 つになっています。

もう 1 つ、嗅覚空間、においです。これも私が今、興味を持っている、非常に興味のある対象になっていますが、においというのはコミュニケーションの古くからの基本的な方法の 1 つです。個体を見分ける、情緒状態を知るといったことがあるわけです。ほかの動物も同じように、食物を見つける、仲間を認識する、縄張りのしるしを見つける、敵の存在を知らせる、子孫を残すということが行なわれておりました。今の人間はそういう意味で言うと、においの機能が少し退化してきておりますので、なかなかこういった状況では、うまく使えない部分がありますが、いずれにしる食物に関しては、皆さんもやっていると思うのですが、たとえば食べられる、食べられない、を判断するときに、まずにおいで判断します。目で見て判断できないわけです。においというのは、かなり重要になってきます。今、足利市では都市ガスがどのように使われているかわかりませんが、名古屋の都市ガスは、天然ガスです。天然ガスはにおいがありません。したがって、ガス漏れしてもわかりません。そうするとガス漏れして死んでしまうといったことが出てきます。感知器があればいいのですが、そこで、ガス漏れがしないように、わざわざブタンという嫌なにおいのするものを入れて、ガス漏れがしたらすぐわかるよ

うな状況にしています。そういうことで、おいというのは、人間は退化しているとは言っても、かなりまだ人間の生存にとっては、非常に重要なものになっています。このおいをうまく使って、においから快適性を高めてやれば、非常に生活が豊かになるのではないか、ということが考えられます。

一方、近接受容器について言えば、これは温度空間という形で、皮膚は感覚器官として、熱いか冷たいとか痛いとか接触しているとかわかります。もう1つ皮膚の温度特性としては、輻射熱、赤外線、これを人間は放出していますし、それを感じることができます。少し離れていても、相手が興奮してくると、熱っぽく感ずるのは、相手の温度が、相手の体温が上がって、輻射熱がくることによります。それでもって感じています。こういう形である意味では、コミュニケーションを取っているということです。ということは、皮膚の温度変化を用いて情緒の状態についてメッセージを発し、受けている、これが人間だと言えます。

触覚的空間というのがありますが、これは一般的には視覚的な空間、触るということを考えると、目をつぶって触る場合と、目を開けて触る場合とあり、一般的には視覚的空間と一体的になって、目を開けながら触ることが結構あります。すなわち、触覚的空間は、観察者を対象から分離させるだけであり、自分か自分以外かだけしかないので、そこに視覚的空間が入ることによって、対象が同じものなのか、違うものなのか判断することが可能になってきます。こういう形で人間は触覚を視覚とともにうまく使って、周りの状況を判断しています。たとえば、真っ暗闇のなかで視覚がきかないときに、触覚だけで歩くのはなかなか難しいのです。どこに何があるかわからない、ということは、自分と自分以外しかわからないわけですから、空間がなかなかうまく把握できないということがあると言えます。ちょっと話が違うのですが、

これは、パーソナルスペースの話になりますが、混雑への対応というのは、知らない人に触られていることをどう感じているのかで異なってきます。したがって、触覚だけで感じていると、誰が触っているかわからないわけです。しかし、それを視覚で見ることによって、この人が触っているのか、この人が背中押しつけているのかなといったことがわかります。そういう混雑のなかで、では自分がどうしたらいいのか、ということを見ると、今しばらくじっとしていなければならぬということと身を縮めて、じっとしているというのが一般的にあります。これは、パーソナルスペースで言うと、人間は携帯用の縄張りを持っていて、その縄張りを大きくしたり小さくしたりして、社会のなかでうまく関係づけをしているということになりますが、今日の本題とは異なりますので、説明はやめときます。

このような空間知覚、風景、見え方で関連付けると、視覚から空間を知覚していく、空間を知る、これは一般的にランドスケープ、あるいは景観と呼んでいます。写真がありますので見ていただきますが、ホームページから取ったものですが、高山の街並み、長崎の眼鏡橋、小樽市の運河、このような景観をランドスケープといいます。これも棚田の例です。聴覚からの空間知覚、これをサウンドスケープ、音風景と呼んでいます。目をつぶって周りの音を聞くと、やはり空間がわかってくるわけです。ここで音を出せませんので、写真になるのですが、環境省の音風景百選からとったものです。特に、北関東のところを取り上げてみました。説明はいたしません、五浦海岸の波音、アマガエルの鳴き声、それから水琴窟の音。これは埼玉県入りますが、虫の声、袋田の滝の音。日本の3名瀑の1つと言われています。北関東では日光にもう1つの三名瀑、華巖の滝があって、音風景を形づくっています。あと霜降の滝、吹割の滝、棚下不動の滝があります。これは三名瀑のもう

1 つで那智の滝、和歌山県的那智勝浦町にあります。このように、音によって周りの風景をとらえることができる、これを音風景と呼んでいます。今日、フラワーパークに行かせていただいたのですが、そこの音風景が、私の感覚からいうとまずかった、というのがあります。なぜかって言いますと、夕方くらいだったのですが、せっかくのフラワーパークで、たくさんの植生があって、鳥の声も聞こえるのですが、そこにジングルベルがスピーカーで流れていました。それは、音風景としては、フラワーパークの価値を少し下げってしまうということが言えます。その場に合った音風景を、どういうふうにつくるかというのは大きな意味を持っています。似合わないものを持ってきたのなら、マイナスになってしまうのです。そこは夜になると電飾して光り輝くなかでは、たぶん音風景としてあぁいったジングルベルとかクリスマスの歌を流すのは、もちろんいいことになるかと思いますが、昼間はちょっとやってほしくないなという気がいたしました。嗅覚からの空間知覚をかつては、かつてはという言い方はおかしいのですが、1990年代はスメルスケープ、におい風景と呼んでいました。ところが、最近はいいにおいで周りを見ていこうということでアロマスケープ、かおり風景という言い方をするようになりました。これもあとでアロマスケープの話をするので、いろいろな写真を具体的に見ていただきます。このように遠距離受容器で風景を感じ取るランドスケープ、サウンドスケープ、それからアロマスケープ、この3つがあります。これらをいかにうまく空間に配置していくかで、人間に対して快適な情報を与えてくれるのか、あるいは快適でないのか、が出てくるということになります。触覚は省略します。

これからアロマスケープの話をしていきます。においは先ほども言いましたが、人間にとって前からある感覚で、非常に重要な感覚です。今、だんだんその機能が退化してきています。これ

は、においの情報伝達ということで、においがどういう形で頭のなかに情報として伝わっていくかを、ざっとアニメーション的につくってみました。まず、空気中ににおい分子が漂っています。それを人間が息を吸うときに鼻から、鼻の粘膜で感じ取ります、それが電氣的刺激となって、電気信号で脳皮質に伝わり、最初に見たように前頭葉の近くで処理します。もう1つ、食物中のにおいがあります。食べ物を食べる。そういうときに、食べ物を咀嚼するなかでにおいが出てきます。それが、息を吐くときに、のどから鼻の粘膜を通して、においを感じさせるわけです。したがって、風邪を引いて鼻がきかないというときに、食べ物があまりおいしくないと感じるのは、食べ物から出てくるにおいが、鼻で感知できないからなのです。舌でしか感知できない。したがって、人間が、食べ物がおいしいというふうに感じるのは舌で、それから鼻で感じているということが言えます。鼻というのは、そのような意味で言うと、かなり重要になってきます。

ただ、このにおいというものも変動があつて、ピーク型とバックグラウンド型、この2つにおいがあります。一般的に食べ物を食べるときにぱつとおいを嗅いで、あぁ、つてなるときがピーク型で、間欠的に強くにおう場合です。短時間ピーク影響型という言い方をします。それからバックグラウンド型というのは、たとえば、芳香剤なんかをそばに置いて、ずっとにおわせていく場合には、バックグラウンド型という言い方をします。大きくこの2つに分かれます。こういったにおいというのは慣れがあつて、だんだん、だんだんにおいの感覚が薄れていきます。しかし、からだに負の影響がある場合には慣れにくいというのがあります。先ほど言いました、天然ガスにブタンというくさいにおいを入れておくというのは、負の影響がありますから、非常に慣れにくいわけです。すぐに感じ取ってくれるということになります。一般的に、

いいにおいの場合には、しばらくそのにおいだけを嗅いでいますと、どんどん、どんどん薄れていってしまうという状況が人間にはあります。このにおいも時間によって変化します。朝は、非常ににおいというのは鋭敏に感じとられます。そして体と同じように、時間とともに疲れてきます。したがって、夜は、嗅覚が鈍感になってしまう。と言うことは、強い刺激が、ある意味では効果的になります。ちょっと下世話な話になりますが、飲み屋の女性が強い香水を身にまとっているのは、強い刺激になりますので、それは来る男性にとって非常に魅力的になるわけです。これは普通の、昼間つけているような香水だったら誰も見向きもしないということになります。そういった形で、強い香水をするのだということになります。

そういうことで、においは非常に重要になるのです。これは昔から言われてきましたが、2004年のノーベル医学・生理学賞が、においでもって受賞しましたので、ここでにおいの重要性が一気に高まったわけです。40万から50万に及ぶにおい分子があり、ネズミを対象に、におい分子を受け取って脳が1万種類ものにおいを、識別する仕組みを持っているということを確認しました。人間だいたい同じです。人間も、かなり多様なにおいを識別する能力を、まだ持っているわけです。これはなぜかと言うと、そういった識別をしないと、特に、動物の場合には先ほど言いましたように、縄張り行動であるとか繁殖であるとか、食料探しとか生存に重要なことができないとすぐ死んでしまうというものになります。そういうことで、においは動物にとって重要で、人間にとっても大きな意味を、まだ持っているということが言えます。このにおいを使うと、いろんないいことが考えられるわけです。かおりによって、先ほどから言っていますが、快適性が向上していくことがあります。もう1つはまちのにおいによって、環境の変化が把握できることです。熱大気汚染

の影響と書きましたが、ヒートアイランド現象のことです。温度が少しずつ上がっていくと、においが変わってきます。どこがどういふふうに変ったということで、環境の変化がわかるということが、ある文献を読むと出てきます。まちの活性化の指標にもなるだろうということです。つまり、人がたくさん来るようなまちと、シャッター街とではにおいが違うわけです。そうすると、ちょっとまちを通っただけで、普段、人がたくさん来るようなまちはシャッターを閉めていても、活性化したにおいがあるのではないかと、です。そうでないところはそうではない、ということが言えます。それから、かおりのレシピというものがあって、それによって昔のかおり風景を再現することが可能になります。昭和のにおいであるとか、屋台のにおいであるとか、これはやはり昔を思い出すことによって、その人の快適性を増すということが考えられます。そうしたら最近新聞を見ていましたら、かおりのレシピに関してこういうのがありました。冷泉家の秘伝のかおりというのがあるって、これが100年ぶりに復刻したということです。これもやはりちゃんとレシピがあって、それでもって復刻ができて、冷泉家の100年前のかおりが再現することが、可能になったということです。そうすると、こういったレシピがうまくつくられて、それがきちっと伝わっていけば、昔あったようなかおりでも、今、再現することが可能になってきます。これからも、つくることができるといえることが言えます。それから、においによる記憶の呼び起こしができますので、たとえば、認知症の人に、このような昔のにおいをかいでもらうと、記憶がよみがえってくるということが可能になってきます。化粧によって、いわゆる昔の記憶をよみがえらせるということが、行なわれていますが、それ以外にまちの記憶なんか、こういったにおいをかがせることによって、自分がかつて生活していたまちを思い起こさせることができる。そうすると認知症

が、少し軽くなるのだということも言われています。このように、においというものはかなりいろんなところで使われるということが言えます。

においについて、環境省のいろんな取り組みが行なわれていますが、その1つに、におい環境指針があります。これは、身近にあるよいかおりを再発見し、かおりに気づくことを通して、身の周りにあるさまざまなにおいを意識し、不快なにおいの改善に積極的に取り組む地域の活動を推進するもので、平成12年に公表されました。これは、その前にモデル都市を選定して、そこでいろいろ調査をしてつくられたものです。これには2種類あって、多くの人を感じる不快なにおい、臭気が低減された状況をつくる臭気環境目標と、各自の好みや状況に応じた快適なにおい、かおりを楽しむことができる環境を保全・創造するかおり環境目標、この2つがにおい環境指針に入っています。これらの目標を達成する努力をすることによって、地域住民がよりよい生活環境を確保していこうというのが、目的になっています。

これはお手元にあるので、見てもらえればいいのですが、このように2つの指針でもって、快適な環境をつくっていこうということです。このような快適な環境をつくるためのかおり、いいにおい、どういうものがあるのかと言いますと、自然のにおいとして、植物とかその他の自然現象があります。ざっと出てきますが、植物はもちろん、知っての通りさつき事例として挙げた金木犀もあるし、その他の自然現象としては、川のにおいであるとか、土のにおいであるとか、そういったものも含まれています。一方、地域の文化とか歴史とか、生活と関わりのあるにおい、かおりでも、いいものがたくさんあります。農業、地場産業、郷土の特産、祭等の伝統行事、歴史文化、慣習などなどです。いろんなにおいがあります。こういったにおいがまちなかにたくさんあるはずなのです。この

ようなかおり、地域の文化や歴史や、生活と関わりのあるかおり、におい、これをいかにうまく使うかということが、その地域の生活をよくしていく、大きな方策になるのではないかとということが考えられます。

かおり風景ということで見ていくと、今、言った自然のかおりと、地域の文化・歴史や生活と関わりのあるにおいがあって、これは嗅覚でもって感じとります。一方、こういったアロマスケープ以外に、ランドスケープもあります。景観もちろんそれに関係してきます。サウンドスケープももちろんそれに関係してきます。それから、触覚ももちろんそれに関係してきます。ということで、かおり風景、アロマスケープという観点から見ていくと、におい、かおりだけではなくて、それと関連のある視覚・聴覚などの情報が存在することで、いっそう風景として雰囲気が高めることがある、できるという言い方ができます。したがって、においだけではだめで、そのにおいにプラス音、それから見え方、この3つ、少なくとも遠距離受容器で入手するその3つがうまく組み合わさってくれば、非常に大きな快適性を与えるものになっていくということが言えます。1つだけがよくてもだめ、やはり全体が一緒になって、うまくつくられることによって、快適性を高めることができるのだということが言えます。

これは、北関東地域で選ばれているかおり風景百選ですが、これを見ていただければわかりますが、これもにおいだけではなくて、見え方も含まれます。それから鳥がいれば、サウンドスケープにもなります。この3つがうまく重なると、ここでは見え方だけですが、においとか音とかも入ることによって、ものすごくいい風景として、人間は感じとることができます。これは今市市の藤の例です。これはニッコウキスゲの例になります。それから那須八幡のツツジです。これは草津温泉の湯畑の湯けむりです。そういうことで、5番目の話題に行ってしまう

ますが、五感による、主として遠距離受容器になりますが、それを使ったまちづくりとして、どういところでどういうものが行なわれてきているのかを、簡単に紹介いたします。これは築瀬先生も、おそらく関係はしているかどうか分からないですが、名古屋市の東隣に、今、日進市という市になっていますが、そこに香久山団地という団地があります。前の住都公団の時期に計画されてつくられた団地です。そのときに、かおりを重視してまちづくりをしていこうということを行ないました。それはなぜかと言うと、当時の香久山地域は里山的な状況であった。その里山をできるだけ生かして団地をつくりいこうというふうに考えたかと思います。木々の緑と花のかおりのするまちづくりをコンセプトに、計画されました。その団地のなかに、水晶山緑地という昔の里山をそのまま残し、季節のテーマを設定した四季の公園、12ヶ月の広場、四季の道ということで、季節に合った樹木、花を植えていきました。1991年に最初の530人、174戸が入って、2009年1月では2,555戸にまで膨れ上がってきています。香りのマップとして、こういうものをつくっています。この部分を大きくすると、たとえば香久山中央公園では、まちの中心となる公園で、グラウンドもあり、季節は、四季それぞれの花が咲いてくる、そういった香りがするとか、春の道、ユリノキ通り、これはチューリップみたいな花の咲く木だということで、春に咲く花があるし、さざんかの広場で言えば、冬にさざんかが、ばあっときれいに咲く広場があるとかです。こういったものを団地のそこここに、配置していきました。

この日進香久山において、においのまちづくりの調査を去年行ないました。4丁目から5丁目です。今年1丁目から3丁目を調査している最中です。なぜかと言いますと、全部を一緒に調査する費用がなかったので、2年間かけてやりました。最初は215票を得て集計を行なっております。やはり、これだけ時間がたつてくると、

かおりのまちづくりを知っているかということ、知らない人が94%になっています。しかし、かおりのまちづくりに関心があるかを聞くと、とても関心があるが16%、少し関心があるが63%です、4分の3以上はかおりによるまちづくりに関心を持っています。これは香久山団地に入ったせいなのか、あるいはもともとあるのか、それは識別できませんが、とにかく香久山団地に住んでいる人はこういう意識を持っています。そういう人達に、においで季節を感じるかを聞いたら、8割を超える人が、においで春、夏、秋、冬、全部じゃないわけですが、特定の季節は感じています。どういった季節が一番感じられているかと言うと、これは複数回答ですが、春がやはり一番多い。これやはり木々が芽吹いて、花が咲いて、そうすると若葉のにおい、新しい葉っぱのにおいとか花のにおいがするから、やはり一番よく感じる季節になっているかと思えます。冬はやっぱり一番少ない状況です。その他は、春夏秋冬に分けられなかったのを、その他に入れていますが、こういう状況になっています。このような感じ方は、先ほどにおい環境指針をつくるきにモデル都市になった鎌倉市、松本市でも、環境省じゃなくて、それぞれの自治体が行なっている調査ですが、ほぼ同じです。鎌倉市ではにおいで季節を、ここではかおりと書いてありますが、だいたい4分の3です。松本市はもっと多くて、85%になっています。余談ですが、やはり子どもと大人ではにおいを、季節を感じるか感じないかで多少違いがあります。これはどういうことかちょっとわかりませんが、たぶん鎌倉市の子どもは、鎌倉市は自然が多いのですが、なかなか外で遊ばないということが、こういうことに関係してくるのかなと思われます。一方、松本市は外で遊ぶ子どもが多いから、季節を感じているのかなということが推測できます。ただそれが、本当かそうかわかりません。いずれにしろ、日本人の場合には、このようなことから見ると、日進香久山

でも同じですが、だいたい4分の3を超える人達は、春か夏か秋か冬か、いずれかをにおいて感じ取っているだろうと思われる。うまくこのような感覚を使うことは、まちづくりを考えると必要なのかと考えられます。どのにおいて季節を感じているのか、というと、やはり一番多いのが草花であるとか樹木です。それから日光、これはにおいてあるかどうか話なのですが、日光も考えようによっては、においてあるわけです。たぶん、日光のにおいてというのは、布団干すと日光のにおいてするのですが、それで感じている人がいるのかなと、高く出しています。それから雨も、やはりにおいてを感じるわけです。花火は人工的なものですが、夏、花火を上げるということで、においてを感じているということがあります。たき火がもっと出てくるのかなと思っていたのですが、今、たき火やっていませんので、それで感じる人ややはり少ないです。こういう状況になっています。そのなかで心地よいにおいては何かと聞きますと、やはり草花、それから樹木、日光が多いということになっています。風もにおいてを持って運んでくるので、初夏の風なんか心地よいと感じるわけです。さらに、安らぎとか懐かしさを感じるにおいてを聞くと、やはり草花とか樹木が多いと出ています。こう考えると、人間にとって植物というのは、季節を感じさせ、時期を感じさせ、それから心地よさを感じさせる非常に大きな資源になっているのだと考えることができます。その安らぎや懐かしさを感じる理由というのが、子どものころに身近にあったとか、故郷を思い出すとか、懐かしい風景であるとかといったものになります。時間がないので、ちょっと飛ばしていきますが、日進香久山が好きかどうか聞くと、ほとんどの人が好きであると答えています。よく行く場所は団地内が多い。理由としては、自然に親しむのが多いということがあって、やはり自然をうまく配置すれば、人々がそれをよく使うのだということが言えます。今日もフラ

ワーパーク行きましたが、あそこも人々がよく行くというのは、おそらく自然に親しむ、これを1つの目的で行っているのかなということが考えられます。かおりのまちづくりを知っているか、これは先ほど言いました。話が違いますが、気になるにおいては何だ、を聞くと、やはり換気扇、排気口とかゴミ集積場とか自動車の排ガスとか、悪いにおいてに対して、非常に気になるという反応を示しています。草花、樹木、いいにおいてあって気になるものは結構ありますが、それ以外に商店とか飲食店とか、ものを燃やすにおいてとか、やはり周りに悪いにおいてがあると、すごく気になってしまうという状況が見て取れるかと思えます。ここの団地においては、不快なにおいてを削減する要望が大きく出ていますし、逆によいかおりへの要望もまだほしいという状況が見て取れます。さらに、先ほど言いましたように、視覚的側面とか聴覚的側面というのは、私が書きましたが、住んでいる人はにおいて以外に、そこに物が、彫刻があるといよとか、あるいはせせらぎが聞こえるともつといいよとか、そういった要望を持っています。これを考えるとやはり、においてだけではなくて、見え方であるとか音であるとか、かなり必要になってくるのだということが言えます。そういうことで、日進香久山において今、調査を進めておまして、今年また1丁目から3丁目までやります。それを合わせて、分析を進めていこうかなと思っております。たぶん面白い結果が出るのかなという気がしております。

2番目が、名古屋に大須商店街という商店街があります。これは浅草の観音様と同じように、大須観音の門前町として栄えたまちで、昔は色町がありましたが、それが明治大正期に、今の中村のほうに移っていきました。戦後そういうことで衰退していつてしまいましたが、電気街としてなんとかやっていたわけです。それが最近、若者のまちになった、大道芸のまちになった、やはり人が来るようになって、そこにある

意味では、音、それからおいがいに、回ってくるようになったということが言えるかと思います。これは大須でお線香屋さんをやっている人が、私が参加している学会で発表してものですが、商店街のにおいのお話をしました。これは大須です。ここに大須観音があって、こういった形で、ここがアーケード街です、この通りの2つがアーケード街です。ここもアーケード街です。そこに人がたくさん集まっています。これが大須観音です。人がたくさん集まっていると言いましたが、昼間ちょっと閑散としているところもあります。万松寺とって、これは織田信長の関係しているお寺です。こういう形です。このように大須商店街、もともとあったところは、あやしいとか汚いとかうるさいとかうさんくさいとか、地元の人はそういうふうに言っています。確かに古いものとか、たくさんあります。ただ、それが今、生かされてきています。そこでお線香屋さんですから、線香に興味を持っており、このようにいろんな線香があります。これは、巢鴨のとげぬき地蔵の商店街と同じだよという形で見えています。このような線香のにおいというのは、どこにでもある寺院門前型商店街だということになります。大須商店街もチャイナタウンをつくりました。しかし4、5年ぐらいで、人が行かなくなりました。チャイナタウンというのは、建物の再開発ビルの3階以上占めているもので、人は、やはりそこまでのぼって行かないのです。平面を歩き回ってしまうということです。変わりゆく商店街として、平面を歩き回るといことは、逆に言うと本通り以外に、ここに書いてありますが、路地にどんどん、どんどん進出して行ったということがあります。そこに音、においというものをつくり上げていきました。海外でも同じだという話があります。最近、10月10日に、もう少しあとに行けばよかったのですが、さっきの大道芸やっているところですよ。こういう形で大道芸が毎週、毎週だったかな、月に何

回か、日曜日に行なわれております。これは、いろんなところで行なわれています。さっきの万松寺の前で漫才ですか、が始まっているところですよ。このようにいろんな店があって、本当に昔は若者がほとんどいなかったのです。逆に今、若者が非常に増えてきています。これは最初もきっかけが何であったか、今の段階でちょっとわからないのですが、とにかく若者が集まるようになってから、相乗的にどんどん、どんどん人が集まるようになってきました。そう考えると、せっかくここに足利工業大学という大学があるので、若い学生をいかにまちなかに取り込んでいくかということは、足利を考える大きなポイントになるのかなという気はしております。

これは環境省の事業です。「かおりの街づくり」企画コンテストというのがあります。先ほどの、におい環境指針の延長線上にこれが行なわれています。まちづくりにかおりの要素を取りこむことで、良好なかおり環境を創出しようとする地域の取り組みを支援。これによりかおりの樹木を用いた「かおりの街づくり」を進めるものです。平成18年度実施です。先ほどの松本市とか、つくば市とか、芦屋市が表彰されています。

たとえば、松本市の環境大臣賞をもらった「かおりとチョウの森づくり」では、このように、公園のところで森をつくっていくという話ですから、必ずしも、まちなかとは限らないかと思えます。この近辺で言うと、たとえばつくば市の、つくばエクスプレスの開通したあとのセンター街ですか、そこのまちづくり、このように現状が上の方になっていますが、成木になってくる桜が、ああいうふうにきれいに咲くようになるよという形で、公園のまちづくりをしていこうという話があるのです。これは1年で終わりました。

次に「みどり香るまちづくり」企画コンテストということで、平成19年度から始まり、平

成 21 年度は、先ほど募集が終わりました。

平成 19 年度については、北海道の稚内市、世田谷区、神戸市、京都府の向日市が賞をもらっています。たとえば、神戸市の場合、北野町という、異人の建物のある場所があり、その活性化のプロジェクトで、かおりでつなぐ観光名所ということでやっています。この場合のかおりはハーブです。風見鶏のある建物のところに、ハーブを配置していくという形でやっています。

平成 20 年度については、鹿児島県の南種子町、稚内市、飯田市、それから盛岡市です。飯田市の場合には、ハーブのかおりを楽しむまちを目指してということで、自分達の出した生ゴミが生まれ変わるといってつくり上げています。これもちょっと見づらいので、もし興味があるのでしたら、環境省のホームページを見ていただくと出てきます。分別回収しながらハーブのかおりを、そこに配置していくという話で、かおりのまちづくりをやっている例です。

それから、遠距離受容器の 3 つを活用して、まちづくりを行なっている、たぶん唯一だと思うのですが、それが浜松市です。浜松市では、音・かおり・光環境創造条例をつくって、音・かおり・光環境創造計画を立てて、それにしたがって今、整備を進めています。概要は、読むとまた時間かかりますので流していきますが、大きな内容としては、音・かおり・光資源の選定、地域にどういった資源があるのか、それを見つけていこうという話です。それともう 1 つは、快適な生活を送っていくということは、静穏な環境を維持することにほかならないわけですから、それを保持するという、特に、悪臭の少ない生活環境、それから光害の少ない生活環境を保持していこうという話になります。音もそうです。悪臭もそうです。光害もそうです。これもある意味では、生活公害と呼ばれているもので、かなり近隣の間で、もめごとになるようなものになっています。それを、できるだけ

少なくしていこうというふうに考えているわけです。このように、いろいろ条例が整備されています。この 3 本柱、ここに上げてあるように、

「環境のネガティブなものを未然に防ぎ、よいものを残す」、2 点目として「生活型公害の発生源の抑制を図ることで、住民が自分自身の生活を見直す」、住民 1 人 1 人が、その生活型公害を発生しているケースが、かなり多いことがあります。それを自分らでやはり抑制していこう、そのためには生活を見直さなければいけないよということです。3 点目として、「光害を抑制する」。この典型的なものは、夜空を照らすサーチライトです、これによって空が、星空が見えなくなりますが、それを抑制していこうということです。そういうことで、まず、最初に何をしたかと言うと、環境資源に気付く、どこにどういった資源があるのだ、音に関する資源、かおりに関する資源、光に関する資源です。そういうことで浜松市は、音・かおり・資源百選というのを選定しております。今は合併後ですので、合併前には 30 選出しました。合併後は公募で選出しておりますが、合併前の主要なものを 2 つばかり見ると、これは音風景百選に選ばれたもので、遠州灘の海鳴、波小僧というのがあります。遠州灘の音というものが、やはり浜松を代表する音であるということです。もう 1 つ、これはかおり風景ですが、かおりの面で言うと、浜松のうなぎのかば焼きのにおいがあります。今、駅前が非常にきれいになりました。しかし昔の浜松の駅前に確か、このうなぎ屋がありました。窓開けてうなぎを焼きますので、においが浜松の駅を降りてしばらく歩くと、プーンとってきます。すごくいいにおいなのです。これも浜松を表す代表的なにおいになっているということで、選定されました。これは、環境省のかおり風景百選にも選定されています。

どういう資源が、百選選定されたかと言いますと、音で 30、かおりで 26、光で 24、音とかおり、2 つが組み合わせあったものとして 1 つ、

音と光が10、かおり光が6、音・かおり・光資源が3つあります。時間の関係から、音・かおり・光資源というものを少し見ていきますと、先ほどの遠州灘の海鳴、波小僧が音・かおり・資源で選出されています。先ほどは音風景百選では音だけだったのですが、かおり、海のおいんです。それから光、これは波しぶきがあがって光がきれいにきらきら輝きます。そういったものが挙げられています。それから浜松には浜名湖がありますが、その隣に佐鳴湖という小さな湖があります。そこも、音・かおり・光です。それから合併して、昔、天竜市と言いました、そこを合併して入れたわけですから、天竜のいわゆる美林が浜松市にあります。天竜は昔から材木の集散地として有名だったところで、ここに来る美林が天竜の山奥にありました。それが、音・かおり・光資源として選定されました。このように、浜松市は、まず気付くということで、資源がどこにあるのか、これを選定していきました。地元の人々の自薦と、他の人々の他薦とそれぞれ合わさって、そのなかから選ばれています。次の事例が、大阪の試みと書いてありますが、これは大阪市がやったものではなくて、専門学校が大阪のにおいについて何だろうということで、分析したものです。産経新聞の記事に掲載されました。におい識別装置を使って大阪のにおいを、いろいろ観測していきました。それを分析して、大阪のにおいは何だろうという話をしています。たとえば、線香のにおいがあります。線香のにおいはどのような構成からできているかと言いますと、私も知らなかったのですが、アンモニアが結構あります、アミン系もあります。こういったにおいが組み合わさることによって、線香のにおいが出ています。大阪で有名なものに、あと、たこ焼きがあります。たこ焼きのにおいは、こういう形です。いわゆる有香物質についてのチャートができます。それを用いて、たとえば、法善寺横丁、大阪の有名な繁華街、道頓堀の近くにありますが、そこで測る

と、線香のにおいが一番大きく類似していました。あと、たこ焼きのにおいも少しありました。そうすると法善寺のにおいというのは、線香のにおいという形で認識できるわけです。大阪のにおいの1つとして、法善寺の線香のにおいがあります。これをどんどん調べていきました。逆に言うと、こういった有香物質の類似度がわかるわけですから、これが1つのかおりのレシピになります。こういったレシピを用いてかおりをつくれれば、大阪の法善寺のにおいがつくれるという話なのです。そういうことで大阪のにおいは何だろうということで進めたのですが、残念ながら1年前に終わって、それ以降進展していません。この指導した先生を知っているのですが、ちょっと今できませんと話していますので、これもまた続けてもらいたいなという気がしております。

次に、においかおりと直接関係ないのですが、オープンガーデンという考え方があります。これはここに書いてありますように、個人とか団体の庭園を一般に公開したり、道路との生け垣などの境界を低くしたりして開放的なデザインとした庭園を言います。一般の人がオープンガーデンに行って参加し、所有者と、あるいは参加者同士で交流することができるものです。これは、NPO 法人の日本公開庭園機構が、さかんに進めています。かおりのまちづくりとは直接関係ないのですが、オープンガーデンに人が集まるということを考えると、1つの資源になります。これは東京の例ですが、バラの庭、バラをつくった人がオープンガーデンという形で、どんどん人に入ってもらっています。これもそうです。これはちょっと違うところです。これは、小平のオープンガーデンです。このように講習会、説明会を行なっています。これは、雑木林です。これは同じところです。これも同じところです。このように、人がどんどん集まる場所をつくれるということが言えます。これは、道路沿いの先ほど言ったように垣根を低く

したり、なかの植栽が見えるようにしたりする事例です。このようにオープンガーデンをつくることによって、人を集めることができます。植物をうまく使うことによって人を集めることができます。そこにさらにかおりをうまく配置すれば、もっと人が集まるのではないかということが、考えられます。

これは、また少し違うのですが、安全緑地というのは、先ほどの日本公開庭園機構が提唱しているもので、前に提示した藤沢の鵜沼の事例のように、無味乾燥なブロック塀ではなくて、とにかく生垣をつくりましょうよということです。そのなかで特に、角地をうまくつくって、こうと、安全帯をつくって、こうと、そういうことで優しい道をつくって、いくということが、提唱されています。

どういふことかと言いますと、従来、角はこういう形で隅切りしていますが、塀が、普通のブロック塀が高いと、いくら隅切りをしても車と人の出会いを考えると、あまり安全ではないということが言えます。では、遠くまで見渡せるようにしたらどうかということで、所有者が少しセットバックする形でやると、少し見通しがよくなります。空いたところに緑を配置していく、その緑もかおりのあるものであればさらにいい、ということになります。これは、実際につくられた例です。安全緑地の事例はたくさんあります。東京のいろんなところで行なわれている事例があります。安全緑地という考え方を取り入れることによって、そこにいい植栽をすれば、人を集める、あるいは安全にやっつけるといふことが言えます。

最後の2つの事例は、アロマとかにおいとかに直接関係ないのですが、このようにうまくかおりのする資源を使って、まちづくりを行なっているという事例は、結構あると言ってもいいかもしれません。ただそれだけではやはりだめで、においだけではなくて、聴覚であるとか、視覚であるとか、いわゆるサウンドスケープ、

ランドスケープ、こういったものも、うまく組み合わせることによってその効果がますます増していくと考えています。

そういうことで8時半まであと5分しかないので、申し訳ないのですが、先に行きます。我々が住むということを考えると、WHO、世界保健機関がかつて4つの要素があるという提案をしました。1つが安全性。安全・安心のまちづくりと言っています。1つが健康性。これは典型7公害といわれているものを、軽減することが必要になるものです。もう1つが利便性。これは日常生活の容易性です。こういったものが満足されることによって、快適性、いわゆる精神的なゆとりというものが出てきますが、さらに、これを高めていく、そのためにやはり、五感をうまく使うということが、非常に大きな意味を持って来ます。そうすることで、我々の生活の質、QOL。Quality Of Life といいますが、これが向上していきます。したがって、居住、人々が住むということを考えたときに、五感をうまく使えば、かなりいい生活ができるのだととらえることもできます。

これは、五感の人間への作用の話です。人間は、一般的にストレスを受けると、人間の心のなかでは自律神経が失調してしまいます。そうすると心身の疲弊を起こします。ところがこのような状況のときに、たとえば、快いかおりを嗅ぐと、嗅覚から脳に行って、それで自律神経が活性化してきます。そうすると内分泌系とか免疫系が、うまく動くようになりますので、ストレスによる心身の疲弊を正常状態に戻してくれます。これが快適性につながっていきます。人間は、このホメオスタシスという恒常性機能を常に持っていますが、こういった快適なもの、見え方であるとか聞き方であるとか、においであるとか、見えるもの、聞くもの、嗅ぐものです、これらが全て快適な状況であれば、ストレスは抑えられていくということが考えられます。

そういうことで、心地よいかおりを感じる
ことができる快適な環境を実現していくという
ことが、大きな意味を持ち、そのためにはまず、
気付く、この場合には、地域のかおりを再発見
するという、アロマスケープの場合には地
域のかおりを再発見するということになりま
すが、まず気付くということが重要です。その次
に、それを整備していくことです。この場合
には、かおり風景、アロマスケープづくりにな
ります。かおり風景というのは、かおりだけ
ではなくて、見え方、聞き方ももちろん含
めてつくっていかねばいけないということ
です。そのために行動していこう、地域主
体の、かおりのまちづくりをやっていこう
ということにつながっていくということが、
環境省のにおい環境指針に書いてあり、
これ紹介しました。

そのためには、国は国としての役割がある、
地方自治体は地方自治体としての役割があ
る、企業は企業としての役割がある、と
同時に、先ほどの浜松の例でも少し触
れましたが、地域に住んでいる人達も、
大きな役割を持っています。こと日本に
関して言えば、生活型公害に関して自
分が加害者であるという意識を持つ必
要があります。できるだけ周りの人に迷
惑にならないような環境づくりをして
いこうということが出てくることにな
るわけです。快適なおい環境づくりを、
積極的に参画していくということが大
きな意味を持つということで、今日のお
話は終わらせていただきます。ちょう
ど8時半になりましたが、どうもありが
とございました。

司会

どうもありがとうございました。(拍手)

司会

何て言いますか、非常に新鮮な気持ちで聞
かせていただきました。どうもありが
とございます。実に、まちづくりとい
うのは、ハードだけでなくソフトだ
ということを改めて認識したよう
な次第です。それでは、時間も押して

りますが、もし本日の講義のなかで、先生
にご質問あれば、どなたからでも。

和泉講師

はい、どうぞ。

司会

学生諸君、遠慮しないでいいよ。

それでは、ぶしつけな質問で恐縮な
んですが。

和泉講師

はい。

司会

今日、先生、足利初めていらっしや
って、足利のいわゆる五感、特に、
においとかです、どんな印象をお
持ちになりましたか。

和泉講師

季節ですか、ちょっとにおいがな
かったです。

司会

においがなかった・・・。

和泉講師

これはやっぱり、春とか夏だと、
たぶん東部のあそこあたりだと
緑っていう、植物のにおいがた
ぶんしたと思うのですが、今日
はちょっとなかったです。

それからフラワーパーク行
ったときに、やっぱりにおい
はしました。

視覚でもいい、においもいい
んですが、音が悪かった(笑)。

A氏

明日、係長に言っておきます。
お会いしますんで(笑)。

和泉講師

いやだから、TPOというか。

昼間は植物の見え方もあるし、
においもあるし、鳥の声も聞
こえるから、やはり音楽は、な
るべく小さくするか避けたほう
がいいと思うのです。夜のイル
ミネーションなんかのときには、
もちろん逆にあれがないと、
よくないと思うのです。

A氏

そうです、京都なんかに行
きますとね、華や

かさというんですかね。

色があって、においがあるってですね、それがどっから出るかわかりませんが、さっと舞子さんが通ったときね、ふうんとかおってきて。緑もありますしね、なんか華やかかっていうイメージが、ものすごく強いんですね。

和泉講師

はい、それはやはり。それはやはり、そこを通ることによって、自分の快適さが増しているのです。いい気持ちだっという雰囲気になります。

A氏

そういう雰囲気が醸し出せばいいんでしょうがね、なかなか。

和泉講師

だからやはり、そういう資源を見つけることが重要です。あるいは、

A氏

今でも街路樹が植わって、春なんかはにおいがすることはするんですがね。

和泉講師

そこ行けば、こういういいにおいがするよとか、たとえばそれだけでもいいと思うのです。まずスポットから、点から始めていって、それを線にして、面にしていくっていう整備の仕方がありますので。

A氏

法善寺、あじさい寺として有名な、とかですね。

B氏

足利で、においっていうと何ですかね。

司会

お寺多いから、線香のにおいがするかと言うと、そうでもないです。

A氏

お寺は線香のにおいが強烈です、やっぱり。さっき言った法善寺なんてのは、どんどんどん煙が出てるぐらいですからね。」

和泉講師

人がたくさん来るようなところだから。

A氏

そうそう

和泉講師

浅草もそうです。

C氏

ああいうふうにはぼんぼん、各お寺も線香焚かなくなった。

D氏

足利のお寺ではね。においはしないです。線香のにおいはしない。

E氏

最近、お葬式行ってお焼香する場合でも煙出ないですしね、もくもくが・・・。

F氏

お寺の鐘の音があんまり聞こえない。年末ね。

和泉講師

音もなくなりましたか。

D氏

うん、そのクレープ屋さんなんか、においはちょっとするがね(笑)。

D氏

前にあそこのほら、山の上かなんかから、音楽が。

司会

今でも鳴りますよね。

D氏

音楽はあるんだね。なんとなく味気ないが(笑)。5時になるとね。

和泉講師

お寺の鐘なんていうのも、あっていいかもしれませんがね。すごく

D氏

風情がありますよね。最近は鳴らさなくなつたんですかね。

E氏

うるさいって人がいるんです。

E氏

聞こえるところは聞こえますがね。

D 氏

昔は時計代わりだったんです、鐘が。

A 氏

山のお寺の鐘が鳴るって。

B 氏

時計代わりのところ、結構ありましたね。今でも5時になると。

A 氏

時計代わりです、あれ。ご指摘のように、足利でも探さないといかんです、気付かない。

和泉氏

やはり資源というものは、気付かないと資源じゃないわけですからね。それは重要です。

司会

におい、音ですか…。考えてなかったです。

A 氏

昔はハタ屋の音でね、ばったばたばたばたと……。

D 氏

それはね、私も足利に来てね、ちょっと町から外れたところで、ばたんばたん聴いた。

E 氏

あれが聞こえなくなったんです。

A 氏

聞こえなくなった。あれがあるんか、どうか。最近ちょっと通らないからわかんないが。」

D 氏

ああ、ありましたね。一昔前は、そういう音がね、

A 氏

団地をわざわざどかして、かためちゃったもんね。それから問屋団地は問屋団地で、鉄工所なんかは旧市街には、そういう工場がない。きれいなまちは、きれいなまちな、静かな。

E 氏

明らかにそれも何軒かあればね、そんなにいいんでしょうがね、1軒だけでやっていると、確かにうるさいっていう可能性もありますよね。周りが住宅になっちゃうとね。

和泉講師

まちがきれいというのは、それはもうすごくいいことなのです。ただ見え方だけでいいかって言うと、あと、ほかにもやはり要素があるわけで。その要素を比べるともっとよくなるのです。

司会

先ほど、日進地区のお話も出たんですが、実は私もかつてUR本社で事業の話を聞いていたんですが、伝わって来なかったです。臭いというのは、事業の状況を説明しても説明できないもんですから、逆に言うと、ちょっと凝ったような設計をした開発地区は、評価できるのですが、においで工夫しても評価のしようがないものですから、ついそういうのが情報として本社までは伝わってこないか、説明があったかもしれませんが、記憶に残っていない。

おそらく先生のされている研究も、目に見える視覚的なものというのは、表現しやすいし、みんな理解しやすいんですが、音だ、においだって言うと、本当は大切なんだけど、すごくキャッチするのが難しいです。

和泉講師

そうなのです。

司会

それをどういう形で、今日みたいに十分なお時間いただければ理解できるんですがもう少し短い時間で、「うん、なるほど!」と思うようなしかけにしていかないと……

和泉講師

難しいでしょうね。

司会

難しいです。非常にいいお話だったんですが。

A 氏

今日ね、非常にいいお話をうかがったが、においだけはやっぱりどうしてもね(笑)。

N 氏

あと、触覚っていうのも難しいです。

和泉氏

触覚、やはり本人がいないと表現できない。

N氏

表現できないですね。

和泉講師

しかし、たとえば、山の沢に手をつく感触、ああいうのは触覚のいいところなんです。もう1つはたとえば、ここからだ、山からこちらに風が下りてくる、そういうのがあると思うんです。

N氏

そういうのは言葉でもある程度ね、実感は持てると思うんですがね。

和泉講師

そうすると、そういう風が通る道を、どういうふうにつくっていくかっていうのは、大きな意味がありますよね。

司会

それでは、時間もそろそろです。もしどなたか、学生はこの機会に質問しなくてもいいかい。少なくとも私の講義では絶対聞けない話だと思いますから。

よろしいですか。じゃあ時間も参りましたので、これでお開きにしたいと思います。先生、どうも遠いところありがとうございました。

(拍手)

和泉講師

ありがとうございました。

司会

それでは、第3回これで終わりにしたいと思います。次回、来週の水曜日第4回、内閣府の首都圏地域担当の青木さんをお招きして、また水曜日の7時、よろしく願いいたします。

B氏

日にちは、何日？

司会

25日。水曜日です。

司会

今日は、お祭りの前ということで、いろいろと準備があり、せっかくのまちづくりメンバーが出られなくて・・・

中川会長

すいませんね。申し訳なかった。

和泉講師

いえ。

司会

本当に、どうも長い間ありがとうございました。(拍手)

公開講座「地域活性化システム論」

五感によるまちづくり

- (1)五感とは
- (2)五感による空間知覚
- (3)アロマスケープ
- (4)環境省の取り組み
- (5)五感によるまちづくりの事例
- (6)おわりに

平成21年11月20日 担当:名古屋産業大学 和泉 潤

1

(1)五感とは

感覚

・物理的感覚

視覚 視る

聴覚 聴く

触覚 触る

・化学的感覚

嗅覚 嗅ぐ

味覚 味わう

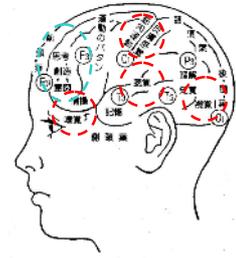


図5 人間の脳皮質の分業の状況

出典:文献7、32頁

2

	受動的	能動的
視覚	見る	視る (観る・看るなど)
聴覚	聞く	聴く
触覚	触(ふ)れる	触(さわ)る
嗅覚	匂う(いいにおい) 臭う(悪いにおい)	嗅ぐ
味覚	味わう	味わう

3

快適性を高める五感

・季節を五感で感じる(例えば)

- 視る 新緑(春)
- 聴く 蝉の鳴き声(夏)
- 触る 風の感触(初夏の風)
- 嗅ぐ 花の匂い(金木犀 秋)
- 味わう 旬の筍(地産地消 春)

・人間と環境のコミュニケーションにより
生活(居住)の快適性増大へ

4

事例

・般若心経における五感+1の事例

眼耳鼻舌身意 識
げんにびぜつしんい



色声香味触法 対象
しきしょうこうみそくぼう

5

・俳句の事例(初夏)

目に青葉 視覚・嗅覚

山ほととぎす 聴覚

初鰹 味覚

(山口素堂:1642~1716)

季語:青葉=夏、ホトトギス=夏、初鰹=初夏
3つの季重ねて現在は一般的ではない

6

・小学校唱歌の事例(春の小川)

原歌詞 **春の小川**は さらさら流る 聴覚
岸のすみれや れんげの花に 嗅覚
においめでたく 色うつくしく 視覚
咲けよ咲けよと ささやくごとく



現歌詞 **春の小川**は さらさら**行くよ**
岸のすみれや れんげの花に
すがたやさしく 色うつくしく
咲いているねと ささやきながら

7

(2)五感による空間の知覚

受容器としての感覚

・遠距離受容器

遠く離れた対象の検知に関するもの

目(視覚)・耳(聴覚)・鼻(嗅覚)

・近接受容器

近接した世界の検知に用いられるもの

皮膚や粘膜や筋肉から受ける感覚
(触覚)

8

- ・触覚 生命そのものと同じ古さ
- ・嗅覚 味覚とも関連
視覚の発達と共に重要さは減ずる
- ・聴覚 **海から陸に上がった段階で獲得した
新しい感覚**
- ・視覚 最も新しく、特殊化した感覚
(樹上生活での立体視)

9

遠距離受容器

・目と耳の違い

目は情報を収集する上では耳の1000倍
ほど有効

耳が有効に動く範囲は限られる

6m位までは有効

30m位より遠くなると機能が崩壊

目はかなり遠くまで機能する

10

目の延長の装置: カメラ テレビ

耳の延長の装置: マイク ラジオ

情報量の相違
再生の質の相違

目と耳の空間知覚の相違

目 障壁による情報の遮断

耳 障壁の検出はできない

11

・嗅覚空間

におい = コミュニケーションの古くからの
基本的な方法の一つ

個体を見分ける・情緒状態を知るなど

食物を見つける

仲間を認識する

縄張りの印を見つける

敵の存在を知らせる

子孫の残す

12

近接受容器

・温度空間

感覚器としての皮膚 熱・冷・痛・接触
皮膚の温度的性質 輻射熱(赤外線)
を放出・検知

皮膚の温度変化を用いて情緒の状態
についてのメッセージを発し、受ける

13

・触覚的空間

視覚的空間感覚と一体的

触覚的空間 観察者を対象から分離
視覚的空間 対象を互いに分離させる

混雑への対応は、知らない人に触られて
いることをどう感じているかで異なる。

触覚だけで感じているか、視覚でも感じているのか

14

風景との関連

空間知覚としての風景

視覚からの空間知覚 ランドスケープ
(景観)

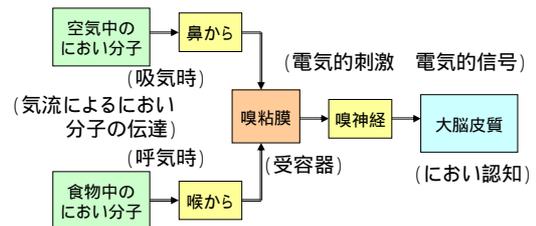
聴覚からの空間知覚 サウンドスケープ
(音風景)

嗅覚からの空間知覚 アロマスケープ
(かおり風景)
(触覚)

15

(3)アロマスケープ

においの情報伝達



文献3より作成

16

においの変動

・ピーク型(短時間ピーク影響型)
間欠的に強くにおう場合

・バックグラウンド型(長時間平均影響型)
定常的で雰囲気臭的な場合

においの慣れ

・通常は慣れがある
・身体的に負の影響がある場合は慣れにくい

17

嗅覚の時間変化

朝:嗅覚は鋭敏



時間とともに嗅覚
は疲れてくる

夜:嗅覚は鈍感になる。強い刺激が効果

18

においの重要性

2004年のノーベル医学生理学賞

におい受容体と嗅覚系の機構の発見

40～50万種に及ぶにおい分子を受け取り、脳が1万種類ものにおいを識別する仕組みをマウスを使い研究

縄張り行動や繁殖、食料探しなど生き物の日常に嗅覚が重要であることを示す

中日新聞平成16年10月5日版

19

においの効用

- ・かおりによる快適性の向上
- ・まちのおいによる環境変化の把握
熱大気汚染の影響など
- ・まちの活性化の指標
シャッター街など
- ・かおりのレシピによる昔日のかおり風景の再現
昭和のおい・屋台のおいなど
- ・においによる記憶の呼び起こし
認知症者(化粧以外にまちの記憶)など

20

(4) 環境省の取り組み

におい環境指針

身近にあるよいかおりを再発見し、かおりに気づくことを通して身の回りがある様々なにおいを意識し、不快なおいの改善に積極的に取り組む地域の活動を推進。平成12年に公表。

モデル都市
平成7年～8年：埼玉県・鎌倉市・堺市
平成9年～10年：新潟市・松本市

環境庁大気保全局大気生活環境室(2000)

21

におい=快適性の一要素

- ・多くの人が感じる「不快なおい(臭気)」が低減された状況をつくる。

臭気環境目標

- ・各人の好みや状況に応じた「快適なおい(かおり)」を楽しむことができる環境を保全・創造する。

かおり環境目標

- ・快適なおい環境の形成による地域住民のよりよい生活環境の確保

22

におい環境指針	臭気環境目標	大部分の地域住民が日常生活において感知しない程度(不快なおいについて)
	かおり環境保全目標	心地よいかおりを感じることができる快適な環境の実現

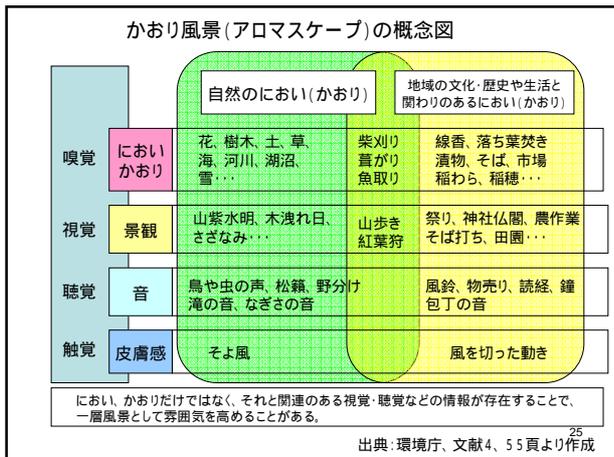
かおり環境の保全・創造に向けて、地域のかおりを再発見し(気づき)かおり風景(アロマスケープ)という総合的な視点で環境づくりを進め(整備する)、地域の自然・文化・歴史との関わりの中で、住民が主体となったかおりのまちづくり(行動する)を進めるための行動計画

出典：文献4、9頁より作成 23

かおりの事例

- 植物**
 - 樹木(クスノキ、イチヨウ、カツラ、マツ、ヒノキ等)
 - 花(サクラ、フジ、バラ、ユリ、キンモクセイ、ウメ、ジンチョウゲ、クチナシ、ナリハナ、ニセアカシア、ライラック、スイセン、モクレン、コブシ、ハナノキ等)
 - 草(芝生、牧草等)
- その他の自然現象**
 - 潮・磯等の海、河川・湖沼等水辺、土、湿原、霧、コケ、草原・高原を渡る風、水田を渡る風、鍾乳洞、鮎、ホタル等
- 農業**
 - 水田、畑、稲わら、田の代かき、果樹園、茶畑等
- 地場産業・郷土の特産**
 - 線香工場、漆塗り、焼き物、酒蔵、製材工場、炭焼き、魚市場、朝市、笹だんご、みそ、漬け物、もち、干物、まんじゅう、しょうゆ、製茶工場、かまぼこ、漢方薬、手漉き和紙等
- 祭り等伝統行事**
 - どんど焼き、たいまつ、花火、お香、ぼっぼ焼き等
- 歴史・文化・慣習**
 - 社寺のお線香、落ち葉焚き、温泉、菖蒲湯、茅の葺き替え等

出典：文献4、54頁より作成



かおり風景100選

環境省では、近年増加している、都市・生活型公害化した悪臭問題を解決するため、悪臭防止法に嗅覚測定法を導入して、その普及を一層推進しているところであるが、それに加えて、かおり環境という新しい考え方を取り入れ、「身近にあるよいかおりを再発見し、かおりに気づくことを通して身の回りにある様々なにおいを意識し、不快なにおいの改善に積極的に取り組む地域の活動」を促進していきたいと考えている。

そこで、良好なかおりとその源となる自然や文化 - かおり環境 - を保全・創出しようとする地域の取組みを支援する一環として、かおり環境として特に優れたもの100地点を認定する「かおり風景100選」事業を実施することとした。平成13年度実施。

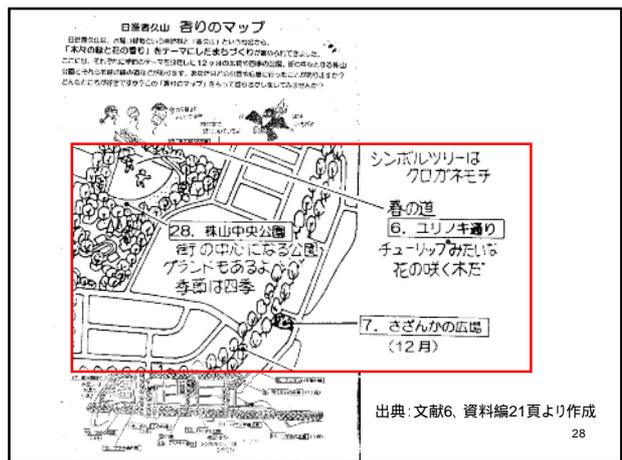
<http://www.env.go.jp/air/kaori/index.htm>

(5) 五感によるまちづくりの事例

日進香久山団地の先駆的試み

- 木々の緑と花の香りのするまちづくりをコンセプトに計画・実施
- 自然林を残した水晶山緑地
- 季節のテーマを設定した四季の公園
- 12ヶ月の広場
- 四季の道

1991年 人口 = 530人 住宅 = 174戸
2009年1月 人口 = 7,365人 住宅 = 2,555戸



日進香久山における「においのまちづくり調査」

調査の概要

対象住宅 日進市香久山4～5丁目の1,160世帯
調査方法 郵送配布(配達地域指定による全戸配布)
郵送回収(同封の返信用封筒)
調査時期 2008年11月20日郵送
2008年12月13日返送締切
回収票 216票(うち1票無効)
有効回答数 215

集計結果

名古屋市大須商店街

- 大須観音の門前町 色町
- 戦後の衰退
- 電気街としての位置づけ
- 若者の街
- 大道芸の街

最近の街の雰囲気

匂いと賑わいについての発表

091010撮影

「かおりの街づくり」企画コンテスト

街づくりに「かおり」の要素を取り込むことで、良好なかおり環境を創出しようとする地域の取り組みを支援。これにより「かおりの樹木を用いた「かおりの街づくり」を進める。平成18年度実施。

環境省：http://www.env.go.jp/air/akushu/midori_machi/index.html

31

・平成18年度

環境大臣賞：長野県松本市
奈川地区「かおりとチョウの森」づくり

におい・かおり環境協会賞：長野県松本市
かおりと花いっぱいコミュニティガーデンづくり

日本アロマ環境協会賞：茨城県つくば市
TX研究学園・葛城、千本桜まちづくり事業

入賞：兵庫県芦屋市
公園魅力アップ計画

32

「みどり香るまちづくり」企画コンテスト

まちづくりに「かおり」の要素を取り込むことで良好なかおり環境を創出しようとする地域の取り組みを支援。これにより、清涼感や心安らぐような空間、季節のうつろいを感じられるような空間が創出され、かおりの伝統をいかしたみどり香るまちづくりが進むことが期待される。平成19年度より開始。

平成21年度の募集期間：5月18日(月)～10月30日(金)

環境省：http://www.env.go.jp/air/akushu/midori_machi/index.html

33

・平成19年度(概要)

環境大臣賞：北海道稚内市
稚内市恵北地区「香りとさえずりの杜」コミュニティガーデンづくり

におい・かおり環境協会賞：東京都世田谷区
四季を織りなす新たなかおり手法で都市緑地を再生

日本アロマ環境協会賞：兵庫県神戸市
北野活性化プロジェクト・かおりでつなぐ観光名所
～ 風見鶏 meets HERB ~

入賞：京都府向日市
香りただよう四季おりおりの競輪場

34

・平成20年度(概要)

環境大臣賞：鹿児島県南種子町
緑あふれ花かおりただようコミュニティパークづくり

におい・かおり環境協会賞：北海道稚内市
稚内市中央地区「香りゃんせ通り」コミュニティパークづくり

日本アロマ環境協会賞：長野県飯田市
自分たちの出した生ごみが生まれ変わる。「ハーブのかほりを
楽しむ街を目指して」

入賞：岩手県盛岡市
風薫る通学・通園路

35

浜松市音・かおり・光環境創造条例

・概要

・3本柱

- (1) 環境のネガティブを未然に防ぎよいものを残す。
- (2) 生活型公害の発生源の抑制を図ることで住民が自分自身の生活を見直す。
- (3) 光害を抑制する

・環境資源に気づく

浜松市音・かおり・光資源百選の選定
合併前に30選出、合併後は公募で選出

<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/lifeindex/life/env/otokaori/hyakusen.htm>

36

・浜松市音・かおり・光資源百選

音資源	30
かおり資源	26
光資源	24
音・かおり資源	1
音・光資源	10
かおり・光資源	6
音・かおり・光資源	3

<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/lifeindex/life/env/otokaori/hyakusen.htm>

37

大阪での試み

たこ焼き、線香、焼き肉...大阪の“におい”何やろう
専門学校生が分析 産経新聞(Web) 2006.02.18

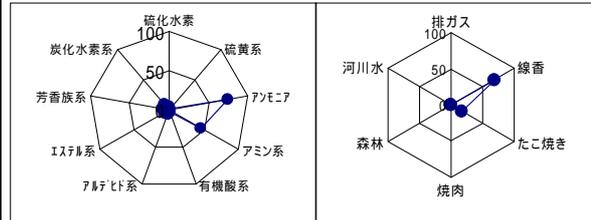


図1 線香の有香物質に対する類似度

図2 法善寺の基準臭に対する類似度

出典:文献5 38

オープンガーデン

- ・個人や団体の庭園を一般に公開すること。
 また、道路との生け垣などの境界を低くしたり、
 取り払い、開放的なデザインとした庭園。
- ・参加者のメリット:庭園づくりの参考や植物を
 通じての交流ができる。
- ・庭園主のメリット:自分で造った庭園を発表できる。
- ・日本のオープンガーデンの例
[資料提供](#): NPO法人 日本公開庭園機構

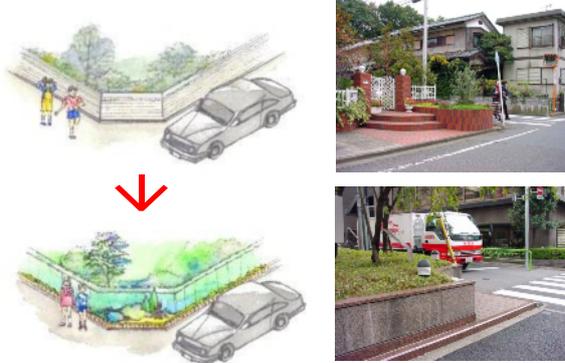
39

安全緑地

・NPO法人 日本公開庭園機構の提唱

- (1) ブロック塀を生け垣に変えよう。
- (2) 角地1m、道沿いの30cmを、高さ50cm以下の低い植え込みにして、見通しの良い安全な道をつくろう。
- (3) この空間は、とっさの時に身を寄せる“安全帯”にもなる。
- (4) 住民の思いやりで、安全でやさしい道をつくろう。

40



NPO法人 日本公開庭園機構

安全緑地の事例

41

(6) おわりに

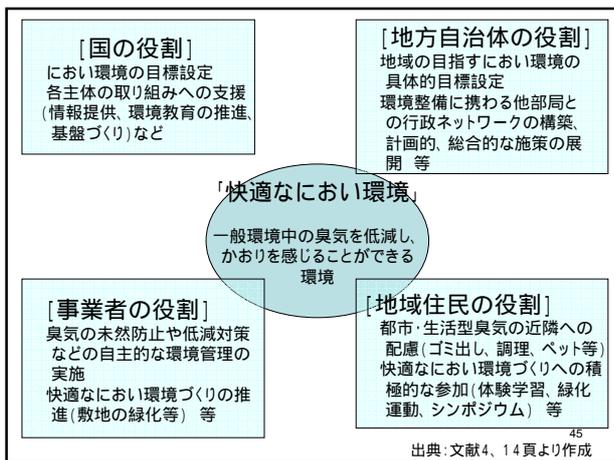
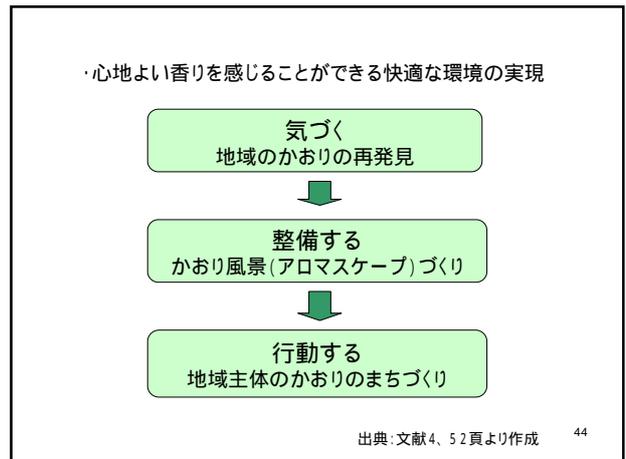
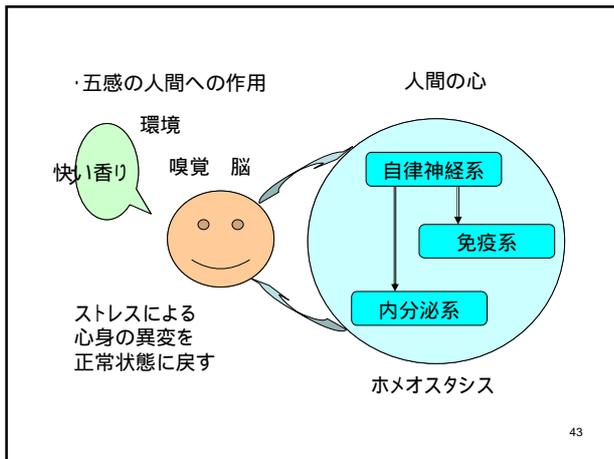
・居住の4要素(WHO)

安全性	安全・安心のまちづくり
健康性	典型7公害の軽減
利便性	日常生活の容易性
快適性	精神的なゆとり



QOL(生活の質)の向上

42



参考文献

1. 和泉 潤・宮田靖子(2009)、住宅地のおいに関する意識調査 - 日進市香久山4~5丁目を対象に、名古屋産業大学環境経営研究所第8号
2. エドワード・ホール(日高他訳)(2005)、かくれた次元、みすず書房
3. 岡田誠之(1995)、生活とおい、理工図書
4. 環境庁大気保全局大気生活環境室編著(2000)、快適なおい環境づくりに向けて、ぎょうせい
5. 佐藤智子(2006)、大坂のおいに関する研究、日本計画行政学会第29回全国大会報告要旨集、p.78
6. 住宅・都市整備公団中部支社(1998)、かおりを活用した街づくり・住まいづくり 街と住まいの環境としての「かおり」に関する研究報告書、住宅・都市整備公団
7. 鳥居鎮夫(1998)、香りの謎、フレグランスジャーナル社

46

全国における地域活性化政策について

内閣官房地域活性化統合事務局

首都圏地方連絡室長 参事官 青木 由行

司会

それでは足利工業大学と NPO 法人「VAN・NOOGA」の共催により「地域活性化システム論」が今年度から始まりました。今日はその第4回目ということで、内閣府の地域活性化統合事務局の青木参事官にご講演をいただくことになりました。それでは開会にあたり、中川先生から、一言ご挨拶をよろしく願いいたします。

中川会長

はい。皆さん、こんばんは。

一同

こんばんは。

中川会長

内閣府で企画された、この活性化に関する大学と民間の合同の講座は、新しい試みでございますけれども、これで4回目になりました。本日は、今、ご紹介ありましたように、そのおおもとである内閣府官房の地域活性化統合事務局から、青木参事官においでいただきました。われわれ地方でいろいろやっておりますけれども、今、中央でいろいろな動きがございますので、その新しい情報も含めて、いろいろお話を伺えるのではないかと期待しております。学生さんも来ておられますけれども、今、事業仕分けという言葉、聞いてますね。実は足利市でも、事業仕分けをやっているんですよ。最近、新聞にその結果が出てますけどね。そういうようなことで、国も地方も地元も、この財政難のなかで、いろいろ苦勞しておりますし、そのなかで、また、まちづくりをどうしようかっていうことが、非常に大きな課題です。そういうなかで地域の活性化、われわれの周りでは、足利の地の活性化をどうしたらいいかということ

考えるにあたって、全国のいろんな事例とか、国の今の考え方とか、そういうことをいろいろ勉強できると思いますので、ぜひ伺って、そのあと広く、いろいろ議論をしてみたいというふうにおっしゃっていますので、質疑応答も含めて。講義1時間、質疑30分。全体で1時間半というような目安で進めたいと思います。どうぞ、よろしく願いいたします。

司会

それじゃあ、よろしく願いいたします。

(拍手)

青木講師

はい。皆さん、こんばんは。

一同

こんばんは。

青木講師

内閣官房の地域活性化統合事務局からまいりました、青木でございます。私どもが提唱させていただいております、地域活性化システム論ということで。発想としましては、これから地域の振興を図っていく上で、今日の話のなかにも、少しその話題をお話しさせていただきたいと思ってるんですけど。地域の知の拠点っていうものが、やはり本当の意味での地域主権だとか、住民主権だとかっていうことを、支えるんじゃないだろうかという、そういう問題意識です。大学のほうも、たとえば国公立大学なども以前から比べますと、独法化してからというもの、非常に地域に向かっているいろんな関心を寄せたり、協力をしようという動きが出てきております。われわれも、大学のほうの経営の問題っていうものと、それから地域の

知の拠点としての役割。こういったものをにらみながら、ぜひ、大学が地域のネットワークの拠点になっていく。そんなことが地域の未来を切り開くんじゃないだろうか。こんな思いを持ちまして、このシステム論という講座を各大学のほうに、呼びかけをさせていただいてるということでもあります。私も何回かこういった格好で、出かけさせていただいたんですけども、今回非常に嬉しいのは、こういう NPO の方が日ごろ拠点としておられる、非常にアットホームな雰囲気の中なかで、お話しができるということ。先ほど、司会の先生のほうからお話がありましたけれども、私自身も、ぜひ今日は、実は当地にまいるのも初めてなものですから、どれほどかみ合った話ができるかっていうのは、ちょっと心もとないところもあるんですけども、逆にいろんなことを勉強させていただいたりってということも期待をしますので、よろしくお話ししたいと思います。それからあと、こういうお話をするとき、一応、紙を持ってきたんですけど、やはり私が話すことってというのは当然、私が経験してきたこととか、そういったバックグラウンドと、無縁ではないっていうふうに思いますので、少し自己紹介というわけではないんですけど、自分のやってきたことを、少しだけお話をさせていただきます。」

男性 B 「お座りください。」

青木氏 「そうですか。じゃあちょっと座って。そのほうがリラックスして話せますんで。生まれたのは、山口県の山口市というところ。昭和 37 年生まれです。それで育ったのは山口に、小学校の 3 年ぐらいまでいまして、そのあと京都、大阪、関西のほうで育ちました。それで高校を卒業して東京に出てきて、大学に進学して、そして昭和 61 年に、今は国土交通省という役所になってますけれども、昔で言うと、建設省という役所に入りました。それでいろんなことをやったんですが、比較的多いのは、都市計画とかまちづくりとかそういった関係と、それから道路関係の仕事が長かつ

たです。それからその間、地方に出向する機会にも比較的恵まれてまして、宮崎県、今、東国原さんががんばってますけど、残念ながら国原さんじゃないときの宮崎県だったんですけども。宮崎県に 4 年。それから、実は私が今のポストに、この統合事務局にまいりましたのは、今年の 7 月なんですけども、それまで 4 年 3 ヶ月ですね、鳥取県、鳥取県庁のほうに出てました。先ほどちょっと、始まる前にお話を少ししてたんですけども、最初は 2 年間は、片山善博さんという、今、慶應大学の教授をされてますよね。あの方 8 年、2 期、知事をされたんですけども。その方に 2 年間ほどお仕えをしました。それから残り 2 年 3 ヶ月は、今新しい、平井さんという方が知事をされておりますけれども、その方と一緒に仕事をさせていただきました。それでこの 7 月に、地域活性化統合事務局に来たと。だいたいこんなバックグラウンドであります。ですから、どちらかと言うと、東京でももちろん仕事もしてきたんですけども、特にまちづくりとか、地域づくりとかの関係で言いますと、特にやっぱり鳥取での経験ってというのは、非常に色濃いものですから、どうも私の話す話ってというのは、その辺がバックグラウンドになって、少しゆがんでるかもしれません。ちょっと首都圏なんかとは、感覚が違う話をしちゃうかもしれませんが、そこはそういうことでご理解ください。最初に、地域活性化統合事務局って言われても、たぶん、皆さんまったくご存じないと思います。それがいかんのだとこの間、大塚さんって今、副大臣が私のボスなんですけど。事実上のボスなんですけど。最近、モラトリアム法案ってというのが、新聞なんかで出てますよね。亀井さんがモラトリアム法案やるんだってとかって言って、実務的にそれを支えたのが大塚耕平さんって、愛知の参議院の国会議員なんですけども。その方が、実はこの統合事務局のご担当ということで、もっとこの事務局の知名度を広げないかんということ、ちょっとはっぱをかけられております。それで、わ

れわれの今のミッションというのは、民主党政権になって、地域主権ということが言われております。地域主権という言葉をよく使う場合に、1つは税源と財源と、それから権限ですね。これを地方に移しましょう。自民政権では、地方分権っていうことを、よく言っておりました。その地方分権、民主党的には地方分権っていうのは、非常に上から目線なので、地域主権という言葉を使っておられますけれども。権限と財源、税源を地方にどんどん移していくっていう柱が1つです。それからもう1つは、地域活性化っていう要素。つまり地域主権をしても、結局、現場の皆さんが元気に仕事をしたり、それから潤いのある生活をしたり、豊かな老後を送ったりっていうことができないことには、何のために地域主権って言うのかわかりませんので、その2本柱でもって、地域主権をやるっていうことになっております。それで、私どもの事務局というのは、この絵でちょっとご覧いただきますと、ここにいろんな各省庁があるわけですね。それで各省庁というのは、典型的には法律が一番わかりやすいんですけども、法律だったり、それからいろんな予算だったり、いわゆるシステムっていうものを持つて存在ということになります。私どもというのは、実は法律も持つてなくはないんですけども、個別の規制だとか、そういうことをやってる省庁ではなくて、むしろ現場でいろんな取り組み、挑戦をしてらっしゃる方が、本来だったら自分達でいろんなことを決めていけるはず。それが地域主権ということだと思っております。それが地域主権ということだと思っております。それはやはり、何て言うんでしょうか。特に戦後ですね、何もない制度が、何もないところから、追いつき追い越せっていうことで、いろんな制度を各省庁つくってきました。私がい建設省で言えば、道路をどんどん整備するために、高速道路に関する制度をつくったり。それから都市計画っていう制度をつくったり。そ

れから、住宅不足を解消するために、公営住宅っていう制度をつくったり。建築基準法をつくったり。そういうシステムづくりを、中央省庁が主導してやってきたってというのが、恐らくずっと戦後続いてきたと、私は思います。ところが高度成長期を経て、私の感覚だったらどうでしょうか、昭和50年代のころからでしょうか。公害問題辺りが、本当に最初の引き金だったってような気がするんですけども。やっぱり現場で、いろんな不具合が生じてきたような気がするんですね。それで問題の質も、私、建設省にいたから、何となく実感するんですけど、私が入ったのは、先ほど昭和61年っていうふうに申し上げましたけども、最初の、イメージとして5年間ぐらいは予算もどンドンどンドン増えるし、まだ増える時代でしたし。それから施策のねたっていうのも、だいたい業界団体っていうのがありまして、そういう方々から要望を聞くんですね。それを聞いて、だいたいよさそうなものをセレクトをして、それを制度官庁と呼ばれている、今で言うと財務省ですね。当時は大蔵省とか。そういったところにお話を持って行ったり、与党である自民党と議論をしたりとかっていうことで、だいたいうまくいった時代っていうのが、長く続いてたと思います。ある種、供給者サイドの問題が多かったというふうに、私は何となく感じてました。ところが環境問題とかっていうのが典型だと思いますけれども、世のなかの問題って、やっぱり消費者サイドの問題っていうのが最近増えてますよね。消費者サイドの問題っていうのは、非常にすくい取るのが難しく、各省庁もいまだにそこは現場に不具合な状態っていうのは、あちこちで抱えながら、悪戦苦闘してるってのが、私は正直なところだと思っております。それで、基本的には、私も中央省庁で働く人間なんですけども、地方で勤務をした経験なんかからしても、やっぱりシステムの不具合を正していくっていう局面では、やっぱり現場に近いところで、システムを変えていくってというのが、

一番手ごたえもあるような気がします。さっきちょっと始まる前に、たまたま雑談で出てきたんですけども、医師不足っていうのがありますね。あれも結局、厚生労働省さんとしても、別にあいつうことを起こそうと思ってやったわけではないんですね。当時、医療過誤の問題とかっていうのはいろいろあって、臨床システムっていうのを充実させなきゃいけないっていう、すごくいい話から始まったんです。いい話から始まったんですけども、結局それが医局制度というものを壊してしまって、昔だったら地方大学で臨床の経験を積んだ人が、絶対地域に残るっていう。閉鎖的と言ったらそれまでなんですけども、そういうシステムが機能してたのが、結局それが壊れてしまって、どんどん地方大学に入ったお医者さんっていうのが、都会の、都会のほうのいろいろな高度な医療の機器もありますし、いろんな経験も積めるっていうことで、どんどんそっちに行ってしまうと、地域の医療がやっぱり壊れかけてるっていうような。そんな不具合っていうのは、なかなかたぶん、予見できなかったと思うんですね。それを正していこうとすると、やっぱりかつての中央省庁の限られたテーブルの上で議論するだけでは、やっぱりうまくいかないっていうことに、だいたい皆、気づき始めてるっていうのが、今の状況じゃないかなって思います。ちょっと話が脱線しましたが。私どもが志向していることっていうのは、現場でいろいろなことを抱えてらっしゃる、苦労してらっしゃる方と、むしろ直接お話し合いをしながら、不具合のようなことを、各省と交渉したり、巻き込んだり。そういったことでボトルネックを解消していくような仕事っていうのが、基本的なミッションかなというふうに思って、仕事をしております。私ども事務局なんですけども、地域活性化統合本部っていうのがあります。これは内閣総理大臣が本部長で、全閣僚がメンバーということでなんですけども。そのもともとの由来は、実は都市再生特別措置法という、全国の、東京からそ

れから地方都市の中心市街地的なところまで、都市再生をやりましょうっていうようなこと。それから、これは今日のお話で出てきますけども、いわゆる特区と呼ばれてる制度。それから地域を再生するための、いろんな各省の補助制度をつなぎ合わせるような計画制度。それから中心市街地の活性化。こういった個別法に基づく業務に加えて、今は地方再生戦略という戦略を、閣議で決めてるんですけど、それに基づいて地域の元気再生事業という、これはのちほどちょっとご説明しますが、地方のいろんな個別の取り組みを支援する事業でありますとか、最近では環境関係のモデル都市とかっていうようなこともやってる組織です。ちょっとこれはもう細かいので、あとで見ただければと思いますけど。今、申し上げたような都市再生とか、特区とかっていうような仕事。それから、最近ですと地方連絡室っていうのを設定して、各、国の出先機関をまとめて、そこで総合窓口のようなことをつくって、いろんな相談に応じるっていうようなこともやらせていただいたり、有識者の方を各地域に派遣をさせていただいて、いろんな相談に乗ったりとかっていう、こんな業務も新しく始めております。それから左の一番下に、今日やらせていただいておりますけども、地域活性化システム論っていうのも、大学との連携っていうようなことでやらせていただいていることであります。それで地域活性化って非常に実は分野が広い概念なんで、問題意識なんて実は簡単に解けるはずもないわけなんでありますけれども。最近ちょっと議論してることっていうことを、紹介させていただこうと思ひまして、あえて思い切って書いてみたのが、このペーパーです。地域活性化のためには、地域自身による新たな挑戦が必要ということで、書きました。私も地方に出たとき、あるいは自分が山口で生まれ育ったときのこととかを思い返しますと、かつては右肩上がりのときは、やっぱり国全体が非常にまだ、国力が小さかった時代があって、太平洋ベルト地帯っていうの

が、私なんか小学校で習った世代なんですけれども、ある意味、傾斜して重点投資をする地域っていうのを決めてやってきたんですね。ですからそのエリアだけ、早めに高速道路をつくりました。それから新幹線も引きました。ということで、やってきました。象徴的なのは、田中角栄さんが、日本列島改造論ということで、その傾斜をしているところから、全国の均衡ある発展を図ろうじゃないかっていうことが、長く自民党の政策テーマとして、掲げられてきたわけですね。ですから、たとえば鳥取なんて、いまだに高速道路が通っておりません。県庁所在地ではたぶん、唯一だと思いますけれども。ようやく今度の3月に、高速道路が来るんですけれども。基本的には遅くなるかもしれないけれど、インフラはつくりますよ。順番を待ってれば、来ますよっていう戦略だったんですね。それで港湾とかの整備、空港とかの整備っていうのも、待っていれば太平洋よりは遅いけれども、いわゆる裏日本と呼ばれてる地域、それから山のなかの条件が恵まれない地域でも、きちんと生活ができるようにしますよっていうことでやってきました。それで一定の成果は、私はあったと思っています。たとえば、私の山口のイメージで、つい言っちゃうんですけれども、昔はやっぱり田舎などは下水道もありませんでした。ぽっとんトイレっていうのが、本当に当たり前の時代でしたし、モータリゼーションがよかったかどうかっていうのは、これはまた議論があるところかもしれないかもしれませんけども、やっぱり車が使えるようになって、道路がよくなったっていうことで、かなり田舎の方々でも、生活レベルが上がったっていうのは、これは率直に評価していいのかなっていうふうにも思います。ただ、一方でどうやって地域を経営していくかっていうことになっていきますと、インフラを整備してそれで工場を誘致していくっていうのが非常に基本的な戦略で、各自治体やったわけですね。港湾を整備したり、工業団地をつくったりっていうことなんですけれども。でも、

ご承知のとおり、製造業なんていうのも、どんどん今、海外に移転するような時代になってきました。そうすると、太平洋地域と同じようなことを待っているっていうわけでは、もういなくなっちゃったっていうのは、これは別に今に気付き始めたわけではなく、もうずっと、皆が気付き始めてる、気付いて各地域で、特に私の感覚だと、この5年から10年ぐらいの間でしょうか。別に小泉さんがですね、選択と集中っていうって、非常に地域間格差を広げたっていうような言われ方もしてますけれども。確かにそういう面があったのかもしれませんが。だけど、地域のほうもやっぱり、このままじゃいけないっていうことで、いろんな方が立ち上がり始めたんじゃないかなっていうふうに、私は思っています。それで、結局製造業だけに頼っているのは、なかなか地域経営ができないっていうことで、いろんな地域で、1次産業と2次産業と3次産業を組み合わせる、いろんな仕掛けをしてみようとか、それからたとえば、観光と物産を組み合わせようとかっていうようなトライアルが、たぶんこの5年10年で、ものすごくいろんなところで展開されるようになってるのは、やっぱり私は偶然とは思えないんですね。全国各地で、やっぱりその取り組みがなされてるっていうのは、やっぱり1つの大きい方向性に、皆が何か気付き始めてるんじゃないかなっていうふうに思っています。実際に、その挑戦自体の数っていうのも、私もさっき鳥取にいたっていうお話ししましたが、鳥取でもそんな話がずいぶんあって、鳥取っていうのは元気なところだと思って、今のところに来てみて、話をいろいろ聞いてみますと、別に鳥取だけが皆、がんばってたわけじゃなくて、全国各地でやっぱり持てる自分達の地域資源だったり、人的資源だったり、ネットワークを何とか使って、何とかやろうっていう取り組みが、非常にあちこちあるっていうことであります。なかには、のちほどちょっと、今日、用意しましたけれども、若干、伝説化してるような成功事例なんかも出て

来てますね。上勝村っていうのが、非常に有名なんですけど、徳島の。あとでちょっと出てきますけども。いくつか先行事例で、すばらしいのも出てきてるっていうふうに思います。ただ、実はそういう成功の陰で私達の認識っていうのは、この2番目の箱でちょっと書いてるんですけど。さっき言いました、国のシステムとかはやっぱり従来の、昔のシステムをうまくリニューアルできてないケースってやっぱり多くて、たとえば、これもあとでちょっと紙でまとめましたけど、たとえば衛生条件が非常に悪かった時代っていうのが、やっぱりわが国にはあって、食中毒がしょっちゅう起きてた時代っていうのが、やっぱりあります。今でもときどき、もちろん起きてますけど。そのころつくった衛生の基準とかっていうのが、基本的にはそのまま保たれてるんですね。いくつか改正、無論、されてますけれど。たとえばそういったことを前提にして、食品衛生、店舗の規制とかっていうのがされてるんで、たとえば、ここも空き店舗を使っただけっていうお話がありましたけれども、空き店舗を使って野菜を売ることってのは、比較的簡単なんです。ところが魚介類を、特にちょっとでも加工しようとするなら、これはものすごい規制がかかるんですよ。たとえば、これは県とかに下りてるんですけど、ただ、県の条例とかでもだいたい一緒です。排水施設をしっかりとつくりなさい。それから上の壁、それから下の床が、基本的に隙間がなくて、要は水をだあととかけて洗える構造じゃなきゃいかんってあるわけですよ。泣く泣くそれで、おじいちゃんおばあちゃんが、流通に乗らないような、ふぞろいな魚とか捨ててるわけですよ。私、ここに来てびっくりするぐらい魚が捨てられてるのも、本当驚いたんですけどね。流通市場に乗らない魚って、捨てられるんですよ、びっくりするぐらい。それを生かして中心市街地に持って来て売ろうと思っても、これがものすごい厨房をつくらないとできないって、そんなお金かけれるような余力って、めったありませ

るので断念してたりとか。それからあとね、面白い、面白いって言っちゃいけませんね。町家ってありますよね。京都だけが町家じゃありませんよね。町家づくり。これで、特に外人なんかで人気なんですけども、そこに泊まりたいってニーズがある。ところが、これが面白いもんで、宿屋にしたとたん、いろんな規制がかかってくるんです。われわれ傑作、傑作って言ったら、厚労省の人にばれたら怒られますけどね。5室以上なきゃだめとかあるんですよ。町家で5室以上って、なかなかないですからね。下側って、だいたい泊まる空間じゃないので。泣く泣くですね、裏技っていうのは、やっぱり知恵のある人っていうのはいましてね、短期賃貸借って、そんな言葉ありませんよ。だけど勝手につくって、1日その町家を住居として民間賃貸をしたっていうことで、やってるビジネスっていうのがあるんですよ。そんなことやってたら、やっぱり広がらないと思うんですよ。結局、あまり私も厚労省にいたわけじゃないので、言っちゃいけないんですけど、昔ながらの旅館とか、高度成長期の制度が、やっぱり少しずつ手直してはしてるんだけど、現場に合っていない事例っていうのが、思ったよりも多いっていうことに、最近実は注目をしています。それでわれわれ、特区っていう制度も、のちほどちょっとご紹介したいんですけど、持っているんですけど、実はなかなか壁が厚くて、国に言ってもこれは変わらんわっていう、諦め感みたいなものっていうのを、よく聞いてはいるんです。それで結局、国のやることっていうのは、ややもすると社会問題化したりすると、制度を変えようとかになるんですね。あと、よくないのは、たとえば最近ニュースで、新宿で火災が起きたりしたことありましたよね。それからこの間は、杉並区の居酒屋で火災が起きたりする。そういうのは非常に痛ましいことで、規制をそのときに、しっかり強化するっていうのはいいことなんです。いいことなんですけど、ややもすると、現場からすると、こんなところまで及

ぼすような規制、やらなくてもいいのについていうことも、やっぱりなかにはあるんですね。安全っていうのは、ものすごく大事なだけに、この辺がものすごく現場の方々が、苦慮されるっていうところなんです。それでわれわれが今、考えてることっていうのは、こういったボトルネックっていうのを、もうちょっと取り去るシステムっていうのをつくってやれば、地域発のささやかな挑戦が、大きい市場を持つんじゃないか。決して工場誘致をするように、大量の雇用を生み出したりするっていうことは、できないかもしれません。けども、その地域のなかで、少なくとも雇用が生まれたり、小さいながらもお金が回ったりっていうことにすることっていうのは、やっぱり意味があるんじゃないだろうかっていうふうに、思ってるんですね。それで一番下に書いてますけど、本質的にはやっぱり、さっき言いましたけど、現場に近いところでシステムが動いてくっていくのが、私も理想だと思ってます。けど、残念ながら、まだそれは道半ばです。それはある意味、私どものような立場の人間が大政奉還をして、ちょんまげを切るっていう世界には、やっぱり少し時間がかかると思っています。われわれは、その過渡期。何年かかるかわかりません。2年ぐらいで、ひょっとしたらそれが荒療治で完了するかもしれませんし、もう少し時間がかかるかもしれませんが、そこを何とかしようじゃないかっていうことを、今、議論をしているところです。それで私どもが、実は今の組織が発足したのは、平成19年なんですけど、その前身のときに、地域活性化の支援制度として、この一番上に書いてある、全国都市再生モデル調査というのをやってました。これはどちらかと言うと都市部ですね。市街地のなかでいろんなまちづくりの取り組みとかを、ソフト事業を中心にあまり分野を限定せずに、当時としては画期的だったんですけども、支援をするということをやっておりました。だいたい概ね、1個あたりそうですね、300万とかそれぐらいのオーダーの支援だ

ったというふうに記憶してますけれど。それで、かなりまちづくりとかで軌道に乗ったものっていうのもあったもんですから、平成19年に今の統合事務局になって、都市部以外にもっていうことで、農山漁村、中山間地にも対象を広げて、地方の元気再生事業っていうのを始めました。これは若干、自民党が地方に冷たかったんじゃないかっていう反省もあって、かなり力を入れてこの施策をつくったものですから、当時、今でも本当面期的だと思うんですけど、上限はなしでソフト経費を中心に、立ち上がりの支援をしましょうというところで。平均すると1個当たり2,000万ぐらいの支援をするということで。ちょっとこの手の制度にしては、かなり破格な支援をしました。それでだいたい300箇所ぐらいの支援をしたんですけども、私が見てる限りでは、それで新しい展開に行けたりとかしたところっていうのも、多かったと思いますし、一定の効果はあったのかなというふうに思っています。ただ、そのなかでやっぱりさっき言ったボトルネックが、実は見えないんですよ。さっき言いましたように、町家の話とかでも、そのことをやってる人が、実は断念したっていうのがなかなか見えないんですね。それとか、野菜の直売所やってる方が、実は水産加工もやりたかったって、なかなか表に出ないんですね。表に出ないで、本来やりたかったレベルより下のレベルで我慢されてるとか。あるいは裏技を使ったりとかっていうケースが、予想以上に多くなっていうのが、非常に驚いたことでした。それで、これを今後どうしていくかっていうのが、1つの私ども、今、国の組織として仕事をしてますので、1つの課題かなというふうに思っているところです。これはこういうのが、全国に広がればいいなっていう事例で、ちょっと持ってきました。葉っぱビジネス。これは結構有名で、皆さんもご存じの方多いと思います。この上勝っていうところは、人口が2,000人ぐらいのところですけども、そこで年間販売額は2億6,000万っていうことは、こ

これはもう本当に驚異的なことだと思いますし、生産者の方が約200名で。何よりもこういった方々、年金受給者の方も多いんですね。ですから、それほど高額なものではないんですけども。やっぱり自分がやったことが、市場から評価をされる。そして成功と失敗っていうのが、やっぱりちゃんと返ってくるっていうことっていうのは、非常に地域にとって金銭以上に、やっぱり価値は大きくなっていうふうに思っています。それからもう1つは千葉の、合併して今は、南房総っていう市になりましたけれど、昔の富浦ですね。ここも人口は非常に、数千人だと思いますけれど、それぐらいのちっちゃいところなんですけれど。道の駅で、この駅長さんっていうのが、もう伝説の駅長さんなんですけど、びわを中心にした地域活性化を、観光と組み合わせでやったっていうことで。これも年間売り上げが6億っていうことなんで、これはやっぱりすごいことだと思います。もちろんさっき言いましたように、でかい工場を呼んでくるようなわけにはいきませんが、波及効果とか、そういったことも考えると、こういうのが全国であちこち広がってくると、これは私は無視できないんじゃないかなっていうふうに思っています。これはさっき言った、全国都市再生のモデル調査で、ここはちょっとばつと飛ばして行きます。たとえばここに書いてある、次のところを見ましようか。川越の蔵の町っていうのは有名ですけども、このモデル調査でNPOなんかと一緒にあって、いろんなアイデアをまとめられて。それでまちづくり交付金っていう制度がありますけれども、この制度を使いながら、観光とまちづくりを合わせたようなことをやって、今のところは、観光客をご覧いただいても、今どき中心市街地で、なかなか来客数って増えないんですけど、非常にいい結果を出しておられて、今も元気な中心市街地、地方のまちっていうことで、がんばっておられるということですね。それからこれは高齢者の、最近をよく見られるようになりまして

ど、当時は複合施設って、まだあまり見られない時代でした。高齢者向けのマンションと、高齢者向けの医療ゾーンとかっていうものを組み合わせでやる。こういったものが、かなり先駆的な存在だったんですけども、軌道に乗ったケースです。最近マンションなんかも売り出すときに、医療モールなんかをセットにするとか、それから最近では病院をセットにして、昔は病院って救急車がピーポーピーポーいうんで、嫌がられた時代もあるんですけど。最近マンションを売る上でも、医療と複合させたほうがいいって、そんな話が出るようになった。ちょっと先駆けのようなケースがあります。それからこれは松山ですけども、これは景観関係で、比較的先進的な取り組みをされたということで、景観計画なんかもつくられて、それでビルの改修なんかも進められたという、こんな事例であります。それからこれが、今も実施中なんですけれども、地方の元気再生事業ということで。ここで書いてますようにテーマ限定もなく、企画競争はするんです。実は競争率10倍ぐらいで、落ちた方には大変申し訳なかったんですけども。これ実は、ちょっと議論があるところなんですけど、国費100パーセント出しますというのが、1つの売りです。というのが、今、多くの市町村が財政難です。ですから裏負担が必要な制度っていうのは、なかなか動きません。比較的大都市のようなところは動くんですけど、本当にお金に困ってる、こういう国の支援が必要のところほど、裏負担がなくて国の支援が受けられないっていう。非常にちょっと、われわれから見ると不条理なことになってたんで、国費100パーセントっていうのは、ちょっと行政の世界では異例なことではあるんですけど、思い切ってそういうことをやったということでもあります。応募状況なんかもちょっと書かせていただけてますけども、やっぱり厳しい農山村とかの、財政状況が厳しいようなところからが多いです。それからNPO、官民連携協議会っていうパターンも非常に多かつ

たということです。それから分野で言うとやっぱり物産系、それからあと観光系の話というのが非常に多かったということです。それで若干レビューとして、いくつか事例を持ってまいりました。1つはこれは非常に面白いんですけど、メインは東京の三宅島です。火山が噴火して、被害を受けたところですけども。そこが笠岡という岡山の島です。それから山形の、これは酒田にある飛島という島です。それでさっき言いましたけど、まず発想は流通に乗らない魚を、そこでがぼがぼ捨ててたんですね。これをちょっともったいないから何とかしようじゃないかっていう人がいた。それからあと、伝統的な灰干しっていう作り方があるんだそうです。私もここに来て知ったんですけど。これはお魚を特殊な、特殊ではないんですけど、浸透膜みたいなもので覆って、その上下に灰を置いて、それでしばらく置いとくと、天日干ししたのと同じぐらいの味が出て、おいしくなるんだそうです。そういう伝統的なものを少し分析をして、それで三宅島の火山灰。灰って言うても、灰って言うよりも、ちっちゃい石ですね。ちっちゃい石をですね、これを岡山の笠岡っていうところはもともと石の産地で、この石を加工する技術があるので、そこと組み合わせると、この灰干しっていう商品をつくらうっていうプロジェクトを、立ち上がり支援をさせていただいたっていうことで。今が2年目なんですけど、この間、聞くともう商品化されて通信販売も決まったということで、かなり引き合いも来てるということで、これは漁師さんにしてみると、もともと捨てとったやつですから、原価は事実上ただみたいなもんなんですね。それで、付加価値の付いた商品っていうのができるということで。この間、聞いたらすね、焼くプレートも何かこの火山の石か何かで作るっていうことで、さらに商売を広げるということで、非常にうまくいってるということであります。それからもう1つは、これは横浜の黄金町というところ、行かれたことある方おられますかね。年配

の方は行かれたっていうと、ちょっと危ないところなんですけどね。これはもともとは、ちょっとこれわかりにくいな。たとえばこんな店舗になってますけど、昔の、この1階が飲み屋で、2階でいわゆる売春をやるという、そういうビジネススタイルのところっていうのが、売春防止法ができて以降も、事実上残っていたんです。昔の赤線とって言われた世界なんですね。それで、実はこういったところっていうのは、ほかにもあるんですけれど、警察とも協力をして、このまちをきれいにしようっていうことで、一所懸命取り組みを、地域の方でされたんですね。それで警察も入って、そういう違法な行為を撲滅するってところまでは行ったんですけど、結局、何が起こったかって言うと、人が寄り付かないまちになっちゃったんですね。それでここに、いろんなクリエイターの方、アーティストの方っていうのが入ってきて、昔のそういう飲み屋街だったところを、コンバージョン、リニューアルをして、こんなふうにきれいにされて、ちょっと面白い店舗をつくったり、ギャラリーつくったりっていうなことをされて、それで私どもの支援でバザールのようなことをやって、10万人以上来訪したっていう、なかなかすごいと思いますけど。これは完全に今、軌道に乗ってきたということで。何かサイダーも売り出されたというふうに、この間、聞きました。ということで、アートとまちづくりっていうのを組み合わせたっていうので、非常に面白いところがあるわけです。それからこれは三好という徳島県の中山間地の事例です。ちょっと時間があれなんで、ざっと行きますけれど。これも観光と古民家を使ったりする、組み合わせたりするっていうようなことを、やって来られたということでありまして。それで、あとやっぱりネックの問題、ボトルネックの話ってさっきしましたけど、この事例を少しちょっとご紹介したいと思います。これは山形の鶴岡市というところなんですけど、ちょっと見えづらいですが、赤い線が入ってます。これが、だいたい山のなか

なんですけど。こういう車が、こういうところのおばあちゃんが山奥で作ってるつけものとか、野菜とかって産直カーで集めて、それを中心市街地のほうに持って行って、異動販売しようっていう、そういう取り組みです。っていうのがですね、中心市街地のほうも、今、店舗がどんどんなくなって、八百屋とか魚屋とかって、どんどんなくなってるんですね。それでほとんどの人は、郊外にあるところに、車で買い物に行けるんですけど、実はお年寄りの方っていうのは、車が運転できなかったりして、中心市街地に昔から住んでる人っていうのは、買い物、非常に不便っていうこともあって。非常に産直カーっていうのが好評なんです。で、さっきの話になるんですけど、ところがこういうことでやってたんですが、右上に書いてあります、魚介類を売ろうとすると、厨房洗い場が必要だっていうことで、結局、今は野菜を中心とした販売に限定されてるとか。それから移動販売車も、本当はそんなに交通量多くないそうなんですけども、路上に置いて売りたいんだけど、やっぱり警察さんの許可が下りなくて、泣く泣く駐車場をお借りして、あんまり場所がちょっとよくないんで、ちょっとつらいんだんですけど、そういうことをやっておられるというような実態があるそうです。これはちょっと僕、行ってませんので、聞いた話なんですけれども。でも何とかしたい、何とかトライしたいっていうことを、今、一所懸命考えておられるという事例です。それからこれは、これは私も行ったことがあるんでイメージわくんですけど、宮崎県に綾町というところがあるの、ご存じでしょうかね。宮崎市から車で30分ぐらいのところでしょうかね。広葉樹林が広がってる、非常にいいところで。工芸とかのやっておられる方が、定住してらっしゃって、非常に体験メニューなんかも人気があったりとか。それから地産地消で有機のものだけのレストランなんかもあって、非常に、最近非常に有名になってきたところなんですけれども。そこで元気再生

事業っていう、先ほどご紹介した事業を使って、ここに書いてあるような体験とか、トレッキングとか民泊とかっていうようなことを、やってきたというのがあったんですけども。実はここには、宿があんまりないんです。それで今どきリスクを冒して、新しく旅館をつくらうなんていうのは、めったないんですね。それで山奥の、山奥って、大した山奥じゃないんですよ。だけど、中心からはちょっと車で入ったところに、集落の集会所っていうのがあるんですね。公民館みたいなものが。それでそれを民泊にしようと思ったら、これが非常に面白い、面白って面白がっちゃいけないんですけど、浴室がいるって言うんですね、浴室が。なぜかシャワーはだめということになって。それでその例外は、近くに銭湯があればよろしいっていうことになってるんですけど。山のなかですから、銭湯なんかありやせんのですよ。今、彼らが模索してるのは、周辺に人が住んでますから、そこにこの期間だけ、お風呂を貸してもらってというシステムをつくれなかっていう。こんなトライをされてるんですけど。窓口に相談すると、お風呂がないから旅館はだめよ。無料で泊めるといいんです。旅館じゃないので。という非常に何か、不思議なことになってるということ。それからあと、消防署で避難灯を付けなさいっていうのは、やっぱり出て来るんですね。スプリンクラーまではいらないみたいなんですけど。緑色のサインって、皆さんわかりますよね。ああいうのを、やっぱり大した金額じゃないんですけど、こういう取り組みをされてる方にとっては、何十万っていうのは、やっぱり非常に厳しいんですね、というような事例であります。それからこれは指宿という、鹿児島でやってる例なんですけど、ここは結構、取り組みの歴史は長くて、低カロリー食の開発っていうのを、市を中心にずうっとやっておられて、温泉で健康を売りにするっていうのは、結構この2、3年、あちこちでなされて来てます。その方といろいろ意見交換をしていって、ようや

くわかったことなんですけれど、ここにちょっと、若干ここ大げさに書いてます。ここまで、まだボトルネックっていうんじゃないですけど、近くボトルネックにぶち当たるっていうことを、ここをやってる人って、もう確信してるんですけど。1つは、ここ書いてあるかな、書いてありますね。どんどんメニューを進化させていくと、今はお医者さんにボランティアみたいな形で入ってもらってるんですけど、医療行為に限りなく近くなって来るんですよ。専門的などところに入って行けば行くほど。そうすると医療行為っていうことで真正面からやると、ものすごく高い料金を取らなきゃいけない。そしてそれが、いわゆる健康保険で補填されるかどうかっていうところが、まったく整理がされていないっていうような問題が出て来ている。これをどっかで整理しないと、本格的な取り組みっていうようなところに、なっていないだろうと。彼らの夢は非常に大きくて、海外から日本の医療レベルが高いっていうのは、非常に知れ渡ってるんですね、アジアのお客さんに。そういう方も、入ってもらってということからすると、本格的な医療までやってみたいっていう気持ちがあるんだけど、どうもやっぱり今の、いわゆる医療行為っていうのは、こんなの想定してないんですね。だからこれはもう典型的な制度の、すき間なんだろうと思います。規制の問題っていうよりも、制度のすき間なんだろうなと思います。ちょっとこういうまとめてみましたけど、上から空き店舗を使う。それから町家、公民館を旅館に使う。それから、3つ目はこれも何て言うんですかね、NPOの方がバイオ燃料を作ろうとして、とするとこれがやっぱり廃棄物っていうことになるんだそうです。そうすると、廃棄物の処理施設の基準って、これはやっぱり素人では、なかなかできるような世界ではないんだそうです。この辺も何とかなんないのかなということ。それからその下は障害者の授産施設で、リサイクルの作業っていうのを、非常にていねいにやる作業につい

ては、障害者の方は向いてるっていうところがあるので、非常にいい授産施設としてやっていて、それでただ、お申し出があった旅館の古いテレビとかを、分解するっていう仕事をやろうと思うと、これが産業廃棄物になる。産業廃棄物ってことになると、これは猛烈にいろんな規制がかかってくるんで、結局、今は家庭のはできるけど、産業系はできないっていうことで、このお宿の方のご協力については、お断りせざるを得ないっていうような話があるとか。それからあと、コミュニティバスをやるときに1回1回、料金を実験のとき変えるとその都度認可がいるという規制があるとか。それからその下が、最近NPOの方で、障害者の方を旅行ができるようになっていう取り組みをやってらっしゃる、神戸の方からお伺いした話です。それでたとえば今、介護保険っていうのがありますよね。介護認定受けてらっしゃる方が、旅行に出るっていうことを、今の介護制度っていうのは想定してないんですよ。結局、ケアマネージャーさんが、ケアプランっていうのをつくるときに、受給できる施設っていうのが決まって来るんだそうですけれど、遠いところまで旅行をして、それでそこで介護のサービスを受けても、介護保険が使えないっていうのが、まだ顕在化してませんが、恐らくこれから要介護の人っていうのが増えていく。そのなかには、本当に自宅以外出れないっていう人ばかりじゃないですよ。恐らく、車いすとかであったとしても、旅行をしたいって方おられるはず。今はどういうことになってるかって言うと、介護の専門家っていうのを付けずに、ボランティアの方が支えたり、それからちょっと恐ろしい話ですけども、旅館とかでほとんど素人の方が、お風呂に入るのを手伝ったりとかしてるんだけど、事故が起こったらどうしようっていうんで、旅館の方は冷や冷やしながらかやっておられる。本当だったら、こういう介護保険とかを使って、しっかりした資格の人を使うか、もしくはまったく新しい資格制度をつくって、旅館

の仲居さんとかでも、行ってその資格を付けてとかっていう制度があればなっていう話を、この間、実は神戸の方からおかがいして、これも制度のすき間だなっていうふうに思っています。それで、それを突破する制度として、1つは私どもも持っている、特区制度というのがあります。聞かれたことがあるかもしれませんが、これは非常にオープンな制度でして、個人の方から、NPOの方はもちろん市町村の方、何か規制がちょっと、これ何とかありませんかねっていうのが出てきたときに、申請をしていただいて、それでわれわれが仲立ちに入って、関係省庁に送って、それで対応するっていうことで。意外に思われるかもしれませんが、結構、100を越える、多くの規制が突破をされているっていうのはあります。わりと有名なのが、学校を保育所とかに転用する補助金の規制を緩めるっていうのが、結構有名になりました。それからあと、どぶろく特区っていうのも結構、有名になりました。酒税法の関係で、なかなかどぶろくをつくれないうのを、特区を使ってやるとか。この辺が若干、新聞なんかにも出たかなと思ってますけど。そのほかにも、ここにいくつか表を書いていますんで、ちょっと説明しだすと時間がなくなるんで、紙をちょっとあとで見ていただいて。校舎の自己所有っていうのをしない小学校っていうのは、これはちょっと話題になりました。いわゆる何て言うんですかね、土地は民間のものなんだけど、そこに小学校を建てるとかっていう。これちょっと笑い話を言いますと、この特区を確か使って建てた小学校っていうのがあって、それが古い小学校だったんですね。それで今は、私学が結局やってるんですけど。それで耐震の助成を受けようと思ったら、国の某官庁が契約でもって土地と建物を借りてるような不安定なところには、助成ができないとかって言って、ちょっと大げんかをした経験が、私あって、最終的には折れてくれたのかどうか、ちょっと確認しないで転勤しちゃったんですけど。やっぱりどこにでも、そういう

システムの不具合っていうのは、眠ってるなというふうに思った次第であります。特区自体は、NPOの方には若干、敷居が高いのかもしれませんが。市町村の方、都道府県の方っていうのは、非常に多いです。それから最近実は、民間企業が増えてます。民間企業の法務担当の方とかが、一所懸命勉強されて、特区にトライをされるっていうケースが、最近増えてます。ただ私の若干、個人的な経験からすると、さっき申し上げたような、地域のコミュニティビジネスとかにトライされてる方っていうのは、お金も人もありません。ですから、なかなか特区の提案をまとめるっていうようなことも、なかなかしんどいっていう話を、よく聞いております。それでもう1つ、若干の成功事例としてご紹介します。これはちょっと題名がなくて、申し訳ありません。農家民泊って聞かれたことあるでしょうか。農家を使って、一番有名なのは飯田市ですね。南信州観光公社が、全国の修学旅行を集めて農家民泊をさせて、っていう取り組みをされてるのが、結構有名なんですけど。それを全国に広げるために、これは小泉さんのときですかね。かなり政治主導で、骨太方針のなかで閣議決定をして、それで右にあるようなプロジェクトチームっていうのを、政治家を並べてつくって、猛烈に圧力をかけて、それでさっきちょっと悪口言いましたけど、旅館業法とか、消防とかの特区も結構実現をして、それからよくこういうのは分権の時代と言いつつ、公共団体がネックになってるケースっていうのも、実はあります。こういうのが実は、始末に負えませんで、特区で出しますとその関係省庁は、私ども権限はもう都道府県市町村に下ろしておりますと。ですからいくらでも、地域の創意工夫でできるって回答が来るんです。ところが現場の人が、たとえば都道府県なり市町村の窓口に行きますと、国の指導があっでできませんとかって言われて、もう、どじょうを捕まえるみたいな感じで、うまくいかないっていうケースもあって。そこはもうびしっとこのと

きは、国のほうからやれるんだっていうことを、技術的助言という名を借りながらなんですけども、規制緩和を事実上やったり。それから右のほうで、いろんな支援制度をセットするっていう、政策群っていうのをセットしたっていうことがあって。これを境に、かなり農家民泊の取り組みっていうのが全国的に広がりました。私のいた鳥取県でも、遅ればせながらっていうんで、一所懸命取り組みを始めたっていう記憶があります。それでこんなふうに、新聞に載ったりとかしたりして、ちょっとした観光市場が生まれたっていうのは、事実だと思います。結構、修学旅行なんかでもかつては京都、奈良とか、ディズニーランドっていうのが、定番だったんですけど、最近こういう農家民泊ものっていうのが増えてきたっていう意味では、かなり市場にインパクトを与えたケースかなっていうふうに思っています。私の問題意識としては、これはこれですごくよかったことだと思うんですが、これが量産されるかどうかっていうことだと思うんですね。これが、ちょっと経緯まで私知りませんけれども、農家民泊をぜひ、やるべきだということを、かなり強く言われた政治家の方がおられたそうであります。その方が、かなり汗をかかれて走り回って、こういう仕組みをつくるっていうことにされたというふうに聞いてます。それはそれで、僕、すごいことだと思うんですけど、ただやっぱりそれが、非常に特殊なケースとして出てくるっていうことで、本当にいいんだろうか。地域が自分の力で、自分の持つてる地域資源で、自分が持つてる人材力で、こういうことをやっていこうっていうときに、壁に当たったときに、何か自分達の力で、システムのほうを変えるような力っていうのをつくりたいなと。というそんな問題意識を私は持っているんです。それで実は、さっき事業仕分けの話が少し出ましたが、来年度に向けて、さっきの地方の元気再生事業という、平均2,000万ぐらい立ち上がり支援をやるっていう制度を持っていました。これは実は事業仕分け

っていうのは、今、新聞で報ぜられてる事業仕分け以前に、民主党が野党時代に事業仕分けというのがありまして、それで少しモデル的な選定をされたんですけども。そのなかに、さっきの元気再生事業っていうのが題材にありました。そのときの結論っていうのが、どういうことだったかと言いますと、そういう立ち上がり支援というのは、これは国がやるべき仕事ではないのではないかと。地域の取り組み団体が自助努力でやる、もしくは各地方公共団体がやるべきではないかっていう話が1つです。それからもう1つは、2年間という支援期間なんです。元気再生は。結局、金の切れ目が縁の切れ目で、かえってお金をあげて2年間やらせてしまって、そのあと持続しなくなる恐れがあるのではないかと。大きく言うと、この2つの理由で廃止すべきだという結論が出されました。それでわれわれとしても、なかなかつらかったんですけども、当初は3年間のプログラムでやろうっていうことだったんですけど、そういう国のやるべき仕事っていうのを、もう少し整理すべきではないかっていう問題提起を受けて、それはわれわれの責任で受け入れました。それで、先ほど言いましたボトルネックを、地域のほうから提案をする仕組みっていうのを、実は新しく来年度に向けて、提案をしてみたんです。イメージとしては、NPOとかで、さっき言ったようないろんな課題を抱えてらっしゃる方々に、国のほうから、これは100パーセント自己負担なしでお金を差上げますので、地域の大学なり、シンクタンクなりと連携をして、この規制に代わる新しいシステムを提案してください。そのときに必要なシミュレーションとか、それから実証実験とかをするお金っていうのは、国のほうで時限的に、2年間ですけれども持ちますので、そういう提案をする運動っていうのを起こしませんかっていう提案をしてみたんですが、ちょっと残念ながら、そこまでのお金をかけてまで、そういう提案システムをつくる必要はないのではないのかという結論が、事

業仕分けのほうで出されました。われわれの説明が充分意を尽くせなかったのかなという反省はいろいろあるんですけども、結論としてはそういうことになったんですけど。ただ、その席上でも、今日申し上げたような、ボトルネックを除去するってことは非常に大事なことから、それはお金をかけないでしっかりやんなさいっていうふうに言われたんで、今日もこういうお話をさせていただいてるということでもあります。それでちょっと今日、残された時間で皆さんと議論してみたいなと思って、最後のページでこういうのを少し書いてみたんですけど。立ち上がり支援っていうものが必要なかどうかっていうところ。これは、われわれは本当に迷ってるところです。特に国がやるっていうのが、本当にいいのかどうか。さっきも言いましたが、10分の1ぐらいの競争率なんです。そういうところをモデル的にやるっていう意味が、本当にあるのかなっていうのは、われわれも迷いながらやっておりました。それから、あとお金を出すっていうことが、やっぱりありがたいがられるのは事実なんですけれど、ほかにもいろんなやり方があるのかなっていう。これは、私どもの率直な議論としてやってるところです。たとえば人材を派遣するっていうのも、立ち上がり支援として有効っていうこともあるのかも。それからあと元気再生事業で、2,000万オーダーのお金をもらえる方からお伺いした話なんです。これは非常に思い上がった言い方と、誤解されたら困るんですけど、非常にとんがった取り組みをされてる方っていうのは、地域において浮き上がった存在になってらっしゃる方もおられます。ここには、おられるかどうかわかりませんが。それで、必ずしも市町村の方々と良好な関係でなかったり、あるいは既存のいろんな経済団体ありますよね。そういったなかでも、必ずしも理解が得られてないケースっていうのもあって。それでそういう方々が、国って言っても第三者の学者の方々も、入ってもらった上で認定させていただくんですけども、

そうしたことで自分達の取り組みが、一転、認知をされる効果っていうのも、非常にあるんですよっていうことをも言われました。何かこの話をすると、非常に何かね国が認定すると、何か葵の御紋みたいなみたくて、何かちょっと誤解されそうなんですけど。ただ現場ではやっぱりそういう声があったっていうのも、事実でした。それから、やっぱり三位一体改革と市町村合併で、やっぱり押しなべて、特に地方の市町村というのは財政と、それから無視できないのは人ですね。職員数が減ってるっていうのが、非常につらいなっていうのが率直なところ。ですから地方公共団体に、すべて立ち上がり支援ができるかっていうと、恐らく私、鳥取県の勤務の経験からみても、ちょっと難しいなっていうのが、正直なところでした。だって給与カットしながら仕事してるなかで、立ち上がり支援の経費を出すっていうのは、やっぱり役場の現実としては、なかなか難しいだろうなっていうのは、正直思いました。それから2番目が人材力です。これはちょっとある人の受け売りなんですけども、風の人と土の人っていうことを、最近ちょっと言われたものですから。風土記っていう言葉は、そういうふうな言葉で使われるそうでありまして。土の人っていうのは、その地元はずっといて、そこでいろんな取り組みをされてる人のことを指すんだそうです。それから風の人というのは、いろんなところを渡り歩いて、それでそういうお話を聞きながら、その話を、そのほかの地域の土の人に伝える、風土記っていうのは、もともとそういう意味なんだそうですね。その両方の人が出て、はじめて地域づくりっていうのが、うまくいくっていうようなことを、ちょっとある人からの受け売りですけども聞きました。それで、最近ちょっと感じますのは、その中間の人っていうのがいるんじゃないかなって気持ちが出ております。中間支援機能って、ちょっと硬い名前でも、取りあえずこんな用語はないかもしれませんが。たとえば商品開発とかでやると

きに、マーケティングとかっていうのは、やっぱり生産者の方っていうのは、やっぱり不得手なことが多いです。市場との対話っていうのが苦手。それからもう1つ、NPOでよくあるのは、このやってらっしゃるNPOの方々に失礼なことを申し上げるつもりはないんですけど。事務機能が非常に苦しいNPOっていうのは、私が経験したなかでは、大変多かったです。ボランティアなことをやることについては、ちっとも苦にならないんだけど、お金の管理とか、それから人を組織して割り付けをしたりするっていうのが、非常に大変ということを知りました。こういう支援機能っていうのも、いるなっていうことであります。それから3番目が、先ほど言いました、システムを現場から変えるにはっていうところなんです。それでやっぱり、システムを現場に近いところに移すっていうのが、まずは大切だと思うんですけど、それに加えて現場からの提案力っていうのを、どうしたら付けれるだろうか。市町村もあるんですけど、やっぱりまちまちだと思うんですね。役場の方の、職員のそういうことにさける能力、マンパワーっていうのも。そのとき私はやっぱり、冒頭にも申しあげましたが、大学とか地域のシンクタンクとかっていうのが、もう少し地域と一緒にあって、ボランティアでやるのか、そこにある種のお金を介在させるのかっていうのは、地域によってさまざまだと思いますけれど。私としては、何か少しお金をやっぱり回さないと、持続しないかなと思ってますんで。何かそこで、地域の提案力みたいなものを付けていくっていうのを、大学の、少しビジネスとしてもやれるような仕組みって、何かできないかな。そこでネットワークを張っていくことで、これが地元の大学でなくてもいいと思うんですね。地元の大学から広がった、ほかの大学のネットワークを使ってやるとか。いろんなバリエーションがあっただろうと思ってるんですけど。今、やっぱりネットとかがあるんで、いろんな人と知り合いになれる。その力

を使えば、もうちょっと何かできないかなという。最後に自立っていう言葉が、これは私が仕えた片山前鳥取県知事なんか、非常に好んで使われた言葉なんですけども。実は鳥取県なんかでも、その言葉は極めて正しかったと思うんですが、若干、副作用があった言葉でもあったかなと思ってます。自立と孤立は違うよっていうふうに書いてますけれど、どうしても自立っていう言葉を強調しますと、行政とコラボレーションしたりするっていうことを、依存というふうに考えてしまったりするケースがあって、本来、自立という言葉は、自ら考えて自ら決定して行って、自ら責任を持つっていう言葉だと、私は思うんです。世のなかには、いろんな意味で恵まれない人、支援が必要な人っていうのは、いらっしゃると思うんですけども、そういう支援を受けたりとか、支え合ったりするっていうことを、否定する概念ではないはずなんですけれども、自立という言葉は都合よく使う人っていうのは、支援を切ったりするときに、便利に使ったりするケースっていうのが非常に多い。私はそこに対しては、非常に政府の文書なんかでも、選択と集中とか、自立っていう言葉を非常に何て言うか、浅い意味で使ってるケースっていうのは、多くないだろうかっていうのを、非常に強く感じています。特にわが国の、これからの行く末を考えると、産業構造なんかややっぱり、製造業が長期的に見たら、海外との競争力を失っていくっていうのは、悔しいですが事実だと思うんですね。そこを何とかしなきゃいけないっていうことで、地域でいろんな取り組みが始まっているんですけども、基本的に税収をそんなにたたき出せるような産業の立地っていうのは、どうしても私は偏在してしまうことは、否定できないんだろうと思ってるんです。そうすると、税収が偏在していったりとかする。雇用は、なるべく均等にあるべきだと思うんですけど、税収が少し昔よりも偏在するっていうのは、どうしても出てくるんだろう。そうなってくると、やっぱり相互理解

っていうものが進んでないと、やっぱり日本って
いう国が立ち行かなくなるんじゃないかなって思
っています。ですから、やっぱり大事なことって
いうのは、一番下に書きましたけれども、都会と
地方だったり、あるいは世代間であったり、いろ
んなところで、相互理解とか情報共有っていうの
を、一所懸命進めていって、そしてできれば、い
ろんな取り組みを共同連携をしてやっていく。そ
れからネットワークをつくっていく。これは市場
原理主義とかで、よく揶揄的に使われますけど、
大多数のなかから、多数のなかから少数が勝ち残
っていくっていうスタイルとは、ちょっと違うか
もしれませんが、やっぱりこういうスタイルで
やっていくっていうことが、本来の自立っていう
ことをやっていく上でも、逆に私は必要じゃない
かっていうことを、ちょっと考えたりしております。
ちょっと、とりとめない話でしたですけども、
ちょっとオーバーしましたね。こんなことを、
ちょっと皆さんと話したいなと思って、このお話
をさせていただきました。とりあえず、私の話は
以上です。ご清聴ありがとうございました。」

(拍手)

司会

さて、それでは今、議論したいというところの
内容を振り返りまして

青木講師

別にもう、これにあまりとらわれないでくださ
いね。

司会

そうですか。

青木講師

ええ、あまり。何でも、ぜひちょっと、ご質問
でも、ちょっと違うんじゃないかな、とかって
いうようなこととか、自分もこう思うとかって
いうようなことでも、何でも結構ですので、ちょ
っと少しお話ししていただければありがたいです。

C氏

立ち上がり支援っていうと、例の仕分けのとき
に、実はこんなことは国でやんなくてもいいんだ
という話が出てるわけですよ。

じゃあ自治体に任せればいいのかって。さっき
おっしゃったように。この足利市でも、1,600人
の職員がいたのが、今、1,100人しかいないん
ですよ。つまり400人から500人、減少になって
るんですね。地方自治体の職員がいくら減って
もいいと、関係ない人は思うわけだけど、実は
世界中の公務員っていうのは、だいたい同じよ
うなことやって、日本は公務員数って一番、人
口比で少ないわけですね。

青木講師

よく言われますね、それは。

C氏

ですからそういう部分もあって、実はど
んどんこれも全部、自治体に任せられるか
って言うと、自治体にその能力が、残念な
がら今、極めて薄くなっているっていうのは
事実なわけですよ。それは職員だけじゃな
くて、それも政治家のも含めて、能力の問
題が入ってくるんで、実はある程度、仕
分けはどうであり、やはり基本的な立ち
上げ支援を国でやらないと自治体が動
けないんですね。本当は。

青木講師

うん。そうですね。この辺が、非常に
議論が分かれるところだと思うんですね。
分権を原理主義的におっしゃる方って
いうのは、そういつて延命してきたん
だろっていうふうに、言われる。この
立ち上がり支援だけではなくて、たと
えば今回、まちづくり交付金って
いう、これは国交省が持ってる、
いくつかの補助金をパッケージに
して、ソフト経費も面倒みれるよ
うな制度にしたものっていうのも、
地方に移管っていうのが出たんです
が。これも理念は正しいんだろうと、
私も思うんですね。ただ、やっぱり
今ご指摘があったように、市町村
の財政力、それから職員のマン
パワーって

うのも現実問題、かなりでこぼこがありますし。それから必要な事業費っていうのも、たとえば駅前整備を、そんなのもう何10年に1回やるっていうのが、たまたまあったところと、それがないところっていうのを、たとえば交付税とかで器用にフォローできるかって言うと、ちょっと難しくないのかなっていうのは思いますね。理念としてはわかるんですね。いや、それは私も正しいと思うんですけども、やっぱり自分のお金と、人からもらってきたお金、どっちが大事に使いますかっていう、非常に根源的なところですよ。そこは、一定の合理性はあるんだろうとは思いますが、ただ、今言われたように、じゃあ現実問題、そういうお金がうまく配れる仕組みっていうのが、今、あるのかねっていうと、なかなか今までいろんな知恵を出してきたんだけど、大きくりにするっていう知恵はできたんですが、一気に国から全部移しちゃうっていうところでは、なかなかいい知恵が出てないっていうのが、正直なところなんですよ。

C氏

全国知事会とか、市町村会とか、包括補助金の問題があるわけですよ。実は包括補助金をもらって一番困るのは、自治体です。

青木講師

そうかもしれませんね。結局、三位一体のときもそうだったんですけど、税源委譲っていう形でやりますと、一番、都会と地方で格差が低いのは、消費税だと言われてるんですね。地方消費税が一番、都会と地方とでそんなに格差がないんですが、格差がないとは言っても、2倍ぐらいはやっぱり、たとえば東京、沖縄とかではあるんですね。だから進めば進むほど、実は税収の格差っていうのが広がって、それを補填しなきゃいけない制度っていうのが、どんどん必要になってくるっていう。非常に、ちょっと一見矛盾したことが起きるっていうのも、これはニワトリ、卵なのかもしれませんね。産業自体がどうしても、今、第3次産業み

たいなのが非常に、稼ぎ頭になってきて、大都市部が、法人税収を稼ぐっていう構図になってるんですよ。非常に悩ましいところなんですよ。

B氏

今のような地方に、地方主義とか、地方分権とかね、地方に能力があるのかっていうような話になるんですけども、われわれみたいな者、一般の人間が何か、ものを考えてやろうとする場合には、法律も何もなしに、区別がないわけですよ。それに対して、やっぱり地方の人の場合、さっき言った、まさにシステムの不具合。それで全部ストップされる。全部って言ったら極端だけでも、何かやろうと思うと、必ずストップされる。最近の例で言うと、特に道路を使ってフリーマーケットやろうとね、最近も路地を使ったいろんな、路地裏アーティストの興行。いろんな人が出展する展示。そうすると、それぞれいろんなところへこう、警察と道路。

青木講師

それから国交省と、国交省っていうか、道路管理ですよ。県、市町村のこともあるでしょうけど。

B氏

もちろん、地元の問題ありますけどね。そういう壁に、必ずぶち当たるわけですよ。そういう意味では、地方の能力があるなしっていうよりも、やっぱりそういう仕組みになっちゃってるんですね。能力があるなしも、あるけれども、そうせざるを得ない。市の人も、当人の能力っていうのもあるけども、それ以上にしょうがないんですよ。こうなっちゃうところがある。その壁を乗り越えられるには、相当、その人自身が、危ない橋を渡らないといけないとかね、極端に言うと。そういうところがあるんで、完全に能力があるかないかってね、私はやっぱりそのシステムの不具合を、どう埋めるかどうか。1つが特区っていう話もね、ありましたけど。

青木講師

特区は一定、機能したとは思いますが、でも今はやっぱりね、落ちてるんですよ。特区の申請って。やっぱりちょっとブームが去った的なのか、ある程度やれるものはやって。もうあとは、岩盤のようになってるのかが、そこは検証できてないんですけどね。

B氏

やっぱり今、地方の人を擁護をするというようなことではないんですけども、私なんかやっていた都市計画っていうのは、都市計画法っていう法律がだんごとあって、国へ行っても、県へ行っても、市へ行っても、皆、その法律で動いてるから。隣の道路と、道路っていうか、医療と都市計画という部分も含めて、国から下まで全部、ぶつかっているんですよ。

青木講師

いや。おっしゃるとおりだと思いますね。

B氏

だからそれを、いきなり国が都市計画、地方だと落とされるのは、なかなかその制度の不具合を、県や市のレベルでいじるっていうのは、相当きつい感じですね。

青木講師

そうですね。

B氏

結局最後、頼りにするのは、首長しかないから。市長とかね。

青木講師

そこはありますね。私もよく感じますね。ええ。

B氏

そういうところの力量がね、むしろ問われるんじゃないかって気がするんですね。

C氏

本来、末端自治体の首長の能力が非常に発揮できれば、本来、国にもうんと力付けなくていいし、当然、県なんかも力を、そんなに今、末端自体も首長の能力さえあれば、それとあと議会ですね。この力があれば、本来は委譲すべきです。

B氏

かなり楽になると思うんだけど、そんなこと言ってたって、選ぶのはわれわれだし。

青木講師

確かにでも、そうですね。

C氏

現実はそのようなものじゃない。

B氏

難しいところですけどね。

青木講師

ええ、やっぱり制度の理屈だけではないんですね。今、おっしゃったように、組織のガバナンスっていうんですかね。たとえば、わかりやすい例で言うと、首長さんのガバナンスが利くところと、たとえば警察なんて、まったくガバナンス利かないですよ。」

B氏

うん。

青木講師

だから、いくら首長さんと言えども、警察がだめって言ったら、これはなかなかいかんともしがたい。あと、安全とかっていうのは本当大事なんですけど、やっぱり私も、自分で反省を込めて言うんですけどね。やっぱりある部署に属しますと。やっぱり、その組織の論理に沿って動くんですよ。それは別に染まっているのかどうかってのはわかりませんが、やっぱりその立場で仕事をしますと、そこでの最適化っていうんでしょうかね。そこをやっぱり、一所懸命やっちゃうでしょう、人間ってね。

B氏

恐らくね。

青木講師

そんなに縦割りをやろうなんて、夢にも思っていないんですけど、やっぱり与えられた立場で、一所懸命仕事をすればするほど、部分最適を追求してしまって、それで現場の人達っていうのは、そういうのをトータルに相手にしなきゃいかんわけ

ですよ。それで始末に負えなくなっちゃったりとか。だから安全なんていう話について言うと、安全を徹底的に言うって、これちょっと、半分オフレコですけどね。笑い話で言いますけどね。これ笑い話みたいに言うんですけど、本当の話なんです。ある中心市街地で、もめてる案件っていうのがあって、交通関係で相談をしたところ、一担当者の人が、本音を言ったんです。警察の本音。要は中心市街地って、今、疲弊してるじゃないですか。それで疲弊して、歩行者も車の量も減って、これはある意味、安全的には望ましいって言ったっちゃうね、これはね、もう非常にわかりやすかったですね。たぶん、まじめな人なんだろうと思うんですよ。

C氏

本音。

青木講師

本音、本音。だから、にぎわいをつくるような取り組みっていうのは、彼らのやっぱり考えることからすると、やっぱりちょっと勘弁してもらいたっていうのが、本音なんです。いや、確かにわかります。そこで人が死んだらどうするんだっていう前では、なかなかつらいですよ。そこを突破していくの。だからやっぱり、でもそうは言っても限度っていうものがあるよね。要は物事には、やっぱり限度ってあります。そこは、どこが限度かっていうのを見極めるのは、私の今、仕事をしている霞ヶ関ではなく、やっぱり現場に近いところでね、最近リスク・コミュニケーションっていうのはやりですけど。リスク・コミュニケーションだと思っただけですよ。いや、どんなにきれいにしたって、私、県で衛生関係も少しだけ、短い1年だったけど、やったから忘れられないんですけど、ノロウィルスなんていうのは、出るときは出るというんですよ。どんなにきれいにしたって。出るときは出るというんですよ。だからやっぱり、あとはリスク・コミュニケーションと、あとリスク、リスクの問題なんです。

絶対に出ないようにするっていうのは、これはもう絶対に無理だと、言っていました。あとは本当、リスクをどの程度低くするか。それからリスク・コミュニケーションで納得して来ていただけるか。もうそれでやるしかない。それは非常にローカルルールだと僕は思うんですよ。やっぱり地域で、ちょっと予算は頓挫しましたが、私の思いは、そういうローカルルールみたいなものを、自らつくっていくことっていうのをあちこちでやると、ひょっとしたら世のなか変わらないかなって思っています。

B氏

やっぱりね、責任のもと、責任の問題という、それから評価の問題。地方に職員が〇〇。その問題がね、どう評価。何かやったときにどう評価されるか。

青木講師

要は人事の評価ですね、たとえば。

B氏

人事、いや業績のね。評価。要するに新しい、何かちょっと際どいところを一所懸命やって、成果も上ったっていうようなことが評価されるのか。余計なことをやってくれたという評価になるのか。

青木講師

それは首長さんですね。

B氏

うん。最後にね、それ言いたいんだけど。

C氏

私が知ってるのは、皆。

B氏

うん。それから責任、今、医療事故で医者が非常に、

青木講師

おっしゃるとおりです。

B氏

要するに産婦人科なんかがね。産科か、婦人科はいいんだけど。産科が、もうどんどん少なくな

っていく。これはもう、やっぱりその責任取らされるんですね。

青木講師

裁判、起こされますからね。

B氏

そういうものを、どう担保するかね。今、そういう仕組みも少しずつなんか、

青木講師

保険とかが、

B氏

年々やられてるようですけども。そういうものを。ミスしたときに、悪意があってやったらもちろんだけど、積極的にやったことが結局、何かそういうことが起きてしまうと。交通事故なんかもそうですよね。にぎわいがあったら、事故があったらそれこそ警察の責任と、もう単純にやられるとね。もう、警察は。

青木講師

立つ瀬ない。

B氏

やる気ないですね。相当何か、報酬がないとやらないとかね。そんなことがね。要するに責任と評価の問題。それはだから今も言いましたけど、首長がそういうものを発してね、何か。警察も含めてできるような。難しいけどね。

青木講師

でも、緩やかな協議会とかを定期的にやるとかして、最後にちょっと書きましたけど、やっぱり情報共有とかいうのは、結構、僕、大事ななと思いましたですね。いろんな、何てことはない情報とかでもやり取りしてると、お互いの考えてることとかってというのがわかってくると、ガバナンスは別でも、そっちの立場もそうかっていうことで、うまくいくケースっていうのもあるのかなと、いう気はしましたですね。何せ情報がないと、なかなか理解しようとしませんから、非常に原理主義的に走りがちなケースっていうのが、行政なんかすごく多いですね。

B氏

一方で、住民サイドのなかにも、そういう問題があつて。要するに、お互い理解相反することを、なかでやってかなきゃならないですもんね。だから情報共有しないと。あいつだけがもうけてるとかね、いい思いしてるとかね。

青木講師

よくあるんですね。

B氏

おれは損してるとかね。

C氏

確かに利益だけ望むと、いわゆる経済力の問題になっちゃうんですね。それが恐らく、基本的にいうと大損害ですからね。自分の利益とか、どうしても損得になってしまうわけだから。そうすると日本っていうか、地域のほうもマイナスになっちゃう。だからそのコンダクターっていうのが必要だ。

青木講師

だから、さっきの農家民泊だって、さっき政治の判断でやったわけなんですけど、それは農家民泊をして、そこで火事が起こって生徒が死んだってということだって、これから、今のところ聞いてませんが、長い年月のなかには事故だってそれはあり得ますよね。だけど、そこをどう考えるかですね。そこどう考えるか。プロの旅館、ホテルしか認めないっていうことは、今もう制度はそうなってませんが、それと同じレベルを本当に求めていくのかっていうことですよ。プロだって事故は起こすわけですよ。規制っていったい何なんだみたいな、本当にね、非常に難しいんですけど。

B氏

皆さん方、NPO っていうのが、いろいろここに出てきてますけども、やっぱり皆さん、試行錯誤で今までやっておりますけど。

青木講師

活動される上で、悩みとってっていうのは。皆さ

んの前では、ちょっとお話しにくいこともあるかもしれませんが。何か、こういうところが非常に厳しいとかっていう経験っていうのは、何かおありになりますですか。

B氏

うちの場合は、目的、NPO の目的にもよるんでしょうけど。まちづくりっていうのを、どうとらえるかっていうのを、何か具体的に動かしていく面と、いろいろどうやったらいいかっていう、ブレーストーミングって概念が、かなり昔からあって、われわれの活動は、表に見えないっていうようなことが、よく言われて、お前達何やってんのと、よく言われるんですけどね。事実、なかなか会議とか、勉強会やってても、あまり表にそういう情報が出ないですね。うん。何か発信しても、ごく限られた中でのことで、よく何か販売するとか何かっていうことを中心にすれば、もう少し違う、あれもあるのかもしれませんがね。いろいろ試行錯誤はしてるんですけども、そういった点がどうしたらいいかっていうのを、今、皆で考えております。あとは財政の問題ですかね。

青木講師

やっぱりお金がないっていうのは、国地方通じてなんですけど、民間の、実は企業の方も今、そうなんですよね。やっぱりバブルのころっていうのは、都市であれ地方であれ、企業さんもそこそこ、いろんな活動にお金出していただけたんですけど、今は本当に厳しいですね。パンフレット1つ作るのでも、協賛金をいただくの、本当苦労しました。鳥取にいたとき。

B氏

もう1つ、私も一緒にやった活動で、どうしたらいいかという。われわれのグループは、女性が少ない。

青木講師

それはいけませんですね。

B氏

女性をどうやって、活動のなかに入れてもらう

か。今は女性のパワーっていうのは、すごいですからね。

D氏

足工大は女性はいないんですか。

B氏

いることはいますけど。いますけども、圧倒的に男だから。そういうところが悩みで。青木氏「どういうところが原因なんでしょうかね。何となくなんですかね。

B氏

さっきも言ったように、まちづくりって理屈ばかり言ってるっていうようなことに、あんまり、魅力を感じないのか。

C氏

本来、まちづくりっていうのは、おじいさんでも、おばあさんでも、子どもも全部、将来のまちづくりって、今のまちづくりって、

B氏

なかなかそうはいかない。

C氏

となるんだけど、若くないんですけどね、なかなかね、いるメンバーが平均年齢が高いから、なかなか来ないわけですよそういうメンバーになっちゃう。若い人は来てくれないと。

D氏

何か女性のキャンペーンやってですね、少し足工大はもう、女性がもう少ないからじゃないですか。

B氏

短大なんかもあるね。

C氏

ああ、いるんだ。近くに。

D氏

何かもう少し工夫して、女性が大いに参加できる仕組み。

B氏

おじいには、なかなかその工夫がうまくね・・・

青木講師

ちなみに大学には、女性の先生方っていうのも、

いらっしゃるんですか。工学系っていうのは、多分。

B氏

建築なのかな。建築と、あといわゆる一般教養っていう、昔のね。そういうところには、女性はいますけどね。

D氏

役所が今、一番問題なのは、人口がどんどん減ってるんですよ。かつて、一番多いときと比べますと、1万人以上、人口が減少しました。それがもう一番の活力がなくなったという、もとなんですね。だから今、まちおこしとか、活性化やる場合に人口がどんどん減ってたんじゃ、税収も上りませんしね、何もできない。だから、人口をどうやって増やすかっていうのが、まちの活性化の前に、今、大通りシャッター街ですけど。あのシャッター街開けるには、やっぱりそれなりの住民が住んでおって、ある程度、人口がいなければ経済的に成り立たないわけです。だから、人口をどうやって増やすかっていうのは、今、減るのはなぜかって言うと、働き場所がないから。結局、首都圏に住んでる人は、皆、東京へ出ていくわけですね。高校を卒業すると、7割以上が東京に行く。

青木講師

7割！

D氏

もっとですか。私はいいい加減なことって申し訳ないですけど、7割以上だと思いますよ。

C氏

いや、大学と就職。ほとんど大学ですけど、東京行くしね。これはもう関東地方全部ですよ。

D氏

全部ですか。

男性C「全部です。全部そうです。」

A氏

90%以上ですね。

C氏

あのね、東京以外は全部、人口減るんです。

D氏

それで市に話したら、その問題に対して、少子化の問題だって言うわけです。それは生まれるのは少なくなるから、転入と転出で人口が決まるわけですから、

青木講師

そう、そういうことですね。

D氏

生まれたのは転入ですね。

青木講師

社会増減。

D氏

その差が毎年1,000人、毎月、毎年か、毎年1,000人ずつ減ってる。もう3、4年続いていますね。

青木講師

そうなんですね。いや実は、前職の鳥取県も人口が60万人と、ずっと言ってたんですけど、一昨年10月に60万人を割ったっていうのが、ヤフーのトップページに出たんですね。それで調べてみると、非常に面白くて。だいたい、今のお話と共通するんですけどね。やっぱり卒業すると、あ、卒業じゃないですね。大学進学で、結構、皆やっぱり出るんです。それはやっぱり出るんですよ。それから就職でもやっぱり出るんです。かつては、それで一定の期間が来ると、時期は人によって違うんですけど、戻って来てたんですね。戻る受け皿っていうのが、やっぱりあって、それで人口が減った時期とかをいろいろ調べてみると、横ばいでもがんばってる時期っていうのがあって、何が起こったんだろうって言うと、たまたまコンピューターのデバイス関係の企業の立地が、そこでぽんぽんぽんぽんとあった。だからおっしゃるとおりで、雇用の場っていうのが、ニワトリと卵なんですけど、やっぱりあると、人口が減らないっていうのはあるんですけど。それがさっき言いましたように、じゃあ企業誘致だけで、本当に大物狙いでいけるかって言うと、なかなか製造業自体が、今、海外との競争がうまくいかないんですね。

だから、今あるところを大切に、少し増設をするっていうのとか、それから雇用、所得はあんまり多くないけれども、コミュニティ・ビジネスみたいなところで、とにかく地域でお金を回していくっていう工夫でやっていくかっていうようなところで、戦略を描いてるところが多いっていうことですね。観光自身もなかなかね。

D氏

それは、戦略でですね、これは今、天地人じゃありませんけどですね、地の利もあるんですね。それから人材もあるわけです。そうすると、足利っていうのは、九州や北海道から見れば東京とみなされ、首都圏だと思われてる。

青木講師

いや、だって1時間で来れますからね。

D氏

宮崎県民なんか東京だと思ってるわけですよ。だから、地の利があるんだから、もう少し考えて、人口の流入を図ってもいいはずなんです。その議論を大いにこの会やってもらいたいと思う。

青木講師

農業なんていうのはどうなんですか、この足利市は。基幹産業、農業は。

C氏

ないです。

青木講師

ないんですか。

C氏

2.5パーセント、確か。

青木講師

少ないですね。

C氏

ええ。両毛地区全体で少ないですから。

B氏

やっぱり工業。工業なんですよ。ものづくりなんですよ。

A氏

やっぱり工場の、富士重工の子会社とか、

D氏

下請けですよ。だいたい。

A氏

サンヨーの下請け。ですね。そこへ勤めてる人がいる。今、私どもが一番悩んでるということは、私がこの中央市街地でNPOの事務所も中央市街地の一部なんですけども、今、足利市では区画整理を5箇所やってるんですね、そのうち。

青木講師

5箇所。

A氏

ええ。2箇所が南側なんです。それで、その2箇所のうち1箇所が、約60数パーセント進行して、もう1箇所はほとんど、12、3パーセント。

A氏

10パーセントかそのぐらい。それからあとの2箇所っていうのは、この中心市街地のこの通りの足利学校、鑢阿寺（ばんなじ）に近い部分の中央町というところと、それから鑢阿寺の西側。織姫山っていうのが、西にあるんですけども、そこに神社がありまして、今、そこへ観光客が大勢来るとは思いますが、その間が大日西と言って、区画整理がそこそこ、その大日西と中央地区と2つに分かれています。一体化してやろうと。それでそこが、以前からは一番の繁華街です。住民も一番多かった地区なんですよ。

今、先ほどもお話に出ましたシャッター通りというのは、中央地区で。昔はもう大変な人通りだったんですけども、今はもう90パーセントぐらいシャッターが。それから大日西というところも、歴史的に見ますと、大日様の壕の、ね、大日様の周りには、ご覧になったかどうかあれですけども、堀があるんですけども、昔はもっと堀がよかったそうなんですけども、その周りに12ですか。12壕があったんですね。その壕の跡地と、それから足利藩。戸田藩なんですけど、その陣屋のあったところ。そこが大日の西の部分です。寺のほうのあったところと、陣屋の跡地を一般に分譲したと。そ

れが明治の前ですね。ええ。

廃藩置県とか、それから、寺のつぶされたって言うんですかね。廃仏毀釈によって、民間に売り渡されたところですから、そういうところは、そう言っちゃ何ですけど、あまり大金持ちがそこへ住んでることは、ほとんどなかったんですね。非常に細かく割れていて、それから私のその大日西の壕の近くにも住んでた方は、何て言うのかな、裏長屋みたいなところがぎっしりある。それから少し整理されてって、芸者さんが多く住んでる。それから、戸田藩の陣屋跡のほうには、そういう歓楽街、飲食街が非常に盛んな飲食店が、そういう道にぎっしりあった、いうところだったんですね。もう明治の末期から、そういう状況でずっときましたから、家も皆、古い。

それで今から 15 年ほど前に、放火がありまして、2 名亡くなられたんですね。それで住民も非常に、そここれまでも消防のほうから、足利でもっとも危険地域だ、何とかしろというふうに言われてきたんですけども、もうほとんどが私道。それで、本当に迷路のようになっていて、そこには 1 軒のそれこそ 2 間が 3 間ぐらいのうちのところに、7 人も 8 人も、10 人も住んでるというような状態になって、だんだん、だんだん子どもが皆、大きくなってくると、出て行くと。それから、そこで自動車を持ちたいと思っても、自動車も入らないような路地で自転車でも通らないような。というところですから、年寄りだけが残されて、全部、どんどんどんどん人がいなくなる。そのうちに年寄りもいなくなって、空き地になってしまいうというふうなことで。そこへきて、そういう人が亡くなられたりということで、どうしようと言うんで、自治体を中心に相談をして、何とかそういう火災とか、それから消防車も入れない、救急車も入れないような場所は、何とかしなくちゃしょうがないだろうと言うので、市のほうと相談したんですけども。住民が集まって相談してくれと。市のほうは何もできないよと。

15 年前、そう言われたわけですね。それで相談をしたり、そういう危険なまちを防ぐにはどうしたらいいだろうかと、というようなことを、市の専門の担当の人に来てもらって、こういう方法論を、いくつか説明してもらったり、それからまた、それと同時に住民がどういうまちをね、将来つくり直すとするなら、どういうまちを希望するかというようなことを、調べようよと言うんで、自治会が中心にやると、やっぱりいろいろ問題があると言うんで、自治会とは別個に、そういうまちづくりの勉強会をつくらうということで、勉強会をつくったんですね。

私どもは家富町っていうんですけども、それから陣屋のあったところは雪輪町っていうんですけども。両方で勉強会をつくって、住民の意見を聞いたりもしまして、それでどういうふうにするかというようなことも、市からいろんな方法はね、方法論があって、そのうち大きなものを 3 つぐらい示されて、そういうものを示されてるうちに、やっぱり基本的には区画整理だと。区画整理をやって、ある程度の道路をつくってもらって、その上、皆がそういうまちだから、歴史的な風情のあるまちがいいとか、和風のまちがいいとかというような意見が多かったもんですから、そういうまちをつくらうというようなことで、運動を時間がかかりますので、省きますけれども。そのうちに国の政策も変わってきて、中心市街地活性化法ができて、区画整理できるかもしれないと。それと同時に、もう市道道路もつくらうと、市のほうでは言い出した。市道道路でも何でも、つくりたいものはつくってもいいと。われわれのほうとするならば、希望するような、安心して住める、かつ、歴史的な風情のあるまちをつくらうというようなことで、それこそ約 10 年。この NPO 法人 VAN-NOOGA っていうところなんですけど、VAN-NOOGA にも協力をさせていただいて、住民の意見を聞いて、それから市のほうもお金も、補助金をいただいて、コンサルタントの話をもとに

設計して、非常に緻密なものをつくりました。それこそ住民のなかから、委員を選びまして、毎晩毎晩のように、約1年、2年ぐらい。集まってですね、つくって、区画整理は基盤づくりだと。それにわれわれは、こういうまちをつくるんだというものをつくって、市長に上申した。要望書として提出したんですね。市のほうは、当然その会議のなかには、市の担当者も一緒にやりましたから、市民と市と、それから専門家とですね、三者一体となって、もちろん、このVAN-NOOGAも一緒に入って、でき上がったんですね。

それで、いよいよというところになったのが、選挙になって、それでそれをやってくれるという市長が選挙に負けてしまったわけですね。それで今、言ったように、5個所の区画整理のうち、南側のほうの6、70パーセント進んでるところからの支持を得てなった市長が当選しましたから、当然に公約としても向こうはやるよと、70パーセントと言ってるんだから。それでうちのほうの、中心市街地のほうはやらんと。5月に選挙がありまして、6月に市議会があつて、そこで質問があったときに、一発で中央市街地と大日西の区画整理、中心市街地の区画整理は、もう休止すると。何の一言も相談なしに、そう言われてしまったわけですね私どもは早速、市議会が終わりまして、そのあと今までこういうものが、市のほうに上げてあるんだけど、こういうものをよく検討してもらったのかと。その上で、そういう話が出たのかということで、市長のところへ役員がそろって行って、また要望書もつくって持ってったんですけども、市長もお金がないからですね、やらないっていうわけじゃない。向こうをやってからこっちをやるんだという、話だけなんですね。

その後、私どものほうでは、どうしようかと。途方に暮れて、それまでも住民のなかには、何もしないでくれと。もう年を取ってるから、そっとしといてくれっていうような人も多かったんですけども。それからまた、強力に反対をされている

方もいて。お寺さんなんですけども。そこはお寺さんで、そばです。この地域ですから檀家の方も多いですね。そういった人達に対する影響力も強い。それから土地もたくさん持ってるものですから、借地をされてる借家の人もいます。そういう人達を回って説得をしたり、いろいろなことをし、また、いろいろな問題もね、ありましたけれども。乗り越えてそこまで行ったんですけども、たったそれ一言で、そうなっちゃったということです。

実は昨日、中央地区のほうで、中央地区のほうは、住民の意見をもう一度聞き直そうということで、アンケートをしたそうです。そのアンケートをして、もう戻ってきたのが約60パーセントぐらいと聞きましたけど。やっぱりそのなかの、やっぱり6、70パーセントは、このままじゃもうシャッター通りですからね。もう、皆どうにもならなくなっちゃうから、何とかこのまま続けてくれという意見だと言うもので、この意見をまとめて市長に提出して、市長が、市長より判定、市長から全員が集まって、そちらの中央地区のほうの説明会で話があるということで、私もその話を聞いたもんですから、オブザーバーとして一応聞いて、話だけ聞いたんですけど、やっぱり市長はお金がないの一点張り。お金がないけれども、やめるわけじゃないんだと。休止なんだから、いずれそのうちはやると。そうすると向こうは商店街ですから、このままじゃ財産が限りなく減っていってしまう。そういうことになってくれば、市長の責任だから訴訟だってあり得ると。かつて、よその地区ではそういうことで訴訟が起こって、市が負けたことだってあるんだ、というような話も出てですね。

いや、それはよくわかるんですけども、そうならないように、今は区画整理をやるということで規制がかかっているんですから、規制を緩和すると。それで、皆さんの経済的なマイナスな部分を、少しでもカバーするようにしたい。というようなことを言っていたんですけども。それならいいや、みた

いな話を向こうが、商店の人達が多いですから、してたんでしょけど、私どもにそういう話をされたらば、それは規制を緩和するのはいいでしょうけども、規制を緩和することによって、じゃあ、いよいよやるっていったときには、緩和されたことによって、もう、われわれが主導したようなまちづくりをすることは、たぶんどきなくなってしまうと思うんですね。高さの制限であるとかね。それから和風のまち並みであるとか。それこそ、商店の看板の形まで、われわれは考えて計画を提出してあるわけですから、一発、規制を外してです、高層ビルも建てられ、マンションも建てる。もうそれで、おしまいです、価格は限りなく安くなりますからね。むしろ持っている人にとっては、そこを持っていることによって、マイナスですよ。何の利用もできなく、駐車場にもならなくて、かつ、固定資産税だけは、がしと取られているところですから、そこを規制が緩和されて買うということになれば、今、こうやって見ればわかるように、大きなホテルがね、建ち上がってるんですけど、ここら辺に建っちゃえばもう、絶対有利なロケーションですから。もう、それこそ何でも出ちゃう。そんなことになってしまったら、もうまちづくりでやることない。というふうに思ってるもんですから。

直接、意見ということはございませんけども、私どものほうへもまた区画整理を休止をするってということで、県の審議会の評価委員会、そこへ休止をするという決定出したのは、市長がそう言うんですから。しかし、住民に充分納得するように、というふうな付帯意見が付いてくるということで、提案があったらいいんですけど。それも、うちのほうにも言ってくるだろうと思うんですけど、そんな話は聞けないよと言おうと思ってるんですけども。そんなことで、非常に悩んでると。

それで要するに、リーダーが代わると、そういうことになるのかと。生命も財産もすべてをね、失われたような形になってしまう。それをどうし

たらいいんだろうか。しかし、その上も人がどんどんどんどん、自治会の役員もやっておりますので、10年前と今だったらば、もう住んでる人が半分近く。あと10年、20年ほっといたら、ほとんどいなくなってしまうよ。そういうなかで、いったいどうしたらいいんだろうか。しかも頼りにする市役所は、まったく役に立たん。それで今、担当部署の責任者は、1人を除いて全員定年で辞めるんですって。話にも何もならないというような状況のなかで、もう本当に夜も寝られないほどに、今もう、心配している。住民に年中ね、隣近所の人ですから、どうなりましたって聞かれるんですけど、説明ができない。たとえば会長にも、どうしたらいいんでしょうねって、いつも聞いてるんですけども。誰も答えはね、出せないと思うんですよ。

市長が、それは市長の悪口を言うのはあれなんですけども、市長はなりたくてなったんで、足利市をどうしようと思っただけで、なったんじゃないですよ。きっと代議士にしても、僕は議長もそうだと思うんですけども、やっぱりそんな人が当選してしまったということ自体がね、それはもう市民が悪いんだから、仕方がないから新聞記者にインタビューを、中止というときに受けたんですけども、結論的に言えば、次の市長をわれわれが、気に入った市長を擁立して選ぶほかないのかな、って言ったら、新聞記者も笑ってましたけども。現状がそんなところにあるもんですから、長々と申し訳ないです。

B氏

だから、われわれのですね、NPOとしてもいろいろ関わってきたところは、あるんですけどね。じゃあ、そういう状態を、じゃあどうしたらいいかっていう議論に、なかなか皆、今、熱が入らないってことなんです。」

青木講師

すみません。ちょっと直接的にね、こうすればいいなんてことは、もう僕に言えるはずもないんで

すけど、ちょっと少し、最近聞いた話を、今、お伺いしてちょっと思い出したのが、青森ってわりと中心市街地では、先進的なところで有名なんですけど。あそこも、ずうっと「コンパクトシティ」っていうのを、旗頭にして、言うだけの人ってすごく多いんですけど、本当にやった人って少ないんですけど、頼りにしてた市長さんっていうのが、やっぱり落っこっちゃった。そのまちづくりやってる人から話を聞いたときに、その人がちょっと言ってらしたことっていうのは、やっぱり自分達は、ずっと中心市街地のトップランナーだっていう自負もあってやってきたんだけど、中心市街地のための、中心市街地っていうことだったっていうのは、ちょっと今、戦略的に見直そうと思ってる。

今日、ちょっと産直の話もしましたが、彼が言っていたのは、やっぱり中心市街地も疲弊してるんだけど、農村もかなり疲弊している。そういうところと、中心市街地が組んでやれるようなことっていうのを、ぜひこれから描いていかないと、いつまでたっても政治的に、非常に不安定な状態が続くっていうのを、その人はちょっと選挙直後だったんで、そういう思いを切々と僕に言われて。僕もどう答えていいか、本当困ったんですけどね。でも確かに国の施策も、そう言われて虚心坦懐に見てみると、私のところで中心市街地活性化法って持ってるんですけど、エリア取りって、中心市街地で取るんです。それで、計画づくりをするときに、ボードっていうか、要するにつくるわけですよね、会議を、協議会を。一応、画期的と言われてたのは、昔はまちづくりをする人と、商店街を考えてる人っていうのがばらばらだったのが、一応その法律をつくって、一緒のボードで議論をして、計画を出すっていうシステムをつくったこと自体は、私はそれなりに意味があったんだろうと思ったんですけど、その方の話によれば、やっぱりこれからどんどん市街地も、やっぱり人が減っていく時代に、多かれ少なかれなるんですよ。

なるべく食い止めるっていうのは、もちろんやらないといけないんですよ。だけど、農村も人が減る。中心市街地も人が減るっていうなかで、何とか地域経営やっていくっていうことになると、確かに中心市街地だけで議論をすることって言うことではなくて、いろんなところと、やっぱり何て言うんですかね、利害関係が緊密になるようにしないと、だめだっていうことを、その方がちょっと、たまたまおっしゃってたのをね、今ちょっと、非常にシリアスな話なんで、こんな話、役にも立ちませんがね、ちょっと思い出しました、はい。

C氏

確か、青森は中活法でやりましたよね。

青木講師

そうです、そうです、そうです。

司会

あ、すみません。ちょっととりあえず。いろいろお話が出たんですが、今日は長い時間に渡ってですね、お話をありがとうございました。」

青木講師

はい。すみません。ちょっとまとまりのつかない話ばかりで。

中川会長

いえいえ、ありがとうございました。

青木講師

すみませんでした。最後まで聞いていただいて、ありがとうございました。

司会

じゃあ、どうぞ拍手で終わりたいと思います。

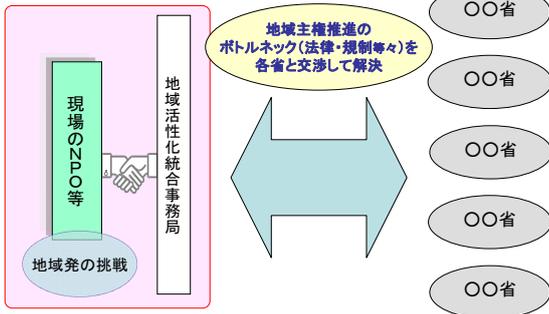
青木講師

いえいえ。ええ、ありがとうございました、どうも。ありがとうございました。

(拍手)

地域活性化統合事務局

＜地域活性化統合事務局は地域主権の実現が使命＞



地域活性化統合事務局の業務

地域活性化統合本部

(本部長：内閣総理大臣 全閣僚がメンバー)

地域活性化統合事務局

個別法に基づく業務

- 地方再生戦略等
 - 地方の元気再生事業
 - 環境モデル都市構想

- 都市再生特別措置法
- 構造改革特別区域法
- 地域再生法
- 中心市街地活性化法

地域活性化統合本部会合（閣議決定により4本部統合）の主な所掌事務について

内閣官房	内閣府
<p>都市再生 (都市再生基本法)</p> <ul style="list-style-type: none"> 都市再生特別措置法に基づき、都市再生基本方針の作成、各省調整 都市再生整備費地域の取組の作成 (ともに閣議決定) <p>構造改革特別区域 (構造改革特別区域法)</p> <ul style="list-style-type: none"> 構造改革特別区域法に基づき、構造改革特別区域基本方針の作成、各省調整 (閣議決定) <p>地域再生 (地域再生法)</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域再生法に基づき、地域再生基本方針の作成、各省調整 (閣議決定) <p>中心市街地活性化 (中心市街地活性化法)</p> <ul style="list-style-type: none"> 中心市街地活性化法に基づき、中心市街地活性化基本方針の作成、各省調整 (閣議決定) 	<p>構造改革特別区域計画の認定</p> <ul style="list-style-type: none"> 地方公共団体より申請される「構造改革特別区域計画」を認定 (構造改革特別区域担当) <p>地域再生計画の認定</p> <ul style="list-style-type: none"> 地方公共団体より申請される「地域再生計画」を認定 (地域再生事業推進) <p>中心市街地活性化基本計画の認定</p> <ul style="list-style-type: none"> 地方公共団体より申請される「中心市街地活性化基本計画」を認定 (中心市街地活性化担当) <p>地域再生基金強化交付金の配分</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域再生法に基づき、地域の再生に必要な事業に充てる「地域再生基金強化交付金」を配分 (地域再生事業推進) <p>地域再生利子補給金の支給</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域再生法に基づき、地域再生に資する事業の実施者が資金借入の際に活用される「地域再生利子補給金」を支給 (地域再生事業推進)
<p>地方再生戦略等の認定</p> <ul style="list-style-type: none"> 「地方再生戦略」等の案の作成、各省調整 <p>現場の出発 (創出モデル調査(仮称)等)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「現場の出発」創出モデル調査(仮称)等の、省庁横断的な地域活性化施策の推進 地域活性化に係る国の小規模窓口 <p>地域活性化の推進 (創出モデル調査(仮称)等)</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域活性化という省庁横断的な課題分野に精通した民間専門家等を全国的に派遣し、地方の実情に応じた相談対応を実施 <p>環境モデル都市の取組推進 (創出モデル調査(仮称)等)</p> <ul style="list-style-type: none"> 重要効果が見込まれる大規模削減など、先駆的取組を促して低炭素社会づくりに取り組む「環境モデル都市」の取組を推進 <p>地域活性化システム (創出モデル調査(仮称)等)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「地域再生基本方針」に基づき、地域の人口や地質が集積する大学を連携した地域づくりを、省庁横断的に推進 	<p>現場の出発 (創出モデル調査(仮称)の推進)</p> <ul style="list-style-type: none"> 現場の取組から既存システムの問題点や制度の隙間を抽出し、新たな地域活性化モデルを構築するための「現場の出発」創出モデル調査(仮称)を推進 (地域活性化推進担当) <p>平成20年度・21年度補正予算に基づく交付金の配分</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域活性化に関する4つの補正予算交付金・緊急安心乗取付合資交付金(200億円)・生活対策臨時交付金(5,000億円)・経済危機対策臨時交付金(1兆円)・公共投資臨時交付金(約1兆円)を配分 (地域活性化推進担当)

地域活性化に係る問題認識

地域の活性化のためには、**地域自身による“地域発”の新たな挑戦**が必要 (現実に、NPO等による、地域の特性・資源を活かした新たな挑戦は数多く存在)

しかし、**新たな取組を想定していない従来のしくみ**による立ち往生が頻発 (法令・基準、法解釈や運用の想定外となるケース、各省庁の隙間となるケースなどのボトルネックが存在)

現場では…

- 課題を「回避し」、中途半端な取組や「一歩手前」の取組にとどまる (多くは断念、縮小、不十分な対応等により課題を回避)
- 「国に言っても変わらない」という諦め感・不信感

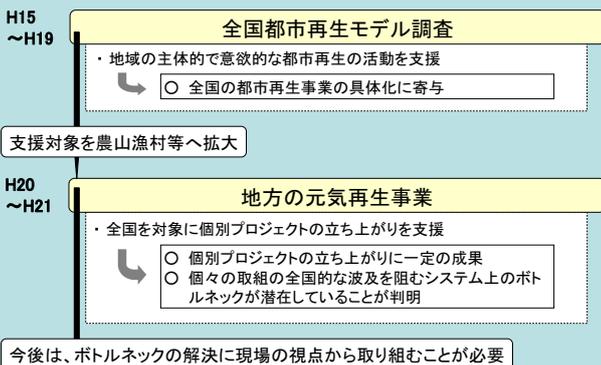
国は…

- 地域の取組に対する個別的・資金面の支援
- 顕在化した場合のみ受身・後追いつ的な対応になりがち

この状況(ボトルネック)を打破し、“地域発”の小さな挑戦を大きな流れにしたい

○本質的には、現場に近いところでシステムが作られ、運用されていく「地域主権型」の社会づくりが必要
 ○それまでの間は現場の挑戦と実践を通じて、地域の課題やニーズを把握し、現場の視点で既存システムの問題や制度の隙間の問題を解決しようとする必要がある

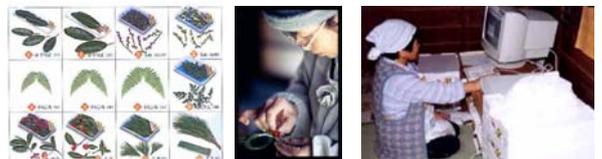
地域活性化に係る支援制度の経緯



地域自身による“地域発”の新たな挑戦の具体例 ～徳島県上勝町～

【葉っぱビジネスによる地域おこし】

- 野山の花や枝葉を日本料理を美しく彩る季節の葉や花、山菜(つまもの)として販売し、地域にありふれた資源を現金化する新たなビジネスモデルを構築。
- ITを活用して多品種少量出荷の「つまもの」の生産・出荷をきめ細かく管理することで有利販売を実現。
- 現在の年間販売額は約2億6000万円。
- 高齢者自らパソコンで情報を分析して商品出荷を行うなど、高齢者や女性の生産意欲向上、地域就業に大きく貢献(生産者：約200名。商品種類：約340種類)。



「地域資源」のブランド展開の具体例 ～千葉県南房総市(旧富浦町)～

【「房州びわ」のブランド化から観光プロジェクト展開】

- 地域の「道の駅」が中核となり、特産の「房州びわ」の出荷規格外品を原料として40アイテムを超えるオリジナルブランド商品を開発・販売。
- 観光業者、農業者、商工業等の連携により、地域の味覚狩り、農業体験などを一括して受け付ける新しい集客交流モデルを構築し、年間通じた観光客の誘致に成功
- 年間売上額は約6億円。
- 町民の約1%に当たる60人の雇用を創出。



全国都市再生モデル調査による都市再生事業の具体化について

1. 中心市街地活性化のための公共施設等整備につながったもの

(例) 埼玉県川越市 「鏡山酒造跡地利用計画」

- ・全国都市再生モデル調査において、中心市街地に立地していた酒造の跡地利用を調査。
- ・調査の結果、当該跡地を集客の核施設（飲食物や特産品の販売、ギャラリー）として活用することを決定。
- ・当該跡地の保全・活用、中心商業地区の観光地区の街路整備等についてまちづくり交付金の交付を受けて整備を実施。
- ・上記事業等を主な事業とする「川越市中心市街地活性化基本計画」の認定（平成21年6月）

2. 高齢者向け複合施設の整備につながったもの

(例) 岩手県花巻市 「花巻市たて坂通り街なか再生検討調査」

- ・全国都市再生モデル調査において、分譲マンションと高齢者向け賃貸住宅、医療、商業施設からなる複合施設を計画。
- ・地元出資による有限会社を設立し、高齢者向け優良賃貸住宅制度等の採択を受けて施設を整備。

3. 地域の景観の整備につながったもの

(例) 愛媛県松山市 「四国・松山・道後温泉歴史深う景観まちづくり宣言（マニフェスト）検討モデル調査」

- ・全国都市再生モデル調査において、100年後の道後温泉を意識した「歴史深う景観まちづくり宣言マニフェスト」「道後百年の「景」」を策定。
- ・まちづくり交付金の交付を受けて、建物の修景や無電柱化を実施。

「全国都市再生モデル調査」(H15～H19)について

○趣旨

- ・「全国都市再生のための緊急措置～稚内から石垣まで～」(平成14年4月8日都市再生本部決定)の一環として、全国各地で展開される「先導的な都市再生活動」の提案を募集し、国が支援するというもの。
- ・募集する提案は、地域が「自ら考え自ら行動する」自由な発想と創意工夫に基づく先導的な都市再生活動で、一過性の活動ではなく、当該モデル調査をきっかけとし、更なる広がりを期待されるもの。
- ・応募された提案については、相当数の調査対象を選定し、各地で活動を展開。

○応募主体

- ・①まちづくり活動に係るNPO法人その他の団体、又は②地方公共団体(原則として市町村)。都道府県については、市町村や①の団体と連名で応募する(もしくは共同で調査を実施する)場合に限定。

○募集提案と選定方針

- ・テーマの限定はせず、地域の創意工夫にゆだねられているが、以下の項目を満たす必要がある。
 - －「元気になる」全国の参考となるべき先導的な都市再生活動であること。
 - －国費による本モデル調査の対象となる取組が、年度中に実施可能であること。
- ・なお、過去に実施した調査の継続的な調査は対象としない。

○実績

- ・H15:171件 H16:162件 H17:156件 H18:159件 H19:157件 計:805件
- ・予算額は各年度とも10億円

歴史的な街並みを活かした既存ストック活用の取組 (埼玉県川越市)

提案者：NPO法人川越風の会

○全国都市再生モデル調査により酒蔵で見学会や音楽コンサートを実施、中心市街地に残されたすくた既存ストックの活用方を検討し、地域再生計画「まちづくり交付金の活用」に展開

埼玉県川越市の概要



○年間観光客数が約40%増加
約400万人(H15)→約550万人(H18)



○全国都市再生モデル調査「中心市街地における鏡山酒造跡地の活用」(15年度)
一蔵の保存・活用を目指すNPOからの提案

○跡地活用に係る地域再生計画認定(16年12月)、まちづくり交付金採択(17年度・川越市中心市街地地区)

・鏡山酒造跡地を集客の核施設(飲食物や特産品の販売、ギャラリー)として整備中。H21春完成。
・旧川越織物市場を活用した観光交流センターを整備予定。

高齢者向け複合施設の整備 (岩手県花巻市)

提案者：たて坂通り街なか再生事業推進協議会

○全国都市再生モデル調査で高齢者向け複合施設の整備計画を策定、分譲住宅部分は完成し、入居開始(19年3月)

花巻市の概要



○全国都市再生モデル調査「高齢者向け複合施設の整備計画策定」(15年度)

- ・空洞化が進化する中心市街地を活性化させるため、地元商店主や住民からなる地元協議会が提案
- ・分譲マンションと高齢者向け賃貸住宅、医療、商業施設からなる複合施設を計画

○協議会を構成する地元商店主や住民が出資し有限会社を設立、基本設計と資金計画を作成(16年度)



四国・松山・道後温泉歴史深う景観まちづくり宣言 (愛媛県松山市)

提案者：道後温泉跡れるまちづくり推進協議会

○温泉情緒豊かなしっとりとした憩いの空間や豊かな伝統を偲ばせる歴史的・文化的な空間の創出を目指して「歴史深う景観まちづくり宣言マニフェスト」を策定し、美しい景観作りに取り組む

愛媛県松山市の概要



○年間観光客数が約40%増加
約400万人(H15)→約550万人(H18)

○全国都市再生モデル調査「道後温泉を意識した景観計画とマニフェスト作成」(17年度)
・道後温泉の旅館オーナー等の事業者が主体
・ワークショップ、フォーラム、まちづくり通信発行等による地域の景観の見直し
・100年後の道後温泉を意識した「歴史深う景観まちづくり宣言マニフェスト」「道後百年の「景」」を策定

○看板等を抑制する沿道景観計画を策定(18年度)
・伊予鉄道道後温泉駅前～道後温泉本館間の電線地中化(18～19年度)にあわせる

○観光案内所の入居するビルの改修事業を実施(18年度)
・道後温泉旅館協同組合と松山市が連携



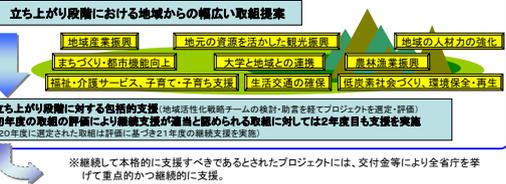
地方の元気再生事業

持続可能な地方再生の取組を抜本的に進めるため、地域住民や団体の意見を聞き、地域主体の様々な取組を立ち上げ段階から包括的・総合的に支援する「地方の元気再生事業」を推進。

平成21年度については、新規及び継続の取組に対する支援を実施。

- 画が専ら支援メニューを示すことをやめ、地域固有の条件に即した先進的な地域活動等、幅広い取組(地域産業振興、農村産業振興、生活交通の振興等)に関する提案を公募
- 公募主体は、①地域活性化に取り組みNPO等の法人、②地方公共団体、③官民連携の協議会
- 公募により広く企画の提出を求め、民間有識者からなる地域活性化戦略チームの検討・助言を経て、支援対象プロジェクトを公平中立に選定
- プロジェクトの立ち上げ段階における、地域づくりの専門家派遣や、社会実験などを中心に、その他シンポジウム、説明会による合意形成等、ソフト面を担った様々な取組を包括的に支援
- 選定後、内閣府地域活性化推進担当から、提案内容に最も関係する省庁に予算を移し替えた上で、関係省庁と提案団体との間の委託契約による調査(全額国費)として実施
- 調査実施期間は年度内(予算の繰り越しは不可)
- 調査実施後に取組の成果を検証するための評価を実施(地域活性化戦略チームに報告)、2年目の継続の可否を判断

地方の元気再生事業



地方の元気再生事業の応募・選定の状況(平成20年度,21年度)

地域類型別 応募・選定状況

◆農山漁村・基礎的条件的厳しい集落からの選定が約6割

地域類型	応募数	選定数
都市	1009件 (約54%)	130件 (約42%)
農山漁村	709件 (約38%)	138件 (約43%)
基礎的条件的厳しい集落	164件 (約9%)	43件 (約14%)

応募主体別 応募・選定状況

◆NPO等の民間法人、官民連携協議会からの選定が約9割

応募主体	応募数	選定数
NPO等の民間法人	881件 (約47%)	108件 (約35%)
官民連携協議会	670件 (約36%)	166件 (約53%)
地方公共団体	331件 (約18%)	37件 (約12%)

施策別 応募・選定状況

施策	応募数	選定数
①地域医療、安心・安全な暮らし	135件 (約7%)	22件 (約7%)
②地域交通・情報通信	121件 (約6%)	19件 (約6%)
③環境	116件 (約6%)	22件 (約7%)
④地域産業・イノベーション、農工商連携	332件 (約18%)	56件 (約18%)
⑤農・林・水産業の再生等	160件 (約9%)	29件 (約9%)
⑥観光・二地域居住	546件 (約29%)	97件 (約31%)
⑦雇用・教育	118件 (約6%)	12件 (約4%)
⑧都市機能	168件 (約9%)	28件 (約9%)
⑨地域コミュニティ・集落のあり方	186件 (約10%)	26件 (約8%)

地方の元気再生事業の立ち上げ支援による一定の成果について①

1. 取組みの順調な立ち上げが実現・進捗しているもの

(例1) 三宅島(東京都)、笠岡諸島(岡山県)、飛鳥等(山形県) 「灰干しプロジェクト」の地域再生全国ネットワーク構築

- ・三宅島の火山灰、豊富な未利用魚類を活用した保存の利く高付加価値製品「灰干し」を商品化し、全国への販売ルートを開拓、条件不利を克服する地域連携ビジネスモデルの確立を目指す。
- ・三宅島の火山灰・礫を灰干し用火山灰へ加工する実験(笠岡諸島)や「灰干し」の試作に漕ぎ着ける、生産者・販売者・専門家を組合員とする事業組合LLPが設立され自立して事業を行う第一歩を踏み出した。

(例2) 神奈川県横浜市中区 初葉・目ノ出町地区再生プロジェクト(黄金町バザール)

- ・違法特殊飲食店の追放によって生じた空き店舗の一部を借り上げ、そこを拠点にした「衣食住」をテーマにした街おこしイベントの開催等により街の浄化・活性化に取り組む。
- ・「アートの街」への移行を目指し、アートフェスティバル「黄金町バザール」を開催、黄金町バザールには10万人以上の来訪者があり、「売買春の街からアートの街」という住民意識の変化が進むとともに、NPO法人の設立が実現し、取組みが順調に連携

「灰干しプロジェクト」の地域再生全国ネットワーク構築 (東京都三宅村三宅島、岡山県笠岡市笠岡諸島、山形県酒田市飛鳥)

取組のねらい
三宅島の未利用資源(火山灰・豊富な未利用魚類)を高付加価値製品(高級干物「灰干し」)として商品化するとともに、全国への販売ルートを開拓、条件不利を克服する地域連携ビジネスモデルを確立する。

平成20年度の主な取組結果
・三宅島の火山灰・礫を笠岡諸島で灰干し用火山灰へ加工。各地の未利用魚類を活用した「灰干し」を試作し、商店街等と販路を確保。
・生産者と販売者が協働し、生産体制・品質管理・販売ルート等を検討。

評価の考え方及び次年度以降に向けた所見
未利用の地域資源の相互活用に加えて、産地間のネットワークを構築するという先進的な取組は、他の島々への波及効果・相乗効果を有しており高く評価できる。生産・管理・販売体制を整えるとともに、販売ルートの確立を図ることにより、22年度以降の発展的な展開が期待できる。

「灰干しプロジェクト」の地域再生全国ネットワーク構築 (東京都三宅村、笠岡諸島、飛鳥、島根、愛媛、宮城等)

三宅島の未利用資源を利用した「灰干し」を商品化し、全国への販売ルートを開拓すると同時に、LLPを活用し、灰干し以外の地域特産物の開発・販売・交流を行う。参加地域拡大と取扱い特産物の多様化を継続的に行うことにより、地域連携ビジネスモデルを確立する。

平成21年度の主な取組

- ① 生産者・販売者・専門家を組合員とするLLPを設立(事務局LLC同時設立)する。
- ② 20年度の3島から15島・地域にネットワークを拡大する。
- ③ 灰干し以外の地域資源の再商品化、商店街や生協など販売者のコーディネートによる消費者の産地体験ツアーを実施する。

平成22年度以降の展開
LLPとLLCが全国の生産者と販売者とともに自立して事業を行う第一歩を踏み出す。(目標:販売実績1億円) また、灰干し以外の商品も販売の段階へステップアップし、核になる商品を生み出して、LLPの多層化を図る。

LLP: 有責任企業組合
LLC: 合同会社

黄金バザール(横浜市中区黄金町地区) - 黄金町バザール実行委員会 -

◆主な実施取組の内容◆
実施取組内容・結果
「黄金町バザール」実施: 平成20年9月11日～11月30日
開催場所: 30以上 アーティスト、クリエイター、ショップ等参加者50名以上
来訪者数: 10万人以上、TV・新聞等マスコミ等掲載数: 70社以上
まちづくりワークショップの開催: 4月8日、10月1日、11月6日、3月7日
地元産品のNPO化の検討: 11月30日設立総会

◆取組実施による成果・今後の展開◆
黄金町バザール、10万人以上の来訪者
地元との協働事業の成功
市民意識の変化「売買春の街→アートの街」
NPO法人の設立まで進んだ

アーティスト、クリエイター等の更なる誘致
特徴のあるカフェ、ショップ、飲食店等の誘致
空き室の積極的な借り上げによる転用
マスタープランの作成とそれに基づきまちづくりの推進

つるか森のキャンパス元気プロジェクト

ポトルネックの事例 (山形県鶴岡市)

魚介類を販売しようとする
 ①対面で切り身にしたいが、厨房・洗い場が必要
 ②鮮魚のままの販売であっても、移動販売車への手洗い設備の設置が必要
 ⇒ 野菜を中心とした販売に限定

中心市街地の20箇所移動販売 (売上平均約1000万円、10月～3月)

「森の産直カー」の集荷及び販売ルート

「森の産直カー」による中山間部の集荷

商店街で販売しようとする、道路使用許可、占用許可が必要
 ⇒ 公共施設を中心とした活動に限定

少量生産品であっても、1つ1つの梱包にラベルの貼付が必要
 ⇒ 簡易なものであっても高齢者には困難

「スローフード運動による食農と工芸と環境融合型の町づくり推進」事業 (宮崎県綾町)

自然環境が豊富に残る地域にあって、先駆的に導入した有機農法による農作物を利用したスローフード体験やファクトリーツーリズム(機織等)など、スローライフを体験できる観光プランの提供により、地域独自の新たな産業・雇用の展開を図る。

平成21年度の主な取組

- ① スローフード・ファクトリーツーリズムを旅行会社との連携のもと商品化。
- ② 古民家等民泊施設の拡大や接客マニュアルの整備などツーリズム受入体制を整備。
- ③ 情報発信や案内機能、さらにはガイド育成等の総合窓口を担う「綾スローライフ協会(仮称)」を設立。

平成22年度以降の展開

「綾スローライフ協会(仮称)」を中心に町内農業従事者・工芸家、各種団体等との連携を拡大し、スローフード・ファクトリーツーリズムを町全体の取組として定着させ、「綾町をスローライフのメッカ」とする。

「スローフード運動による食農と工芸と環境融合型の町づくり推進」事業 (宮崎県綾町)

ポトルネックの事例

自然環境が豊富に残る地域にあって、先駆的に導入した有機農法による農作物を利用したスローフード体験やファクトリーツーリズム(機織等)など、スローライフを体験できる観光プランの提供により、地域独自の新たな産業・雇用の展開を図る。

ファクトリーツーリズム(機織体験) エコレクキング

民泊体験 地産品開発

農家だけでは対応できないため、集会所を活用した民泊体験をしようとして、
 ①宿泊をする場合、浴室が必要
 ②消防法に基づく避難などが必要
 ⇒ 集会所の活用をあきらめ、宿泊を都市部にとった滞在ツアーに限定

「スローフード運動による食農と工芸と環境融合型の町づくり推進」事業 (鹿儿岛県指宿市)

～健康な私を見つけ、もっと元気な私になる旅～ (鹿儿岛県指宿市)

地元の食材を生かした低カロリー食、ウォーキング、砂むし入浴等を組み合わせた滞在プログラムを提供するとともに、身体状況計測機器やICTを活用して滞在者の健康状態を計測し即時的に食事・運動のアドバイスなどを行う「平成版IT湯治」を商品化し健康保養滞在型の観光地づくりを進める。

平成21年度の主な取組

- ① 「平成版IT湯治」導入ホテル・旅館の拡大・組織化を図るとともに、インストラクターの育成を実施。
- ② 「平成版IT湯治」に関するWeb情報発信などに加え、旅行会社とタイアップして、来訪者に20年度に実施したIT湯治を体験頂く「お試しキャンペーン」を実施。

平成22年度以降の展開

「平成版IT湯治」の指宿地域での先行販売をとおし、健康保養滞在型観光プラン導入地域の県内普及を順次展開。さらに歴史や文化も融合した新しい観光モデルプランへの拡大を図る。

ポトルネックの事例 長寿の国 かがしま苑「平成版 IT湯治」

～健康な私を見つけ、もっと元気な私になる旅～ (鹿儿岛県指宿市)

地元の食材を生かした低カロリー食、ウォーキング、砂むし入浴等を組み合わせた滞在プログラムを提供するとともに、身体状況計測機器やICTを活用して滞在者の健康状態を計測し即時的に食事・運動のアドバイスなどを行う「平成版IT湯治」を商品化し健康保養滞在型の観光地づくりを進める。

生体基礎情報の計測 携帯端末に接続した携帯型心電計

ウォーキングや砂むし入浴

入院までは必要ない患者や健康増進に関心がある方が、温泉地に一定期間滞在しつつ温泉療法を気軽に利用できるようにするためには、利用者の負担軽減を図る必要がある。温泉療法が健康保険の適用対象となれば、長期間滞在する患者の費用負担を減らすことができる。

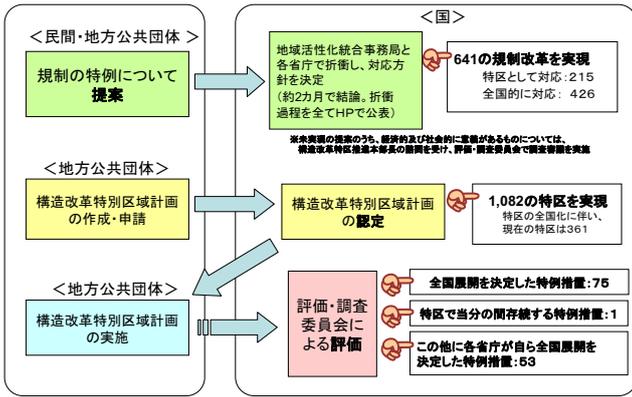
「疾病を有した人」が治療行為に近いサービスを受けたいとの要望もあるが、医療法等、法令上の制約がある。
 ⇒ 現場では、「健康な人」を対象として、疾病を有する方や治療目的の方へのサービス提供は行わず、治療目的の方に対しては連携している医療機関を紹介する取組に止まっている。

○ポトルネックの現状と現場の対応状況

ポトルネックの現状	現場での対応
空き店舗を活用して産産物等の臨時的な販売を行いたい、食品衛生の基準は固定設備を持つ店舗を想定しているため、産品別(野菜、魚介類等)に大規模な設備投資が必要。また、移動販売を行う場所の確保について、要緊等関係機関の協力が得られない	○ 空き店舗での魚介類の販売は断念し、野菜のみ販売を実施 ○ 商店街の道路での移動販売を諦め、公共施設の駐車場等で実施
古い町家や公民館等を利用して宿泊サービスを提供しようとする、旅館業法、消防法等、多数の関係法令の施設基準により大規模改修が必要となる。また、建物の風情が失われる。	○ 公民館の活用を断念 ○ 町家の一部のみの活用にとまる
刈草や伐採木を活用してバイオ燃料として加工しようとする、簡易な施設であっても、廃棄物処理施設となるため、大規模施設と同等の騒音・煙塵処理等が必要となるほか、地域との合意形成に支障。また、原料となる刈草を大量に排出する河川等公物の管理者との連携も不足。	○ 町で施設許可を取得し、民間による処理は断念
知的障がい者の探産施設における作業として旅館等の廃棄物のリサイクルを行いたいが、産業廃棄物扱いとなり、関連許可の取得に際し厳しい投資を余儀なくされる。	○ 一般廃棄物のみ対象とし、産業廃棄物となる旅館等からのリサイクルは断念
コミュニティバスを運営する際、効果的な需要調査のために社会実験的に随時料金や経路の変更を行いたい、道路運送法等の既存制度はどのような社会実験は想定していない。	○ 旅客営業となる社会実験は断念し、会員制による試験的サービスを実施
介護を要する高齢者等が外出先で介護サービスを受けることを想定しておらず、外出先での介護保険の適用を受けられない。	○ 介護保険の適用のない、高齢な介護サービスを提供せざるを得ず、高齢者が旧友の訪問や同窓会出席を断念
関係機関の連携と協力が得られない	
地域の小さな挑戦に対する理解が進まず、資金調達も困難	
システムのポトルネック解消を自ら検討するための場や、専門的知見からの助言機能、協力するネットワークが不足	

構造改革特区制度の概要

構造改革を推進し、地域の活性化を図ることを目的として、地域の特性に応じた規制の特例措置を導入する。



特区による規制の特例措置で全国展開されたもの

【千葉県我孫子市関係】

特定事業の名称	全国展開にされた規制の特例措置	実施時期	所管省庁
NPO等によるボランティア輸送としての有償運送における使用車両の拡大事業 <small>※我孫子市福祉連送センター特区</small>	福祉有償輸送について、使用車両の限定にかかわらず、セダン型等の一般の車両を使用することができる。	平成18年 10月1日	国土交通省
認知症対応型共同生活介護の短期利用事業 <small>※我孫子市認知症高齢者グループホーム短期利用事業特区</small>	あらかじめ利用期間（退所日）を定めて認知症高齢者グループホームを利用することを可能とする。	平成18年 4月1日	厚生労働省

【神奈川県横須賀市関係】

特定事業の名称	全国展開にされた規制の特例措置	実施時期	所管省庁
市町村費負担教職員任用事業 <small>※横須賀市国際教育特区</small>	教職員の給与を都道府県が負担することとする規定の例外を設け、市町村教育委員会による市町村費負担の教職員の任用を制度化する。	平成18年 4月1日	文部科学省

特区による規制の特例措置で全国展開されたもの

【神奈川県小田原市関係】

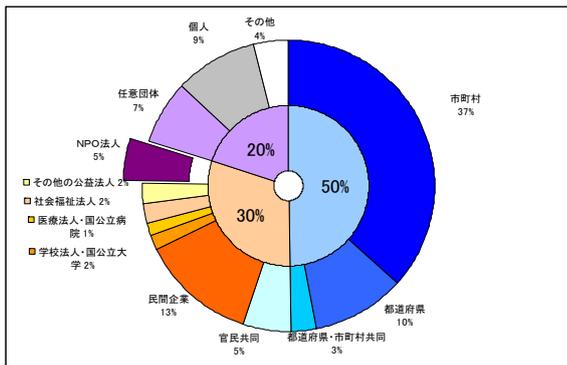
特定事業の名称	全国展開にされた規制の特例措置	実施時期	所管省庁
校地校舎の自己所有を要しない小学校等設置事業 <small>※LD、ADHD等の不登校児童生徒の間に応じた「生きる力」を育む教育特区</small>	地方公共団体が教育上又は研究上特段のニーズがあると認める場合には、学校法人の寄附行為の認可に当たり、大学等の校地・校舎については自己所有を求めないものとする。	平成19年 3月28日	文部科学省
不登校児童生徒等を対象とした学校設置に係る教育課程弾力化事業 <small>※LD、ADHD等の不登校児童生徒の間に応じた「生きる力」を育む教育特区</small>	不登校児童生徒及び不登校状態の生徒を対象とした学校において、教育課程の基準によらない教育課程の編成・実施を可能とする。	平成17年 7月6日	文部科学省

特区による規制の特例措置で全国展開されたもの

【神奈川県小田原市関係】

特定事業の名称	全国展開にされた規制の特例措置	実施時期	所管省庁
地方公共団体又は農地保有合理化法人による農地又は採草放牧地の特定法人への貸付け事業 <small>※田市農業成長特区</small>	農業生産法人以外の法人が、地方公共団体又は農地保有合理化法人から農地等を賃借できるようにする。	平成17年 9月1日	農林水産省
地方公共団体及び農業協同組合以外の者による特定農地貸付け事業 <small>※田市農業成長特区</small>	地方公共団体及び農業協同組合以外の者が特定農地貸付けを行う場合に、適正な農地利用を確保する方法等を定めた「協定」を市町村等との間で締結することを義務付け市民農園を開設できることとする。	平成17年 9月1日	農林水産省

構造改革特区提案の提案者内訳



副大臣プロジェクトチームとは

平成14年6月
共生・対流推進を政府決定

「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2002」
（平成14年6月閣議決定）
第2部 経済活性化戦略（抜粋）
2.6つの戦略、30のアクションプログラム
(4)産業発展戦略
ライフスタイルの変化が引き出す潜在需要の顕在化）
結果、平成14年度から、都市と農山漁村を両方で、行き交うライフスタイル（デュアルライフ）の実現に向け、国民運動として民間の取組、みの拡大を図るとともに、特区手法を旨の、都市と農山漁村の共生・対流を推進する。

経済財政運営と構造改革に関する基本方針2003、
閣議決定、第208頁
・都市と農山漁村の共生・対流の推進に関する記述

平成16年度予算編成の基本方針
・都市と農山漁村の共生・対流の推進
政策課
以経統統

平成14年9月 副大臣PTの設置

「都市と農山漁村の共生・対流に関するプロジェクトチーム」
都市と農山漁村の共生・対流に向け、都市と農山漁村の共生・対流を推進する。

プロジェクトチームメンバー
内閣官房副長官（政務・農）
内閣官房副長官（政務・参）
総務副大臣
文部科学副大臣
厚生労働副大臣
農林水産副大臣
経済産業副大臣
国土交通副大臣
環境副大臣

○平成14年9月
主査：安倍官房副長官
連絡農水副大臣

○平成15年11月
主査：細田官房副長官
市川農水副大臣

○平成16年10月
主査：杉浦官房副長官
若永農水副大臣

○平成18年2月
主査：長勢官房副長官
宮澤農水副大臣

プロジェクトチームによる成果 1 -規制緩和と予算の拡充-



プロジェクトチームによる成果 2 -各省の取組を俯瞰した方向付け-

都市と農山漁村の共生・対流に関する副大臣プロジェクトチームによる提言 (平成17年7月)

(ポイント1) 現場型での田舎暮らし希望の実現など都市から農山漁村への人の流れの加速化を図る

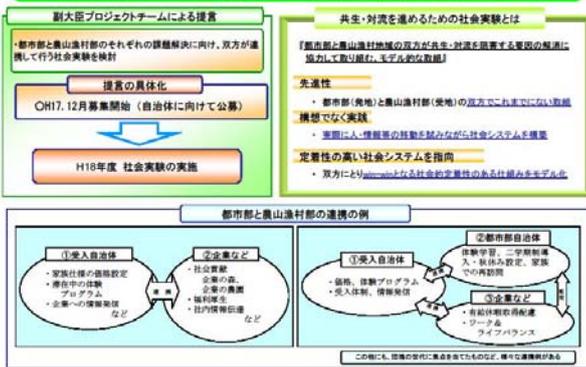
(ポイント2) 副大臣間の協議により関係省の連携が実現し、一層の推進が可能となるものに留意

(ポイント3) 提言だけでなく、今後の取組をしっかりとフォローアップ



提言の取りまとめ前後に、朝日、毎日、日経ほか、30を超える地方紙でも提言に関する記事が掲載

プロジェクトチームによる成果 3 -国民運動の新展開に向けた仕掛け-



議論したい論点

- 立ち上がり支援は必要か？誰が支援をすべきか？
 - 成功体験の連鎖の重要性
 - 存在や取り組みが認知されることの意味
 - 三位一体改革と市町村合併が地方公共団体に及ぼしたものと
- 人材力
 - 「風」の人と「土」の人
 - 中間支援機能(マーケティングなどの目利き、事務機能のサポート等)
- システムを現場から変えるには？
 - 現場に近いところにシステムを移す
 - 現場からの提案力(大学、地域シンクタンクなどの力とネットワーク)
- 自立とは？
 - 自立≠孤立
 - 情報共有と相互理解 → 協働・連携とネットワーク

栃木県における中心市街地活性化の取組み

栃木県県土整備部都市計画課

課長補佐 西村玲

司会

それでは、公開講座、足工大とVAN-NOOGAさんの公開講座、今回第5回目ということで最後になります。定刻になりましたので、始めさせていただきます。本日は県庁の都市計画課から西村先生をお招きして、お願いしたいと思います。前回は外しまして、誠に恐縮だったんですが、内閣府の方から、日本の全国レベルでの地域活性化の事例のご紹介をしていただきました。本日は栃木県にフォーカスして、どんなまちづくりが行われているかということをご紹介したいと思います。

ということで、お話しをお願いします。学生諸君も話が難しかったら、「難しいぞ」と言って結構です・・・と思います。きっと、やさしく話していただけるとおもいますが。

ということでよろしくをお願いします。まず、始めに、VAN-NOOGAの中川会長に一言、ご挨拶をお願いします。

中川会長

VAN-NOOGAの中川です。今日はお忙しいところ、西村さんにはおいでいただきましてありがとうございます。今、お話がありましたように、公開講座、最後ということでございますが、新しい試みで5回、ここまでやってまいりました。これが今後、どういうふうにもまた進められるか。前回の内閣府の方の話ですと、必ずしも明るい方向ではないような(笑)、例の、皆さん聞いたと思いますが、あまりいい返事がなかったというようなこともあって、これにどう影響するかよくわかりませんが、また何らかの形で、県にもお願いして、続けられたらいいかなというふう願っていることです。

それから県には、今年の3月の足利の観光まちづくりシンポジウムで、栃木県まちなか元気会議、ですか。という形でいろいろご支援をいただきまして、シンポジウムができたということで、だいぶ時間がたっておりますけども、この場を借りて、改めてお礼を申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。じゃあ本日、よろしくをお願いします。」

司会

はい。では、お願いいたします。

西村講師

皆さんこんばんは。

一同

こんばんは」

西村講師

どうもお忙しいところ、なおかつお疲れのところ、多数お集まりいただきましてありがとうございます。私は今回、大田原の中心市街地活性化のお話をさせていただきます、栃木県都市計画課市街整備担当の西村でございます。よろしくお願いたします。それと今日は私の手伝いのために、市街整備担当の塩田、それと渡邊です。

渡邊氏

渡邊です。よろしくお願いたします。

西村講師

この2名が私の補助をしていただくこととなります。そして都市計画課の施設計画担当の黒岩担当リーダーです。地元でもありますので、本日は、よろしくお願いたします。」

黒岩氏

黒岩です。よろしくお願いたします。

西村講師

それでは早速でございますが、皆さまのお手元に、県政出前講座ということで、簡単なレジюмеをつくりました。このレジюмеにもとづきまして、お話をさせていただきたいと思っております。最初に皆さまのお手元にある、このグリーン色の1ペーパー、こちらをご覧ください。今日は、学生の方が多いようですけれども、たぶん築瀬先生からある程度、この辺のお話は既に聞いていると思っておりますけれども、『1. 我が国の現状と都市を取り巻く社会経済情勢の変化』でございます。こちらを見ていただきますと、これは1955年ですか、ちょっと私も老眼でよく見えませんが、要するに、戦後の生産年齢人口がいわゆる高度経済成長時代に、ぐんと伸びまして、2005年には日本の人口のピークが、初めて減少に至ったというグラフでございます。それと中央付近に、2005のところには線が入っていますが、それより手前の年次は実績値、その後は推計値ということでございますので、その2つのデータがかみ合ったものでございます。これによりますと、今後、人口は間違いなく減少の一途をたどるということでございます。それといわゆる年少人口、14歳未満の年少人口、それと老年人口、65歳以上ですか。こちらについては1995年ごろ、それぞれの人口が逆転してしまった訳です。1995年までは、いわゆる年少人口のほうが、老年人口を上回っておりましたけれども、それ以降はお年寄りのほうが増えてきますというグラフです。次の、うしろ側を見ていただきますと、少子高齢化の進展ということでございますけれども、1960年から2100年に至る、これも実績と推定値ですね。左側の縦方向が人口でございます。100と書いてあるのが、これが1億人ですね。それと右側に高齢化率ということで、パーセンテージが書いてあります。これによりますと、だいたい2010年のところを見ていただきたいのですが、人口についてはこの棒グラフを読みかえまして、1億2,700万人で、高齢化率は現在、約

23%ですね。これが2050年ごろ、2050年という、あと40年後ですから学生の皆さんが、ちょうど60歳ごろの時点では、まさに高齢化率がもう40%になってしまいます。皆さんも立派なお年寄りの仲間になっています。しかも10人のうち4人がお年寄り。そういうグラフに読めると思いません。日本が今、現在置かれている状況と、今後、間違いなく人口が減少して、少子化かつ高齢化の道をたどっていきますというのが、こちらのグラフでございます。続きまして、パワーポイントのほうでお願いします。『2. 中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方』でございます。こちら、前の画面のほうをご覧ください。「中心市街地活性化の方向性の①」と書いてございますが、これまでのまちづくりの結果ということで、左側のほうから、市役所とか学校とか病院等の公共施設、こういったものがこれまでに郊外に移転されてきました。また、真中にありますけれども、郊外にはショッピングセンターが次々とできています。その結果、どうなったかと言うと、中心市街地がさびれて空洞化しています。まさにシャッター通りが多く出現しているということです。まちづくりの弊害としては、高齢者の生活利便性が低下いたします。また、各種公共サービスの効率性の低下、あるいは都市経営コストが増大してきます。そして車は当然多くなってきますと、環境に負荷がかかりますよということ、こういった弊害が出てまいります。従って人口減少、超高齢社会を迎える今後のまちづくりの方向性としては、さまざまな都市機能がコンパクトに集積した、いわゆる歩いて暮らせるまちづくり、こういったものが重要だということで、こういった歩いて暮らせるまちづくりを進めるべきでしょう、ということでございます。次に、1人暮らし高齢者の外出手段ということです。こういったデータを取ったものがございます。これをご覧くださいと、やはりお年寄りは、まず徒歩を中心としています。ある程度、公共機関が発達したところではバスとか路面電車、

あるいは地下鉄、電車を利用されている傾向にございます。従って、自動車に過度に今後依存してしまうと、自立的な生活を阻むということになってしまいますということでございます。次に、都市経営コストの増大ということで青森市と富山市。この2つの事例がちょっと記載されています。これは皆さん、ご存知かもしれませんが、青森市と富山市というのは、初めて改正中心市街地活性化法の内閣総理大臣の認定、国内で第1号を取ったのが、まさにこの青森市と富山市でございます。平成19年2月8日、初の大員認定を受けたということでございます。その後、次々と大都市ならびに、中小の都市が取ったということでございます。今日、お話しさせていただくのは、県内初の大員認定を受けた大田原市ということで、のちほど説明させていただきます。ここで、青森市はどういうことが起きていたかと言うと、過去30年間で郊外へ人口流出がありまして、約350億円の行政コストが増えたといったことが書いてあります。それと富山市、こちらも郊外へ人口が流出しました。ただし全体的な人口としては減っています。郊外に拡散したために、新たな設備投資が増えたということで、170億円ほどの追加費用が発生したということでございます。こういったことを踏まえて、やはり既存ストックがある中心部に集約をして、今後、まちづくりを進めるべきだろうということでございます。次に「中心市街地活性化の方向性②」でございますけれども、さまざまな都市機能がコンパクトに集積した、歩いて暮らせるまちづくり、これはイメージでございます。1つとしては、アクセスしやすいまち。そしてにぎわいのあるまち。そして歴史、個性を活用したまち。こういったものを求めて行くべきでしょう。その結果としては、生活者の利便性が向上し、持続可能な都市の運営管理ができます。あるいは環境負荷が低減します、といったことでございます。そして「中心市街地活性化の方向性③」でございますけれども、コンパクトなまちづ

くりを実現していくためには、中心市街地への都市機能の集約ということが1つ。そして都市機能の無秩序な拡散を防止するという、この両輪で取り組むことが必要だということでございます。矢印のところに書いてございますけれども、中心市街地の推進、都市機能の集積ということはどういうことかと言うと、たとえば言うと、市街地の整備改善、まちなか居住の推進、公共公益施設の立地促進、商業等の活性化ということでございます。あと、公共機関ですね。今回、大田原についても、まさにこの教科書にのっとったような形で取り組んだということでもあります。そしてあとは、都市計画制度の活用をして、用途の制限をするということでございます。それでは次に、「中心市街地活性化の方向性④」でございますけれども、なぜ中心市街地の活性化が必要なのかということですね。多くの中心市街地は、これまで公共ネットワークの拠点としてまず整備がされている、そういった既成事実がございます。そのために多くの人にとって、最もアクセスしやすい場所ということですね。これがまず1つ。そして都市機能とか、インフラの既存ストックが整備されています。これが2つ目ですかね。そして歴史的、文化的背景もありますということで、こうしたそれぞれの要素があいまって、地域の核として機能しうる条件が整っていますということです。では、その中心市街地はどこがいいのかという話にもなりますけれども、そうは言っても既に、中心市街地については、効率的に都市機能を集積がされていますので、1つの重要な候補地ということでもあります。次に、「中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方①」でございますけれども、やはり中心市街地を持続可能なまちとするためには、絶えず投資が行われることが必要であります。これがやはり重要だということですね。そして中心市街地が投資に値する、魅力ある空間であり続けるためには、複数の視点を持って、ソフト、ハードの両面から取り組みを行うことが重要です。真中に書いてあ

りますけれども、中心市街地の活性化のためには、先ほどの説明とダブりますけれども、たとえば市街地整備、あるいは公共交通のアクセス、まちなか居住、それから公益施設とか商業の活性化、こういったものをそれぞれ連携させてやる必要があります。続いて、「中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方②」でございますけれども、中心市街地における多様な都市活動ということでございますけれども、これまでではどちらかと言うと、まちづくりというのは行政主導型で行われてきたという事実がございます。ただそれが本当によかったのかというのが、我々行政を担っている者が反省すべきところも、大いにあるところでございます。従いまして中心市街地は、やはり商業、業務、居住、文化、医療とか、そういった多様な都市活動の展開により成り立っていますので、そういったものを実質的に活用していくということが、重要だということであります。いわゆる利害関係者、こちらの絵にも円グラフがございますけれども、実際には、まちづくりを進めるためには行政だけではなく、NPO とか地権者、もちろん一般市民の方、民間企業、商工会議所、商業者、こうした方が、複数の観点からまちづくりを担っているのが事実でございますので、やはりそうした調整役、たとえば中心市街地活性化の協議会などが必要であろうということであります。次に「中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方③」です。簡単に図式化しますと、これからの中心市街地活性化というのは、行政による投資、これは過去あるいは今後ともそうでございますけれども、行政による投資、それに加えることで新たに民間による投資、こうした相互の効果がなければ、にぎわいのある中心市街地の活性化というものが進んでいかないのかなということであります。次に、「中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方④」でございますが、これは常日ごろ、まちづくりをされている先生方の、有識者の声でござ

います。いろんなご意見がありますけれども、たとえば大切なのは、いくら税金を投入しても、民間の活力を持ってこなければ活性化はできないでしょう、という意見だとか、長期的な投資が起こりうる、そうした空間を維持できることが必要ですよといったご意見があります。続いて「中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方⑤」こちらの表では、行政と民間が担うべき割合ですかね。こちらの一番左側を見ていただきますと、まちづくりを進めるプロセスというのがございます。市全体のマスタープランということでビジョンをつくり、次にプログラムをつくり、そして事業の実施、まちの管理運営といったことで、まちづくり全体のフローがございます。最初は行政が、どちらかと言えば主導でされてもよろしいでしょうと。ビジョン、あるいはその辺までは、どちらかと言うと行政のウエイトが高い。しかしプログラムを進める以降の事業の実施、あるいはまちの管理運営になりますと、民間が逆にその役割を担っていくべきだといった考え方を明示したものでございます。次に、レジュメのほうの3番として、『3. 中心市街地活性化の法的枠組み』でございます。これはもしかしたら前回、内閣府の方がいらして、ある程度話がダブっているかもしれませんが、簡単にご説明しますと、中心市街地活性協議会というものをつくっていただく。その協議会の意見を、改正中心市街地活性化法の基本計画に反映させていただきますということです。その基本計画を内閣府に申請して、何回かやり取りをしまして、最終的には大臣の認定をいただくといった流れでございます。これはどちらかと言うと、行政、それぞれの市町村行政が担うべきものであります。ただし今までは、いわゆる中心市街地活性化法が確か、平成10年ですか。そうした法律ができて、昔は行政主導型だった訳ですね、まさに。ただし、そのまちづくりに対して、成果が出て出なくても、とやかく言われなかった訳です。むしろ、計画倒れが逆に多かったのかなというのが実態でござ

ざいます。それを国は、やはり、このままではいけないだろうということで、平成 18 年にまちづくり三法を制定しまして、そのなかの 1 つとして中心市街地活性化法を改正したわけでございます。このなかでは、今まで行政主導でやっていましたけれども、新たに民間の意見を聞きなさいということで、商工会議所、市町村、民間企業、あるいはまちづくりカンパニー、そうした方の意見を反映させなさいということです。中活法のなかでも、明確には協議会をつくりなさいとは言ってはいませんが、事実上はつくらないと基本計画の審査をしていただけないということでもあります。この辺は、今の話とダブっていますので。たぶん前回、内閣府の方がご説明されていますので、のちほど見ていただければよろしいかと思います。それで今日の主題はどちらかと言うと、大田原市の話をしてくださいということだと思いますので、ここから栃木県内初の内閣総理大臣認定をいただきました中活関係のお話をいたします。それで私だけ喋っていても、皆さんも退屈してしまうと思いますので、ちょっと私のほうから学生さんのほうにお聞きしたいのですけれども、今日お集まりいただいた学生さんで、出身が栃木県以外から来ている方は、どれくらいいらっしゃるのですか。手を挙げていただけますか。ちょっと数えて、何人。

渡邊氏

1、2、3、4、5・・・

西村講師

6 人ですかね。

渡邊氏

6 人です。はい。

西村講師

残りの方は、たぶん栃木県内ということでしょうけれども、そのなかで宇都宮を含めて、足利のほう、要するに宇都宮を含めて、南の方。たとえば宇都宮、壬生、栃木だとか、佐野、足利とかです。3 人ですか。じゃあ逆に宇都宮を含まない、

宇都宮より北だよという方はいらっしゃるのですか。ああ、1 人いらっしゃるのですか。ちなみにどちらですか。

学生 A

鹿沼です。

西村講師

鹿沼ですか。そうですか。だいたい宇都宮と似たようなところですね。要するに、私が言いたかったのは、次のページに行きますか。大田原というのは、たぶん県外の方だと、あまり知名度がないのかなど。そもそも、大田原自体どんなまちなのかなということ、その内容を把握するために、お聞きしたわけでございます。当然、中活の話だけに集中してもよろしいのですが、大田原の置かれた地形的なもの、あるいは歴史、文化、そうしたものを理解していただいたほうが、これまで大田原市が歩んできた経過のなかで、より理解がされるのかなということで、『4. 大田原市ってどんなまち』ということで、その辺をお話しさせていただきます。こちらはご覧のように、東京から大田原は、直線距離にして約 150km でございます。栃木県の絵が書いてありますけれど、栃木県は南北で何 km あるかご存知ですか、だいたい。どなたでもいいですから、ちょっと何 km ぐらいあるか。マスクをかけた茶色の方、どうですか。南北方向で何 km ぐらいあるのですかね。

学生 B

南北方向ですか。

西村講師

ええ。だいたいいいですよ。

学生 B

80 ぐらい。

西村講師

ああ、だいたいいいですね。いいと思いますね。概ね 98km と言われています。約 100km とおもえばいいですね。だいたい東西方向が、約 80 数 km ということで 100 : 80 ぐらいの、どちらかと言うと楕円形の形をしています。では次に、南北

100km のなかで、この足利市役所と大田原市役所の間。これは直線距離にするとだいたい80kmで、栃木県の北と南で、かなり歴史も文化も地勢も当然違って来るわけでございます。ちなみに県庁所在地の宇都宮市から大田原市までは約45km、宇都宮から見れば、だいたい大田原と足利は、ほぼ同じような距離に置かれています。かたや南の群馬県寄り、かたや北の福島県寄りという位置関係にございます。それと、前のページに戻して。それで約10名ですか、今日学生さんがいらっやっていますよね。参考までに、1人1つでいいですから、大田原市について、知らない場合は知らないと言って結構ですが、何か1つだけ、大田原ってこういう所だよねということで、お話していただけないですかね。順番にどうぞ。大田原市、行ったことがなければ、素直に知りませんで結構です。たとえば大田原市ってこういうのがありますよ、こういうのを知っていますよ、というのであれば一言だけ。順番に、せっかくですから。一番こちらの、黒いジャンパーを着ている方。

学生C

何があるかまでは、ちょっとわからないですね。

西村講師

知らないってことですね。

学生C

はい。

西村講師

はい、じゃあ次。

学生D

イメージが悪くなるかもしれないんですけど、刑務所があるとは聞いたことがありますね。

西村講師

ああ、そうですね。よくご存知です。はい。

学生E

大田原牛。

西村講師

そうです、はい、次のマスクの方。

学生F

知りません。

西村講師

はい、どうぞ、次の方。

学生G

なかがわ水遊園は行ったことがあります。

西村講師

ああ、そういうことです。はい、このうしろの方。

学生H

水族館のほうに行ったこと、名前がちちよつと・・・

西村講師

ええ、なかがわ水遊園ですね。はい、じゃあどうぞ。

学生I

ちょっとわからない。

西村講師

はい、わからないね。はい、じゃあ眼鏡の方。

学生J

国際医療福祉大学が。

西村講師

ああ、そういうことですね。大学がありますね。はい、茶色の方。

学生K

わからないです。

西村講師

はい。そうですか。やっぱりこれだけ離れていると、正直知らないっていうのがたぶん、皆さんの集約した意見だと思えますね。同じ大学として国際医療福祉大学があります。そして那珂川という一級河川のきれいな河川があります。そこに、なかがわ水遊園があり、淡水魚を集めた水族館があるということですね。では大田原市と距離が相当離れています足利、歴史も全然違いますね。足利と言えば、板東の足利学校ですか。あちらは室町時代が最盛期だとかおっしゃっていました。こちらの左側の上は、侍塚古墳という前方後方墳で大きさが全長100mぐらゐの古墳がございませぬ。

こちらは日本で最初に、徳川光圀公が学術調査をした古墳であります。要は古墳を掘り返した。それは何故かという、その隣に出ています、いわゆる那須国造りの碑がある訳ですけれども、いわゆる笠石のある碑ということで日本三大古碑がありまして、これはだいたい700年ごろにつくられた碑だそうです。当時この地方を治めていた那須の直葦提という方の業績が書いてあるということです。それが約1,000年間眠っていた。それを徳川光圀さんの時代に、あるお坊さんが発見して光圀公に知らせ、それを調べたら、なんと約1,000年前の、ここを治めていた方の業績が書いてある碑だということが分かった。宮城県と群馬県、そしてこの大田原ということで、日本三大古碑になっていて、これは国宝にもなっています。光圀さんは、もしかしたら那須の直葦提という方が、この古墳に祀られているのではないのかなということで、当時、掘り返した訳です。また、当時の資料も残されています。あと、残念な結果でしたが、やはり県北の人だと那須与一です。たぶん真っ先に弓の名手の那須与一ですね。もしかしたら今の学生さんは、那須与一自体がわからないのですかね。那須与一、知っている人。知らないですか。ああ、そうですか。私らの時代は、だいたい知っていますけれどね。源平合戦で、源義経が平氏をどんどん追い詰めていき、瀬戸内海に1艘の小舟が現れた。そこにきれいな女性が乗っていて扇の的を出したわけですね。それは、挑発しているわけですね。平家が、源氏に向かって、この的を射てみなさいということですが、そこで選抜されたのがこの那須与一。那須与一もいやいやながら引き受けた。弓の名手なのですからけれども、当然、海の上で的が揺れるわけですね。その距離はわかりませんが、遙か先の扇の的、それを射抜けるだけの力量があるかどうか、自信がなかった。だから再三断ったけれども、やむなく役目をおうせつつかって、それを見事に射抜いたということで、後世に伝わる有名な武将なのですね。ということ

で大田原というと、この那須与一ですから、今日1つだけでもいいですから(笑)、覚えていってください。ということで、こういった与一伝承があります。それともう1つ、松尾芭蕉は知っていますかね。何とか知っていますね。松尾芭蕉はご存知のように、俳人ですね。奥の細道ということで、日本をどのぐらいかけて回ったのですかね。何日ぐらい。1年ぐらいですかね。

渡邊氏

1年ぐらいだと言われます。

西村講師

まあ約1年近くですか。

渡邊氏

約1年です。

A氏

2週間ぐらいですかね。

西村講師

奥の細道のなかで、この黒羽に一番長く14日間いたということで、黒羽には芭蕉の館というのがあります。そしてこの黒羽には、雲巖寺という有名なお寺がございます。あと旧湯津上村ですけれども、日本一の天狗の面がございますね。それと大田原は意外と竹工芸、これが有名ですね。もうお亡くなりになりましたけれども、八木澤啓造さんという有名な先生がいらっしゃいました。今はそのお弟子さんで勝城蒼鳳さんという人間国宝になられた方がいらっしゃるといことですね。それと先ほど、何人かいらっしゃいましたけれども、このなかかわ水遊園は、平成13年にできたということですね。ここには世界の淡水魚が約230種類ぐらいいます。結構、土日は、にぎわっているということです。その下は、那須野ヶ原ハーモニーホールということで、平成6年に初めて、当時の大田原と西那須野町、現在の那須塩原市が共同で文化会館をつくったというホールでございます。はい、次でいいです。実は大田原市はつい最近、合併をしました。平成17年10月に、こちらに書いてありますけれども、これですね。今日、

お話しさせていただくのは、これ全体が新しい大田原市ですけれども、旧大田原市ということで、何か犬が立ったような形ですよ、これね。

B氏

しっぽが出て。

西村講師

何かこれしっぽみたいに見えますけども。それでここに、ちょこんと湯津上村があります。県内有数の名刹で、禅宗で有名な雲巖寺などがある訳ですね。この一市一町一村が合併して、現在約7万8,000人、まあ7万9,000人と書いてありますけども、12月1日時点の最終のデータだと、7万8,000人をちょっと切っているといった状態です。県内では9番目の人口であります。それと、大田原市の交通関係でありますけれども、大田原は一般的には東北線が通っていないという認識なのですが。実は犬のしっぽに見える所に野崎がある訳ですね。これが東北線の駅なのですね、かろうじて。ただし、大田原の中心部の方は、宇都宮とか東京に行く場合には最寄りの西那須野駅、ここまでが約3kmです。ですから隣町に行って乗るということですね。それと、東京に行かれる方は約7km先の那須塩原駅、この隣町の駅から東京方面に行けるということです。この野崎駅は周辺の方は利用しますが、大田原市民の多くは、隣町のJRを利用されているというのが実態でございます。それと、かろうじて鉄道は入っていますけれども、この東北自動車道も隣町になっています。西那須野塩原インターや最近できました黒磯板室インターですね。ということで、隣町からしか高速道路に乗れない状況です。それとさっき歴史の部分でお話するのを忘れましたけども、大田原というのは、江戸時代は宿場町として発達したところでございます。この絵柄を見ていただければわかりますけれども、だいたい大田原から放射状に、当時の街道が出ている訳です。ですから現在もちろん、周りの市町村から大田原に向かった放射状の道路が集中している訳です。そうしたいわゆる鉄

道網からはずれていますけれども、逆に道路が主役となっています。そちらについては国道294号、400号、それと461号という3つの国道があります。それ以外に県があります。大田原についてはこうした三環状、3つの環状道路。それと、少しはずれていますけれどもライズラインという道路があります。こうした3つの環状道路と8つの放射状道路で構成されたまちづくりということになっています。ですから結果的には、車中心のまちづくりになっているのかなということでありませぬ。

それと産業面では私どもも初めて知ったのですが、製造出荷額は県内では宇都宮が断トツですが、大田原市は平成20年までは2位だった訳ですね。つい先ごろ、小山市に若干の金額の差ではございますけれど、逆転されてしまった訳で、今、3位になっていますが、隠れた工業出荷額の多い町です。こちらに東芝メディカル機器という地元の有力企業さんがありまして、海外にも製品を出荷しているということでございます。おそらく地元の方でも、これについて知っている方は少ないのではないかと思いますね。あと、食べ物ですけれども、やっぱり唐辛子なのですね。大田原と言ったら唐辛子です。私も大田原に3年間、大田原土木事務所に勤務しましたけれども、道路沿いにピリ辛ラーメン店があります。ラーメンのなかに唐辛子を練り込んだラーメン。なぜかわかりませんが、羊羹のなかにも(笑)、唐辛子を練り込んだ羊羹というのがうけておりますね。あとは、先ほど話をさせていただきましたけれども、大田原は栃木県の北にありますから、那珂川あるいは箒川ですね、あとは蛇尾川、蛇の尾の川と書いて、さび川と読みますけれども、当然、川の上流のほうにございますので、水がおいしく酒造りには適したところでございます。有名な天鷹酒造メーカーなどがございます。それと先ほどの大田原牛。これは、私は食べたことがないですけれども、先ほど発言された方は、大田原牛を食べたことがあ

るのですかね(笑)。まあ、大田原牛を食べるのだったら、ほかのステーキ屋さんに行けば、その何 10 倍も食べられますから、そちらのほうがよろしいかと思います。ちょっと手の届かない高級ブランド牛だということで、私も食べたことはありません。それとよく宇都宮のラーメン店では、那須の白美人といった素材を使って、ねぎを白髪ねぎふうに割いたものがラーメンの上に乗っています。それから、そちらにフィッシャーマンがいますけども、やはり鮎のメッカでございます。那珂川の鮎というのは、シーズンになりますと太公望がたくさん押し寄せたり、ヤナがあったりですね、鮎の甘露煮とか、そうした鮎製品などが多数売られているといったところでございます。それと観光的な要素としては、大田原の祭りとして有名なのが、左側の屋台まつりですね。それとこちらの右側の下のほうが、先ほど言った、那須与一を祀った与一まつりということで、これはたぶん毎年 8 月ごろですかね、与一まつりはね。こうした催しものが行われるようであります。ということで、大田原の概略的な様相を頭に入れていただいたものですから、続いて本日のレジュメの、『5. 中心市街地活性化の取り組み』に入っております。(1)の「中心市街地の輝きを取戻せ～金燈籠が照らすまち 大田原市～」ということで、11 月 1 日に、私が栃木テレビの番組に出させていただきます。この中心市街地活性化のお話をさせていただきますものですから、こちらのビデオを約 15、16 分ご覧ください。

以降映像

司会

何でも揃って 1 箇所で購入物を済ませることができる、郊外型のショッピングモールや大型店が各地域に増えて、人気を集めていますね。しかし、町中の商店街なども賑わいを取り戻そうとする動きも活発になってきています。今回は、中心市街地の活性化についてお送りしていきます。スタジオには県都市計画課の西村アキラさんにお越しい

ただきました。よろしくお願ひします。

西村講師

よろしくお願ひします。

司会

早速なのですが、西村先生、栃木県内の商店街の状況はどうなっていますか。

西村講師

はい。宇都宮市や佐野市などの郊外には、大規模なショッピングモールが進出して人気を集めています。それに比べ、テレビをご覧になっている皆さんもまちなかの商店街を思い浮かべたときに、何か元気がないなど感じたことはないでしょうか。こちらのグラフをご覧ください。これは平成 6 年から平成 16 年までの商店街の店舗数と空き店舗率を表したグラフです。店舗数は、この 10 年間で、およそ 46%減少し、空き店舗率は 4.1%から 12.5%と、およそ 3 倍に増加しています。このグラフからもわかるとおり、現在の商店街は昔の活気を失いつつある状況となっています。

司会

少し寂しい気もしますね。

西村講師

はい、そうですね。

司会

でも、かつての賑わいを取り戻そうと、中心市街地の活性化に取り組んでいる地域というのも多くなってきているそうですね。

西村講師

はい。県内各地で、中心市街地活性化の事例が見られるようになってきました。平成 18 年に、国は、中心市街地活性化に意欲的に取り組む市や町を応援するという内容で基本方針を示しました。その方針に基づき、やる気のある市や町は、基本計画を策定し、内閣総理大臣の認定を受け、中心市街地活性化に取り組んでいます。現在、全国で 83 箇所。関東地方で 5 箇所認定を受け、栃木県では、大田原市が県内初の認定を受けました。大田原市のような人口 10 万人に満たない都市の認定

は、全国でも例が少なく、同じような地方都市を代表する画期的な例となることは間違いありません。

司会

では、大田原市では具体的に、どんなことに取り組んでいるのでしょうか。

西村講師

はい。大田原市の基本計画では、まちなかの人口を取り戻す、ということが1つのテーマとなっております。もともと生活基盤の充実した中心市街地に魅力ある空間施設を整備することで、人口回復の足掛かりにしようと考えています。具体的な取り組みは、市街地の整備改善のための事業として、再開発準備組合が整備する中央通り地区市街地再開発事業です。これは密集した住宅地に再開発ビルを建設します。ビル周辺には、住民の皆さんが気軽に歩いていくことができるように回遊路も整備します。このほか、将来を担う子供たちや市を訪れる方々に、大田原市の歴史、文化を伝えるために、屋台会館を建設します。

司会

とても壮大な計画なのですね。

西村講師

はい、そうです。そのほか、商店街活性化のための事業としては、まちなか学校事業、蔵の活用推進事業、学生サロン整備事業などがあり、ソフト事業とハード事業を織り交ぜながら、市民の皆さんに、憩いや集いの場を提供していきます。

司会

はい。それでは、計画をどのように進めていくのか。そして進められているのかご覧ください。」

ナレーション

「人口およそ7万9千人。大田原市は、源平合戦の英雄で、弓の名手、那須与一ゆかりの地で、江戸時代には、旧奥州街道の宿場町として栄え、中心市街地は、蔵づくりのある建物が点在し活気に満ちていました。しかし、最近では、集客力も低下し小売販売額は、昭和63年を100%とすると、

平成16年には、およそ50%にまで減少しています。大田原市の中心市街地のシンボルとなっている金燈籠、文化文政の頃、地元の商人たちが、町内安全を願って寄進したものです。こうした地元の思いは、現在も受け継がれ、商店街の活性化として表されました。大田原市では、この計画を地元密着で進めるため商店街が空き店舗を利用し、まちづくり推進課の職員6人が常駐して、地元と一体になって計画を進めています。」

大田原市長

「ここに昔の心のふるさと、心の拠りどころを求めて集まってくるような、そんな中心部をもう一度再編したい。こんな思いで、今回は中心市街地活性化基本計画も策定をして、これは栃木県で大田原市だけではありませんが、内閣総理大臣の認可を受けてということで、今は、平成20年11月から平成26年の3月までの5年5ヶ月間ということで、大変長期にわたりますけども、あるいは短期かもわかりませんが、この中心部に、ハード、ソフト合わせて、この街路の整備も、あるいは市街地の再開発も含めて、その他、ソフト面なども全部で36の事業を、この地域に展開していこうと。この町の裏通りも大変狭いものですから、そういう回遊路の整備なんかも初めてになりますが、これも全部整合性のとれた中心市街地を、もう一回整備していきたい、こんなことであります。金燈籠は、照らすまちと。金燈籠は人を照らす。あるいは歴史を照らす。あるいは未来を照らす。こういうテーマで、また戦略としてはそのために、この金燈籠を中心にしてもう一回心のふるさととしてみんな集まってもらう、訪れてくれる人を増やす、住む人を増やす。また生活者のための商業施設なんかも整備を図りたい。こんなことで今計画を作っているところなんです。この金燈籠は、この地域に長く住んでおられた方、あるいは最近になって移って来られた方にとっても、この金燈籠というのは心のなかに深く刻み込まれた、心のふるさと拠りどころになってますから、金燈籠中心と

した賑わいをもう一度取り戻すことによって、この地域全体を、この金燈籠だけではなくて中心部だけではなく、もっと広い範囲の明るい希望とか、将来の夢やなにかを抱いてもらえるような、そういうシンボルだっという意味で金燈籠は非常に大切なものと我々も受け止めています。ですから、これからこの地域の方とご意見なんかもお聞きしながら、この地区の整備を図っていきたいというふうに思っています。」

ナレーション

「これが、中央通り地区市街地再開発事業の計画です。まず、中央通り沿いにある空き地を活用して駐車場を確保し、商業が振興と町中の賑わいを生み出します。そして、再開発ビルが建設されます。ビルには、商業施設、市営住宅、分譲マンションや複数の開業医がテナントで入る医療ビレッジ、そして、図書館や美術館、行政窓口などが整備されます。夢膨らむ計画について、再開発準備組合理事長、中野さんにお話を伺いました。」

(中野理事長)「大田原もシンボリックなものでね、人がよく集まってくれて、年寄りも安心して歩けるような町並みにしたいと思ってます。見ての通り、ちょっとシャッターが閉められてるところが多いので、賑わいっというものが薄れてきたので、やっぱりここにもう一度、荒町という商店街を復活させたいなあという思いです。」

司会

この計画に対する地元の方々の意気込み、そして、熱心さというのが伝わってきますね。

西村講師

はい。全国的に少子高齢化が進むなかで、そこにお住まいの方々が、町の将来をイメージし、真剣に取り組んだ努力の賜物だと思います。ここにたどり着くまでは地元地権者の方々、市の担当者には大変ご苦労があったと聞いております。

司会

そうですね。ところで、この計画に対して、県では、どのようにバックアップしていくのでし

ょうか。

西村講師

はい。県では中心市街地活性化を支援するために、通称中央通りの金燈籠交差点付近から北へおよそ 850 メートル区間の道路を整備します。道路付近は 10 メートルから 16 メートルに。歩道は、両側 3.5 メートルに広げます。また、現在変形した、食い違いとなっている危険な交差点を解消し、まちなかの中心部にふさわしい道路に整備します。なお、道路を整備する区間は電柱をなくすことで、歩行者にとって安全な空間を確保し、すっきりとしたまち並みにすることで、景観の向上を図ります。

司会

はい。では、道路や基盤整備などと同時に、町をどのように活性化させるのか。こちらをご覧ください。

ナレーション

「この地区では、土蔵や店蔵が多くあることから、それを利用した蔵の活用推進事業が、すでに平成 19 年から始まっています。あらまち蔵屋敷は、一際立派な店蔵で、もとは金物屋さんでした。今は、七味唐辛子や、昔懐かしい駄菓子を扱っていて、子供たちに人気を博しています。また、蔵屋敷の一部を活用して、甘味処、クラの華フェがオープンし、土曜日、日曜日には、女性客でいっぱいになるそうです。この蔵の管理・運営は、株式会社大田原まちづくりカンパニーが行っています。まさに、民間参画の表れです。」

萩原社長

「この蔵屋敷は、そもそもこの土蔵が明治 41 年に建てられまして、この大田原の経済史を物語るにはなくてはならない土蔵屋敷でございました。つい、数年前まで、こちらも、店舗の事務所として、お使いいただいていたんですが、それが、人にわたるといようなことがございまして、それではせっかくならば、子供の数も少なくなって非常にまち中が寂しくなってきたと。そういう意

味では、駄菓子でも販売をさせていただいて、子供たちの居場所づくりにも、兼ねようと、それと同時に、お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんも一緒に来ていただく。それが町の賑わいの創出にも繋がるのではないかとということで、スタートさせていただきました。まずはこの中心市街地に人が安心安全に暮らせ、そして快適に交流ができる場をまず目指すという考え方のもとにスタートしてるわけでございまして、やはりそれを大事に考え、そういった安心安全で快適な町になって、周りから人がたくさん憩いを求めておいでになったところで、やはり商業ですね、そういう皆さんのために、積極的に活用させていただくという考えでおります。」

ナレーション

「また、大田原市は、かつて唐辛子の全国有数の産地で、現在では唐辛子を生かしたまちづくり事業として、全国に誇れる唐辛子商品の開発を進めています。春から秋にかけて、緑、黄色、赤と変化する唐辛子は、街ゆく人たちらを楽しませています。まちなか学校事業はイベントを計画して、もっと近隣の住民を中心市街地に呼び込もうとする計画です。独自のイベントは、市民の皆さんの興味を引き成功しています。中央通りに面したお店、bsp カフェ。ちょっとしゃれたネーミングですが、それもそのはず、ここは学生サロン整備事業として、地元と医学生が運営するお店です。もとは雑貨屋さんで営業は夕方から。交通安全のため、お酒はなし。第1第3土曜日の午前中は、社会福祉法人あいのか福祉会とのコラボレーションで、手作りパンを販売しています。地域の活性化と障害者の自立支援の促進に役立っています。」

大田原市長

「昔から大田原は、商業、あるいは行政、教育、文化いろんなものの中心であったわけですので、こういったものが今、かなり拡散していますけれども、やっぱりどこかに、みんな中心っていうのは欲しいと思ってるはずでありますから、

大田原市はそういった県北の役割も果たしていけるような町にしていきたい。その中心がこの中央通りでありまして、この大田原の中心市街地活性化事業が成功できれば、これは、栃木県のあいだで、よその市町村における、やはり市街地の中心部の空洞化に困ってる方々にとりましては、第2弾の、あるいは第3弾の中心市街地活性化の事業があと続いてくるんじゃないかと、こう思っておりますので、新しい町とあと古い町の再現を図りながら、新旧、合いまった魅力のある生活空間を出現させていきたいというふうに思っています。」

司会

中心市街地の活性化が大田原市周辺の地域の活性化にもつながってきますから、本当に積極的に進めていきたいですね。

西村講師

はい、そうです。

司会

さてこの大田原市のほかに、県内ではどんな取り組みがあるのでしょうか。

西村講師

中心市街地活性化を応援するため、栃木県と市や町で、栃木県まちなか元気会議を作り、全国の中心市街地の視察や事例の研究、まちづくりに情熱を持った人たちの体験談をうかがうことで、それぞれのまちづくりに役立てております。また、会員である宇都宮市は、現在、中心市街地活性化基本計画の総理大臣認定を受けるための準備を進めているところです。なお、県庁内のまちづくりに関係する部署を集め、まちなか元気応援団を作り、情報を共有することで総合的に支援しています。

司会

はい。では最後に、今後の中心市街地の活性化に向けて、一言お願いします。

西村講師

はい。今後も少子高齢化、人口減少は避けられません。高齢者や子供たちが安心して生活できる

町の再生に向け、県民の皆さんと、市や町、そして県も力を合わせ、中心市街地の活性化をきっかけとし、かつての輝き、賑わいを取り戻せるよう全力を尽くしていきたいと思えます。」

司会

それぞれの町が、そこに住む皆さんとともに、より一層賑わって行くといいですね。

西村講師

はい。

司会

西村先生、どうもありがとうございました。

西村講師

ありがとうございました。

映像終了

西村講師

8 時になってしまいましたので、あと簡単に次の(2)「大田原市中心市街地活性化基本計画の基本方針」、(3)「中心市街地活性化基本計画事業」この辺をちょっとお話しさせていただいて、皆さんと意見交換をかわしたほうがよろしいかと思えます。だいたい今、見ていただいてわかったかと思うのですが、最後のほう、こうした2枚もののカラーのレジメがあると思えますけれども、これが大田原市の中活関係、中心市街地活性化基本計画のダイジェスト版でございます。詳しい説明をしていますと時間がなくなってしまうものですから、はしおって、グラフのほうはのちほど見ていただければわかると思えます。まず、大田原市の現状としては、市内の中心部が、かつてにぎわいがありましたけれども、現在はシャッター通り化しているということでもあります。そして少子高齢化が進んで、今後ますますその傾向が顕著となり、まちの空洞化に拍車がかかるといったことが現状であります。そしてそのまま放置しておきますと、町の中心部が衰退して、生活する上で支障をきたしてしまうということが現状です。従って、その課題というのは、やはり中心市街地が今後も、地域住民の生活に欠かせない場所であり続けるため

に、これまで蓄積してきた都市機能を活かしながら、快適な空間、あるいは新たな機能をつくり出していくことが課題となっております。ということでその方針として、何をしたらいいのかというのが、こちらの放送がありましたけれども、中心市街地活性化基本計画の内閣総理大臣認定を受けましょうと。この認定を受けるとどうなるの、という話ですけれども、国からさまざまな支援を受けることができるわけでもあります。たとえば、100 を超える事業の採択が可能になったり、まちづくり交付金という、交付金の補助率が40%から45%になります。あるいは税制の優遇措置があります。そして、経済産業省の戦略補助金の採択が受けられます。それと、大田原についていえば、先ほどの市街地の再開発ビルの事業が出ていましたけれども、都市局の市街地再開発事業の採択が受けられますということです。それと、こうした中活の認定を受けると、暮らし・にぎわい事業などの採択も受けられます。

それで今回、大田原については、次のページをめくっていただきますと、基本計画の基本方針ということで、テーマは先ほど市長さんが何遍もお話ししたもの、内閣府に出した3つの大きな柱ですね。それがここに記載されています。まず1つは、訪れる人を増やしましょうという戦略ですね。次に住む人を増やす戦略。そして商業活性化の戦略ということでございます。現在の状況が、歩行者、二輪車に限定して見ますと、平成20年、1日あたり2,301人という数値を、目標を平成25年に設定しまして、それを3,000人までに上げましょう。まちなか居住推進ということにおいては、中心市街地の定住人口を、平成19年3,104人を、平成25年に3,150人にしましょう。これは数値が一般論からすれば、たった46人しか増えてないという話なのですけれども、最初に見ていただいたように、今後、日本の人口が右肩下がりになってきます。従って、そのまま放置しておけば、間違いなくマイナス方向に行くものを、少なくとも

同じレベル、大田原については若干増やしましょうということ、マイナスになる部分をプラスに持ち上げるということです。数値以上に実際は大変な取り組みなのではないのかと思われます。あとは商業関係ですけれども、小売りの販売額を、平成 19 年の時点で 110 億円が、平成 25 年には 120 億円にしましょうということであり、最後のページをめくっていただきますと、基本計画の事業ということで、赤のてん・てん・てん、こう矢印でこう囲ってあるところ、これが今回の中心市街地を活性化させようというエリアでありまして、これは 90ha でございます。ただ 90ha と言っても相当面積が広いですから、そのなかの特に黒で斜めに横断している線があるのですけれども、こっちは入ってないかな。

渡邊氏

入ってないですね。

西村講師

ないですね。この黒いところが対角線方向に、左から右方向に下がっているこの黒の部分、これが旧国道 400 号ということで、先ほど 850m の区間を整備しますという説明をしましたけれども、このいわゆる中央通りを、特に活性化させましょうと。それにあたっては、市街地再開発事業ということで、こちらの、ピンクの反対側の、黄色っぽい部分ですね。こちらに出ていますね。こちら側は、先ほどの旧国道 400 号・中央通りですね。それと国道 461 号は、現在、この道路沿いも歩行者・二輪車の交通量が大きく減少しています。こちらのグラフの交通動向を見ていただきますとわかりますが、特にこの辺が、すごく落ちているわけですね。ですからどこかで流れが変わってしまった。都市計画道路の環状道路が整備されて、ショッピングセンター等が次々にできた訳です。20 数店舗が環状道路周辺にできてしまった訳です。この 90ha のなかでとりわけ中央通りを中心として活性化しましょう。

その起爆剤というのは今回、こちらの市街地再

開発事業、これをてこ入れしながら、この周辺を活性化させる。ハード事業とソフト事業、それぞれをこちらに傾注させるわけでございますけれども、たとえば先ほどのなかで新たに市街地再開発のなかには美術館、図書館といったものをつくって、1 階にはショッピングセンターを入れて、2 階には市の窓口、3 階には図書館、4 階には美術館が入ります。スーパーが入って、図書館・美術館・高齢者用の住宅等が入りますということで、これが完成予想ですね。今、若干変わっているのかな、少しね。こうした再開発事業を入れながら、この周辺のてこ入れをする。この赤の部分には残念ながら、現在、ショッピングセンターがない訳ですね。ですからお年寄りにとっては、非常に買い物が困るわけです。しかも歩いて行く範囲には、こうしたショッピングセンターがなかったり、あるいは病院がないということで、そうした機能をこちらのビルのなかに入れていきたいと思います。高齢者、あるいはその他の人にも、優しいまちづくりをしていきたいと思いますという取り組みをしております。時間の関係上、この辺で説明を終わらせていただいて、あとは意見交換のほうに臨んだほうがよろしいかと思っておりますので、以上でございます。

司会

はい。どうもありがとうございました。

(拍手)

司会

大田原市の、中心市街地活性化事業の事例を紹介していただきました。足利市よりもちょっと大変そうな感じもありますが、ぜひ、活発な意見交換をお願いしたいと思います。

どなたからでも結構ですので、今の西村先生のご紹介に対して、ご質問あるいは意見があれば、ぜひお願いしたいと思います。それから学生諸君も、多少専門用語なんかあって、難しいところがあったかもしれませんが、それも含めて質問してください。私も 1 回、お邪魔したんですが、

確かに中心市街地は、ものすごい元気がなくて大変だなというふうに思ったんですが、この図面のなかで下のほうを見ますと、ちょっと字が小さいんですけども、ベイシアの大田原店があるところなんです。カインズホームの大田原店があるんです。基本的にはこの外周道路沿いには結構、いろんなもんが出てますよね。

西村講師

そうですね。はい。

司会

ええ。ですからある意味、足利もそうなんですけども、皆 50 号沿いに出てしまっているとかですね。ですから本当に大田原市の人は、どの程度困っているんですかっていうのは、すごく率直な言い方ですけどね。

西村講師

買い物はやはり主婦の方が中心だと思いますので、おそらく栃木県内、特に県北だと免許保有者も多いことでしょうから、たとえば、若い 20 代とか、20 代から 60 代ぐらいの方にとっては、免許を持っていけば、比較的利便性が高いところ、こうしたショッピングセンターがある所に行かれる。だけど免許のない方ですね、そうした方にとっては、今まで近いところに小さなお店、いわゆる昔ながらの商店街があった訳です。けれども、やはり足腰がこれから間違いなく弱ってまいりますから、今後 10 年、あるいはその先を睨んで行くと、歩いて行ける範囲にそうした毎日食べるお店というのは、必要になってくるのかなと思いますよね。

司会

現実はどうなんでしょうね。足利市に照らし合わせるとよくわかると思うんですが、皆さんこの辺だと、トンネルの向こうに行ってみたり、川の向こうに行ったりするわけですけど、実際はかなりの方がこの周辺に住んでいらっしゃる。で、今おっしゃったように、本当にまだ歩けるうちはいんだけどっていう、その部分って、まちづくり

としてどう考えているかということだと思うんですね。だけど僕ね、ちょっと個人的に、誰もたぶんこの中心市街地に、ああいう再開発ビルをつかって便利になるだろうっていうことに対して、反対してる方はいないし、皆、そうだというふうに支援されているんだと思うんですが、どうなんでしょうね。本当に、どれくらいの買い回り品とか、どれくらいの利便性というのが中心にないといけないんでしょうかねっていう。

A氏

買い回り品に関しては、必ずしも中心になくてもいいでしょう。たとえば大田原だと電車や車で行けるだろうし、あと周りがヤオハンでヤオハンのほうも影響が多いですからね。ですから、まず昔で言うと、買い回り品のほうの 1 つの中心に置いてっていうまちですと、実際に買い回り品やった地方都市で、うまくいったまちはないわけですよ。

はっきり言って、すべて国の政策で、たとえば足利市だったら買い回り品中心の商店街は、買い回り中心でいいでしょう。で、最寄り品のほうは少し街中という形になっている。中心にどんどん人々が来なくなって、まちが衰退していったんですね。だから買い回り品中心にもっていくという考え方自身は、すでにもうとっくに成り立ってなかった。富山なんかでも、来てるのは来たりなんかすることはありますけど、再開発ビルで買い回り品がうまくいってるっていうのは、あまり実は、仙台では見えていますけど、あまり見えないですね。

司会

一所懸命計画立てて、実行されている方に対しては、ちょっと辛めの意見なんですけど、現実的に今、買い物のこともある。だから本当に、たとえば自分で自動車の運転ができなくなった方とか、そういう方が本当に必要とされているのは何なんだろう。その辺を、たとえば学生諸君なんかも、どう考えますかね。まあ、なかなかぴんと来ない

と思うけどね。自分が歩けなくなる、何 10 年も先っていうのは。

塩田氏

よろしいですか。

司会

どうぞ、どうぞ。

塩田氏

県の担当からで申しわけないのですが、買い回り品というと、やっぱり大型のショッピングセンターみたいなところが、にぎわっているような状態だと思うのですが、大田原で1階に持って来ようとしているのは、日用雑貨、いわゆる本当に歩いて、昔ながらで言えば買い物に行っ、て、買い出しをして、それで一生使ってるようなものを買うようなところを、1階に持って来ようとしています。イメージとしてはショッピングセンターとはまた違ったような意味合いで、1階、ワンフロアですね。さっきの再開発の1階を考えておまして、やっぱり日常品的なところ、いわゆる通常に使うもので、家から出たらすぐ買いに行けるようなところのものを、その1階の店舗として、スーパー的な形で考えている訳ですね。だから、何て言えばいいんですかね、普段、地元に着したようなところの店舗が、中心市街地がないといけないっていうような状態なんじゃないかなって、私的には考えています。

司会

ですから、買い回り品という言葉の定義があまりしないまま、ちょっと議論してしまったってことがあるんですけども、本当に大事なもので何なのか、ですね。あえて、ちょっと非常に来ていただきながら、挑発的なことを言っているのも少し議論を、というつもりもあるんですが、コンビニではいけないわけですね。っていう、その部分ですね。

塩田氏

今の、コンビニ的なところでもいいと思うのですが、今、コンビニとしても、コンビニだけ

じゃなくて、もうちょっと生鮮スーパーとか、そういったものとかも含めたコンビニ的なところよりも、少し広げたようなものも展開していくようなこともできていくと思うんで、そういったところがまちなかにできて来ればいいのか、と、思っているところです。

西村講師

だいたい今、この地域の高齢化率は、大田原市の方からお聞きしましたが 26%ぐらいですか。約 30%前後の町内が、結構、多いらしいです。そうしますと、コンビニというのは当然、若者が求めるものが多いわけですから、たとえばおにぎりであり、ラーメンであり、そういう類のものだと思う訳ですね。だけど私よりちょっと上の方、要するに日々食べるもの、生活必需品、そういったものはコンビニじゃ揃わない部分があるじゃないですか。東京のローソンは別ですよ。地方においてはそうした野菜類、たとえばお米もそうかもしれませんけども、あるいはちょっとしたもの、コンビニだとちょっと高いけど、スーパーだとちょっと安いものですよ。たとえば石鹸だ、歯ブラシだ、日々使うものですね。そうしたものをとりあえず、もちろんコンビニにもありますけども、もちろんその品物はたぶん、一部重複するものがあるでしょうけれども、基本的には若者からお年寄りまで、日々使えるようなものを揃えるような方向で行くと。そういうお店にしたいということですね。

A氏

いわゆるネバーフードショッピングセンター的な感じっていうことなんですね。結局、ネバーフード、近隣型っていう形だけど、コンビニはあくまでコンビニエントで、便利性を追求してますよね。

司会

ああ、そうですね。

A氏

だから便利性をあくまで追求するものであるけ

れど、生活のすべてを 3,000 アイテムで商品化できない。そうすると、だいたい 1 万 5,000 から 3 万アイテムやるためには、ネバーフードショッピングセンターが普通になっているという形で、日常的なものをまかなうようなショッピングエリアが必要になってくるんじゃないかっていうことですかね。

司会

足利で言うと、そのフレッセみたいなものが、

A氏

もうちょっと。

西村講師

そうですね、確かに。

司会

ですかね。何か議論として、イメージをしないとわかんないと思うんですけど、だからフレッセが、もし逆の言い方をすると、ここにフレッセがないとしたら、えらいことですよ。」

B氏

きっとね。

A氏

お年寄りが大変なことになる (笑)。

黒岩氏

実際に都会なんかでも、そういう商店的なところがだいぶなくなってきて、地元に住んでいるお年寄りの方なんかも、買い物に不自由を感じてるっていう都市難民が出てきてるみたいなんです。」

A氏

お店がでかくなって、そこまで行くの大変ですからね。

黒岩氏

そうですね。郊外まで行ける足があればいいんですけど、そういったところは、車とか利用できない方については、やっぱりまちなかに何かしら生活の、そういうニーズを求めるところがないと、かなり厳しい状態になっているというのが現状です。

B氏

ちょっと別な 3 つの戦略が示されていますよね。こちらを増やしてカバーしてということで数字的には平行だけど、減るのをそれで

西村講師

下がるものを、そうですね、上げるということですね。

B氏

減らないようにして、現状維持にちょっとプラスと。

西村講師

はい、ええ。

B氏

それはなかなか大変なことだと思いますけれども、そこを戦略として、何か具体的に示されてるのかどうかということも、もしあれば教えていただきたい。

街路事業なりね、何か事業。それ 1 つと、足利もこの辺、小さな世帯約 30% 超えていますよ、高齢化率が、40% ぐらいになって独居になっていますけれども、ちょっと変な言い方すると、時間が経つと、要するに高齢化率が下がるんじゃないかと。それでむしろ周辺のほうが、どんどん高齢率が。

司会

ああ、そういう、どっかで逆転するかもしれないですね。うん。

B氏

上ってるんじゃないか、うん。ちょっとね、あんまりそういうこと言いにくいけども、だんだんお年寄りも亡くなっていくことになっていくのでね。で、高齢化がなくなっていくんじゃないかと思うけれども、しかし人口は明らかに減る。そういうなかで、やっぱり若い人とかね、そういう人を持って来ないと、なかなか活性化しない。あるいは現状維持、だいたいそうですね、だいたい建物もうほとんど、住み替えができないという状況になってますからね。そうすると、じゃあ本当に人を増やすってどうしたらいいのか。

この間も、働く場所があれば、若い人も来るん

じゃないか。そうするとじゃあ働く場所をどうするか、そういう連鎖でいろいろやらなきゃなんないことがある。大田原の場合は何か工夫して、若い人に住ませる方策というかね、というようなことで何かやっていますか。

西村講師

大田原の場合は、先ほど学生さんから出ましたけど、国際医療福祉大学がある訳ですね。そこに1年生から4年生ですか、常にそうした若い層がおりますから、それをできればこうした町の中心部に持って来られればいいのかなのというのがやっぱり根底にはあるようですね。

B氏

今は、あんまりないんですかね、産学連携。

西村講師

まあ、やはり大学周辺のほうが、やっぱり近いという利便性がありますからね。

B氏

足工大もそういう状況ですけどね。

A氏

中心部からかなり離れてるんですね。

西村講師

離れちゃいますね。

B氏

どうしても学校自体がね、できるときにそういう条件を出してしまうから。」

A氏

今もう町村で言うと、もってこいって。

西村講師

ええ。そうですね。それと先ほど、大田原の隠れた工業出荷高、3番手の東芝があるということで、大田原市の方はどちらかと言うと、東芝関係の方とか、その辺をターゲットにしています。こちらの公的な部分もありますけれども、実は分譲マンションも今回、入っている訳です。ですから分譲マンションについては、ある程度大手の企業さん、地元に住んでおられる東京から来られた方をこちらに。つい先ごろもそうした、まちなか散

策のなかで、紹介しているようですねけれども、その辺をターゲットにしているようですね。」

A氏

北関東のほうは製造出荷額でいくと、東芝も含めて異様に伸びてるわけですよね。ただし雇用乗数っていう形でいくとどうなんですか。そこに大会社はいっぱいあるんですけど。

西村講師

そうですね。まあ、製造出荷額は多いけれど、人がどのくらい実際雇用されているかというのは、結局、この製造出荷額がいくら多くても、あまり関係ないわけですね。だからそこら辺の問題があって、大企業、中小企業がもともとあったとこじゃないですよね。

A氏

で、大田原は市街地はわかりますけど、この地図通り、全部1つにまとまっているわけですね。その中心は旧奥州街道ですね。ですから、まちとしては非常にまとまっていて、もともと流通文化の中心だったわけです。ですから今、衰退したって言うけど、実はなかなかいいソフト構造を持ってまちでして、ですけど、どうも中小企業が昔からあったっていう話聞かないし、そのあとからも来たって話も、実は聞いてなかったんですけど、大企業入ったのは知ってるんですけど、だから雇用乗数的には、そんなにどうなのかなと思うんです。

西村講師

確かにそうした先ほどの、東芝は野崎というところですか、野崎工業団地。あそこで、ぐんと稼いではおりますけれども、やはりもともとの企業というのは、そうない訳ですよね。大田原にはやはり役所とか、そうした公的機関、あと県の出先機関があり、いわゆる県北の拠点都市ではありますけれども、いわゆる大手、中小以上の企業はそうはない訳ですね。我々の関わり方から言えば、橋梁メーカーとか、そうした会社が2社程度はございますけれども。

B氏

足利のプランではございません。再開発の絵なんか見ると、そのものとしては足利も同じような構想あるわけですからね。

C氏

足利がやったようなと同じような、というものを計画はしても、民間はついて来られないっていうのが一番ですよ。

B氏

そういう状況で、危惧されてるあたりはあるんでしょうけど。

西村講師

この絵柄を見ると、実は大田原市の方には大変申しわけないですけども、県からすると、これはちょっと違うのではないかという意見ですね、我々としては、もっとコンパクトな、いわゆる5階建て位に収めるべきではないか、いわゆる身の丈にあった再開発を目指すべきではないのかということです。ただし、大田原市の場合、公営住宅とか分譲住宅の部分については、極力、日当たりをよくしたいL字型の建物にしているものですから、そのぶん、ぐんと上に伸びている訳ですね。だけどそれは押さえるべき、要するに、総合的なコストがやっぱり、跳ね上がってしまいますから、下げるべきではないのか相当議論はした訳ですよ。

司会

今、身の丈っておっしゃいましたけど、今、再開発も「身の丈再開発」という言い方をしまして、結局、あれだけ上げるとおそらく、低層部分に対して、相当でっかい柱が出るんですよ。そうするとその柱の位置によって、店舗配置みたいなものが相当制約されてくるはずなんですよ。

西村講師

そうですね。

司会

だからむしろ、容積率を目いっぱい使うんじゃなくて、容積率を余してもいいから、1階部分の低層フロアを広く使えるような仕掛けにしたらどうかっていうのが、今ちょっと再開発のほうの動

きになりつつあるんですよ。

容積率いっぱい使って、単純に最大効率みたいなものを要求するよりは、容積率を余らせてもいいから、各ブロックごとで使うとか、1階部分の低層階の梁を減らして、使い勝手をよくするとかっていうほうが、実質的にいいんじゃないかっていう動きが実は出てまして、それを考えるとちょっと懸念があるんですよ。

西村講師

なるほど。

A氏

公団住宅。

司会

えっ？公団も今、やんない。

西村講師

だからこの敷地面積、0.65haということで、6,500㎡な訳ですね。これは宇都宮で言えば、二荒山の前のパルコ。パルコくらいの敷地面積らしいですね。ただ宇都宮の場合は若干、前面に大通りというか、広い道路もありますから、そんなに違和感がないのかもしれないですけど、ここは、正直言って公共の空間というのがない訳ですね。歩道のところから2mぐらいセットバックしたら、いきなり13階がボーンと建っているわけですよ。非常に圧迫感のある、通常、再開発をやると憩いの空間的なものが創出されるわけですけども、それが今回ないのがちょっと、残念なところなのですよ。

A氏

道が狭すぎるんですよ。

西村講師

まあ今回、10mから16mで、広くはなったんですけど。

C氏

だから、この道が、そこで16m、13階でぼんと出ると、かなり。圧迫感がありますよね。

黒岩氏

この再開発だけを考えたときに、まあそうい

う形なのですが、ここの商店街の方々があまり広からず、狭からずの道路にしてくれと。それが16mなのだというこのようですね。

A氏

私は商業コンサルタントの立場で考えるとだいたい10m以内なんですよ。で、世界で一番広いところが20m。これはそれ以上広がると、商業が成り立たない。しかも車、走っちゃいけないんです。これが基本的な商業の道なんで、16mなんて中途半端すぎて、どうすんだって話なんです。だからそんなもの、今さらつくるってのが間違いで、車通さないで10mにして、このままにしたほうが、はるかにいいとは思いますが、大きなお世話だったんで(笑)。

西村講師

ここはたまたま、歩道が1.5mぐらいですね。この延長線上に大田原女子校がございますから、非常に学生さんの自転車が多い訳ですよ。だから今回は、車道は広げないですけども、歩道を広げる形ですね。

A氏

あそこは車道が、確かに狭いんですよ。歩道がないと同じ。

西村講師

歩道が、そうですね。1mから1.5mです。

A氏

ただ横には、この形なら、すべてずらすことできますよね、この場合はね。それにじゃあ、真ん中に集中していたんだけど、ある意味じゃあ横にもそらせる可能性は十分あったね。

司会

ちょっと話が専門的になって、学生諸君も容積率なんていうと、なんか習ったような気がするとか、たぶんそんな感じかもしれないけど。

ちょっと話を変えて、もし家賃がね、今だいたい、足工大の前で4万円ぐらいかい。ひと月ね。ここから仮にいくらだったら、たとえばその辺の空いてるところに、部屋貸してくれるとすると。

この近辺でね。いくらぐらいだったら、住んでいいと。遠いよね、はっきり言ってね、大学行くまで。だからさっき言ってたように、こちらの国際福祉大学の学生さんに住んでもらいたいとしたらさ、きっと家賃安ければ来るんじゃない。だから君たちの立場で言うと、いくらぐらいだったらここで住んでみる。

B氏

だから家賃と足の問題。

A氏

込みで、バス。

B氏

バスがあるとして、家賃はいくらなら。そのセットで来るかな。

司会

J君、どうだい?

学生J

バスがあったとしても、地元にもあるんですけど、やっぱり1時間に1本とかじゃ不便なんですよ。

B氏

うん、そうだよ。

学生J

やっぱりバスがやっぱり本数がないと。やっぱりそのぶんコストがかかっちゃうと思うんですけど、利用する人たちから見ちゃ、やっぱり多いほうが。

司会

何本、最低。

B氏

今のスクールバス程度じゃだめ?

学生J

まあ、厳しいとは思いますが。

B氏

2本ぐらいか、多いときは、1時間に。

学生J

1時間に1本あれば。

B氏

1本か2本。

学生J

2本もないです(笑)。

B氏

いやいや、今、現状は1本か2本。スクールバス入れて。足もかなり大きいよね、足の問題はね。

司会

それで、仮に時間3本あったとするじゃない。時間3本あって、家賃がいくらだったら住む。

学生J

学生だったら、やっぱりお金がないと思うんで、やっぱり5万円以下。

司会

いや、そらそうだけど、ここで1時間バスが3本あって、今と同じ面積のところ、家賃がいくらならここに住む。2万、3万。」

学生J

ほかのマンション、周りのマンションと変わらなければ、たぶんいい。

司会

今の、足工大の前のマンションって意味だろう。

B氏

何万ですか。3、4万。4万、5万。」

司会

それでも、バスがあれば来る。僕は感覚的にわからないんだけど、たぶん家賃半分にしないと来ないとか、そういう話ではない。

学生J

そういう話ではない。

B氏

先生は、いくらなら来ますか。

司会

そうですね。私も、やっぱりいいとこ、5万を超えるようだったら、入らないと思いますね。新しく、バスが3本あって、5万円っていうんだったら、私が仮に国際福祉大学に勤めてれば、考えるか、っていうところではあるかもしれないですね。しかしそれよりも、いっそのこと、今ある

空き店舗を安く住まわせてくれたら、そっちでもいいような気がしますね。

B氏

実を言うとね、空き店舗はものすごく住みにくいんですよ。私も住んだけどね(笑)。

司会

やっぱり住みにくいですか。

B氏

あのね、やっぱり日常、学生さんが生活しようと思ったら、ちょっと難しいですよ。私みたいにちょっと別な意味でね、そういうところを使ってる人間がね、言ってみれば半分遊びみたいなのがあるからね。そういう意味では耐えられるんだけど、寒さとかね、いろんな動物の問題があつてね、なかなか。いや、学生に聞いたんですよ。うちでコンパやってね、いいですね、いいですねって言うわけですよ、古いね。じゃあ住むかって言ったら、いやあそれはって。家賃は安くね、安ければ住むかって言うと、いやあそれはやっぱり。一時、ちょっと経験をするのはいいけども、毎日イヤ。

一同

(笑)

司会

ちょっと住んでもらうために、リニューアルをすれば結局、結構高いもんになっちゃいますもんね。

A氏

当然、高くてもいいんじゃないですか。まちのなかのね、高投資はやはりすべきであって、たとえば京都の町屋住宅、かなりのお金がかかるんですよ。田舎の木材の一軒家に住んでも、新築よりかはる高くなるんですね。で、その高い、高コストっていうものも、これからの日本の社会にきわめて必要な話になって、しかも文化と文明の問題になってきますから、すべて文明でいくんじゃないくて、文化の問題としてとらえていかないと、文化視点が入る必要がなってくるのかな。

B氏

今、住んでる人は、結構なんか改装したりなんかする、手を入れてるんじゃないですか。やっぱりそうでないと、なかなか住みにくい。

司会

エアコン入れても、全部スカスカだったらきかないですしね、やっぱり。

A氏

入れてないと、もったきかないけど（笑）。

B氏

それなりに入れてるけども、それでもどうしても出てってしまう。

A氏

子供のうちはっていうかね、若いうちはペンキの家のほうが、きれいなんですよ。ある一定の年齢になると、白木の家が古くなったやつがきれいなんです。そのどっかでそこが、この街に入ってくるわけですね。今、この街もね、そうやってきたんで、だから若い人も当然入ってくる。若い人に合わせながらも町屋的、集合施設入ったらどうなのか。町屋の集合って言っても、古いっていうか、古い文化的な町屋を。14階建てにしなくていいわけだから。

司会

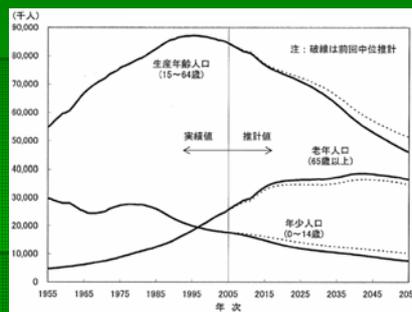
さて、そろそろ。時間もまいりましたのでお開きにしたいと思います。遠くから、来ていただいている関係から、あまり遅くまでは残念ですができません。意見交換ということで、ここまでとしたいと思います。ありがとうございました。

中川会長

遠いところ、ありがとうございました。

わが国の現状と都市を取り巻く社会経済情勢の変化

◆年齢3区分別人口の推計(出生中位(死亡中位)推計)



出典:日本の将来推計人口(平成18年12月推計)国立社会保障・人口問題研究所

前回推計に比べて将来人口の減少傾向、高齢化傾向が増す数値となっている。

◆少子高齢化の進展



資料:国勢調査、国立社会保障・人口問題研究所(2006年12月推計)、日本の将来推計人口(~2055年、中位推計)、参考推計(超長期推計×2056年~)

2005年にわが国の人口は初めて減少傾向に転じ、将来の人口推計によりよれば、今後一貫して減少基調となることが見込まれる。

大 田 原 市

まちづくり 住まいづくり




住む人が輝き
来る人がやすらぐ
幸せ度の高いまち

Ohtawara city

栃木県大田原市建設部まちづくり推進課

大 田 原 市 の 概 要

大田原市の概要

平成17年10月に湯津上村、黒羽町と合併した「大田原市」は、船の漁獲量日本一の清流那珂川を挟んで、中・西部の那須野が原の平野部と東部の八雲山系の山部部に大別されています。

中・西部の平野部は、本市の市街地を構成する都市機能の集積度が高い活力あふれるエリアで、栃木県北部の拠点地域である。那珂川を挟んで東部地区は、八雲山系の美しい山並みが連なる日本の原風景が残る地域であります。

本市は、藤平祖島の合戦の実績で号の名を「那須野一」ゆかりの地であり、室町時代後期に那須家の家臣、大田原資清(すけむね)が大田原城を築城し、現在の市街地の基礎がつけられ、江戸時代には大田原氏の城下町として栄えてきました。また、旧長岡街道の宿場町としても活気にあふれたいに賑わいを見せていました。

現在の交通網は、市街地と鉄道駅がやや離れており、東北新幹線那須塩原駅から中心部まではバスまたはタクシーで約15分程度の位置にあり、また東北自動車道西部那須野インター及び矢張インターからは中心部までは約20分程度に位置しています。市内は内環状線と外環状線の2本の道路網が整備され、また国道400号及び461号の2路線の国道が通過しています。




	人口: 77,973人 平成21年10月1日現在
	世帯数: 27,854世帯 平成21年10月1日現在
	面積: 354.12km²
	予算: 291億3千万円 平成21年度

大 田 原 市 の 空 撮 全 景



現在の商業集積地 商業集積地 (駅前後部) 市役所 中心市街地

旧国道400号 国道400号 通常使用するルート

大 田 原 市 の 紹 介

2.大田原市の紹介

大田原市は合併前の3つの旧市町村(地区)からなっており、大田原地区は、市の産業・文化等の中心地として日本最大の医療機器メーカーや製品の国内生産の半分以上を占める工場等のため、工場生産出荷額は栃木県で第2位という工業団地があり、那須野一が湯津上地区は、日本三古碑の一つである国宝「那須国造碑」が祀られ、上侍塚と下侍塚の二つの古墳が残る古代のロマンを感じさせる地域であります。

黒羽地区は、俳聖「松尾芭蕉」が「奥の細道紀行」で最長逗留(とまりゆ) (13泊14日)した地でもあり、雲巖寺(らんがんじ)や大権寺(だいごんじ)などの古刹が残る数多い歴史文化遺産のある地域であります。

①名所及び市の施設等








大 田 原 市 の 特 産 品

②特産品

大 田 原 市 の イ ベ ン ト

③各種イベント










大田原市の市政方針

将来都市像
住む人が輝き 来る人がやすらぐ 幸せ度の高いまち

まちの特徴
那須連山と八瀬山系に囲まれ、
那珂川と帯川が清らかに流れる水と緑、
豊かな大地に恵まれた田園工業都市

主要施策
本市の施策の選択に当たっては、市民の幸せ度を高める施策であるかどうかを一つの判断基準として、選択と集中を図ることを心掛けています。
優先順位としては、教育・つまり人づくりであり、さらに健康で有意義な人生を送れるような施策であります。
なお、中心市街地の活性化対策として、昨年11月に基本計画の国の認定をいただきましたので、その計画に基づき中心市街地再開発事業、街路及び回道路整備事業等様々なハードソフト事業を展開して参ります。

大田原市中心市街地の現状

中心市街地の現状
大田原市も多分に漏れず郊外型大型量販店等の立地により、中心市街地の衰退が加速度的に早まり、高齢化率は中心市街地9地区の内6地区で30%を超えるという状況なので、高齢者が中心市街地で安全で安心な生活ができるようまちづくりを行うため、**ひとにやさしいまちなか居住の推進**を活性化の柱のひとつとして掲げています。

中心市街地の現状

区 分	前 回	今 回	比 較
人 口	平成元年 4,381人	平成19年 3,104人	1,277人 70.8%
世 帯	平成元年 3.22人/世帯	平成19年 2.52人/世帯	0.7人/世帯 78.3%
高 齢 化 率	平成9年 23.3%	平成17年 29.8%	6.5%
小 売 販 売 額	昭和63年 18,236百万円	平成17年 9,721百万円	8,515百万円 53.3%
小 売 店 舗 数	昭和63年 282店	平成17年 165店	117店 58.5%
交 通 量	昭和63年 8,715人	平成17年 2,491人	6,224人 28.8%
従 業 員 数	平成13年 2,846人	平成16年 2,272人	574人 90.4%

(大田原市中心市街地活性化基本計画より)

中心市街地の写真

大田原市中心市街地活性化基本計画①

活性化の基本方針と目標
中心市街地の活性化にあたっては、中心市街地にその魅力がなくなると大田原市全体の魅力がなくなるといふ危機感をもって取り組むこととする。
中心市街地が今後も「地域住民の生活に欠かせない場所」であり続けるには、これまで蓄積されてきた都市機能を活かしながら、快適な空間や新たな機能を創り出していくことが課題となる。
そのためには、人が集まり楽しめる施設の整備や便利で安心して暮らせる居住空間づくりに必要な事業を、多様な住民の参画を得ながら一体的に推進する必要がある。

中心市街地活性化基本計画

- 中心市街地活性化基本計画の期間
 - 計画期間 平成20年11月～平成26年3月(5年5ヶ月)
 - 認定月日 平成20年11月11日
- 中心市街地活性化のテーマと戦略
現行の大田原市中心市街地活性化基本計画に掲げていた中心市街地活性化テーマと戦略を踏襲し、新中心市街地活性化基本計画においても以下のように位置づける。

【テーマ:金燈籠が照らすまち】
人を照らす/歴史を照らす/未来を照らす

【戦略】
・訪れる人を増やす戦略 ・住む人を増やす戦略 ・商業活性化のための戦略

金燈籠

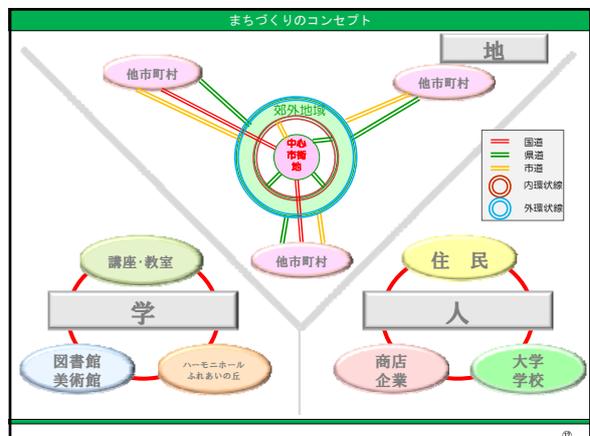
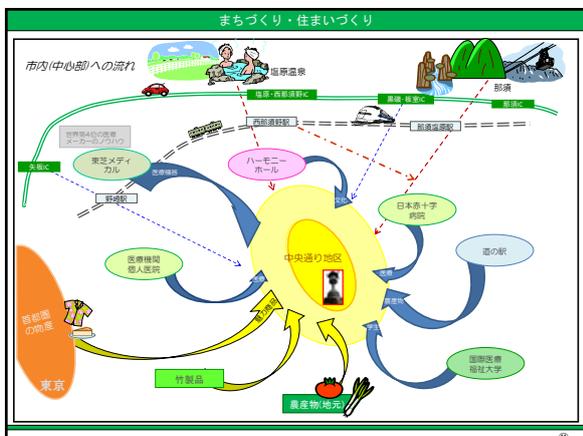
大田原市中心市街地活性化基本計画②

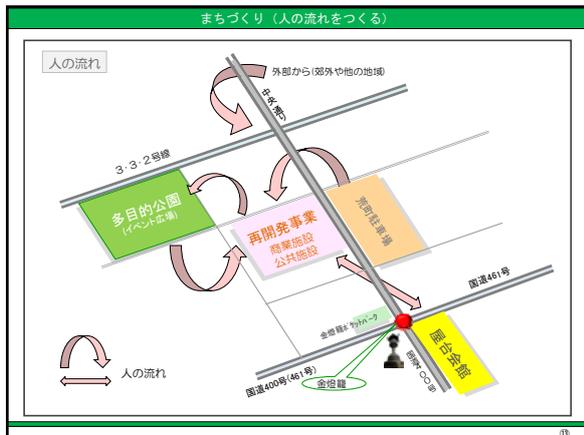
活性化の戦略に対する施策の柱

①訪れる人を増やす戦略
ひとにやさしいまちなか居住の推進
多様な市民活動のさらなる集積と発信による賑わいの創出
大田原市民は数々のボランティア活動や、イベント等への参加意欲の旺盛な市民性を持っている。こうした市民の意欲や活動機会が得られやすいような場所、空間の提供を図る。その結果、多くの交流が生まれ、訪れる人々の増加も期待できる。
(取組み内容)
・需を活用したアンテナショップの導入 ・空店舗を活用した市民活動の場の確保 ・美術館整備事業
・図書館整備事業 ・舞台芸術整備事業 ・イベント等市民活動のサポート

②住む人を増やす戦略
ひとにやさしいまちなか居住の推進
中心市街地の活性化のためには、先ず人々が住まい、定住することが重要であることから、中心市街地内により多くの住民を誘導するものとする。そして本市のまちづくりの大きな特徴である「福祉」と「医療」の十分なサポートを提供し、高齢者にも身体障害者にも、優しい安全で快適な居住環境を整備することで、「ひとにやさしいまちなか居住」に重点的に取り組む。
(取組み内容)
・公営住宅建設事業 ・ケア付き高齢者住宅建設事業 ・医療ビレッジ(村)整備事業 ・回道路整備事業
・分譲マンション建設事業 ・多目的公園整備事業 ・ボートハウス整備事業 ・まちなか保健室事業 ・市内循環バスの導入

③商業活性化のための戦略
地域特性を活かした商業の振興
国道40号(中央通り)の拡幅・無電柱化事業等により、新しく個性豊かな街路空間が形成される中で、地域特性を活かした商業を展開することが郊外店との差別化、共存共栄につながる。異なったニーズ、異なった客層が中心市街地に集まり、このことが更なるビジネスチャンス拡大、魅力的な店舗の増加、小売販売額の向上を目指す。
(取組み内容)
・街路の拡幅 ・電線類の地中化 ・街並み景観の形成 ・空店舗の流動化 ・複合交流商業施設の活用
・駐車場整備事業 ・既存店舗経営改善 ・起業家育成を目的とした「創業塾」の開催





大田原市中心市街地活性化基本計画の事業内容

ソフト事業

まちなか学校事業

中心市街地の空き店舗又は既存店舗を活用して、現在活躍している店舗経営者や時の人の実践や講和等の講座を開催する。市内だけでなく外部から中心市街地への集客を図っていく。

健康ウォーク講座

中心市街地の再生、活性化が他県となっている中で、ウォーキングの健康であるウォーク教室を設け、中継者のほか参加者に協力と関わりを創出する。

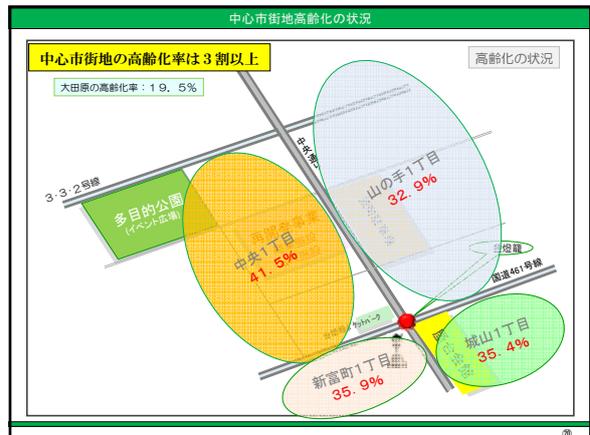
わがまち講座

昔話館から市内に活動する人や実際に市内の魅力を伝え、定住化を促すための講座

まちなか保健室事業

中心市街地の空き店舗を活用して、まちなか保健室を設置する。この事業は、市及び国際医療福祉大学と連携を図り、「誰でも気軽に立ち寄れる相談場所」として、健康づくりの支援を行うとともに地域と学生の関わりを深める事業である。

○業務内容
健康相談、栄養相談、コミュニティの場の提供、健康に関する情報発信



安心生活創造事業とのリンク(まちづくりカンパニー)

見守り・買物支援

中心市街地における見守りの対象となる方の見守りや買物支援を地域方々や大田原まちづくりカンパニーが一緒になって安心で安全な生活ができるようサポートをする。

見守りの対象となる方
「ひとり暮らし」「高齢者世帯」「身障者等」で
①見守りを希望する方
②見守りが必要な方で民生委員、自治会長、福祉委員が見守りを必要と判断した方

大田原まちづくりカンパニー一環
自治会長
民生委員
公民館長
福祉委員

見守り

まちづくりカンパニー

雇用関係(買物支援)

見守り対象世帯

まちづくり・住まいづくり(まちなか再生)

まちなかの再生

交通網の発達や生活様式の変化が「まち」を変えていった。

昔、まちなかにあった「安心・安全」な居住空間を、中心市街地に今風に復活させ、人が集まり、便利で安心して暮らせる居住空間を再現し、商業・業務・居住・文化・医療福祉等の多様な都市活動が行われ、まち全体が明るく活気のある「まちなか再生」を目指していく。

中心市街地活性化のための方向性④

なぜ中心市街地の活性化なのか

多くの中心市街地は、これまで公共交通ネットワークの拠点として整備され、現在でもその機能が継承されており、高齢者等交通弱者を含め、多くの人にとって最もアクセスしやすい場所であるとともに、都市機能やインフラの既存ストックが整備されており、歴史的・文化的背景等と相まって地域の核として機能し得る条件が整っている。

都市機能の集積拠点としてどこが適当であるかは、地域がそれぞれの実情に応じて個別に判断することになるが、中心市街地は、効率的に都市機能を集積する拠点として重要な候補。

中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方① 複数の視点

中心市街地を持続可能なまちとするためには、絶えず投資が行われる必要がある。中心市街地が**投資に値する魅力ある空間であり続けるためには、複数の視点を持ってソフト・ハードの両面から取組を行うことが重要。**

○**地域固有の価値の創出**
歴史、文化、景観、人材等の発掘と活用により、地域の人たちにとって住み良さ、優越感を基本としながら、他にない魅力づくりを目指すことが重要。

○**都市空間の管理運営**
まちづくりは、事業実施で終わりでなくハードソフトの両面からマネジメントを続けることが重要。

○**地域経済管理**
地産地消や地域活動との連携などにより、地域の土、モノ、カネが循環する持続可能な地域経済を構築することが重要。

○**市民・民間の参画**
中心市街地の再生を自分たちの問題としてとらえ、行政と連携のもと、地域が主体となってまちづくりを進めることが重要。

○**土地の合理的活用**
身の丈に合った再開発や、土地の暫定利用、近隣地域の活用など、ゆるぎある人が土地を有効に活用できる工夫が必要。

中心市街地のまちづくり

市街地整備
商業・業務
公共交通アクセス
中心市街地活性化
公共公益施設
街なか居住

中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方② 多様な都市活動とステークホルダー

中心市街地における多様な都市活動

- これまで、中心市街地に限らず、まちづくりに関する事業の多くは一般的に行政が担ってきた。
- 中心市街地は、商業、業務、居住、文化、医療福祉等の多様な都市活動の展開により成り立っている。

中心市街地を取り巻く多様なステークホルダー(利害関係者)

- これら多様な都市活動は、地域が発意し、民間が投資を行うことにより展開するもの。
- 中心市街地のまちづくりを進める上で、行政以外に、市民、商業者、地権者、民間企業、NPO、投資家等多様なステークホルダーが関与。

多様なステークホルダーによる、様々な都市活動を円滑に進めるには、**調整役(ex. 中心市街地活性化協議会)が必要。**

多様な都市活動を持続可能とするためのまちづくりを行う**事業主体が必要。**

中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方③ 民間投資の必要性と行政の役割

これからの中心市街地活性化像

元気がない中心市街地 → 地域への熱意 → 賑わいある中心市街地

民間による投資
行政による投資

行政の役割

- コンパクトなまちづくりを行っていくという、**ブレのない政策展開(=都市機能の適正立地、中心市街地への重点投資)。**
- 民間の投資を後押しするような**仕組みづくり。**

中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方④ 民間投資の必要性と行政の役割

コンパクトなまちづくりを推奨する有識者の声

■横森豊雄氏の声(宮城大学大学院 事業構想学専攻 教授)

- コンパクトなまちづくりの仕組みは、「マスタープラン(センターマネジメント)」と「郊外規制+中心市街地への誘導」を両輪で行うもの。
- 大切なのは、いくら税金を投入しても、民間の活力を持ってこなければ活性化は出来ない。**
- 民間の投資を呼ぶには、「町の中に投資することは儲かる」と、民間に理解させなければならぬが、そのためには**数年にわたって投資**していなければならない。
- コンパクトシティを作るという宣言をしてそれがふれなければ相手も考える。
- 今回の車の両輪はその仕組みだから、絶対に崩してはいけない。

■藤谷浩介氏の声(日本政策投資銀行 地域企画部 参事役)

- 市街地は現状では、経済活動の中心ではないが、**多年にわたる民間投資が累積した長期にわたるストック**がある。
- それを**民間投資によって維持していくことによって、長期的な投資が起こりうる唯一の空間を維持できる。**
- 民間に、償却期間の長い投資空間を提供すべきである。

中心市街地活性化のためのまちづくりのあり方⑤ ポイント

プロセス

市全体のマスタープラン
中心市街地活性化基本計画
ビジョン
プログラム
事業の実施
まちの管理運営

行政

民間

行政の役割

- コンパクトなまちづくりを行っていくという、**ブレのない政策展開(=都市機能の適正立地、中心市街地への重点投資)。**
- 民間の投資を後押しするような**仕組みづくり。**

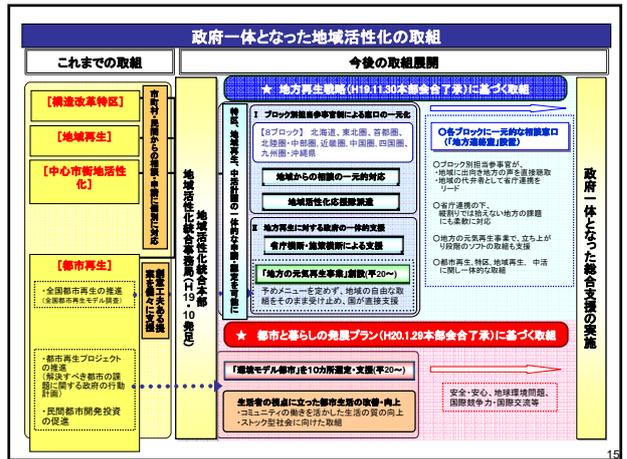
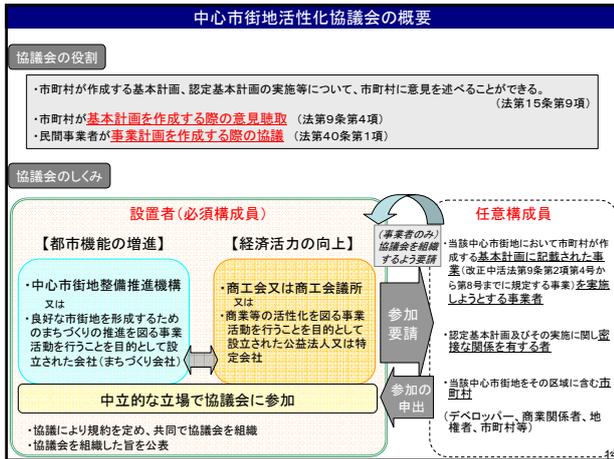
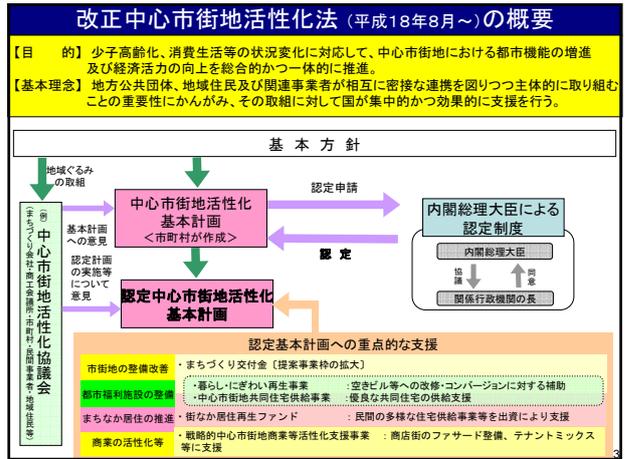
中心市街地活性化は商店街の活性化ではなく、まちづくりであり、計画策定、事業実施において、まちづくり**関係者の参加も必要。**

中心市街地を持続可能なまちとするためには、絶えず投資が行われることが必要であり、中心市街地が**投資に値する魅力ある空間であり続けるためには、複数の視点を持ってソフト・ハードの両面から取り組むことが重要。**

多様なステークホルダーによる、様々な都市活動を円滑に進めるには、**調整役(ex. 中心市街地活性化協議会)が必要。**

多様な都市活動を持続可能とするためのまちづくりを行う**事業主体が必要。**

中心市街地活性化の法的枠組み



編集後記

平成 21 年度公開講座「地域活性化社会システム論」の講演録が刊行できることになりました。ささやかかもしれませんが、足利工業大学と足利まちづくりセンターVAN-NOOGA の地域の活性化に向けた取り組みの活動の一つです。本講演録ができたのは、足利の地まで足を運んでいただいた講師の方々のお陰です。心からお礼申し上げます。

21 世紀を向かえて 10 年が経ちましたが、あまり元気の出る話は聞きません。なかでも地方都市は、中心市街地の空洞化の危機が叫ばれてかなりの時間が経過しました。様々な施策が執られています、シャッター通りは広がりこそすれ、縮まる様子はあまり見られません。とは言え、よく見れば、全国各地で地域活性化の地道な動きが芽吹き、中には双葉が開き始めている町や村もあります。本公開講座の中で、そうした具体的な事例を知ることもできました。その中心には必ず元気な地域の人々がいます。

「我々も足利、両毛地域、いや北関東の活性化に向けて、できることから、やって行きます」という宣言の意味を込めて、本講演録をまとめました。

本公開講座を開設するにあたり、ご協力をいただいた内閣官房地域活性化統合事務局、栃木県都市計画課、足利市企画課の皆さん、また、裏方を勤めていただいた足利工業大学の総合研究センターと庶務課、VAN-NOOGA 事務局の皆さん、そして、機材運搬、設置に協力してくれた学生諸君にお礼を申し上げます。

末尾ながら、講演録の編集にあたり、テープ起こし原稿の校正には注意したつもりですが、不備な点もあるかと存じます。お気づきの点があれば、下記までご連絡いただければ幸甚です。
(築瀬範彦)

〒326-8558 足利市大前町 268-1
足利工業大学工学部都市環境工学科
地域・都市計画研究室

TEL 0284-22-5684

FAX 0284-64-1061

Email:

